

広島市の文化財 第48集

広島市安佐南区緑井町所在

毘沙門台東遺跡発掘調査報告

1990.3

広島市教育委員会

は し が き

毘沙門台東遺跡の所在する安佐南区緑井地区は、団地の造成や交通網の整備により、著しく変貌している地域です。本市においては市街地の拡大により宅地開発等の大規模な開発が進められており、それとともなって埋蔵文化財の調査件数が増えるとともに発掘の規模も拡大しております。毘沙門台東遺跡も、こうした開発行為に伴って発見された遺跡です。

今回の調査の結果、遺跡から約50軒の住居跡と約100基の土壙が検出され、弥生時代後期の太田川下流域では比較的大規模な集落跡であることがわかりました。また、土器、鉄器、石器等の遺物も多数出土しており、弥生時代後期の市域の様子や、先人たちの暮らしぶりをうかがう貴重な資料を得ることができました。本報告書によって、郷土に対する理解と愛情を深め、地域のさらなる発展に役立てていただくことを願っている次第です。

末筆ながら、調査にあたってご指導いただいた諸先生方、ならびにご協力いただいた方々、暑い中寒い中を発掘作業に従事していただいた方々に厚くお礼申し上げます。

平成2年3月

広島市教育長 鍋 岡 聖 剛

例

言

1. 本書は、広島市安佐南区緑井町における毘沙門台団地第3期造成工事にかかる、毘沙門台東遺跡の発掘調査報告である。
2. 調査は、広島電鉄株式会社の依頼により、広島市教育委員会が実施した。
3. 本書は、Ⅰ・Ⅳ（１）（２）（４）、Ⅴを大崎が、Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ（３）を吉原が執筆し、大崎が編集した。
4. 遺構の実測及び写真撮影は、吉原、武内、大崎が分担して行った。
5. 遺物の実測及び写真撮影は、吉原、大崎、野島（広島大学大学院生）が分担して行った。
6. 図面のトレースは、吉原、高田、岡野、住川、橋本、大崎が分担して行った。
7. 本書掲載の航空写真は、スタジオ・ユニに委託して行った。
8. 第1図に使用した地図は、国土地理院発行の5万分の1の地図を複製したものである。

また、第3図に使用した地図は、明治28年測量の国土地理院発行の2万分の1の地図を複製したものである。

目 次

I	はじめに	1
II	位置と環境	2
III	A地点遺跡	
(1)	遺跡の概要	5
(2)	遺構	5
(3)	遺物	6
(4)	小結	6
IV	B・C地点遺跡	
(1)	遺跡の概要	11
(2)	遺構	11
(3)	遺物	23
(4)	小結	26
V	まとめ	45

挿 図 目 次

第1図	周辺遺跡分布図	4	第27図	B・C地点遺跡第10号住居跡実測図	66
第2図	遺跡周辺地形図	47	第28図	B・C地点遺跡第11号・第12号・第13号住居跡実測図	66
第3図	遺跡周辺地形図（明治28年測量）	48	第29図	B・C地点遺跡第14号・第15号住居跡，第2号テラス状遺構実測図	67
第4図	A地点遺跡遺構配置図	49	第30図	B・C地点遺跡第16号住居実測図	68
第5図	A地点遺跡第1号住居跡実測図	50	第31図	B・C地点遺跡第19号・第20号住居跡実測図	68
第6図	A地点遺跡第1号テラス状遺構実測図	50	第32図	B・C地点遺跡第17号・第18号住居跡実測図	69
第7図	A地点遺跡第2号・第3号住居跡実測図	51	第33図	B・C地点遺跡第21号住居跡実測図	69
第8図	A地点遺跡第2号テラス状遺構実測図	51	第34図	B・C地点遺跡第22号住居跡実測図	70
第9図	A地点遺跡土壌実測図（1）	52	第35図	B・C地点遺跡第23号住居跡実測図	71
第10図	A地点遺跡土壌実測図（2）	53	第36図	B・C地点遺跡第24号住居跡実測図	71
第11図	A地点遺跡土壌実測図（3）	54	第37図	B・C地点遺跡第25号住居跡実測図	72
第12図	A地点遺跡第10号土壌土器出土状況	54	第38図	B・C地点遺跡第26号住居跡実測図	73
第13図	A地点遺跡出土土器実測図（1）	55	第39図	B・C地点遺跡第27号住居跡実測図	74
第14図	A地点遺跡出土土器実測図（2）	56	第40図	B・C地点遺跡第28号住居跡実測図	75
第15図	A地点遺跡出土石器実測図	56	第41図	B・C地点遺跡第29号住居跡実測図	76
第16図	B・C地点遺跡遺構配置図（1）	57	第42図	B・C地点遺跡第30号住居跡実測図	77
第17図	B・C地点遺跡遺構配置図（2）・折り込み		第43図	B・C地点遺跡第31号・第32号住居跡実測図	78
第18図	B・C地点遺跡第1号・第2号住居跡実測図	59	第44図	B・C地点遺跡第33号～第44号住居跡配置図	79
第19図	B・C地点遺跡第3号住居跡実測図	60	第45図	B・C地点遺跡第33号・第34号・第35号住居跡実測図	80
第20図	B・C地点遺跡第5号住居跡実測図	60	第46図	B・C地点遺跡第36号・第37号・第38号・第39号・第40号住居跡実測図	81
第21図	B・C地点遺跡第4号住居跡実測図	61	第47図	B・C地点遺跡第41号住居跡実測図	82
第22図	B・C地点遺跡第6号住居跡実測図	61	第48図	B・C地点遺跡第42号住居跡実測図	83
第23図	B・C地点遺跡第7号住居跡実測図	62	第49図	B・C地点遺跡第43号住居跡実測図	84
第24図	B・C地点遺跡第8号住居跡実測図	63			
第25図	B・C地点遺跡第9号住居跡実測図	64			
第26図	B・C地点遺跡第10号～第16号住居跡，第19号～第22号住居跡配置図	65			

第50図	B・C地点遺跡第44号住居跡実測図	・ 84
第51図	B・C地点遺跡第45号住居跡実測図	・ 84
第52図	B・C地点遺跡第46号住居跡実測図	・ 85
第53図	B・C地点遺跡第1号テラス状遺構実測図	・ 86
第54図	B・C地点遺跡第3号テラス状遺構実測図	・ 86
第55図	B・C地点遺跡土器棺墓実測図	・ 87
第56図	B・C地点遺跡土器蓋土壙実測図	・ 87
第57図	B・C地点遺跡第1号石棺実測図	・ 88
第58図	B・C地点遺跡第2号石棺実測図	・ 88
第59図	B・C地点遺跡土壙実測図(1)	・ 89
第60図	B・C地点遺跡土壙実測図(2)	・ 90
第61図	B・C地点遺跡土壙実測図(3)	・ 91
第62図	B・C地点遺跡土壙実測図(4)	・ 92
第63図	B・C地点遺跡土壙実測図(5)	・ 93
第64図	B・C地点遺跡土壙実測図(6)	・ 94
第65図	B・C地点遺跡土壙実測図(7)	・ 95
第66図	B・C地点遺跡土壙実測図(8)	・ 96
第67図	B・C地点遺跡土壙実測図(9)	・ 97
第68図	B・C地点遺跡土壙実測図(10)	・ 98
第69図	B・C地点遺跡土壙実測図(11)	・ 99
第70図	B・C地点遺跡土壙実測図(12)	・ 100

第71図	B・C地点遺跡土壙実測図(13)	・ 101
第72図	B・C地点遺跡土壙実測図(14)	・ 102
第73図	B・C地点遺跡土壙実測図(15)	・ 103
第74図	B・C地点遺跡土壙実測図(16)	・ 104
第75図	B・C地点遺跡土壙実測図(17)	・ 105
第76図	B・C地点遺跡土壙実測図(18)	・ 106
第77図	B・C地点遺跡土壙実測図(19)	・ 107
第78図	B・C地点遺跡出土土器実測図(1)	108
第79図	B・C地点遺跡出土土器実測図(2)	109
第80図	B・C地点遺跡出土土器実測図(3)	110
第81図	B・C地点遺跡出土土器実測図(4)	111
第82図	B・C地点遺跡出土土器実測図(5)	112
第83図	B・C地点遺跡出土土器実測図(6)	113
第84図	B・C地点遺跡出土土器実測図(7)	114
第85図	B・C地点遺跡出土土器実測図(8)	115
第86図	B・C地点遺跡出土土器実測図(9)	116
第87図	B・C地点遺跡出土土器製品・紡錘車実測図	・ 117
第88図	B・C地点遺跡出土鉄器実測図	・ 118
第89図	B・C地点遺跡出土石器実測図(1)	119
第90図	B・C地点遺跡出土石器実測図(2)	120
第91図	B・C地点遺跡出土石器実測図(3)	121

図 版 目 次

- 図版 1 昆沙門台東遺跡全景（調査前，東から）
図版 2 a A地点遺跡中景（調査前，東から）
図版 2 b A地点遺跡全景（調査後，北から）
図版 3 a A地点遺跡第 1 号住居跡
図版 3 b A地点遺跡第 2 号・第 3 号住居跡
図版 4 a A地点遺跡第 1 号土壙
図版 4 b A地点遺跡第 2 号土壙
図版 4 c A地点遺跡第 3 号土壙
図版 4 d A地点遺跡第 4 号土壙
図版 4 e A地点遺跡第 4 号土壙貝出土状況
図版 4 f A地点遺跡第 5 号土壙
図版 5 a A地点遺跡第 6 号土壙
図版 5 b A地点遺跡第 7 号土壙
図版 5 c A地点遺跡第 8 号土壙
図版 5 d A地点遺跡第 9 号土壙
図版 5 e A地点遺跡第 10 号土壙
図版 5 f A地点遺跡第 10 号土壙土器出土状況
図版 6 a B地点遺跡中景（調査前，東から）
図版 6 b B地点遺跡全景（調査後，東から）
図版 7 a C地点遺跡遠景（調査後，西から）
図版 7 b C地点遺跡中景（調査前，東から）
図版 8 C地点遺跡全景（調査後，北から）
図版 9 a B・C地点遺跡第 1 号・第 2 号住居跡
図版 9 b B・C地点遺跡第 3 号住居跡
図版 10 a B・C地点遺跡第 4 号住居跡
図版 10 b B・C地点遺跡第 5 号住居跡
図版 11 a B・C地点遺跡第 6 号住居跡
図版 11 b B・C地点遺跡第 7 号住居跡
図版 12 a B・C地点遺跡第 8 号住居跡
図版 12 b B・C地点遺跡第 9 号住居跡
図版 13 a B・C地点遺跡第 10 号～第 22 号住居跡
図版 13 b B・C地点遺跡第 10 号住居跡
図版 14 a B・C地点遺跡第 11 号・第 12 号・第 13 号住居跡
図版 14 b B・C地点遺跡第 14 号・第 15 号住居跡，第 2 号テラス状遺構
図版 15 a B・C地点遺跡第 16 号住居跡
図版 15 b B・C地点遺跡第 17 号住居跡
図版 16 a B・C地点遺跡第 19 号・第 20 号住居跡
図版 16 b B・C地点遺跡第 21 号住居跡
図版 17 a B・C地点遺跡第 22 号住居跡
図版 17 b B・C地点遺跡第 23 号住居跡
図版 18 a B・C地点遺跡第 25 号住居跡遠景
図版 18 b B・C地点遺跡第 25 号住居跡
図版 19 a B・C地点遺跡第 24 号住居跡
図版 19 b B・C地点遺跡第 26 号住居跡
図版 20 a B・C地点遺跡第 27 号住居跡，第 60 号土壙
図版 20 b B・C地点遺跡第 27 号住居跡
図版 21 a B・C地点遺跡第 28 号住居跡
図版 21 b B・C地点遺跡第 29 号住居跡
図版 22 a B・C地点遺跡第 30 号住居跡炭化材出土状況
図版 22 b B・C地点遺跡第 30 号住居跡
図版 23 a B・C地点遺跡第 31 号・第 32 号住居跡
図版 23 b B・C地点遺跡第 33 号～第 42 号住居跡
図版 24 a B・C地点遺跡第 33 号・第 34 号・第 35 号住居跡
図版 24 b B・C地点遺跡第 36 号～第 40 号住居跡
図版 25 a B・C地点遺跡第 41 号住居跡
図版 25 b B・C地点遺跡第 42 号住居跡
図版 26 a B・C地点遺跡第 43 号住居跡
図版 26 b B・C地点遺跡第 44 号住居跡
図版 27 a B・C地点遺跡第 45 号住居跡
図版 27 b B・C地点遺跡第 46 号住居跡
図版 28 a B・C地点遺跡第 3 号テラス状遺構土器出土状況
図版 28 b B・C地点遺跡第 30 号住居跡炭化材出土状況
図版 29 a B・C地点遺跡土器棺墓
図版 29 b B・C地点遺跡土器蓋土壙
図版 30 a B・C地点遺跡第 1 号石棺（開棺前）
図版 30 b B・C地点遺跡第 1 号石棺（開棺後）
図版 31 a B・C地点遺跡第 2 号石棺（開棺前）
図版 31 b B・C地点遺跡第 2 号石棺（開棺後）
図版 32 a B・C地点遺跡第 1 号～第 9 号土壙
図版 32 b B・C地点遺跡第 80 号～第 91 号土壙
図版 33 a B・C地点遺跡第 1 号土壙
図版 33 b B・C地点遺跡第 2 号土壙
図版 33 c B・C地点遺跡第 3 号土壙
図版 33 d B・C地点遺跡第 4 号土壙
図版 33 e B・C地点遺跡第 5 号土壙
図版 33 f B・C地点遺跡第 6 号土壙
図版 34 a B・C地点遺跡第 7 号土壙
図版 34 b B・C地点遺跡第 8 号・第 9 号土壙
図版 34 c B・C地点遺跡第 10 号土壙
図版 34 d B・C地点遺跡第 11 号土壙
図版 34 e B・C地点遺跡第 12 号土壙
図版 34 f B・C地点遺跡第 13 号土壙
図版 35 a B・C地点遺跡第 14 号土壙
図版 35 b B・C地点遺跡第 15 号土壙
図版 35 c B・C地点遺跡第 16 号土壙
図版 35 d B・C地点遺跡第 18 号土壙
図版 35 e B・C地点遺跡第 19 号土壙
図版 35 f B・C地点遺跡第 20 号土壙
図版 36 a B・C地点遺跡第 21 号土壙
図版 36 b B・C地点遺跡第 22 号・第 23 号土壙
図版 36 c B・C地点遺跡第 24 号土壙
図版 36 d B・C地点遺跡第 25 号・第 26 号土壙
図版 36 e B・C地点遺跡第 27 号土壙

图版 3 6 f B · C 地点遺跡第 2 8 号土壤
图版 3 7 a B · C 地点遺跡第 2 9 号土壤
图版 3 7 b B · C 地点遺跡第 3 0 号土壤
图版 3 7 c B · C 地点遺跡第 3 1 号土壤
图版 3 7 d B · C 地点遺跡第 3 2 号土壤
图版 3 7 e B · C 地点遺跡第 3 3 号土壤
图版 3 7 f B · C 地点遺跡第 3 4 号土壤
图版 3 8 a B · C 地点遺跡第 3 5 号土壤
图版 3 8 b B · C 地点遺跡第 3 6 号土壤
图版 3 8 c B · C 地点遺跡第 3 7 号土壤
图版 3 8 d B · C 地点遺跡第 3 8 号土壤
图版 3 8 e B · C 地点遺跡第 3 9 号土壤
图版 3 8 f B · C 地点遺跡第 4 0 号土壤
图版 3 9 a B · C 地点遺跡第 4 1 号土壤
图版 3 9 b B · C 地点遺跡第 4 2 号土壤
图版 3 9 c B · C 地点遺跡第 4 3 号土壤
图版 3 9 d B · C 地点遺跡第 4 4 号土壤
图版 3 9 e B · C 地点遺跡第 4 5 号土壤
图版 3 9 f B · C 地点遺跡第 4 6 号土壤
图版 4 0 a B · C 地点遺跡第 4 7 号土壤
图版 4 0 b B · C 地点遺跡第 4 8 号土壤
图版 4 0 c B · C 地点遺跡第 4 9 号土壤
图版 4 0 d B · C 地点遺跡第 5 0 号土壤
图版 4 0 e B · C 地点遺跡第 5 1 号土壤
图版 4 0 f B · C 地点遺跡第 5 2 号土壤
图版 4 1 a B · C 地点遺跡第 5 3 号土壤
图版 4 1 b B · C 地点遺跡第 5 4 号土壤
图版 4 1 c B · C 地点遺跡第 5 6 号土壤
图版 4 1 d B · C 地点遺跡第 5 7 号土壤
图版 4 1 e B · C 地点遺跡第 5 8 号土壤
图版 4 1 f B · C 地点遺跡第 5 9 号土壤
图版 4 2 a B · C 地点遺跡第 6 0 号土壤
图版 4 2 b B · C 地点遺跡第 6 1 号土壤
图版 4 2 c B · C 地点遺跡第 6 2 号土壤
图版 4 2 d B · C 地点遺跡第 6 3 号土壤
图版 4 2 e B · C 地点遺跡第 6 4 号土壤
图版 4 2 f B · C 地点遺跡第 6 5 号土壤
图版 4 3 a B · C 地点遺跡第 6 6 号土壤
图版 4 3 b B · C 地点遺跡第 6 7 号土壤
图版 4 3 c B · C 地点遺跡第 6 8 号 · 第 6 9 号土壤
图版 4 3 d B · C 地点遺跡第 7 0 号土壤
图版 4 3 e B · C 地点遺跡第 7 1 号土壤
图版 4 3 f B · C 地点遺跡第 7 5 号土壤
图版 4 4 a B · C 地点遺跡第 7 6 号土壤
图版 4 4 b B · C 地点遺跡第 7 7 号土壤
图版 4 4 c B · C 地点遺跡第 7 8 号土壤
图版 4 4 d B · C 地点遺跡第 7 9 号土壤
图版 4 4 e B · C 地点遺跡第 8 0 号土壤
图版 4 4 f B · C 地点遺跡第 8 1 号土壤
图版 4 5 a B · C 地点遺跡第 8 2 号土壤
图版 4 5 b B · C 地点遺跡第 8 3 号土壤
图版 4 5 c B · C 地点遺跡第 8 4 号土壤
图版 4 5 d B · C 地点遺跡第 8 5 号土壤

图版 4 5 e B · C 地点遺跡第 8 6 号土壤
图版 4 5 f B · C 地点遺跡第 8 7 号土壤
图版 4 6 a B · C 地点遺跡第 8 8 号土壤
图版 4 6 b B · C 地点遺跡第 8 9 号土壤
图版 4 6 c B · C 地点遺跡第 9 0 号土壤
图版 4 6 d B · C 地点遺跡第 9 1 号土壤
图版 4 6 e B · C 地点遺跡第 9 6 号土壤
图版 4 6 f B · C 地点遺跡第 9 7 号土壤
图版 4 7 a B · C 地点遺跡第 9 8 号土壤
图版 4 7 b B · C 地点遺跡第 9 9 号土壤
图版 4 7 c B · C 地点遺跡第 1 0 0 号 · 第 1 0 1 号土壤
图版 4 8 A 地点遺跡出土遺物 (1)
图版 4 9 A 地点遺跡出土遺物 (2)
图版 5 0 B · C 地点遺跡出土遺物 (1)
图版 5 1 B · C 地点遺跡出土遺物 (2)
图版 5 2 B · C 地点遺跡出土遺物 (3)
图版 5 3 B · C 地点遺跡出土遺物 (4)
图版 5 4 B · C 地点遺跡出土遺物 (5)
图版 5 5 B · C 地点遺跡出土遺物 (6)
图版 5 6 B · C 地点遺跡出土遺物 (7)
图版 5 7 B · C 地点遺跡出土遺物 (8)
图版 5 8 B · C 地点遺跡出土遺物 (9)
图版 5 9 B · C 地点遺跡出土遺物 (1 0)
图版 6 0 B · C 地点遺跡出土遺物 (1 1)
图版 6 1 B · C 地点遺跡出土遺物 (1 2)

付 表 目 次

表 1	A地点遺跡土壌観察表	8	表 4	B・C地点遺跡出土土器観察表	3 4
表 2	A地点遺跡出土土器観察表	9	表 5	安川流域の住居跡	4 6
表 3	B・C地点遺跡土壌観察表	2 8			

はじめに

昭和63年2月18日、広島市安佐南区緑井町で団地造成工事現場から土器が出土したとの通報があったため、広島市教育委員会は、工事の施行者である広島電鉄株式会社あて、その取扱について協議を申し入れた。それとともに、3月9日、11日の両日遺跡の範囲を確認するための試掘調査を実施し、この結果、造成工事の範囲内の尾根上全域にわたって遺跡の所在が確認された。

これをうけて広島市教育委員会は、原因者にたいして、文化庁あて遺跡の発見届の提出を求めるとともに、この遺跡の取扱について協議を重ねたが、地形的条件等から計画変更は困難であるため、やむを得ず、記録保存をはかることとし、昭和63年度に発掘調査を実施した。

調査は、遺跡をA、B、Cの3地点に分け、5月16日から3月31日までの期間実施した。

なお、調査の関係者は下記のとおりである。

調査依頼者 広島電鉄株式会社

調査主体 広島市教育委員会

調査担当係 広島市教育委員会社会教育委員会社会教育部管理課文化財係

上田孝明 社会教育部長

繁野勝元 管理課長

檜垣栄次 管理課課長補佐兼文化財係長

幸田 淳 文化財係主査

若島一則 文化財係主事

高田正剛 文化財係主事

岡野孝子 文化財係嘱託

調査者 大崎尚吾 文化財主事

吉原輝明 文化財係主事

武内 真 文化財係主事

調査補助員（順不同）

原田勝子，馬込アキミ，原田三喜枝，下岡芳江，新川邦恵，桑木芳子，
岩原静枝，中村作市，下岡順子，杉中多賀夫，佐藤千佐美，上岡次郎，
大沢正季，大歳輝雄，阿佐三郎，森田清春，松野克子，松岡富美子，三
反田利雄，開田恒治，久都内一男，森貞幸子，松岡悦子，国本直江，松
岡馨子，井手下強史，柿田美也子，土井健一，森崎レイ子，政田幸子，
川口孝子，谷本敬子，宮田政子，高本すが子，梅本貴美子，岡原節子，
水戸サツヨ，上林陽子，石田孝子，笹木光恵，橋本礼子，坂本七五登，小田真智枝，川
手京子，岩田貴代子，河瀬陽子，野島 永，大田恭子，河合淳子，住川香代子，吉村志
津江，小林尚子，佐伯ひとみ，吉木利江，日下甚文，平山琢也， 河野匡伸，日高真由
美，三戸里美

また、広島電鉄株式会社をはじめ現場事務所の方々、佐東公民館、古市公民館、安公民館の方々ほか多くの方々から、調査を円滑に進めるために多大なご配慮と援助をいただいた。さらに、報告書作成にあたって、広島大学理学部教授・沖村雄二氏ほか多くの方々から広範なご教示をいただいた。ここに記して謝意を表したい。

II 位置と環境

本遺跡は、広島市安佐南区緑井町字石屋山、宇願成寺原に所在する。本遺跡は標高397mの権現山から南に延びる丘陵上に位置し標高は110mから180mを測る。眼下を流れる安川を挟んで武田山と対面し、遠方に太田川兩岸の市街地を眺望することができる。周辺には、太田川下流域において遺跡の密集している地域といわれる可部・高揚・祇園・石内地区があり、地形の上からはこれらの中心にあたる場所に位置する。

安川には、多くの挟小な河川が注ぎこみ、この小河川によって兩岸には多くの小河谷が形成されている。これらを望む丘陵上には、弥生時代から古墳時代の遺跡が点在しており、本遺跡もそのひとつである。本遺跡のある丘陵の西側には、太田川下流域では比較的大きな岩谷の谷が開けており、現在毘沙門堂が建立されている辺りから豊富な水が湧きだしている。丘陵の東側にも湧水地が存在し、最近まで水田が開けていた。それらの水田面と本遺跡の比高は30m前後となる。

安川流域を中心として周囲の弥生時代の集落遺跡を概観してみると、国重遺跡、中畦遺跡、恵木遺跡、大町矢ヶ谷遺跡、毘沙門台遺跡等が上げられる。いずれも弥生時代後期の遺跡であり、発掘調査の結果、集落や墳墓群の存在が確認されている。国重遺跡からは住居跡2軒、中畦遺跡からは住居跡2軒、土壌10基が、安川を挟んで対岸の恵木遺跡からは、住居跡2軒と土壌墓等が見つかった。大町矢ヶ谷遺跡では、住居跡3軒、土壌15基、土壌墓39基、箱式石棺2基、壺棺2基を検出している。市域では一般に、弥生時代後期以降急激に遺跡の数が増大するようになるが、長期間継続的に営まれた遺跡は少なく、住居数も同時期に2、3軒を単位とする集落がほとんどである。しかし本遺跡の西に隣接する毘沙門台遺跡では、弥生時代後期から古墳時代初頭の住居跡70軒、土壌180基、墳墓群等を検出しており、市域の他の遺跡と比して規模の点で群を抜いている。こうした規模の大きさに加えて、大量の鉄器ほか青銅器も出土しており出土遺物の点からも注目される。

さて、ここで市域全般において比較的大きな遺跡を概観してみると、太田川西岸では広島経済大学構内遺跡群が知られている。ここでは、隣接する3本の尾根に点在する3遺跡から弥生時代後期後半を中心に18軒の住居跡を検出している。しかしこれらの住居は一度に営まれていたわけではなく、2、3軒程度の集落が何回か営まれたものと考えられる。太田川東岸では、矢口川流域における大明地遺跡が上げられる。この遺跡からは弥生時代後期後葉から古墳時代初頭にかけた住居跡17軒が検出されているが、これも集落の構築及び廃絶が何回か繰り返されたものと考えられている。この他、八幡川水系の石内川流域においては浄安寺遺跡や下沖5号遺跡が知られている。両遺跡は営まれた期間及び規模、出土遺物等から、石内川流域における地域の核となる集落として位置づけられている遺跡である。浄安寺遺跡からは、弥生時代後期中葉から後期後葉にかけての住居跡21軒を、下沖5号遺跡からは弥生時代後期全般を通じて18軒の住居跡を検出している。ただ両遺跡においても、同時期に営まれた住居は多くて10軒前後であったと思われる。

このように、市域における弥生時代後期の遺跡を集落の規模という点で比較してみると、一般に、同時期に2、3軒を一つの単位として集落を形成しており、比較的大きな遺跡においても、多くて10軒前後であったと考えられる。これにたいして先述の毘沙門台遺跡においては、検出された住居の総数から規定して他の遺跡の数倍もの住居が同時期に営まれていたことが考えられ、市域においては規模の点でかなり突出しているといえる。本遺跡はこの毘沙門台遺跡とは岩谷の谷をはさんで東に隣接した位置にあり、集落の営まれていた時期もほぼ同じ頃と思われることからなんらかの関係が想定できるが、毘沙門台遺跡の報告がなされていない現時点においては明確にすることはできない。ただ、今回の発掘調査によって、広島湾頭において中心の一つとなりうる集落の存在を暗示する貴重な手がかりを得ることが出来たといえよう。

注

1. 広島市教育委員会「国重遺跡発掘調査報告」1982
2. 広島市教育委員会「中畦遺跡発掘調査報告」1984
3. 恵木遺跡発掘調査団「恵木遺跡発掘調査報告」1982
4. 矢ヶ谷遺跡発掘調査団「矢ヶ谷遺跡発掘調査報告」1984

5. 毘沙門台遺跡発掘調査団「毘沙門台遺跡発掘調査現地説明会資料」1982
6. 広島市教育委員会「広島経済大学構内遺跡群発掘調査報告」1984
7. 財団法人広島県埋蔵文化財センター『大明地遺跡』「山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告書」(協)1987
8. 財団法人広島県埋蔵文化財センター『浄安寺遺跡』「山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」(企)1986
9. 広島市教育委員会『下沖5号遺跡』「一般県道原田五日市線道路改良事業地内遺跡群発掘調査報告」1988



1. 毘沙門台東遺跡
2. 毘沙門台遺跡
3. 大町矢ヶ谷遺跡
4. 広島経済大学構内遺跡群
5. 恵木遺跡
6. 中駐遺跡
7. 国重遺跡

第1図 周辺遺跡分布図

Ⅲ A 地点遺跡

(1) 遺跡の概要

毘沙門台東A地点遺跡は、権現山から派生した東から西に延びるゆるやかな尾根上に立地する。北側は、B・C地点遺跡の尾根との間に狭小な谷が形成されている。標高は、110m前後、付近の水田面からの比高は約10mを測る。本遺跡の遺構は、傾斜がゆるやかとなる尾根上に分布しており、調査の結果竪穴式住居3軒、テラス状遺構2ヶ所、土壌10基を確認し、遺構及びその周辺から弥生土器及び石器（砥石）のほか、少量の貝殻を検出した。

(2) 遺構

第1号住居跡（第5図）

本遺跡の最先端に造られた竪穴式住居跡である。斜面を削って床面のほぼ半分を造りだしている。壁高は東側で最も高く、検出された状態で57cmを測る。壁溝は遺存部分のほぼ3分の2に巡る。遺存部の形状から長円形の平面プランであると思われる。床面からは2つのピットが検出されたが、壁からの位置及び底面レベルから支柱穴と考えられる。この2つの支柱穴の間には、深さ7cmの不整形のくぼみが検出されたが、柱穴の位置関係から炉跡と考えられる。遺存する壁のやや南よりの部分から、幅50cm、奥行30cm、深さ35cmの段が検出された。土層観察の結果この住居跡に伴うなんらかの施設であると考えられる。本住居跡床面からは、土器が出土しているが細片のため図示できなかった。

第2号・第3号住居跡（第7図）

第1号住居跡の東約18mの尾根上平坦部に位置する。2軒の住居跡が切り合っているが、北側の床面の高い方を第2号住居跡、南側の床面の低い方を第3号住居跡とした。床面のレベル差は15cmある。その切り合い関係から第2号住居跡が第3号住居跡に先行するものと思われる。

第2号住居跡はそのほとんどを第3号住居跡と切り合い、壁の3分の1を遺存させている。床面は大部分重複により失われている。検出面での壁高は北側で最も高く31cmを測る。壁溝は遺存部分を全周する。遺存する壁から平面プランは隅丸方形を呈すると思われる。本住居跡に伴う柱穴としては底面レベル及び位置関係からP2-P7-P9-P10が考えられる。床面から土器（No. 1）が出土しており、その特徴から本住居跡は上深川Ⅰ式の時期に比定できる。

第3号住居跡は北側を第2号住居跡と重複しており、検出面での壁高は東側で最も高く62cmを測る。南に向かって徐々に壁高を減じ壁の約4分の1を欠損している。壁溝は遺存部分の約5分の4に巡っており、平面プランは円形を呈している。床面中央からやや西よりに長辺35cm、短辺16cm、深さ10cmの長方形のくぼみが検出された。内部から炭が出土したことから炉跡と考えられる。また床面中央から深さ10cmの不整形のくぼみが検出しているが、その位置関係からこれも炉跡と考えられる。本住居跡に伴う柱穴としてはP5-P6-P8-P10が考えられる。なお、P1-P3-P4-P5の組合せによる建物の存在も想定できる。このうちP1は第2号住居跡のP2と切り合い、P5は第3号住居跡の柱穴と共用している。このことからP1-P3-P4-P5の建物は、第2号住居跡と第3号住居跡の間の時期に営まれた可能性が考えられよう。第3号住居跡の床面からほぼ完形の土器（No. 2）と砥石（No. 1）が出土しており、その特徴から第3号住居跡の営まれた時期は上深川Ⅱ式の時期であると考えられる。

2. 土 壌

（別表土壌観察表）

3. テラス状遺構

第1号テラス状遺構（第6図）

第1号住居跡の南東5.7mの斜面から検出された長さ2.6m、奥行0.9mの平坦面である。この平坦面からは柱穴と考えられるピットが4個検出された。また本遺構の西端から、切り合い関係を有する第1号土壌が検出された。新旧関係は不明であるが、残存する土壌の深さから同時併存は考えにくい。遺物は、床面よりほぼ完形の土器（No. 4, No. 3）が出土している。これらの土器の特徴から、本遺構の営まれた時期は、上深川Ⅱ式の時期と思われる。

第2号テラス状遺構（第8図）

第2号・第3号住居跡の東4.4mの斜面を約40cm掘り込んだ長さ7.4m、奥行1mの平坦面である。この平坦面からは3個のピットが検出された。遺物は、床面から土器（No. 6）を検出しているが、その特徴から本遺構は上深川Ⅰ式の時期に営まれたものと思われる。本遺構の東端から2mのところに第10号土壌が検出された。本遺構と第10号土壌の埋土に明確な差は認められなかったことから、本遺構と時期的にさほどへだたりが無いものと思われる。第10号土壌は、断面袋状を呈していることから貯蔵穴と考えられ、完形の土器3点（No. 8, No. 9, No. 10）が出土している。これらの土器のうち土器（No. 10）にはその体部に直径5cmの穿孔がみられ、土器（No. 9）が底部を欠損していた。またこれらの3つの土器は、土壌の底面から45cm浮いた状態で土器がちょうど隠れる程度に並んでおり、土器と土器の間、土器と土壌の側壁の間には、土器を安定させるためと考えられる角礫が挟まれていた。このことからこれらの土器は、第10号土壌がある程度埋まった時点でテラスにできたくぼみを利用して埋め置かれたことが想定できる。

（3）遺 物

調査の結果、遺構内及びその周辺から弥生土器、石器（砥石）が出土した。土器の大部分は破片の状態であったが、第2号住居跡、第1号テラス状遺構、第4号土壌、第10号土壌内から完形の鉢形土器、壺形土器、甕形土器が7点出土している。

1. 弥生土器

（別表土器観察表）

2. 砥 石（No. 1）

第2号住居跡床面から出土したもので、全長4.2cm、最大幅3.6cm、最大厚1.4cmを測る。欠損した部分を除く6面に使用痕が認められる。使用石材は安山岩である。

（4）小 結

本遺跡からは竪穴式住居跡3軒、テラス状遺構2ヶ所、土壌10基を検出した。遺物としては弥生時代後期の土器が大部分を占め、遺構はすべて弥生時代後期に属すると考えられる。なお、今回調査したA地点遺跡は権現山より南に延びた尾根からさらに西に派生した尾根上にあるが、本遺跡の所在する尾根をのぼりきったあたりの林道斜面からも土器片が採集されたことから、関連した遺跡の存在が予想される。

さて、本遺跡から検出された遺構については、その立地の点から概ね3つのまとまりに区分できる。まず第1に、第2号テラス状遺構及び第6号～第10号土壌、第2に、第2号・第3号住居跡及び第4号・第5号土壌、最後に第1号住居跡、第1号テラス状遺構及び第1号～第3号土壌である。これらを以下、順に第1遺構群、第2遺構群、第3遺構群とよぶこととし、各遺構群について若干の考察を行ってみる。

まず、これらの遺構群はいずれも住居跡かテラス状遺構を中心にその周囲に数基の土壌が存在するという形で成り立っており、本遺跡の遺構組成の点でひとつのパターンを示しているといえる。各遺構群の中で時期の明確なものをあげれば、第1遺構群の第2号テラス状遺構及び第10号土壌が上深川Ⅰ式の時期に、第2遺構群の第2号住居跡が上深川Ⅰ式の時期に第3号住居跡及び第4号土壌が上深川Ⅱ式の時期に、第3遺構群の第1号テラス状遺構が上深川Ⅱ式の時期に営まれている。また、第1遺構群の土壌と第2、第3遺構群の土壌を比べると、第2、第3遺構群の土壌の方が底面径において1.5倍程度大きくなる傾向を示しており、第1遺構群と第2、第3遺構群の間に何らかの相違が生じているようである。また、遺構周辺から出土する土器に着目すれば、上深川Ⅱ式の特徴を持つ土器の出土する割合が、第2、第3遺構群周辺で高くなる傾向を示しており、前述したそれぞれの遺構群における時期の明確な遺構の分布と合致しているようである。

以上のことから、個々の遺構については若干の相違が考えられるものの、第1遺構群が上深川Ⅰ式の時期に、第2遺構群が上深川Ⅰ式からⅡ式の時期に、第3遺構群が上深川Ⅱ式の時期に形成されたといえよう。その場合、このような遺構の変化は、本遺跡中最も良好な残存状態で検出された第2号・第3号住居跡を含む第2遺構群を中心として、上深川Ⅰ式からⅡ式の時期にかけて、第1遺構群から第3遺構群へと生活の場を移したためと想定出来よう。

注

1. 広島市教育委員会「一般県道原田五日市線（石内バイパス）道路改良工事事業地内遺跡群発掘調査報告」1988

広島市教育委員会「岩上山田遺跡発掘調査報告」1988

なお、時期的位置づけについては、上深川Ⅰ式を弥生時代後期前葉に、上深川Ⅱ式を弥生時代後期中葉～後葉に、上深川Ⅲ式を弥生時代終末～古墳時代初頭として整理し、以下全てこれに準拠した。

2. 石材については、広島大学理学部教授・沖村雄二先生の御教示を得た。

表1 A 地点遺跡土壌観察表

No.	位 置	大 き さ	出土遺物	時 期	備 考
1	尾根線をやや南 にはずれた斜面	底径 181cm 深さ 113cm	—	不 明	底面に深さ10～15cmのピットがある。 第1号テラス状遺構の西側に接する。
2	尾根線をやや南 にはずれた斜面	底径 170cm 深さ 109cm	炭化物	不 明	底面から42～74cmの高さに炭化物。 第1号テラス状遺構の西側に隣接する。
3	尾根線をやや南 にはずれた斜面	底径 165cm 深さ 113cm	—	不 明	第1号テラス状遺構の西側に隣接する。
4	尾根線上平坦面	底径 150cm 深さ 117cm	土器(Ⅶ) 貝殻	後期中葉	部分的に壁溝がある。 第1号住居跡の西1.5m。
5	尾根線上平坦面	底径 150cm 深さ 140cm	土器細片	不 明	第1号住居跡の東1.4m。
6	尾根線上平坦面	底径 82cm 深さ 75cm	—	不 明	
7	尾根線上平坦面	底径 103cm 深さ 85cm	—	不 明	
8	尾根線をやや南 にはずれた斜面	底径 130cm 深さ 80cm	—	不 明	西側側壁を里道のため損壊。
9	尾根線上西向斜 面	底径 105cm 深さ 103cm	—	不 明	第2号テラス状遺構の北側に隣接する。
10	第2号テラス状 遺構内	底径 108cm 深さ 130cm	土器(Ⅷ) (Ⅸ)(Ⅹ)	後期前葉	底面に径20～23cmの3つのすり鉢状のく ぼみがある。

表2 A 地 点 遺 跡 出 土 土 器 観 察 表

番号	出土位置	器 種	法量 (cm)	器形について	調整・成形について	備 考
1	第2号住居跡	不 明	底径 6	やや凹底を呈する底部である。	外面 ハケ目。 内面 ヘラ削り後ナデ。	色調 外面淡褐色 内面 褐色 胎土 密 焼成 良
2	第3号住居跡	甕形土器	口径 13.4 底径 6.3 胴部最大径 20 器高 25.4	口縁部は「くの字」状に外反し、端部は平たくおさめている。	外面 ハケ目。 内面 口縁部ナデ、以下ヘラ削り。 口縁端部に2条の凹線を施す。口縁直下にクシ歯状工具による刺突文を施す。	色調 赤褐色 胎土 密 焼成 良
3	第1号テラス状遺構	鉢形土器	口径 18.4 底径 3 器高 10.3	口縁部は短く外反し、端部は丸くおさめている。底部は口径に対してややずれた位置にある。	外面 口縁部ナデ、以下ハケ目。 内面 口縁部ナデ、以下ヘラ削り。	色調 赤褐色 胎土 密 焼成 良
4	第1号テラス状遺構	甕形土器	口径 14.5 底径 3.4 胴部最大径 16.2 器高 15.6	口縁部は「くの字」状に外反し平たくおさめている。体部は半球状によく張る。	外面 口縁部ナデ、以下ハケ目。 内面 口縁部ナデ、以下ヘラ削り。	色調 赤褐色 胎土 密 焼成 良 外面にスス付着
5	第1号テラス状遺構	不 明		口縁部は「くの字」状に外反し、端部はつまむことによって肥厚させている。	外面 口縁部ナデ、以下ハケ目。 内面 口縁部ナデ、以下ヘラ削り。 口縁端部に2条の凹線を施す。口縁直下にヘラ状工具による押し引き文を施す。	色調 赤褐色 胎土 密 焼成 良
6	第2号テラス状遺構	不 明		口縁部は「くの字」状に外反し、端部は粘土をはりつけることによって肥厚させている。	外面 口縁部ナデ。 内面 口縁部ナデ、以下ヘラ削り。 口縁端部に3条の凹線を施す。口縁直下にクシ歯状工具による刺突文を施す。	色調 暗褐色 胎土 密 焼成 良

番号	出土位置	器 種	法量 (cm)	器形について	調整・成形について	備 考
8	第10号土 壙	壺形土 器	口径 20.2 底径 9 胴部最大径 30.7 器高 38.8	口縁部は「くの字」 状に外反し端部は粘 土をはりつけること によって肥厚させて いる。肩部はよく張 る。底部は凹底を呈 する。	外面 口縁部ハケ目，屈 曲部はハケ目後ナ デ，以下ハケ目 内面 口縁部ハケ目後ナ デ，以下ヘラ削り 口縁端部に2条の凹線を 施す。肩部に2段のヘラ 状工具による押し引き文 を施す。	色調 赤褐色 胎土 やや密 焼成 良
9	第10号土 壙	甕形土 器	口径 16.7 底径 7.8 胴部最大径 27.3 器高 40	口縁部は「くの字」 状に外反し端部は粘 土をはりつけること によって肥厚させて いる。底部は焼成後 外側からの穿孔がみ られる。	外面 口縁部ナデ，以下 ハケ目 内面 口縁部ナデ，以下 ヘラ削り 口縁端部に2条の凹線を 施す。肩部に2段のクシ 歯状工具による刺突文を 施す。	色調 赤褐色 胎土 やや密 焼成 良
10	第10号土 壙	甕形土 器	口径 17.3 底径 5.9 胴部最大径 27.4 器高 37	口縁部は「くの字」 状に外反し端部は粘 土をはりつけること によって肥厚させて いる。胴部はほぼ中央 に直径5cmの穿孔 がみられる。胴部最 大径付近でかなり薄 手となる。	外面 口縁部ナデ，以下 ハケ目後ヘラナデ 内面 口縁部ナデ，以下 ヘラ削り 口縁端部に3条の凹線を 施す。肩部に波状文を施 す。	色調 淡褐色 胎土 やや粗 焼成 やや軟

IV B・C地点遺跡

(1) 遺跡の概要

毘沙門台東B・C地点遺跡は、権現山から南に延びる尾根上に位置する遺跡で、直下の水田面からの比高は30～50mである。調査は、造成工事の都合からB地点とC地点の2地点に分けて実施した。B地点は最近まで畑として使用されており、遺構に著しい影響があったが、C地点は旧状が山林であり、良好な状態で遺構を検出できた。両者の間は工事用の重機によって分断されていたが、本来、同一尾根上の一体となるべき遺構であるので、まとめて報告することとした。

遺構は、尾根上の全面にわたって検出され、竪穴式住居跡46軒、土壇101基、テラス状遺構3ヶ所、土器棺1基、土器蓋土壇1基、石棺2基が検出された。また、遺構内及びその周辺から弥生土器、鉄器、石器が出土した。

(2) 遺 構

1. 住 居 跡

第1号・第2号住居跡(第18図)

南向きに延びた尾根の先端の平坦部に位置する竪穴式住居跡である。2軒の住居跡が切りあっているが、南東側床面のレベルの高い方を第1号住居跡、北西側床面の低い方を第2号住居跡とした。床面のレベル差は17cmある。

第1号住居跡は、北西側を第2号住居跡に切られ、南側を畑によって削平されているため、東側と北側の一部で壁が遺存している。遺存部から推定される平面プランは円形である。遺存部において壁溝がみられる。第1号住居跡に伴う柱穴については、P3-P5-P7-P10-P13-P15-P19で巡る7本柱の構造と、P3-P4-P8-P11-P14-P18で巡る6本柱の構造の二通りの組合せが考えられ、この住居での2回の建て替えのあった可能性が考えられる。後者の6本柱の構造については、柱穴の位置関係からP3-P8-P10-P18の支柱にP4とP14の支柱の付いた構造であったとも考えられる。

第2号住居跡は、南側を第1号住居跡と重複しているものの壁・壁溝とも完存し、平面プランは円形を呈する。最も遺存状態の良い北側では、地山を72.4cm掘り込んで壁としている。床面のほぼ中央には深さ10cmの不整形の窪みがあり、その位置関係から炉跡と考えられる。第2号住居跡に伴う柱穴としてはP1-P5-P16-P19の4本柱が考えられる。

第2号住居跡の南隅は第33号土壇と重複している。この土壇の第2号住居跡床面からの深さは62cmを測るが、P16周辺の第2号住居跡床面一帯及び土壇の埋土は、炭混じりの黒色土であった。このことから第33号土壇は、第2号住居跡に伴う土壇であり、同時に廃棄されたものと考えられる。

第1号住居跡の床面からは、上深川特式の特徴を持つ土器(No. 1, No. 2)が出土している。第2号住居跡床面からは鉄器(No. 11)と上深川監式の特徴を持つ土器(No. 3, No. 4, No. 5)が出土しており、第1号住居跡の後、第2号住居跡が営まれたと考えられる。

第3号住居跡(20図)

尾根線を西にはずれた斜面に地山を最大78.6cm掘り下げて床面を作りだしている。壁は東半分で遺存し、西側は斜面により流失している。北側と東側で壁溝が見られる。遺存している壁・床面との位置関係から、平面プラン長方形のP1-P2による2本柱の構造が考えられる。本住居跡に伴うと考えられる遺物はなかった。

第4号住居跡(第19図)

尾根線をやや西にはずれた斜面に立地する。東側を畑によって著しく削平され、南東側は斜面のため流失している。北東側を第26号土壇と切りあっているが、土層が攪乱されていたため新旧関係を明らかにすることはできなかった。遺存部分での壁高は西側で最も高く27.3cmである。この部分で壁溝が巡る。遺存する部分から推定される平面プランは円形もしくは長円形である。柱穴と考えられるピットは4ヶ所に検出されたが、遺存している壁との位置関係からP1-P3とP1-P4の2本柱の組合せが考えられ、建てかえのあった可能性がある。

本住居跡床面からは土器（No. 6）が出土しており、その特徴からこの住居跡は上深川Ⅲ式（古）の時期の遺構であると考えられる。

第5号住居跡（第22図）

尾根線をやや東にはずれた斜面に立地している。西の隅を畑の溝によって欠損させているもののほぼ完存の状態を検出された。平面プラン方形の4本柱の構造である。遺存部での壁高は、北の隅が最も高く25cmを測る。壁溝は東側と西側で部分的に検出された。

住居跡の床面からは土器（No. 7）が出土しており、その特徴からこの住居跡は上深川Ⅲ式（新）の時期の遺構であると考えられる。

第6号住居跡（第21図）

畑の造成によって著しく削平され、特に南西側は畑の段によって失われている。検出された状態では東側の壁が最も高く21cmを測る。遺存部において壁溝が巡っている。柱穴と考えられるピットは7ヵ所に検出され、このうち、床面からはP1、P2、P3の各柱穴が検出されたが、住居跡の大半を畑によって削平されているため組合せを明確にしがたい。また、壁に沿ってP4-P5-P6、P4-P5-P7の組合せでほぼ等間隔となるように配置されていることから、主柱の組合せに対応して補助的な柱が建てられていたことが考えられよう。

本住居跡の床面からは土器（No. 8）が出土しており、その特徴からこの住居跡は上深川Ⅲ式（古）の時期の遺構であると考えられる。

なお、本住居跡の東7mに第16号土壌が検出されており、土壌内から上深川Ⅲ式（古）の特徴を持つ土器が出土した。時期を同じくする遺構であること及び位置関係から、第16号土壌は本住居跡に伴う土壌であった可能性がある。

第7号住居跡（第23図）

尾根線をやや東にはずれた斜面に立地する。壁は北西側で最も高く、検出された状態で65cmを測る。南東側は、工事用重機によって破壊されていた。遺存部では壁溝が全周しており、推定される平面プランは円形となろう。主柱穴と考えられるピットは2ヵ所にあるが、壁との位置関係から、すでに破壊を受けた部分にも柱穴が存在していたと思われ、4本柱の構造が考えられる。なお、2ヵ所の柱穴はそれぞれ重複しており、建てかえのあった可能性がある。推定される床面のほぼ中央で炭が少量出土しており、この位置に炉跡があった可能性がある。

本住居跡の床面からは土器（No. 9）が出土しており、その特徴からこの住居跡は上深川Ⅲ式（古）の時期の遺構であると考えられる。

本住居跡は北西側で第40号土壌と重複している。両者の土層には明確な相違を見出すことができず、また、柱穴及び床面との位置関係から、第40号土壌は本住居跡に付属する貯蔵穴であると考えられることができる。

第8号住居跡（第24図）

尾根線をやや西にはずれた斜面に立地する。壁は北東側で最も高く、検出された状態で74cmを測る。西側で斜面のため壁と床の一部が流失し、東隅を第41号土壌と切りあっている。遺存部では壁溝が全周しており、推定される平面プランは隅丸方形である。主柱穴と考えられるピットは4ヵ所にある。

本住居跡の床面からは砥石（No. 9）と土器（No. 10）が出土しており、土器の特徴からこの住居跡は上深川Ⅱ式の時期の遺構であると考えられる。

東隅で重複している第41号土壌は、土層観察により、土壌が先行すると考えられる。

第9号住居跡（第25図）

尾根線をやや西にはずれた斜面に立地している。壁は北東側で最も高く、検出された状態で44cmを測るが、南西側では斜面のため壁と床面の一部が流失している。遺存部において壁溝が全周し、推定される平面プランは隅丸方形である。柱穴と考えられるピットは7ヵ所にあるが、その位置関係からP1-P2-P6-P5の主柱穴とP3、P4、P7の支柱の構造が考えられよう。推定される床面の中央に深さ15cmの不整形のくぼみがあり、その位置関係から炉跡と考えられる。このくぼみからは炭混じりの黒色土が検出されている。

本住居跡の床面からは土器（No. 11）が出土しており、その特徴からこの住居跡は上深川Ⅱ式の時期の遺構であると考えられる。

第 1 0 号住居跡 (第 2 7 図)

尾根線を東にはずれた緩やかな斜面に立地している。西側と北側で壁が遺存しており、最も良好に遺存している北西の隅で壁高は 3 4 c m を測る。東側と南側の壁及び床面の一部は斜面のため流失している。遺存する部分において壁溝が巡る。推定される平面プランは隅丸方形となろう。柱穴と考えられるピットは 2 ヲ所にあるが、壁との位置関係から、流失した南側の床面にも柱穴のあった可能性がある。

本住居跡の床面からは土器 (No. 1 2) が出土しており、その特徴からこの住居跡は上深川Ⅱ式の時期の遺構であると考えられる。

第 1 1 号・第 1 2 号・第 1 3 号住居跡 (第 2 8 図)

尾根線をやや西にはずれた緩やかな斜面に立地している。互いに切りあい関係を有する住居跡群である。南西側から床面の低い順に第 1 1 号住居跡、第 1 2 号住居跡、第 1 3 号住居跡と呼称する。

第 1 3 号住居跡は北側と東側の壁が遺存しており、北側で壁溝が見られる。最も遺存状態の良い北隅で壁高 4 4 c m を測るが南側で第 1 1 号住居跡・第 1 2 号住居跡と重複している。本住居跡に伴う柱穴は、壁との位置関係及び規模から P 1 と P 2 が考えられる。推定される平面プランは長方形となろう。床面からは土器 (No. 1 5) が出土しており、その特徴からこの住居跡は上深川Ⅱ式の時期の遺構であると考えられる。

第 1 2 号住居跡は、北側を第 1 3 号住居跡と、東側を第 1 1 号住居跡と切りあって検出された。第 1 3 号住居跡の床面とのレベル差は 2 2 c m ある。壁が遺存するのは北側の一部分で、そこに壁溝も見られる。本住居跡に伴うと考えられる柱穴は P 3 である。本住居跡に伴う遺物は出土していない。

第 1 1 号住居跡は北西で第 1 2 号住居跡と切りあっている。壁は北側と東側で遺存している。第 1 2 号住居跡床面とのレベル差は 2 5 c m、第 1 3 号住居跡床面とのレベル差は 4 7 c m ある。遺存部において壁溝が巡る。推定される平面プランは長方形となろう。床面からは土器 (No. 1 3, No. 1 4) が出土しており、その特徴からこの住居跡は上深川Ⅱ式から上深川Ⅲ式にかけての時期の遺構であると考えられる。

出土した遺物の特徴から第 1 3 号住居跡の後、第 1 1 号住居跡が築造されたと考えられる。

第 1 4 号住居跡 (第 2 9 図)

尾根線をやや東にはずれた斜面に立地している。西側と北側で壁が遺存しており、最も良好に遺存している北西の隅で壁高は 1 6 c m を測る。南側の壁及び床面は斜面のため流失し、東側は第 2 号テラス状遺構と重複している。柱穴と考えられるピットは P 2 であるが、壁との位置関係から P 6 との組合せも考えることができる。遺存する壁と柱穴に、対応する関係が見られることから住居跡とした。

本住居跡からは土器が出土しているが、細片のため図示しえない。

第 1 5 号住居跡 (第 2 9 図)

尾根線をやや東にはずれた斜面に立地している。西側と北側で壁が遺存しており、最も良好に遺存している北西の隅で壁高は 5 3 c m を測る。南側及び東側は斜面のため流失している。遺存部分において壁溝が巡る。柱穴と考えられるピットは 2 ヲ所にあるが、流失した部分に柱穴のあった可能性もある。このことから推定される平面プランは長円形もしくは隅丸方形となろう。

床面からは土器 (No. 1 6) が出土しており、その特徴からこの住居跡は上深川Ⅱ式の時期の遺構であると考えられる。

なお、本住居跡の北東の壁に段が検出されており壁溝を伴うことから、これも住居跡であった可能性がある。

第 1 6 号住居跡 (第 3 0 図)

尾根線を西にはずれた緩やかな斜面に立地している。壁は北西側と北東側で遺存し、壁高は北の隅で 3 8 c m を測る。南側の壁と床面は斜面のため流失している。遺存部において壁溝が巡る。柱穴と考えられるピットは床面に P 1 と P 2 があるが、南側斜面にも P 1 に対応して P 3 が認められ、P 2 に対応する柱穴のあった可能性がある。その場合は、推定されるプランは方形となる。

床面からは土器 (No. 1 7) が出土しており、その特徴からこの住居跡は上深川Ⅰ式の時期の遺構であると考えられる。

なお、本住居跡の北西に隣接して高さ 1 6 ～ 2 0 c m の壁を持つ段があり、何らかの施設があった可能性がある。

第 17 号・第 18 号住居跡 (第 32 図)

尾根線をやや東にはずれた斜面に立地する、切りあい関係を有する住居跡群である。東側から床面の低い順に第 17 号住居跡、第 18 号住居跡と呼称する。

第 17 号住居跡は、壁・壁溝ともほぼ完存しており、平面プランは隅丸方形を呈する。検出面での壁高は北側で最も高く 63 cm を測る。柱穴と考えられるピットは 4 ヲ所に検出された。このうちの 3 ヲ所には重複がみられ、建てかえのあった可能性がある。床面中央からやや北寄りには深さ 8 cm の不整形のくぼみがあり、位置関係から炉跡と考えられる。床面からは土器 (No. 18) が出土しており、その特徴からこの住居跡は上深川Ⅲ式 (古) の時期の遺構であると考えられる。

第 18 号住居跡は第 17 号住居跡の北西の斜面にある。壁・壁溝の一部と柱穴が 1 ヲ所検出されている。推定される平面プランは、隅丸方形もしくは長円形である。第 18 号住居跡の床面からは土器 (No. 19) が出土しており、その特徴からこの住居跡は上深川Ⅰ式の時期の遺構であると考えられる。

第 19 号・第 20 号住居跡 (第 31 図)

尾根上南向き斜面に立地する、切りあい関係を有する住居跡群である。南側から床面の低い順に第 19 号住居跡、第 20 号住居跡と呼称する。

第 19 号住居跡は、北側の壁と壁溝を遺存させる住居跡である。床面からは柱穴と考えられる P2 と P3 のピットが検出されている。第 20 号住居跡と重複しており、床面のレベル差は 11 cm である。遺存している壁の形状や、壁と平行する P2、P3 の柱穴の位置関係から考えて、遺存部を一辺とする隅丸方形もしくは方形の方面プランが考えられる。

第 20 号住居跡は北西の壁の一部と柱穴が遺存している。壁高は北の隅で最も高く 53 cm を測る。床面は大部分を第 19 号住居跡と重複している。壁溝は検出されなかった。本住居跡に伴う柱穴としては、壁との位置関係から P1 が考えられる。床面からは土器 (No. 20) が出土しており、その特徴からこの住居跡は上深川Ⅱ式の時期の遺構であると考えられる。

第 19 号住居跡の床面からは遺物は出土していないが、第 19 号住居跡の床面から浮いて第 20 号住居跡床面と同じレベルで焼土が検出されており、第 19 号住居跡が第 20 号住居跡に先行すると考えられる。

第 21 号住居跡 (第 33 図)

尾根上南向き斜面に立地する。北側で壁と壁溝が遺存し、検出面での壁高は北東で最も高く 48 cm を測るが、斜面のため南西側の壁及び床面は流失している。推定される平面プランは方形となろう。柱穴と考えられるピットは 3 ヲ所に検出されたが、壁との位置関係から、南東側斜面にも柱穴があった可能性がある。推定される床面中央からやや西寄りに深さ 12 cm の不整形のくぼみがあり、位置関係から炉跡と考えられる。

本住居跡の北東側の壁溝から石庖丁 (No. 14) が出土している。床面からは土器 (No. 21, No. 22, No. 23, No. 24) が出土しており、その特徴からこの住居跡は上深川Ⅴ式から上深川Ⅲ式にかけての時期の遺構であると考えられる。

第 22 号住居跡 (第 34 図)

尾根上南向き斜面に立地する。地山を約 1 m 掘り込み、幅 7 m 奥行 2 m で遺存する平坦面が造りだされ、この平坦面の南端中央をさらに一辺 1.8 m、深さ 20 cm の掘り方が造られている。平坦面の壁は、北側で掘り方に沿って遺存し、壁に沿って壁溝が部分的に巡る。平坦面中には柱穴と考えられるピットが 4 ヲ所に検出された。掘り方の壁は北側で遺存している。床面の南端には深さ 5 cm の不整形のくぼみと焼土が検出されており、炉跡と考えられる。北隅には柱穴と考えられるピットが 2 ヲ所に検出されている。

平坦面と掘り方には明瞭な土層の違いが無いことから、両者は一体のものであり、平坦面の規模に比して掘り方の規模の小さいこと、柱穴の組み合わせとして、平坦面中の P4 と掘り方中の P5 および P6 の組み合わせが考えられることから、ベッド状の段をもった住居であると考えられよう。

平坦面からは土器 (No. 25) が出土しており、その特徴からこの住居跡は上深川Ⅱ式の時期の遺構であると考えられる。

第 23 号住居跡 (第 35 図)

尾根線を西にはずれた斜面に平坦面を造りだし、その平坦面上に築造された住居跡である。壁は完存し、地山を 36～68 cm 掘りくぼめ、壁溝は南側の一部を欠いている。平面プランは隅丸方形である。柱穴と考えられるピットは 4 ヲ所に検出された。床面中央には深さ 10 cm の不整形のくぼみと焼土が検出さ

れており、炉跡と考えられる。本住居跡の床面からは土器（No. 26）が出土しており、その特徴からこの住居跡は上深川Ⅲ式（古）の時期の遺構であると考えられる。

本住居跡は西側で第5号土壌と重複している。床面のレベル差が12cmしかなく、両者の同時併存は考えにくい。土壌内から遺物が出土していないため、新旧関係を確認できなかった。

第24号住居跡（第36図）

尾根上平坦部の南端に立地している。住居の北側で壁及び壁溝が遺存するが、南側の壁及び床面は斜面にかかり流失している。柱穴と考えられるピットは1ヵ所に検出されたが、壁との位置関係から、流失した床面にも柱穴があったと考えられる。遺存している状態から推定される平面プランは隅丸方形もしくは長方形となろう。

本住居跡の床面からは土器（No. 27）が出土しており、その特徴からこの住居跡は上深川Ⅱ式の時期の遺構であると考えられる。

第25号住居跡（第37図）

尾根線を東にはずれた斜面を削って造りだした平坦面上に立地する。壁はほぼ完存し、壁高は北側で68cmを測るが、南側では平坦面の端にかかるため、10cmで遺存する。壁溝は全周し、平面プランは隅丸方形を呈する。柱穴と考えられるピットは6ヵ所にある。床面のほぼ中央には深さ5cmの不整形のくぼみが検出されており、その位置関係から炉跡と考えられる。このくぼみからは焼土が検出されている。

本住居跡の床面からは鉄器（No. 7, No. 12）と土器（No. 30, No. 31）が出土しており、その特徴からこの住居跡は上深川Ⅲ式（古）の時期の遺構であると考えられる。本住居跡に伴う平坦面からは土器（No. 28, No. 29）が出土している。

なお、住居跡北側の斜面に遺存する3つの段は、土層を観察したところ住居跡との同時併存が考えられることから、平坦面を造成する際の痕跡であると思われる。また、本住居跡西側の平坦面は壁溝を伴っており、住居跡であった可能性がある。

第26号住居跡（第38図）

尾根線を西側にそれた斜面に平坦面を造りだし、その平坦面上に築造された住居跡である。壁高は北東側で最も高く59cmを測るが、南西側の壁の一部と床面は斜面のため流失している。壁溝は遺存部で全周し、推定される平面プランは隅丸方形である。柱穴と考えられるピットは6ヵ所に検出され、柱穴間の距離がほぼ等しくなるP1-P2-P3-P5の組合せとP1-P2-P4-P6の組合せが考えられ、建てかえがあった可能性がある。床面中央からやや南西寄りには深さ12cmの不整形のくぼみと焼土が検出されており、炉跡と考えられる。

本住居跡の床面からは土器（No. 32）が出土しており、その特徴からこの住居跡は上深川Ⅱ式の時期の遺構であると考えられる。

第27号住居跡（第39図）

尾根線を西側にそれた斜面に平坦面を造りだし、その平坦面上に築造された住居跡である。壁高は北東側で最も高く70cmを測るが、北西側の壁と壁溝の一部は斜面のため流失している。壁溝は遺存部において全周し、平面プランは円形を呈する。柱穴と考えられるピットは7ヵ所に検出されている。その位置関係からP1-P3-P4-P5-P6の組合せとP2-P4-P5-P7の組合せが考えられ、建てかえがあった可能性がある。床面中央からやや南西寄りには深さ18cmの不整形のくぼみがあり、その位置関係及び焼土を伴うことから炉跡と考えられる。

本住居跡の床面からは鉄器（No. 2）と土器（No. 33）が出土しており、その特徴からこの住居跡は上深川Ⅲ式（古）の時期の遺構であると考えられる。

本住居跡の東に隣接して第60号土壌を検出した。第60号土壌は断面袋状を呈する貯蔵穴と考えられるが検出面での深さが25cmしかなく、表土からも約30cmの深さになることから、本住居跡築造の際の造成に伴って上部を削平されたと考えられる。このことから、第60号土壌が第27号住居跡に先行すると考えられる。

第28号住居跡（第40図）

尾根線を東側にそれた斜面に平坦面を造りだし、その平坦面上に築造された住居跡である。壁高は北西側で最も高く70cmを測るが、南側の壁と床面の一部は斜面のため流失している。壁溝は北側と西側に巡る。平面プランは隅丸方形と推定される。柱穴と考えられるピットは5ヵ所に検出されているが、深さ

41～49cmのP1-P2-P3-P4の4本柱の組合せが考えられる。P5は深さ20cmの浅い柱穴で支柱であったと思われる。床面中央からやや南東寄りには深さ5cmの不整形のくぼみがあり、その位置関係から炉跡と考えられる。

本住居跡の床面からは土器（No. 34）が出土しており、その特徴からこの住居跡は上深川Ⅱ式の時期の遺構であると考えられる。

本住居跡の北東に隣接して第62号土壌を検出した。住居跡に伴う平坦面に位置し、住居跡築造の影響を受けていないことから、本住居跡に伴う土壌であった可能性がある。

第29号住居跡（第41図）

屋根線を東にはずれた斜面に、地山を約30cm掘り込み幅6.2m奥行1.7mにわたって平坦面が造りだされている。その平坦面の南側中央をさらに20cm掘り込んで、第29号住居跡が造りだされている。平坦面の壁は北側で住居跡のプランに沿うように遺存しており、西側と東側の壁及び床面はそれぞれ流失している。壁に沿って柱穴と考えられるピットが並んでおり、垂木尻をとめる杭の痕と考えることができる。

住居跡の壁は北側で遺存しており、平坦面と同様西側と東側でそれぞれ流失している。遺存部において壁溝が巡る。柱穴と考えられるピットは2ヵ所にあり、壁との位置関係などから隅丸方形の平面プランを推定できる。

平坦面と第29号住居跡には明瞭な土層の違いがないことから、両者は一体のものであると考えられる。

平坦面の床面からも第29号住居跡からも遺物が出土しておらず、この住居跡の営まれた時期は不明である。

第30号住居跡（第42図）

屋根線をやや東にはずれた斜面に平坦面を造りだし、その平坦面上に立地する。壁はほぼ完存し、検出された状態での壁高は北の隅で最も高く77cmを測る。壁溝はほぼ全周し、平面プランは隅丸方形を呈する。床面中央には深さ5cmの不整形のくぼみがあり、その位置関係から炉跡と考えられる。柱穴と考えられるピットは4ヵ所から検出された。

本住居跡の床面の全面にわたって大量の炭化材が検出された。炭化材は住居跡の北側で良好に検出された。これらは、屋根掛けに用いられた垂木材であったと考えられる。

本住居跡の床面からは遺物が出土しておらず、この住居跡の営まれた時期は不明である。

なお、本住居跡の北側に隣接して第66号土壌が検出されているが、検出面での深さが24cmしかなく、表土からも約30cmの深さになることから、本住居跡築造の際の造成に伴って上部を削平されたと考えられる。このことから、第66号土壌が第30号住居跡に先行すると考えられる。

第31号・第32号住居跡（第43図）

屋根線を東にはずれた斜面に平坦面を造りだし、その平坦面上に築造された、重複する住居跡群である。南側から床面の高い順に第31号住居跡、第32号住居跡と呼称する。

第31号住居跡は、北東側を第32号住居跡と切りあい、南東側を斜面のため流失しており、西側の1/4が遺存している。西側で壁高は36cmを測り、遺存部において壁溝が巡る。推定される平面プランは円形もしくは隅丸方形である。本住居跡に伴うと考えられる柱穴の組合せは遺存する壁との位置関係からP5-P6-P9-P4が考えられる。床面からは弥生土器（No. 35, No. 36）が出土しており、その特徴から本住居跡は上深川Ⅱ式の時期の遺構であると考えられる。

第32号住居跡は、平面隅丸方形のプランを呈する住居跡である。東側の壁と床面の一部が斜面のため流失しているほか良好に壁が遺存する。壁高は北の隅で最も高く73cmを測る。第31号住居跡床面とのレベル差は28cmである。遺存部において壁溝は全周する。本住居跡に伴うと考えられる柱穴の組合せは遺存する壁との位置関係からP1-P2-P4-P8が考えられる。本住居跡からは土器（No. 37）が出土しており、その特徴から本住居跡は上深川Ⅱ式の時期の遺構であると考えられる。

第31号・第32号住居跡の土層を観察したところ、第32号住居跡の床面から約36cmの高さに水平な土層面が観察された。この土層面は北側で土手上に10cm盛り上がり終息しており、これが第31号住居跡の推定される平面プランと一致することから、第31号住居跡の床面であったと考えられる。このことから、第32号住居跡は第31号住居跡に先行すると考えられよう。なお、第31号住居跡は東側で第70号土壌と切りあっているが、第31号住居跡の柱穴との位置関係及び土壌の深さから、第31

号住居跡に伴う土壌であった可能性がある。

第 3 3 号・第 3 4 号・第 3 5 号住居跡 (第 4 5 図)

尾根上の平坦部に位置する互いに重複した住居跡群である。南側から第 3 3 号住居跡、第 3 4 号住居跡、第 3 5 号住居跡と呼称する。

第 3 3 号住居跡は、南側の壁と床面を遺存させており、壁高は 53 cm を測る。西側と東側の壁は斜面のため流失し、北側は第 3 4 号・第 3 5 号住居跡と重複している。遺存している壁の西寄りの 2/3 に壁溝が見られ、溝内には杭を打った痕と思われるピットが並んでいる。遺存部分から推定される平面プランは円形となる。第 3 3 号住居跡及び第 3 4 号住居跡の床面からは柱穴と考えられるピットが 11 ヲ所に検出された。これらの柱穴は床面からの深さが 42～63 cm とほぼ同じ規模であるが、壁との位置関係及び柱穴の配置から P1-P3-P8-P10, P2-P6-P10, P4-P9 の 3 通りの組合せが考えられ、建てかえのあったことが考えられる。床面からは土器 (No. 38, No. 39) が出土しており、その特徴から本住居跡は上深川Ⅱ式の時期の遺構であると考えられる。

第 3 3 号住居跡の壁とほぼ平行に長さ約 2 m の溝が検出された。この溝及び床面は東側と西側を斜面のため流失し、北側の大部分を第 3 5 号住居跡と重複している。遺存部分から推定される平面プランは円形若しくは隅丸方形である。土層を観察したところ、この溝から壁と考えられる土層の立ち上がりが見られた。また、土層には第 3 5 号住居跡を埋めて床を張り出した痕跡と思われる水平な土層面があり、前述の溝から約 4 m で終息しており、溝の遺存部分から推定される平面プランと一致する。本住居跡に伴う柱穴としては P5-P11 が考えられ、さらに柱穴が存在していたと考えられるが、第 3 5 号住居跡と重複しているため明確にしがたい。床面からは土器 (No. 40) が出土しており、その特徴から本住居跡は上深川Ⅲ式 (古) の時期の遺構であると考えられる。

第 3 5 号住居跡は、第 3 3 号住居跡の南側半分と重複した住居跡で床面のレベル差は 55 cm を測る。住居跡の北側では壁高を 30 cm に減じるとともに岩石に当たっている。西側では第 7 2 号土壌と重複している。土壌の床面にも岩石が露頭している。岩石と土壌のある北側と西側を除いて壁溝が巡り、平面プランは円形を呈する。柱穴と考えられるピットは床面上に 7 ヲ所あり、柱穴間の距離がほぼ等しくなる P15-P17-P18-P20, P-15-P17-P19-P20 の 2 通りの主柱穴の組合せが考えられる。床面中央には深さ 5 cm の不整形のくぼみがあり、その位置関係から炉跡と考えられる。本住居跡の北東の隅の溝内には深さ 10～20 cm で P22, P23 の柱穴があり、支柱であったと考えられる。床面からは鉄器 (No. 4) と土器 (No. 41) が出土しており、その特徴から本住居跡は上深川Ⅱ式の時期の遺構であると考えられる。

第 3 5 号住居跡と西側で重複する第 7 2 号土壌は、断面袋状を呈する貯蔵穴と考えられるが、住居跡床面とのレベル差は 16 cm しかなく同時併存は考えにくい、土壌内から遺物が出土していないため、新旧関係は確認できなかった。

土層の観察及び遺物の出土状況から、本住居跡群においては第 3 3 号住居跡及び第 3 5 号住居跡の後第 3 4 号住居跡が築造されたものと思われる。第 3 3 号住居跡と第 3 5 号住居跡の関係は明確でない。

第 3 6 号・第 3 7 号・第 3 8 号・第 3 9 号・第 4 0 号住居跡 (第 4 6 図)

尾根上平坦部に立地する。ほぼ同心円となる 5 段の平坦面があるが、それぞれ壁、壁溝、床面を伴うことから住居跡とし、床面の高い順に第 3 6 号・第 3 7 号・第 3 8 号・第 3 9 号・第 4 0 号住居跡と呼称する。

第 3 6 号住居跡は南側の壁と壁溝を遺存させる。東側の壁は斜面のため流失しており、他の部分は第 3 7 号・第 3 8 号住居跡と重複している。壁高は最も遺存状態の良い南西側で 36 cm を測る。遺存している部分から推定される平面プランは円形である。床面の大部分が他の住居跡と重複していることから、本住居跡に伴う柱穴は明確にしがたい。床面からは土器 (No. 42) が出土しており、その特徴から本住居跡は上深川Ⅳ式の時期の遺構であると考えられる。

第 3 7 号住居跡は南側の壁及び壁溝、北西側の壁及び壁溝が遺存しており、径は 4.4 m を測る。東側の壁は斜面により流失し、北側から東側にかけては第 3 9 号住居跡と重複している。第 3 6 号住居跡床面とのレベル差は 10 cm である。遺存している部分から推定される平面プランは円形である。本住居跡に伴うと考えられる柱穴は P7, P6, P4, P14 であり、壁との位置関係から 6 本柱の構造が想定されるが、重複により確認できなかった。本住居跡に伴うと考えられる遺物は出土していない。

第38号住居跡は南側と東側にかけての壁と壁溝を遺存させている。第37号住居跡床面とのレベル差は13cmである。遺存している部分から推定される平面プランは一辺が3.2mの隅丸方形である。本住居跡に伴うと考えられる遺物は出土していない。

第39号住居跡は、東側で第73号土壌、第74号土壌と重複しているほか、壁を完存させている。第38号住居跡床面とのレベル差は40cmを測る。壁溝は東側の一部分と西側の一部分に見られる。柱穴と考えられピットは6ヵ所にあり、壁との位置関係からP8-P9-P10-P11-P12-P13の6本柱の構造が考えられる平面プランは円形を呈する。床面からは鉄器（No. 9）と土器（No. 43）が出土している。土器の特徴から本住居跡は上深川Ⅱ式の時期の遺構であると考えられる。東側で重複している第73号土壌、第74号土壌とともに住居跡床面とのレベル差が3～5cmであるが、土層を観察したところ、第73号土壌、第74号土壌ともに本住居跡に先立つ遺構であると考えられる。

第40号住居跡は、壁と壁溝を完存させており、第39号住居跡床面とのレベル差は11cmを測る。柱穴と考えられるピットは4ヵ所にあり、壁との位置関係からP15-P16-P17-P18の4本柱の構造が考えられる。床面の中央には深さ6cmの不整形のくぼみと焼土が検出されており、炉跡と考えられる。本住居跡の床面からは土器が出土しているが細片のため図示しえなかった。

なお、第39号住居跡の北西側の床面の大部分は第40号住居跡と重複しており、これをマサ土で埋めて床を張っている。このマサ土層の上からは焼土が検出されており、第39号住居跡に伴う炉跡と考えられることから第40号住居跡を拡張して第39号住居跡が築かれたものと考えられる。

本住居跡群の東西の斜面からは上深川Ⅰ式の特徴を持つ土器が多く出土しており、時期を確定しえなかった住居跡が上深川Ⅰ式の時期の遺構になる可能性がある。

第41号住居跡（第47図）

尾根上平坦部をやや西にはずれて位置する。壁はほぼ完存し、検出された状態での壁高は東の隅で最も高く77cmを測る。南西の隅では第76号土壌ときりあっている。壁溝はほぼ全周し、平面プランは方形である。床面のほぼ中央には深さ6cmの不整形のくぼみが検出され、炉跡と考えられる。柱穴と考えられるピットは4ヵ所から検出された。このうち、1ヵ所に重複が見られ、本住居跡は建てかえのあった可能性がある。

第42号住居跡（第48図）

尾根上平坦部をやや東にはずれて位置する。壁は住居跡の西側で良好に遺存しており、壁高は50cmを測るが、東側の壁と床面の一部は斜面のため流失している。南側では第75号土壌と重複している。遺存する部分において壁溝が巡り、推定される平面プランは隅丸方形である。床面のほぼ中央から深さ7cmの不整形のくぼみが検出されており、炉跡と考えられる。柱穴と考えられるピットは8ヵ所にあり、壁との位置関係及び規模から、P1-P2-P3-P4とP5-P6-P7-P8の組合せが考えられるが、P5-P6-P7-P8については、底面レベルが不揃いであり、規模も小さいことから支柱穴とは考えにくく、P1-P2-P3-P4の支柱であったと考えられる。

本住居跡の床面からは、砥石（No. 4, No. 5, No. 8, No. 10）が出土している。

本住居跡は南端で第75号土壌ときりあっているが、土壌内に遺物が無く、新旧関係を確認できなかった。

第43号住居跡（第49図）

尾根上平坦部をやや西にはずれて位置する。住居の南側と西側が斜面によって流失しているが、東側で壁が遺存し、壁高は東の隅で17cmを測る。壁溝は見られない。遺存部分から推定される平面プランは長円形である。柱穴と考えられるピットは2ヵ所に検出された。壁との位置関係から、この2本柱の組合せであったと考えられる。本住居跡が営まれていた時期は不明である。

第44号住居跡（第50図）

尾根上平坦部をやや東にはずれて位置する。住居の南側と東側が斜面によって流失しているが、北側で壁が遺存し、壁高は北西の隅で53cmを測る。この部分で土器蓋土壌と重複している。検出された状態から、住居跡が埋まった後、土器蓋土壌を造ったものと思われる。

壁溝は北東側の一部に見られる。柱穴と考えられるピットは1ヵ所に検出されたが、壁との位置関係から南側斜面にも柱穴が存在していたと考えられる。床面からの遺物は無く、本住居跡が営まれていた時期は不明であるが、土器蓋土壌に使用されていた土器が上深川Ⅰ式の特徴を持つことから、これより以前の

遺構となろう。

第45号住居跡（第51図）

尾根上平坦面に位置する掘立柱建物跡である。柱穴は6ヵ所から検出され、P1-P2-P4-P5の4本柱にP3、P6の支柱の付いた構造が考えられる。床面中央に深さ6cmの不整形のくぼみと炭混じりの黒色土が検出されており、その位置関係から炉跡と考えられる。このことから、この掘立柱建物跡は平地式の住居跡であったと考えられる。

本住居跡に伴う遺物としては、P6内から土器（No. 44）が出土しており、その特徴から本住居跡は上深川Ⅱ式の時期の遺構であると考えられる。

第46号住居跡（第52図）

尾根のつけ根に当たり、本遺跡中最高所の住居跡である。尾根線をやや西にはずれた斜面に立地している。壁はほぼ完存し、壁高は東の隅で74cmをはかるが、斜面にかかる西側では第92号土壇と重複している。壁溝はほぼ全周し、平面プランは隅丸方形である。本住居跡の床面からは、柱穴と考えられるピットが8ヵ所から検出されている。このうち、主柱穴と考えられるのは床面からの深さが53cm～68cmのP1-P2-P3-P4と床面からの深さが32～40cmのP5-P6-P7-P8の2通りの組合せで柱穴が巡り、建てかえがあった可能性がある。炉跡は検出されなかった。

本住居跡内に第93号土壇、第94号土壇、第95号土壇の3つの土壇が検出された。それぞれ住居跡の壁に寄って柱穴の間に配置されており、住居跡の床面からの深さが50～85cmとなることから、本住居跡に付属する施設であると考えることができよう。

本住居跡の床面からは鉄器（No. 8）と土器（No. 45、No. 46）が出土している。土器の特徴から本住居跡は上深川Ⅱ式の時期の遺構であると考えられる。

本住居跡と切りあう第92号土壇は、住居跡床面とのレベル差が6cmしかなく同時存在は考えにくい。しかし、第92号土壇が上深川Ⅱ式の特徴を持つ土器を出土させていることから、さほど時期を隔てずに営まれた遺構であると考えられる。

2. 土 壇

（別表土壇観察表）

3. その他の遺構

第1号テラス状遺構（第53図）

尾根線を西側にはずれた斜面に地山を約1m掘り込んで奥行1.5mの平坦面が造りだされている。この平坦面は、北西側が尾根の斜面によって流失し、南側と西側が畑の石垣によって破壊され、幅7mで遺存しており、西側に広がる可能性がある。平坦面上には柱穴と考えられるピットが11ヵ所に検出されたが、西側を畑により削平されていたため、組合せを明確にしがたい。また、遺存している状態からは住居跡としての平面プランを想定できず、壁溝、炉跡等もないことから、テラス状遺構とした。

本遺構の床面からは土器（No. 47、No. 48、No. 49）が出土している。これらの土器の特徴から本遺構は、上深川Ⅱ式の時期の遺構であると考えられる。

なお、第1号テラス状遺構の推定される遺構面の内側に、第8号・第9号土壇があり、第1号テラス状遺構が作り出された後、第8号・第9号土壇が造られたものと思われる。

第2号テラス状遺構（第29図）

尾根線をやや東にはずれた斜面に立地する。2段になっているが新旧関係は不明である。上段は北側と西側の一部で壁が遺存し、最も遺存状態の良い北西側で66cmを測る。下段は上段とのレベル差が10cmを測り、西側で第14号住居跡と切りあっている。床面には柱穴と考えられるピットが壁と平行に3ヵ所から検出されたが、組合せを明確にすることはできない。床面からは鉄器（No. 5）が出土している。

なお、上段の北西に隣接して80×50cmの平坦面が検出されたが、これもテラス状遺構となる可能性がある。

第3号テラス遺構（第54図）

尾根線を西にはずれた斜面に奥行2mの平坦面を造りだしている。壁高は北側で最も良好に遺存しており、58cmを測る。この部分では1.7mにわたって段が見られる。壁の西側では一部に壁溝も見られる。柱穴・炉跡等はない。

第3号テラス状遺構の埋土からは大量の土器が流れ込みの状態出土したが、それらの土器を伴う上層

の下、テラス状遺構の床面から完存の土器が3個体（No. 50, No. 51, No. 52）出土した。これらの土器の特徴から本テラス状遺構は上深川Ⅰ式の時期の遺構と考えられる。

土器棺墓（第55図）

第25号住居跡の北西6mの場所に立地する。斜面に高さ30cm奥行80cmの小テラスを造りだした後、さらに深さ13cm、長さ52cm、幅23～33cmに掘り込んで墓壇としている。小テラスの壁には蓋の受け部と思われる掘り込みがある。墓壇底面には北東の一部に溝があるが、これは土器片を固定するためと考えられる。

棺材として大型の壺形土器1個体分を割った破片が用いられている。墓壇の底面には、隙間が生じないよう小破片を重ねあわせるように敷き詰めてある。墓壇の底面は南西側に傾斜しているが、土器片は水平を保っている。墓壇の側壁には、10×20cm程度の大きい破片を石棺状に組み上げて棺としている。さらに、口縁部を墓壇周辺の小テラス上に置き、棺蓋の端を押さえるように並べられていた。蓋材は検出されていない。

土器棺は南西側で広くなっており、頭位は南西側となろう。棺内からは遺物は出土しなかった。棺の規模から本土器棺墓は小児用と考えられる。

棺に使用された壺形土器（No. 75）の特徴から、本土器棺墓は上深川Ⅱ式の時期の遺構と考えられる。

土器蓋土壇（第56図）

尾根上の斜面に検出された。墓壇は、第44号住居跡ときりあって、長軸61.5cm短軸31.5cmの長円形の掘り方を形成している。壁高は北側で26cm、南側で4cmである。底面はほぼ平坦であった。棺身は壺形の土器を縦方向に割り、底部を合わせて据え置かれていた。口縁部周辺には打ち割った別個体の土器の破片をあてていた。棺身の土器は、墓壇の底面の直上から出土しており、直接遺骸を覆っていたと推定される。土器に覆われている範囲は長さ55cm幅25cmになることから、小児用の墓であったと考えられる。

土器蓋内からは遺物は出土しなかったが、使用されていた土器（No. 76, No. 77）の特徴から上深川Ⅰ式の時期の遺構であると考えられる。

第1号石棺（第57図）

尾根上の頂部、尾根線をやや西にはずれて設置されている。この頂部には後述する第2号石棺のほか、他の遺構は存在しない。

第1号石棺は、内法で長さ60cm幅30cm高さ30cmを測る。その規模から、本石棺は小児用と考えられる。主軸は尾根線に沿うようにほぼ南北方向であるが、南側が若干幅が広がっており、頭位は南方向であると考えられる。側壁は南北に各1枚、東西に各2枚の板石が横長に用いられている。蓋として3枚の板石が横長に用いられている。

棺内には遺物はない。石棺に伴う墓壇は検出されていないが、これは、墓壇が地山面にまで達していなかったためと思われる。

第2号石棺（第58図）

第1号石棺の西に隣接して検出された。内法は長さ45cm幅30cm高さ30cmであった。その規模から、本石棺も第1号石棺と同様、小児用と考えられる。主軸は尾根線と直交するようにほぼ東西方向である。東側と西側で幅に明確な違いがなく、頭位は不明である。側壁は北側と東側で各1枚、西側と南側で各2枚の板石が縦長に用いられている。蓋石には、板石が1枚用いられている。

棺内には遺物はない。石棺に伴う墓壇は第1号石棺と同様、検出されていない。

（3）遺物

本遺跡からは弥生時代後期全般にわたる大量の土器と、鉄器、石器が出土している。土器の多くは細片であったが、ここでは遺存状態の良好なもののうち、遺構にともなうものについて紹介し、考察を加えた。

1. 弥生土器

（別表土器観察表）

2. 鉄器

鑿（No. 1～No. 4）

No. 1は、B地点遺跡西側斜面から出土したものである。鍛造品で、現存長97mmを測る。茎部は欠損しているが、最大幅13mm、厚さ7mmを測り、断面は長方形を呈する。刃部が徐々に薄くなる両刃であることから突き鑿と考えられる。

No. 2は、第27号住居内より出土したものである。身部は欠損しており残存長44mm、幅17mmを測る。刃部は徐々に薄くなっており突き鑿と思われる。

No. 3は、第22号住居跡内より出土したものである。残存長63mm、幅12mm、厚さ9mmを測る。鍛造と思われ、身部は断面長方形を呈し徐々に薄くなる刃部を持つ。

No. 4は、第35号住居跡床面より出土したものである。残存長60mm、刃部最大幅13mm、厚さ5mmを測る。鍛造と思われ、断面はほぼ長方形を呈する。身部から刃部への移行はなだらかにひろがっている。

斧（No. 5）

第2号テラス状遺構の床面から出土したものである。全長73mm、刃部最大幅32mm、厚さ6.5mmを測る。基部の末端35mmの部分より刃先へ向けてゆるやかに広がる身を持つ鍛造の板状鉄斧である。片刃の横斧として使用されたものと思われ、刃の付けられている側にやや内湾している。

鎌（No. 6）

第34号住居跡内より出土したものである。全長111mm、刃部長87mm、最大幅26mm、背部の厚さ4mmを測り刃部はほぼ直線状をなす直刃鎌である。刃部の手前の部分に研ぎ減りと思われる湾曲が見られ、刃部の付け根部分を頻繁に使用したものと考えられる。身の末端には柄を固定するためと思われる折り返しが見られる。

鉞（No. 7～No. 9）

No. 7は、第25号住居跡床面から出土したものである。全長76mm、刃部長28mm、刃部最大幅14mm、厚さ3mmを測る。刃部には鑄は認められないが、わずかな裏すきを有し、この裏すきは茎部にも認められる。刃部と茎部は同じ幅で続いている。表面にはひも状のもので巻いた痕跡が見られる。

No. 8は、第46号住居跡床面から出土したものである。身部を欠損しており残存長37mm、刃部長7mm、刃部最大幅10mmを測る。刃部は一部鑄と思われる痕跡がみられるが不明瞭である。刃部、身部に裏すきが顕著に見られ、刃部と茎部は同じ幅で続いている。

No. 9は、第39号住居跡内より出土したものである。残存長53mm、刃部長28mm、刃部最大幅11mmを測る。刃部に鑄、裏すきは認められず、刃部と茎部はほぼ同じ幅で続いている。

鏃（No. 10～No. 17）

No. 10は、B地点西側表土中より出土した定角式鉄鏃である。全長44mmを測り、そのうち身部11mm、茎部17mm、刃部16mmである。鑄及び関を両面に持つものと思われる。

No. 11は、第2号住居跡床面より出土したもので、腸袂を持つ。残存長45mm、残存最大幅20mmを測る。

No. 12は、第25号住居跡埋土中より出土したものである。平面形において、木の葉状を呈し関は不明確である。全長51mm、刃部最大幅15mm、刃部及び茎部の厚さはそれぞれ2mm、3mmを測る。茎部断面は、方形を呈する。

No. 13は、B地点西側表土中より出土したものである。無茎の三角形式鉄鏃に類似しており、腸袂をもつ。全長42mm、最大厚3mmを測り、中央に単孔を有する。

No. 14は、B地点東側地山面より出土したものである。平面形において、木の葉状を呈し関は不明確である。全長67mm、刃部最大幅22mmを測る。茎部断面は方形を呈するものと思われる。

No. 15は、C地点東側斜面埋土中より出土した柳葉式鉄鏃である。残存長54mmを測り、刃部は欠損しているが平面形において木の葉状を呈すると思われ、関は不明確である。茎部断面は方形を呈する。

No. 16は、第93号土壌内より出土したものである。茎部を欠損しており、平面形において木の葉状を呈すると思われる。残存長37mm、最大幅18mmを測る。

No. 17は、C地点東側埋土中より出土したものである。無茎の三角形式鉄鏃に類似しており、腸袂をもつ。残存長30mmを測る。

5. 石 器

砥 石 (No. 1～No. 12)

No. 1は、第17号住居跡内より出土したものである。残存長135mm、最大幅61mm、最大厚15.7mmを測る。欠損した部分を除く4面に使用痕が認められる。使用石材は安山岩である。

No. 2は、第35号住居跡埋土中より出土したものである。全長72mm、最大幅26mm、最大厚27mmを測る。四角柱状を呈し四面に使用痕が認められる。使用石材は安山岩である。

No. 3は、第39号住居跡内より出土したものである。残存長40mm、最大幅31mm、最大厚24mmを測る。四角柱状を呈し、四面に使用痕が認められる。使用石材は安山岩である。

No. 4は、第42号住居跡内より出土したものである。残存長87mm、最大幅40mm、最大厚27mmを測る。不整形な多面体で四面に使用痕が認められる。使用石材は安山岩である。

No. 5は、第25号住居跡内より出土したものである。残存長53mm、最大幅41mm、最大厚32mmを測る。四角柱状を呈し6面すべてに使用痕が認められる。使用石材は流紋岩である。

No. 6は、第32号住居跡内より出土したものである。全長94mm、最大幅47mm、最大厚30mmを測る。表裏面の中央部に縦方向の荒い使用痕が認められる。側面には一部縦、横両方向の使用痕が認められる。使用石材は安山岩である。

No. 7は、第37号住居跡内より出土したものである。残存長82mm、最大幅63mm、最大厚38mmを測る。四角柱状を呈し3面に使用痕が認められる。使用石材は安山岩である。

No. 8は、第42号住居跡内より出土したものである。全長56mm、最大幅53mm、最大厚28mmを測る。やや扁平な四角柱状を呈し4面に使用痕が認められる。使用石材は安山岩である。

No. 9は、第8号住居跡内より出土したものである。全長190mm、最大幅153mm、最大厚91mmを測る。形状は不整形な多面体である。その大きさから据え置いて使用したものと考えられる。使用痕は1面に認められるが、きめの細かい擦痕のほか、使用面の端部に数条の溝状の痕が認められ、これも使用痕と思われる。使用石材は安山岩である。

No. 10は、第42号住居跡内より出土したものである。全長80mm、最大幅51mm、最大厚13mmを測る。1面のみに使用痕を認める。使用石材は石英安山岩である。

No. 11は、第10号住居跡内より出土したものである。全長159mm、最大幅54mm、最大厚40mmを測る。四角柱状を呈し2面に使用痕が認められる。使用石材は安山岩である。

No. 12は、第10号住居跡埋土中より出土したものである。全長204mm、最大幅97mm、最大厚62mmを測る。形状は不整形な多面体で、使用痕は1面のみに認められる。使用石材は安山岩である。

石包丁 (No. 13・No. 14)

No. 13は、第30号住居跡周辺の平坦面より出土したものである。全長107mm、最大幅35mm、厚さ5mmを測る。刃部は直線状をなし、片刃である。背部はやや外湾する。紐穴は、ほぼ中央に2カ所認められ、両側から穿孔されている完形品である。全面が研磨されており、刃部、体部とも右上がり斜め方向の研磨痕である。使用石材は泥質変岩である。

No. 14は、第10号住居跡内より出土したものである。全長13mm、最大幅43mm、厚さ6mmを測る。ゆるやかに外湾する刃部をもち平面杏仁状を呈する。刃部は両刃状を呈するが、片側の研磨は不十分であり、未成品と思われる。紐穴は体部のほぼ中央背部寄りに1箇所認められ、両側から穿孔されている。紐穴から約10cm右に楕円状の窪みがあり、穿孔の途中であったものと思われる。使用石材は緑色変岩である。

磨製石斧 (No. 15・No. 16)

No. 15は、第67号土壌内より出土した大型蛤刃石斧である。残存長13.5cm、最大幅6.7cm、厚さ4.7cmを測る。刃部の3分の2は欠損しているが、先端部分が平たくなっており、欠損した後、敲石等の用途で再使用したものと思われる。頭部は平坦である。使用石材は安山岩である。

No. 16は、C地点西側斜面より出土した大型蛤刃石斧である。全長12.7cm、最大幅6.2cm、厚さ4.9cmを測る。刃部は先端部分が平たくなっており、欠損した後、敲石等の用途で再使用したものと思われる。頭部は平坦である。刃部、体部とも刃先にたいして垂直方向の研磨痕が認められる。頭部より3.3cmあたりから約4.5cmの幅で敲打による窪みが認められ、着柄に関係した痕跡と考

えられる。使用石材は安山岩である。

4. 土 製 品

土製勾玉 (No. 1～No. 4)

No. 1は、第25号住居跡周辺地山面より出土したもので、形状から勾玉と考えられる。尾部を欠損しており現存長54mm、幅23mm、厚さ23mmを測る。孔は径3.5mmで片側から穿孔されており貫通していない。胎土焼成とも良好である。

No. 2はB地点東側斜面より出土したもので、形状から勾玉と考えられる。尾部を欠損しており現存長64mm、幅32mm、厚さ29mmを測る。孔は径4mm程度で、片側から穿孔され、貫通した後、もう一方の側の孔形を整えている。頭部に丁字頭をもつ。胎土はやや粗であるが、焼成は良好である。背部に縦方向のハケ目が認められる。

No. 3は、第25号住居跡周辺埋土中より出土したものである。頭部を欠損するが、その形状から勾玉と考えられる。現存長27mm、幅17mm、厚さ17mmを測る。胎土は良好であるが、焼成はやや軟調である。

No. 4は、C地点東側表土中より出土したもので、形状から勾玉と考えられる。全長37mm、幅13mm、厚さ11mmを測る。孔は径2mmを測り、両側から穿孔されており貫通していない。胎土はやや粗、焼成は概ね良好である。

土製丸玉 (No. 5・No. 6)

No. 5は、第7号住居跡内より出土したものである。径32mm、最大厚20mmを測る小玉状の土製品である。中央をややずれたあたりに径2mmの穿孔が見られ貫通している。胎土は良好であるが、焼成はやや軟調である。

No. 6は、第7号住居跡内より出土したものである。径25mm、最大厚20mmを測る小玉状の土製品である。径1.5mmの穿孔がほぼ中央に見られ、貫通している。胎土は良好であるが、焼成はやや軟調である。

紡錘車 (No. 7)

C地点西側斜面より出土したものである。全体の約3分の1の破片で、復元すると25mm前後の円形を呈すると思われる。厚さはほぼ一定で約7mmを測り径約7mmの孔が両側から穿孔されている。外面は滑らかに仕上げられている。

(4) 小 結

B・C地点遺跡は、谷を見おろす尾根上に集落が築かれるという、弥生時代後期に一般に見られる立地をしており、出土した遺物も弥生時代後期から古墳時代初頭のものである。従って個々の遺構の説明において「時期不明」としたのも、この範囲に収まると考えられる。

本遺跡の遺構の配置は、尾根上平坦面に住居跡が配置され、縁辺部斜面に土壌が並んでいると概括できる。検出された住居跡を、出土した遺物から時期ごとに整理してみると以下ようになる。

上深川Ⅰ式の時期には、第1号住居跡、第8号住居跡、第16号住居跡、第18号住居跡、第44号住居跡、第3号テラス状遺構が検出されている。第16号住居跡、第18号住居跡を除いて尾根上でも比較的平坦な場所に立地している。

上深川Ⅱ式の時期には、第2号住居跡、第9号住居跡、第10号住居跡、第13号住居跡、第15号住居跡、第20号住居跡、第22号住居跡、第24号住居跡、第26号住居跡、第28号住居跡、第31号住居跡、第33号住居跡、第35号住居跡、第36号住居跡、第39号住居跡、第45号住居跡、第46号住居跡がある。これらの中には切りあい関係を有するものがあり、なお、細分化が可能であると思われる。この時期には住居の数が増しており、上深川Ⅰ式の時期に住居があった場所に、引き続き住居が営まれているほか、尾根上の斜面にも住居が築造されている。特に第26号住居跡や第28号住居跡は最大20度の急斜面を大きく造成して住居が築造されている。

上深川Ⅲ式の時期になると、第4号住居跡、第5号住居跡、第6号住居跡、第7号住居跡、第11号住居跡、第17号住居跡、第21号住居跡、第23号住居跡、第25号住居跡、第27号住居跡、第34号住居跡が築造され、遺構の数を減じているものの、上深川Ⅱ式の時期とほぼ同様の立地状況を示している。

上深川Ⅱ式から上深川Ⅲ式にかけての住居跡は、住居跡相互に間隔を保ちながら築造されており、あた

かも計画的に配置されたかのような様相を呈している。特に第23号住居跡から第32号住居跡にかけての一連の住居跡は、尾根上の斜面に平坦面を造成した後住居跡が築造されており、隅丸方形の平面プランに4本柱の構造というよく似た住居跡群である。互いの位置を意識しながら配置されていること、築造の方法や住居跡の構造に共通した点が多く見られることから、これらの住居跡群は比較的近い時期に築造されたものと考えられよう。

B・C地点遺跡を検出された住居跡のまとまりでみると、特に住居の集中している場所が2ヵ所に認められる。

第33号～第44号住居跡群は、尾根上鞍部の長さにして約25mの比較的平坦な場所に、12軒の住居跡と1ヵ所のテラス状遺構が重複しあって検出されており、出土した遺物の特徴から、本遺跡の築造当初から終末に至るまで連続的に1～2軒の住居跡が営まれていたと考えられる。

第10号～第22号住居跡群は、斜面に直接壁を掘り込み、盛土をして床面を構築するという簡便な構造の住居跡群である。そのためか、床面の流失が著しかったものとみられ、階段状に建てかえが行われた痕跡が残っている。遺物には上深川Ⅰ式から上深川Ⅲ式にかけての全般のものが見られることから、第33号～第44号住居跡群と同様、本遺跡の築造当初から終末に至るまで連続的に住居が営まれていたと考えられる。この場所の住居跡は、住居の立地する場所としては他に適した場所があるにもかかわらず、斜面・赤土土層を運ぶ形で築造され、集落内の住居占地に格差のあった可能性がある。この類例として広島湾岸では、浄安寺遺跡、下沖5号遺跡、小林遺跡A地点、大明地遺跡があげられる。いずれも十数軒を越える住居跡が検出された遺跡であり、集団の規模との関連性を指摘できよう。

以上をまとめてB・C地点遺跡の変遷を考えてみると以下ようになる。

本遺跡が築造された上深川Ⅰ式の時期においては、尾根上の比較的平坦な場所に住居を築造し、上深川Ⅱ式の時期に集落が拡大されて、斜面にも住居を築き、上深川Ⅲ式の時期においても維持している。ただし、上深川Ⅲ式の時期に第45号住居跡、第46号住居跡が廃棄され、第4号住居跡、第5号住居跡、第6号住居跡が築造されているため、集落の重心が尾根の先端方向に若干移動したような印象を受ける。

上深川Ⅱ式の時期に遺構が増加するのは、広島湾岸に全体的に見られる傾向と軌を一にしたものであり、本遺跡はその典型であるといえよう。なお、上深川Ⅲ式は新古の2段階に細分することが可能であるが、上深川Ⅲ式の新に比定される住居跡は、第5号住居跡のみである。従って、本遺跡は、上深川Ⅲ式の古の時期に集落としては終末を迎え、第5号住居跡を最後に廃棄されたものと考えられる。

注

1. 広島市教育委員会「一般県道原田五日市線（石内バイパス）道路改良工事業地内遺跡群発掘調査報告」1988 広島市教育委員会「岩上山田遺跡発掘調査報告」1988
なお、時期的位置づけについては上深川Ⅰ式を弥生時代後期前葉に、上深川Ⅱ式を弥生時代中葉から後葉に、上深川Ⅲ式を弥生時代終末～古墳時代初頭として整理し、以下全て準拠した。
2. 広島県教育委員会「高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告」1977
3. 古瀬清秀「古墳出土の鉦の形態的変遷とその役割」『考古論集』1977
4. 大村 直「弥生時代における鉄鏃の変遷とその評価」『考古学研究』第30第3巻
5. 石材については、広島大学理学部教授沖村雄二先生の御教示を得た。
6. 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『浄安寺遺跡』『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅲ1986
7. 広島市教育委員会「一般県道原田五日市線（石内バイパス）道路改良工事業地内遺跡群発掘調査報告」1988
8. 広島市教育委員会「小林遺跡A、B地点発掘調査報告」1990
9. 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『大明地遺跡』『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅳ1987
10. 広島市教育委員会「一般県道原田五日市線（石内バイパス）道路改良工事業地内遺跡群発掘調査報告」1988 広島市教育委員会「岩上山田遺跡発掘調査報告」1988

表3 B·C地点遺跡土壤觀察表

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

No.	位 置	大 き さ	出土遺物	時 期	備 考
97	尾根上平坦面	底径 175cm 深さ 178cm	土器 (No.73)	後期前葉	
98	尾根線を西には ずれた斜面	底径 80cm 深さ 105cm	—	不 明	
99	尾根上平坦面	底径 200cm 深さ 150cm	土器 (No.74)	後期中葉	
100	尾根上平坦面	底径 107cm 深さ 104cm	—	不 明	第101号土壙と切りあう。新旧不明。
101	尾根上平坦面	底径 165cm 深さ 147cm	—	不 明	第100号土壙と切りあう。新旧不明。

表4 B・C地点遺跡出土土器観察表

番号	出土位置	器 種	法量 (cm)	器形について	調整, 成形について	備 考
1	第1号住居跡	壺形土器	口径 15.7	口縁部は「くの字」状に外反し、端部は粘土をはりつけることによって肥厚させている。頸部は長目である。	外面 口縁部ナデ, 以下ハケ目。 内面 口縁部ナデ, 以下ヘラ削り。 口縁端部及び頸部に3条の凹線及びクシ歯状工具による刺突文を, 肩部に2段の波状文を施す。	色調 淡黒褐色 胎土 密 焼成 良 外面に黒斑
2	第1号住居跡	壺形土器	口径 15.5	ゆるやかに外反する口縁にやや内湾気味に接合する立ち上がり部をもつ複合口縁である。端部は平たくおさめる。頸部に貼りつけ突帯をめぐらす。	外面 ナデ, 口縁端部に細かいヘラナデ。 内面 ナデ。 口縁たちあがり部に2段の波状文を施す。下段の口縁端部にたて方向の細かい沈線を施す。	色調 赤褐色 胎土 密 焼成 良
3	第2号住居跡	台付鉢	口径 10.3	口縁部は, 内湾気味にたちあがり, 端部は丸くおさめている。台部は斜め外側に開く。	外面 口縁部はハケ目。以下ヘラ削り後ハケ目。 内面 ハケ目後ヘラ磨き。	色調 赤褐色 胎土 密 焼成 良
4	第2号住居跡	甕形土器	口径 10.1 底径 2.8 胴部最大径 10 器高 11.3	口縁部は「くの字」状に外反し, 端部は丸くおさめている。頸部はやや厚手となる。底部は平底である。	外面 口縁部ナデ, 以下ヘラ削り後ナデ。 内面 口縁部ナデ, 以下ヘラ削り。	色調 褐色 胎土 やや粗 焼成 やや軟 外面一部黒斑
5	第2号住居跡	不 明		口縁部は「くの字」状に外反し, 端部は丸くおさめている。	外面, 内面ともにナデ。	色調 赤褐色 胎土 やや密 焼成 良
6	第4号住居跡	鉢形土器	口径 9.4 底径 1.3 器高 6.2	口縁部は内湾気味に立ちあがり, 端部はかなり薄手となりややとがり気味におさめている。底部は平底である。	外面, 内面ともにハケ目。	色調 淡褐色 胎土 密 焼成 やや軟 口縁部周辺にスス付着
7	第5号住居跡	壺形土器	口径 9.8 胴部最大径 12	口縁部はやや内湾気味に立ちあがり, 端部は丸くおさめている。胴部最大径は中央よりやや下方にある。	外面 ヘラ磨き 内面 口縁部ハケ目, 一部に指頭痕が残る。以下ヘラ削り。	色調 淡褐色 胎土 密 焼成 良

番号	出土位置	器 種	法量 (cm)	器形について	調整, 成形について	備 考
9	第2号住居跡		口径 17.1	口縁部は「くの字」状に外反し, 端部は平たくおさめている。	外面 ハケ目後ナデ。 内面 ハケ目後ナデ。	色調 外面 暗褐色 内面 赤褐色 胎土 密 焼成 良
10	第8号住居跡		口径 15.3	口縁部は「くの字」状に外反し, 端部は粘土を貼りつけることによって肥厚させている。	外面 口縁部ナデ, 以下ハケ目。 内面 口縁部ナデ, 以下ヘラ削り。 口縁端部に凹線を施す。 肩部にヘラ状工具による押引紋。	色調 外面 赤褐色 内面 褐色 胎土 密 焼成 良
11	第9号住居跡	甕形土器	口径 17.4 胴部最大径 17.5 器高 22.7	口縁部は「くの字」状に外反し, 端部は平たくおさめている。底部はとがり気味である。	外面 口縁部, 体部ともハケ目。 内面 口縁部ハケ目, 以下ヘラ削り。	色調 黒褐色 胎土 やや粗 焼成 やや軟 外面にスス付着
12	第10号住居跡	不 明	口径 15.9	口縁部は「くの字」状に外反し, 端部はつまむことにより若干肥厚させている。	外面 口縁部ナデ, 以下ハケ目。 内面 口縁部ナデ, 以下ヘラ削り。	色調 赤褐色 胎土 粗 焼成 良
13	第11号住居跡	不 明	口径 15	口縁部は「くの字」状に外反し, 端部は器厚を減じつつ丸くおさめている。内面屈曲部に稜を有する。	外面 ナデ。 内面 口縁部ナデ, 以下ヘラ削り。	色調 赤褐色 胎土 密 焼成 良
14	第11号住居跡	不 明	口径 19.4	口縁部は「くの字」状に外反し, 端部はつまむことにより若干肥厚させている。	外面 口縁部ナデ, 以下ハケ目後ナデ。 内面 口縁部ナデ, 以下ヘラ削り後ナデ。	色調 外面 赤褐色 内面 暗褐色 胎土 密 焼成 外面に一部黒斑
15	第13号住居跡	不 明		口縁部は「くの字」状に外反し, やや肥厚する。	外面 口縁部ナデ, 口縁直下にヘラ状工具による押引紋を有する。 内面 ナデ。	

番号	出土位置	器 種	法量 (cm)	器形について	調整, 成形について	備 考
17	第16号住居跡	甕形土器	口径 13.5 底径 8.7 胴部最大径 28.3 器厚 39	口縁部は「くの字」状に外反し、端部は粘土を貼りつけることによって肥厚させている。体部はよく張る。底部は若干凹底である。	外面 口縁部ナデ。以下肩部までハケ目後ヘラ磨き。以下削り後ナデ。 内面 口縁部ナデ。以下ヘラ削り後ハケ目。 口縁端部は3条の凹線が施されている。 頸部下に2段の刺突文を有する。	色調 外面 褐色 内面 黒褐色 胎土 やや密 焼成 やや軟 一部黒斑
18	第17号住居跡	不 明		口縁部はゆるやかに外反し、端部は器厚を減じつつ丸くおさめている。	外面 ナデ。	色調 表 赤褐色 裏 暗褐色 胎土 密 焼成 良
19	第18号住居跡	不 明	口径 11	口縁部は「くの字」状に外反し、端部は粘土を貼りつけることによって肥厚させている。	外面 ナデ。 内面 口縁部ナデ。以下ヘラ削り。 口縁端部に2条の凹線を施す。肩部に2段の刺突文を有する。	色調 赤褐色 胎土 密 焼成 良
20	第19号住居跡	不 明	口径 13.4	口縁部は「くの字」状に外反し、端部はつまむことにより、若干肥厚させている。	外面 口縁部ナデ、以下ハケ目。 内面 口縁部ナデ、以下ヘラ削り。	色調 赤褐色 胎土 密 焼成 良 口縁部周辺にスス付着
21	第21号住居跡	鉢形土器	口径 13.2 底径 5.5 胴部最大径 15.9 器高 14.2	口縁部は「くの字」状に外反し、端部は平たくおさめている。体部は半球状に張る。底部は平底である。	外面 口縁部ナデ。以下ハケ目。底部周辺ハケ後ナデ。 内面 口縁部ハケ目後ナデ。以下ハケ目後ナデ。中央部以下削り後ヘラナデ。屈曲部に指頭痕が残る。	色調 外 暗赤褐色 焼成 良 胎土 密 口縁接口部に左右それぞれ2個の焼成前の穿孔がみられる。
22	第21号住居跡	不 明		口縁部は「くの字」状にゆるやかに外反し、端部は平たくおさめている。屈曲部は稜を有する。	外面 ナデ。以下摩滅のため不明。 内面 口縁部ナデ。以下ヘラ削り。	色調 赤褐色 胎土 粗 焼成 良 頸部にスス付着

番号	出土位置	器 種	法量 (cm)	器形について	調整, 成形について	備 考
23	第21号住居跡	台付鉢形土器	口径 10.3 底径 4.6 胴部最大径 13 器高 10.5	口縁部は「くの字」状に外反し, 端部は丸くおさめている。体部は半球状によく張り, 底部はやや凹底となる。口縁屈曲部に稜を有する。	外面 口縁部ナデ。以下ヘラ削り後ハケ目。底部接合部はこまかい削り痕がみられる。後なでている。 内面 下半部, 口縁部ナデ。以下ヘラ削り後ナデ。上半部ハケ目。	色調 黒褐色 底部黒斑が著しい。 焼成 やや軟 胎土 密 口縁接合部に左右それぞれ2個の焼成前穿孔を有する。
24	第21号住居跡	不 明	底径 6.5 胴部最大径 17.3	平底の底部をもつ。	外面 摩滅が著しく調整不明。 内面 ヘラ削り後ナデ。	色調 外面 赤褐色 内面 暗褐色 胎土 やや粗 焼成 良 体部にスス付着
25	第22号住居跡	不 明		口縁部は「くの字」状に外反し, 端部は平たくおさめている。屈曲部にやや段を有する。	外面 ナデ。 内面 口縁部ハケ目。以下ヘラ削り。	色調 外面 黒褐色 内面 暗褐色 胎土 密 焼成 軟
26	第23号住居跡	甕形土器	口径 19.8 胴部最大径 24	口縁部は「くの字」状に外反し, 端部は器厚を減じつつ平たくおさめている。	外面 口縁部ナデ。以下ハケ目。摩滅が著しい。 内面 端部ナデ。以下ヘラ削り。	色調 外面 赤褐色 内面 褐色 焼成 良 胎土 粗 体部にスス付着
27	第24号住居跡	不 明		口縁部は外反し, 口縁部はつまむことによって肥厚させている。	外面 ナデ。 口縁端部に凹を施す。	色調 赤褐色 胎土 やや粗 焼成 やや軟
28	第25号住居跡	不 明	口径 7.4 底径 2.8 器高 7.3	手づくね土器である。	外面 ハケ目。 内面 ナデ。	色調 赤褐色 胎土 粗 焼成 良
29	第25号住居跡	鉢形土器	口径 4.4 底径 2.3 器高 5.7	手づくね土器である。	外面 ハケ目。 内面 ナデ。	色調 赤褐色 一部黒斑 胎土 やや粗 焼成 良

番号	出土位置	器 種	法量 (cm)	器形について	調整, 成形について	備 考
31	第25号住居跡	不 明	口径 11.9	ほぼ真直ぐに立ちあがる。頸部にゆるく外反する。 口縁部を有する。端部は平たくおさめている。	外面 ナデ。 内面 口縁部ナデ。頸部はしぼり後ナデ。以下ヘラ削り。 肩部にクシ歯状工具による刺突文を有する。	色調 赤褐色 胎土 良 焼成 良
32	第26号住居跡	甕形土器	口径 底径 胴部最大径 器高	口縁部は「くの字」状に外反し, 端部は平たくおさめている。底部はやや凹底である。	外面 口縁部ナデ。以下ハケ目。 内面 口縁部ナデ。以下ヘラ削り。	色調 赤褐色 胎土 粗 焼成 良 胴部下半にスス付着
33	第27号住居跡	甕形土器	口径 13.2 底径 4 胴部最大径 14.6 器高 17	口縁部は「くの字」状に外反し, 端部は平たくおさめている。口縁接合部の内面に稜を有する。底部は平底である。	外面 口縁部ナデ。以下ハケ目。 内面 口縁部ハケ目後ナデ。以下ヘラ削り。 口縁直下にヘラ状工具による「ノの字」施文を有する。	色調 外面 褐色 内面 淡赤褐色 焼成 良 胎土 やや密 体部にスス付着
34	第28号住居跡	不 明		口縁部は外反しながら端部は丸くおさめている。	外面 ナデ。 内面 ナデ。	胎土 やや密 色調 赤褐色 焼成 良
35	第31号住居跡	不 明		口縁部は「くの字」状に外反し, 端部は丸くおさめている。体部は半球状にやや張る。	外面 口縁部ナデ。以下摩滅が著しく調整不明。 内面 口縁部摩滅が著しく調整不明。以下ヘラ削り。	色調 外面 暗褐色 内面 褐色 胎土 やや粗 焼成 やや軟
36	第31号住居跡	不 明		体部はやや湾曲ぎみにたちあがり, 口縁部はゆるやかに外反し, 丸くおさめている。	外面 ナデ。 内面 口縁部ナデ。以下ヘラ削り後ナデ。	色調 外面 淡赤褐色 内面 暗褐色 胎土 密 焼成 良
37	第32号住居跡	不 明		平底の底部を有する。	摩滅が著しく調整不明。	色調 赤褐色 胎土 粗 焼成 良

番号	出土位置	器 種	法量 (cm)	器形について	調整, 成形について	備 考
39	第33号住居跡	不 明		口縁端部はつまむことによって肥厚させている。	外面 ナデ。 内面 ナデ。	色調 淡赤褐色 胎土 密 焼成 良
40	第34号住居跡	不 明	口径 14	口縁部は「くの字」状に外反し, やや器厚を減じつつ丸くおさめている。 体部は半球状によく張っている。	外面 口縁部ナデ。以下ハケ目後ナデ。 内面 口縁部摩滅が著しく調整不明。以下ヘラ削り。	色調 外面口縁部赤褐色, 以下褐色 胎土 密 焼成 良
41	第35号住居跡	不 明	口径 14.2	口縁部は「くの字」状に外反し, 端部は平たくおさめている。	外面 口縁部ナデ。以下ハケ目。 内面 口縁部ナデ。以下ヘラ削り。	色調 外面 暗赤褐色 内面 々 胎土 黒斑 密 焼成 良
42	第36号住居跡	不 明	口径 15.6	口縁部は「くの字」状に外反し, 端部は平たくおさめる。	外面 口縁部ナデ。以下ハケ目。 内面 口縁部ハケ目後ナデ。以下ヘラ削り。	色調 赤褐色 胎土 密 焼成 良 肩部にスス付着
43	第39号住居跡	不 明	口径 19.7	口縁部は「くの字」状に外反し, 端部は平たくおさめる。	摩滅が著しく調整不明。	色調 外面 赤褐色 内面 褐色 胎土 粗 焼成 良
44	第45号住居跡	不 明		口縁部は「くの字」状に外反し, 端部は平たくおさめている。	摩滅が著しく調整不明。	色調 淡赤褐色 胎土 粗 焼成 やや軟
45	第46号住居跡	甕形土器	口径 17.8 底径 4.3 胴部最大径 19.3 器高 2.3	口縁部は「くの字」状に外反し, 端部は平たくおさめている。 底部は平底である。	外面 口縁部ハケ目後ナデ。以下ハケ目が見られるが摩滅が著しく調整不明。 内面 口縁部ハケ目後ナデ。以下ヘラ削り。	色調 赤褐色 胎土 粗 焼成 良 口縁部から胴部中央にかけてスス付着。

番号	出土位置	器 種	法量 (cm)	器形について	端部の 調整, 成形について	備 考
47	第1号テラス状遺構	不 明		口縁部は「くの字」状に外反し、端部は平たくおさめている	外面 口縁端部ナデ。以下ハケ目。 内面 口縁部ナデ。以下ヘラ削り。	色調 赤褐色 胎土 密 焼成 良 外面に黒斑
48	第1号テラス状遺構	不 明	口径 13.4	口縁部は屈曲部から直立気味に立ち上がり、中央部分からやや外反する。 端部は指でつまんでやや肥厚し、平たくおさめている。	外面 ヘラナデ。 内面 ナデ。	色調 外面 黒褐色 内面 暗褐色 胎土 密 焼成 やや軟
49	第1号テラス状遺構	不 明	口径 10.3	口縁部は「くの字」状にゆるく外反しながら立ち上がり、端部は丸くおさめている。	外面 口縁部はハケ目後ナデ。以下ハケ目。 内面 口縁部ナデ。以下ヘラ削り。	色調 淡褐色 胎土 密 焼成 良
50	第3号テラス状遺構	甕形土器	口径 13.2 底径 7.1 胴部最大径 22.8 器高 32.6	口縁部は「くの字」状に外反し、端部は粘土を貼りつけることによって肥厚させている。 胴部に直径1cmの穿孔がみられる。 底部はやや凹底である。	外面 口縁部ナデ。以下ハケ目。 内面 口縁部ナデ。以下ヘラ削り後ハケ目。 口縁端部に4条の凹線、頸部に2段の、肩部に1段の「1の字」施文を有する。	色調 淡褐色 胎土 やや粗 焼成 軟 一部黒斑
51	第3号テラス状遺構	壺形土器	口径 10.2 底径 4.1 胴部最大径 16 器高 24.9	ほぼまっすぐ立ち上がる。頸部に「くの字」状に外反する口縁をもつ。端部は粘土を貼りつけることにより肥厚させている。 胴部最大径が器高のほぼまん中にくる。底部はやや凹底を呈する。	外面 口縁部及び頸部ナデ。以下ヘラナデ。 内面 口縁部、頸部ナデ。以下ヘラ削り後ナデ。 頸部に指おさえによる調整痕を有する。口縁端部に3条の凹線を施す線。 頸部下半に5条の凹と2段のクシ歯状工具による刺突文を有する。	色調 外面 赤褐色 内面 暗褐色 胎土 密 焼成 良 一部黒斑

番号	出土位置	器 種	法量 (cm)	器形について	調整, 成形について	備 考
53	第2号土壙	鉢形土器	口径 38.2	口縁部は「くの字」状に外反し, 端部は粘土を貼り付けることによって肥厚させている。	外面 口縁端部ナデ。以摩滅により調整不明。 内面 口縁部ハケ目。以下ヘラ削り。 口縁端部に3状の凹線、肩部にヘラ状工具による押引紋を施す。	色調 淡褐色 胎土 やや粗 焼成 良
54	第15号土壙	台付鉢	口径 11.3 底径 4.9 器高 6.9	口縁部は「くの字」状に外反し, 端部は平たくおさめている。肩部に稜を有する。	外面 口縁部ナデ。以下ハケ目。 内面 口縁部ナデ。以下ヘラ削り後ナデ。	色調 赤褐色 胎土 密 焼成 良 外面に黒斑
55	第16号土壙	鉢形土器	口径 8 底径 3 器高 7.1	口縁部はやや内湾気味に立ち上がり, 口縁端部は丸くおさめている。	外面 口縁部ハケ目。底部周辺ヘラ削り。 内面 ヘラ削り後ナデ。	色調 淡褐色 胎土 密 焼成 良 外面に黒斑
56	第18号土壙	不 明		口縁部は「くの字」状に外反し, 端部は平たくおさめている。	外面 口縁部ナデ。 内面 口縁部ナデ。以下ヘラ削り。 口縁端部に2条の凹線を施す。	色調 淡赤褐色 胎土 やや粗 焼成 良
57	第20号土壙	鉢形土器		口縁部は「くの字」状に外反し, 端部はつまむことにより肥厚させている。肩部に稜を有する。	外面 口縁部ナデ。以下ハケ目後ナデ。 内面 口縁部ナデ。以下ヘラ削り。 口縁端部に2条の凹線を施す。 肩部にヘラ条工具による押引紋を施す。	色調 赤褐色 外面 褐色 内面 褐色 胎土 粗 焼成 良
58	第24号土壙	不 明	口径 13.2	口縁部は「くの字」状に外反し, 端部は平たくおさめている。	外面 口縁部ナデ。 内面 口縁部ナデ。以下ヘラ削り。	色調 淡褐色 胎土 粗 焼成 軟 外面にスス付着
59	第34号土壙	不 明		口縁部は「くの字」状に外反し, 端部は平たくおさめている。	外面 摩滅が著しく調整不明。 内面 口縁部ナデ。以下ヘラ削り。	色調 淡褐色 胎土 粗 焼成 軟

番号	出土位置	器 種	法量 (cm)	器形について	調整, 成形について	備 考
61	第43号土 壙	甕形土 器	口径 12.5 胴部最大径 16.3	口縁部は「くの字」 状に外反し, 端部は つまむことによって 肥厚させている。	外面 口縁部ナデ。肩 部以下ハケ目。 内面 口縁部ナデ。以 下ヘラ削り。	色調 赤褐色 胎土 やや密 焼成 良 体部にスス付 着
62	第47号土 壙 4 区東	甕形土 器	口径 15.9 胴部最大径 20.1 底径 4.5 器高 27	口縁部は「くの字」 状に外反し, 端部は 粘土をはりつけるこ とによって肥厚させ ている。肩部が開き 気味にやや張る。 底部は凹底となる。	外面 口縁部ナデ。以下 ハケ目。 内面 口縁部ナデ。以下 ヘラ削り。 口縁端部に 2 条の凹線を 施す。	色調 赤褐色 胎土 やや粗 焼成 良 口縁部, 肩部 を中心に広い 範囲にスス付 着する
63	第50号土 壙	不 明	口径 14	口縁部は「くの字」 状に外反し, 端部は つまむことによって 若干肥厚させ平たく おさめる。	外面 口縁部ナデ。以下 ハケ目。 外面 口縁部ナデ。以下 ヘラ削り。 口縁直下にヘラ状工具に よる「ノの字」施文を有 する。	色調 赤褐色 胎土 粗 焼成 やや軟 肩部にスス付 着
64	第56号土 壙	壺形土 器	口径 15.4	ゆるやかに外反する 口縁端部に内傾する 施文帯を貼りつけ, 複合口縁としてい る。	外面 ナデ。口縁貼りつ け部に上下 2 段の 波状文。 頸部に貼りつけ突 帯を巡らし「メ」 字文を有する。 内面 口縁接合部に棒状 工具による調整が みられる。以下ナ デ。	色調 赤褐色 胎土 粗 焼成 良
65	第58号土 壙	高 杯	口径 30.4	杯部の口縁部はゆる やかに大きく外反 し, 端部は平たくお さめ, 杯部と底部の 堺には明瞭な稜があ り, 底部はやや丸み をおびている。	外面 ハケ目後ナデ。 内面 口縁端部周辺ナ デ。以下ヘラみが き。 内外面とも非常に緻密な 調整が施されている。	色調 赤褐色 胎土 密 焼成 良

番号	出土位置	器 種	法量 (cm)	器形について	調整, 成形について	備 考
68	第69号土壙	甕形土器	口径 22.3 底径 6.0 胴部最大径 25.8 器高 33	口縁部は「く」の字状に外反し、端部は粘土をはりつけることによって肥厚させている。 底部は凹底である。	外面 口縁部ナデ。以下摩滅し、調整不明。 内面 口縁部ナデ。以下ヘラ削り。 口縁端部に2条の凹根を有する。口縁直下に2段の刺突文を有する。	色調 淡褐色 胎土 やや密 焼成 やや軟 体部にスス付着
69	第82号土壙	不 明	口径 17.8	口縁部は「く」の字状に外反し、端部は平たくおさめている。	外面 口縁部ナデ。以下摩滅し、調整不明。 内面 口縁部ナデ。以下ヘラ削り。 口縁直下にヘラ状工具による「ノ」の字施文を有する。	色調 赤褐色 胎土 やや密 焼成 良 体部にスス付着
70	第84号土壙	不 明	口径 18.2	口縁部は「く」の字状に外反し、端部はつまむことによって若干肥厚させている。	外面 ハケ目。頸部ナデ。頸部から肩部にかけてクシ歯状工具による刺突文。 内面 口縁部ハケ目。以下ヘラ削り。	色調 赤褐色 胎土 良 焼成 良 口縁部一部黒斑 体部にスス付着
71	第91号土壙	不 明		口縁部は「く」の字状に外反し、粘土をはりつけることによって肥厚させている。	外面 口縁部ナデ。 内面 摩滅が著しく調整不明。口縁端部に2条の凹線を有する。	色調 黒褐色 胎土 やや粗 焼成 やや軟
72	第92号土壙	不 明	口径 19.9	口縁部は「く」の字状に外反し、端部はつまむことにより肥厚させている。	外面 ナデ。 内面 口縁部ナデ。以下ヘラ削り後ナデ。 口縁端部に3条の凹線を有する。口縁部外面に指でつまんだ痕を残す。	色調 淡赤褐色 胎土 密 焼成 良
73	第97号土壙	不 明		口縁部は「く」の字状に外反し、端部は粘土をはりつけることによって肥厚させている。	外面 口縁部ナデ。 内面 口縁部ハケ後ナデ。以下ヘラ削り。 口縁端部に3条の凹線を有する。	色調 淡褐色 胎土 密 焼成 やや軟

番号	出土位置	器 種	法量 (cm)	器形について	調整, 成形について	備 考
75	土器棺墓	壺形土器	口径 16.3	ゆるやかに外反する口縁に内湾気味に立ちあがり部が接合する複合口縁である。端部は平たくおさめている。 頸部には刻目格子の貼り付け突帯をめぐらす。	外面 口縁立ち上がり部に8条の波状文を有す。以下ハケ目。 内面 ナデ。	色調 赤褐色 胎土 粗 焼成 良
76	土器蓋土壙	甕形土器	口径 14	口縁部は「くの字」状に外反し、端部は粘土を貼りつけることによって肥厚させている。肩部はよく張る。	外面 口縁部ナデ。以下ハケ目。 内面 口縁部ハケ目後ナデ。以下ヘラ削り。屈曲部に指頭痕が残る。 口縁端部に2条の凹線を有する。口縁直下及び肩部に押引紋を有する。	色調 赤褐色 胎土 密 焼成 良
77		甕形土器	口径 15.7 底径 3.5	口縁部は「くの字」状に外反し、端部はつまむことによって肥厚させ、平たくおさめている。底部はやや凹底となる。	外面 口縁部ナデ。以下ハケ目。口縁端部はハケ目。 内面 口縁部ナデ。後ヘラ磨き。以下ヘラ削り後ヘラ磨き。 口縁直下に押引紋を有す。	色調 褐色 胎土 密 焼成 良

V ま と め

今回の調査の結果、A地点遺跡からは3軒分の、B・C地点遺跡からは46軒分の住居跡が検出されるなど、本遺跡は弥生時代後期の集落跡であることが判明した。安川流域の弥生時代集落跡については、すでに幾例かの発掘調査が実施されてきたところであるが、本遺跡が、太田川流域では他の遺跡に比して規模の大きな集落跡であるので、ここでは、本遺跡と周辺の遺跡との関係を考察することでまとめとしたい。

従来、弥生時代後期の集落の立地については、2～3軒を単位とする集落が各地に散在するという景観が太田川の下流域に共通した特徴として把握されている。安川流域においても、国重遺跡、中畦遺跡、恵木遺跡、広島経済大学構内遺跡群跡、ほぼ同様の立地を示すものと考えられてきた。これらの遺跡で住居跡の営造された時期を見てみると、国重遺跡では、上深川Ⅲ式（新）の住居跡が2軒検出されている。中畦遺跡においては、上深川Ⅰ式の時期に1軒、上深川Ⅱ式の時期に2軒の住居跡が営まれている。恵木遺跡では、上深川Ⅰ式の時期の住居跡が2軒営まれている。大町矢ヶ谷遺跡A地点においては、上深川Ⅰ式の時期の住居跡が1軒、大町矢ヶ谷遺跡B地点においては、上深川Ⅲ式（古）の時期の2軒の住居跡が検出された。広島経済大学構内遺跡群においては、長う子遺跡で上深川Ⅱ式の時期に2軒、上深川Ⅲ式（古）の時期に5軒の住居跡が検出され、芳ヶ谷遺跡で上深川Ⅲ式（古）の時期の住居跡が5軒、大谷遺跡A地点では上深川Ⅱ式の住居跡2軒、大谷遺跡B地点では上深川Ⅱ式の時期に1軒、上深川Ⅲ式（古）の時期に3軒の住居跡を検出している。

一方、毘沙門台東B・C地点遺跡は、同一尾根上の長さにして360mにわたって住居跡を散在させているが、集落内には区域を画するような溝若しくは空閑地は検出されておらず、基本的な立地として、時期による住居跡の移動が見られないことから、一本の尾根そのものを一単位とする集落であったと考えられる。

毘沙門台東B・C地点遺跡で検出された住居跡の時期をみてみると、すでにB・C地点遺跡の小結でみたように、毘沙門台東遺跡B・C地点遺跡では、上深川特式の時期に6軒であった住居跡が16軒に増加しており、上深川Ⅲ式（古）の時期にも、住居跡の数を若干減じながらも引き続き集落を存立させていることがわかる。上深川Ⅱ式の時期に遺構が増えるという傾向は、太田川東岸の旧高陽町域及び八幡川下流域の動向と軌を一にするところである。太田川の東岸の旧高陽町域においては、散在した遺跡が時期差を持っており、集落が派生・展開していた可能性が指摘されている。ところが、B・C地点遺跡の場合は、上深川Ⅱ式から上深川Ⅲ式（古）の時期に、第23号住居跡～第32号住居跡でみられたように、斜面をも造成して、あたかも土地に執着するかのように住居が増加しており、注目される。

以上をまとめて、本遺跡と周辺の遺跡の住居跡の推移を合わせて考えると次のようなことが考えられよう。

上深川Ⅰ式の時期には、中畦遺跡、恵木遺跡、大町矢ヶ谷遺跡A地点、毘沙門台東A地点遺跡、毘沙門台東B・C地点遺跡などで住居が築造されている。上深川Ⅱ式の時期になると、毘沙門台東B・C地点遺跡で周辺の遺跡を吸収するかのように住居跡の数を増すとともに、長う子遺跡、大谷遺跡A地点、大谷遺跡B地点に住居跡が築造される。上深川Ⅲ式（古）の時期では、長う子遺跡、大谷遺跡B地点で住居の数を増すとともに、大町矢ヶ谷遺跡A地点、芳ヶ谷遺跡で集落が造られるようになる。上深川Ⅲ式（新）の時期では、丘陵上に住居はほとんど見られなくなり、国重遺跡、毘沙門台東B・C地点で1～2軒が点在するだけとなる。

なお、発掘報告が未発表なため、詳細は不明であるが、毘沙門台東B・C地点遺跡の谷をはさんだ西隣には、70軒分の住居跡を検出した毘沙門台遺跡が確認されている。毘沙門台と毘沙門台東B・C地点遺跡は、ともに弥生時代後期を通して住居を立地させていることや、生産基盤と考えられる谷を共有していること、互いに連絡の容易な至近の場所に立地していることから、ひとつのまとまった集落であると考えることができる。両遺跡をあわせると、弥生時代後期に100軒を越える集落が存在していたことになり、他の遺跡に対する卓越性の高いことが指摘できよう。この両遺跡は、生産基盤と考えられる谷の広さ、集落としての規模、遺跡の密集している可部、高陽、祇園、石内のいずれとも近い距離にあって中心的な場所となるという立地からも、太田川流域の中心となる集落であった可能性が高い。

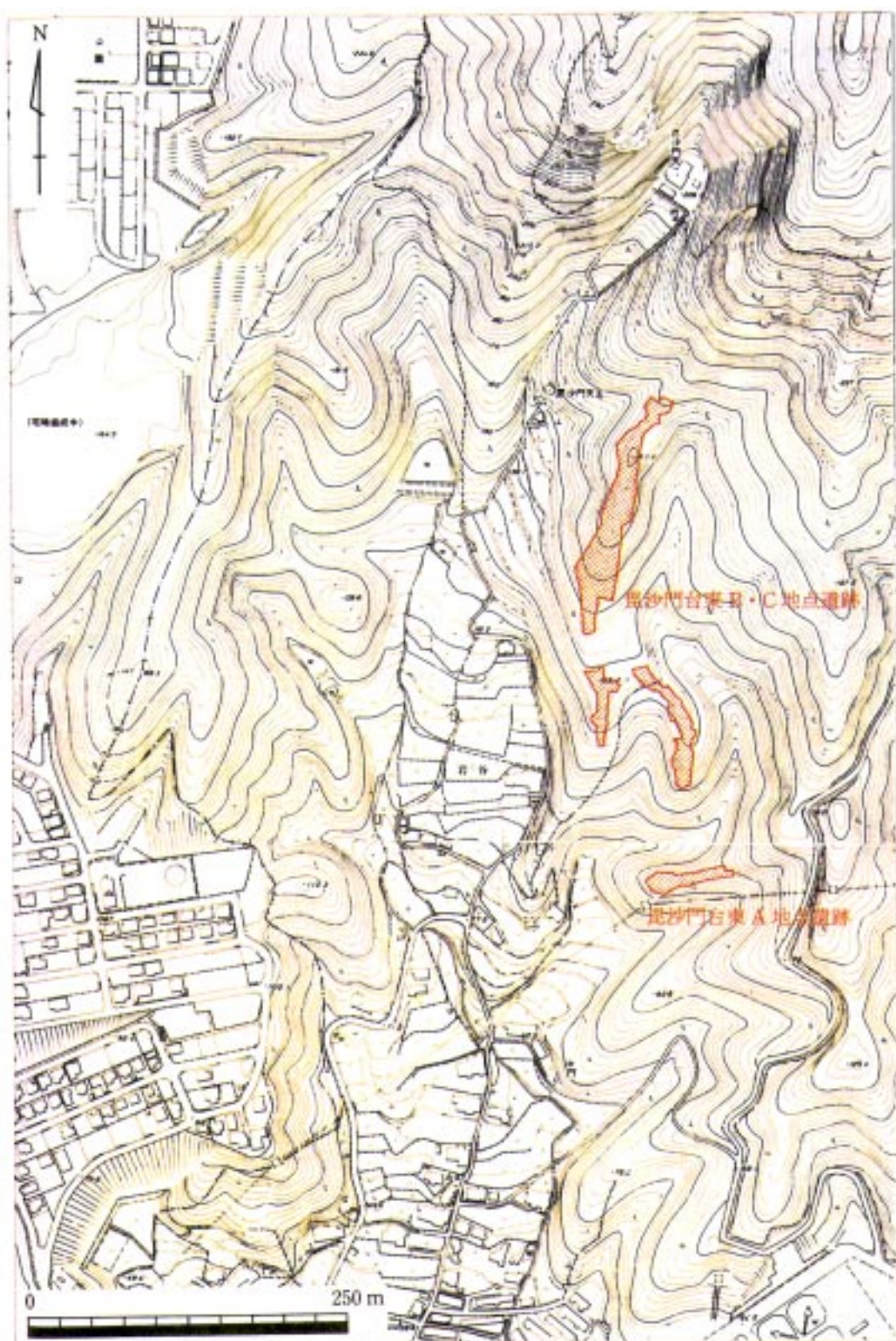
表5 安川流域の居住跡

	上深川。式	上深川「式	上深川」式（古）	上深川」式（新）
国 重 遺 跡				○ ○
中 畦 遺 跡	○	○		
恵 木 遺 跡	○ ○			
毘沙門台東A地点遺跡	○	○		
毘 沙 門 台 東 B ・ C 地 点 遺 跡	○○○○○	○○○○○○○○○ ○○○○○○○○○	○○○○○○○ ○○○○○	○
矢ヶ谷遺跡A地点	○			
矢ヶ谷遺跡B地点			○ ○	
長 う 子 遺 跡		○ ○	○ ○ ○	
芳 ケ 谷 遺 跡			○○○○○	
大谷遺跡A地点		○ ○		
大谷遺跡B地点		○	○ ○	

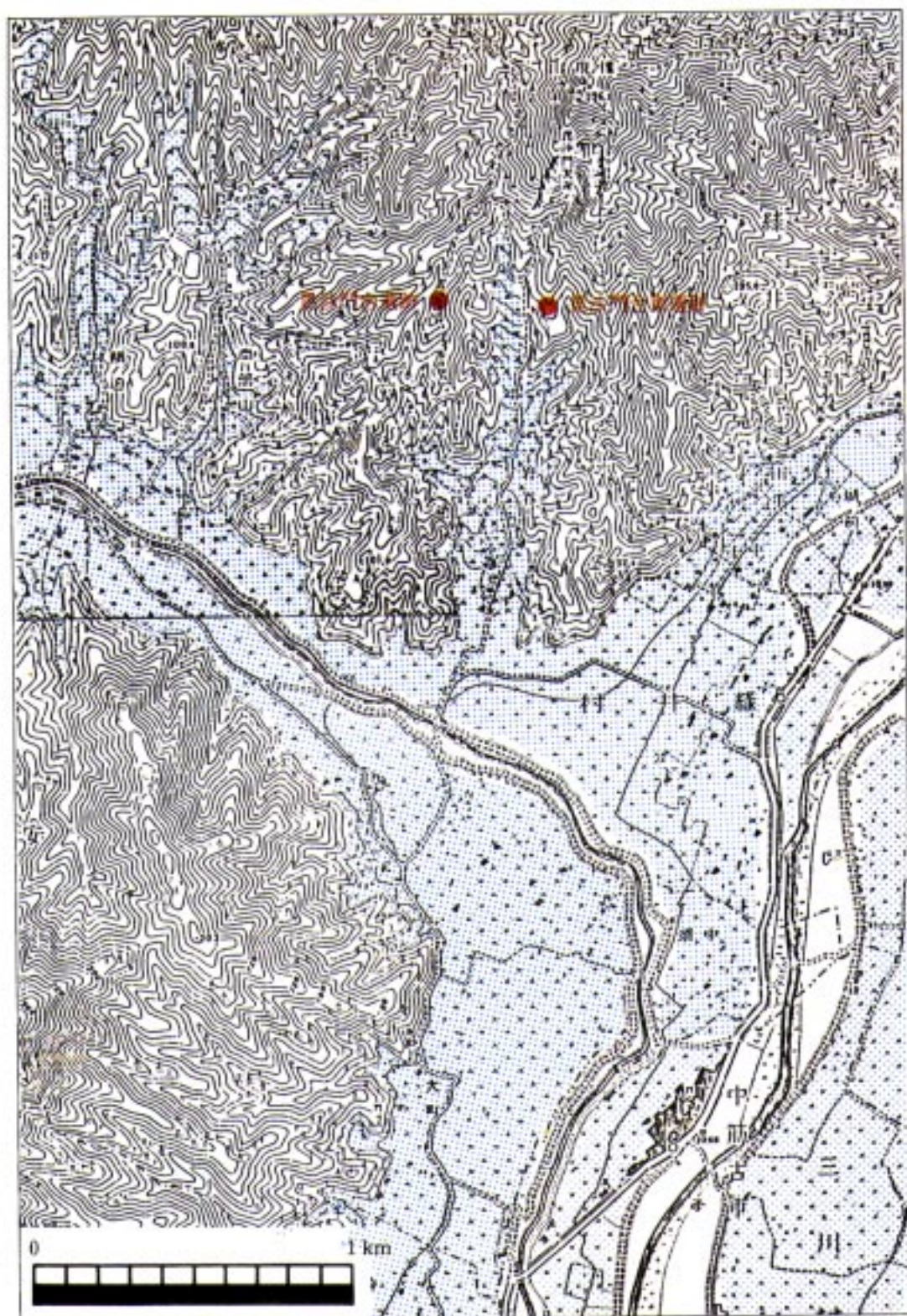
以上、今回発掘調査された毘沙門台東遺跡と周辺の遺跡の関係について考察を試みたわけであるが、現時点では毘沙門台遺跡における集落の変遷が不詳であるため、本遺跡の集落組成の変化や太田川下流域の集落遺跡の関係及び変遷をもたらした社会的経済的背景等、明らかにできなかった部分も多い。こうした諸問題については、毘沙門台遺跡と本遺跡との関係を整理していくなかでさらに検討を加えていきたい。

注

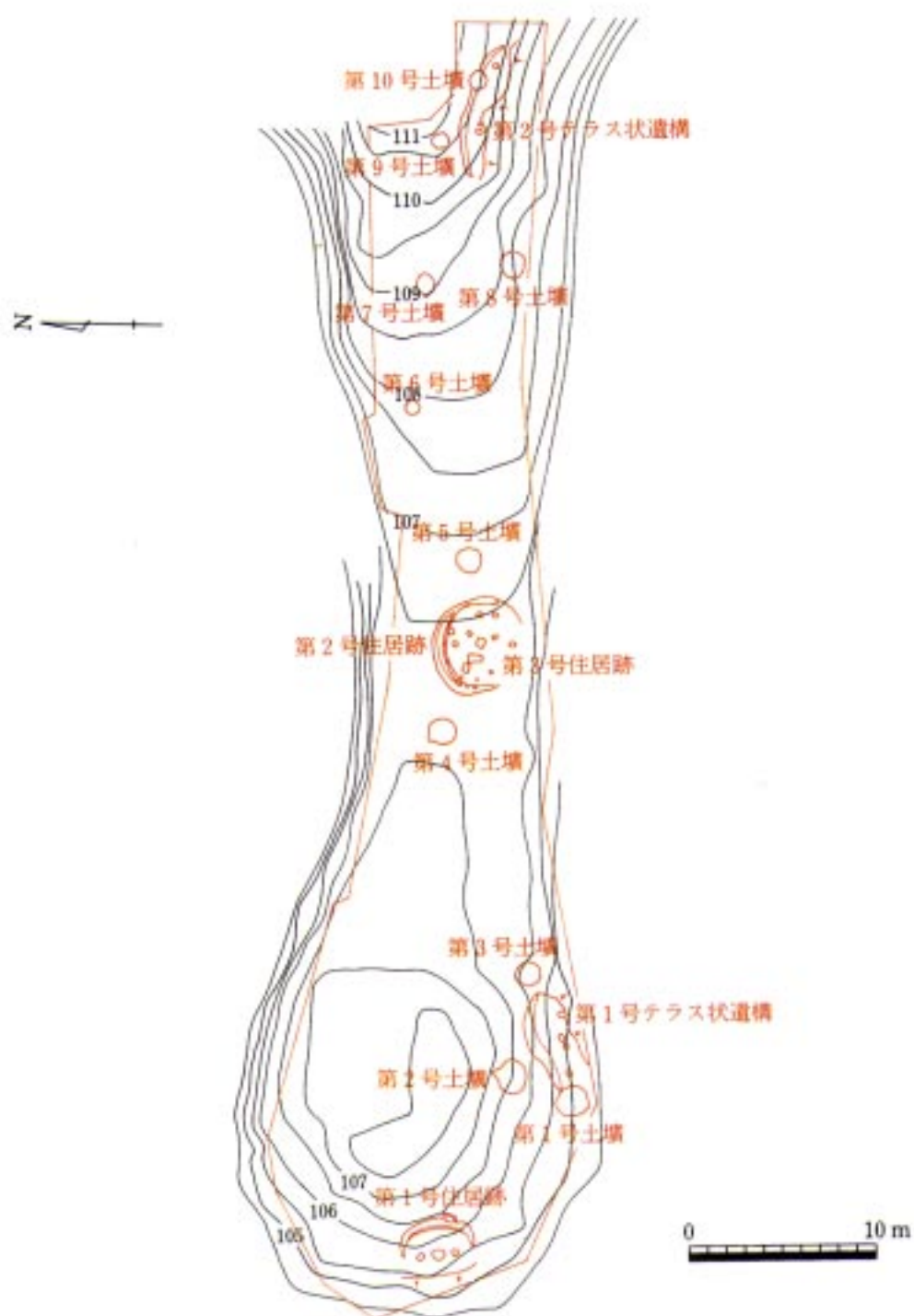
1. 広島市教育委員会「国重遺跡発掘調査報告」1982
2. 広島市教育委員会「中畦遺跡発掘調査報告」1984
3. 恵木遺跡発掘調査団「恵木遺跡発掘調査報告」1982
4. 広島市教育委員会「広島経済大学構内遺跡群発掘調査報告書」1984
5. 矢ヶ谷遺跡発掘調査団「矢ヶ谷遺跡発掘調査報告」1984
6. 同上
7. 毘沙門台遺跡発掘団「毘沙門台遺跡発掘調査現地説明会資料」1982



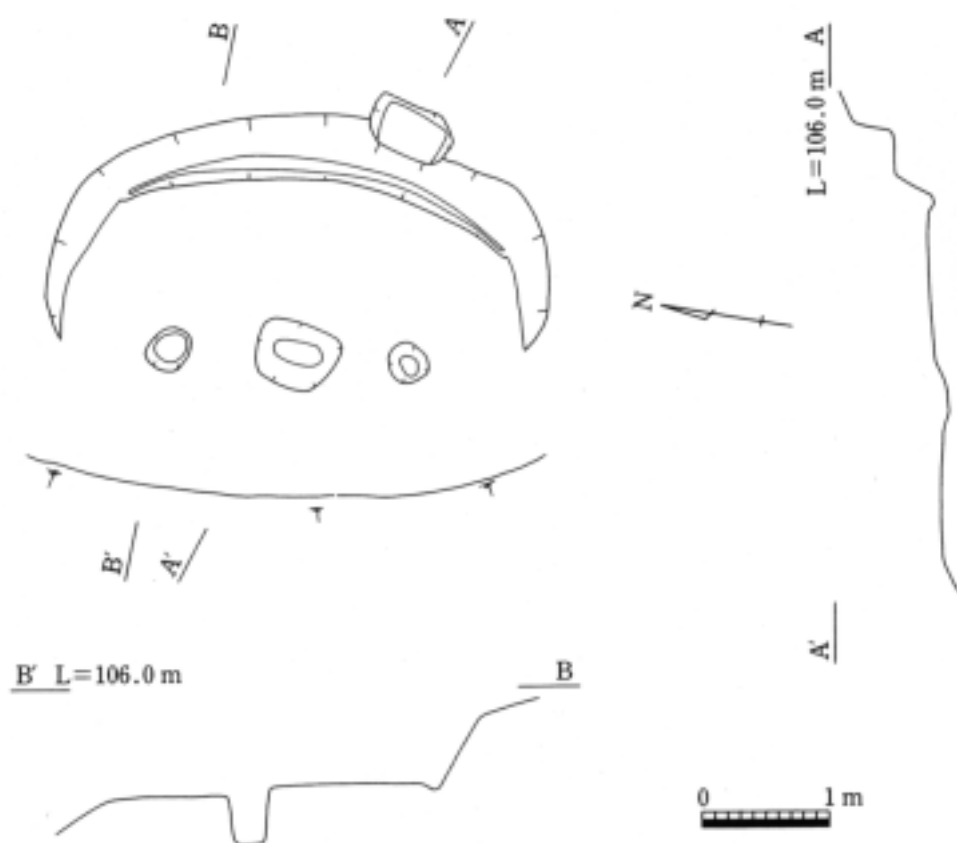
第2圖 遺跡周辺地形図



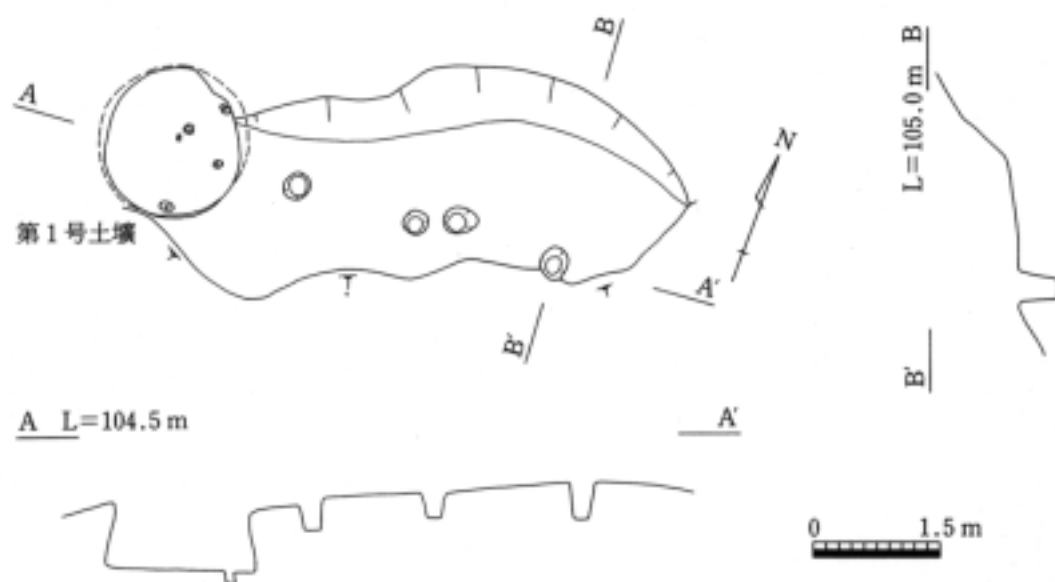
第3図 津路周辺地形図（明治28年測量）



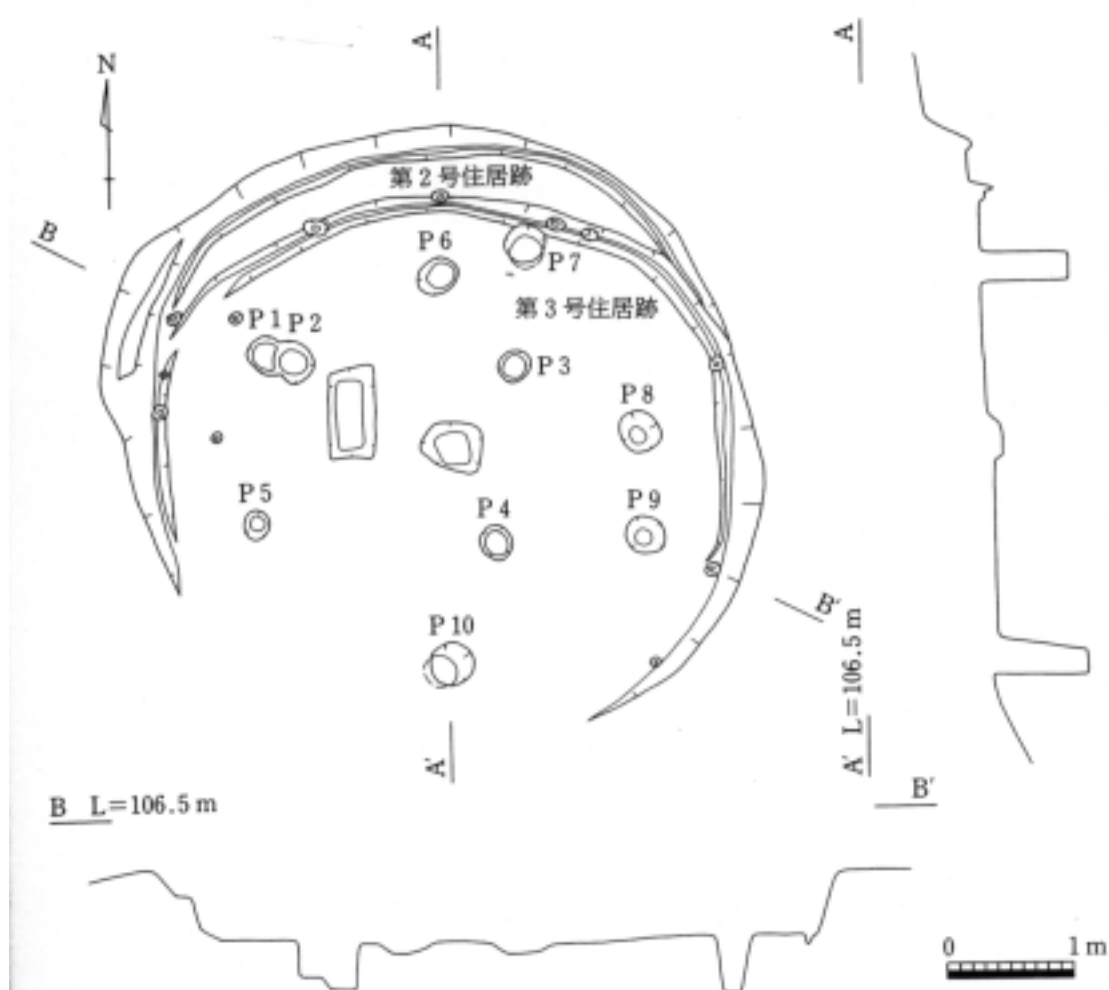
第4図 A地点遺跡遺構配置図



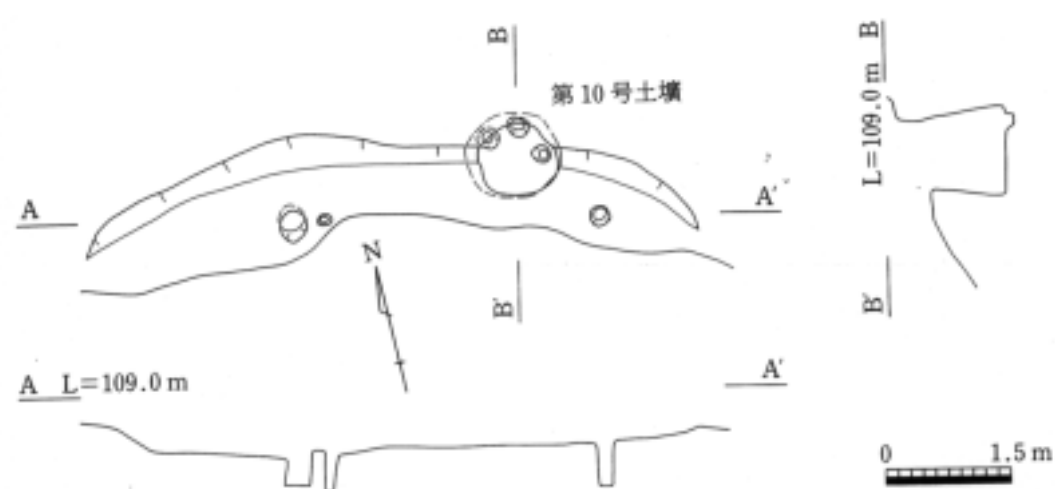
第5図 A地点遺跡第1号住居跡実測図



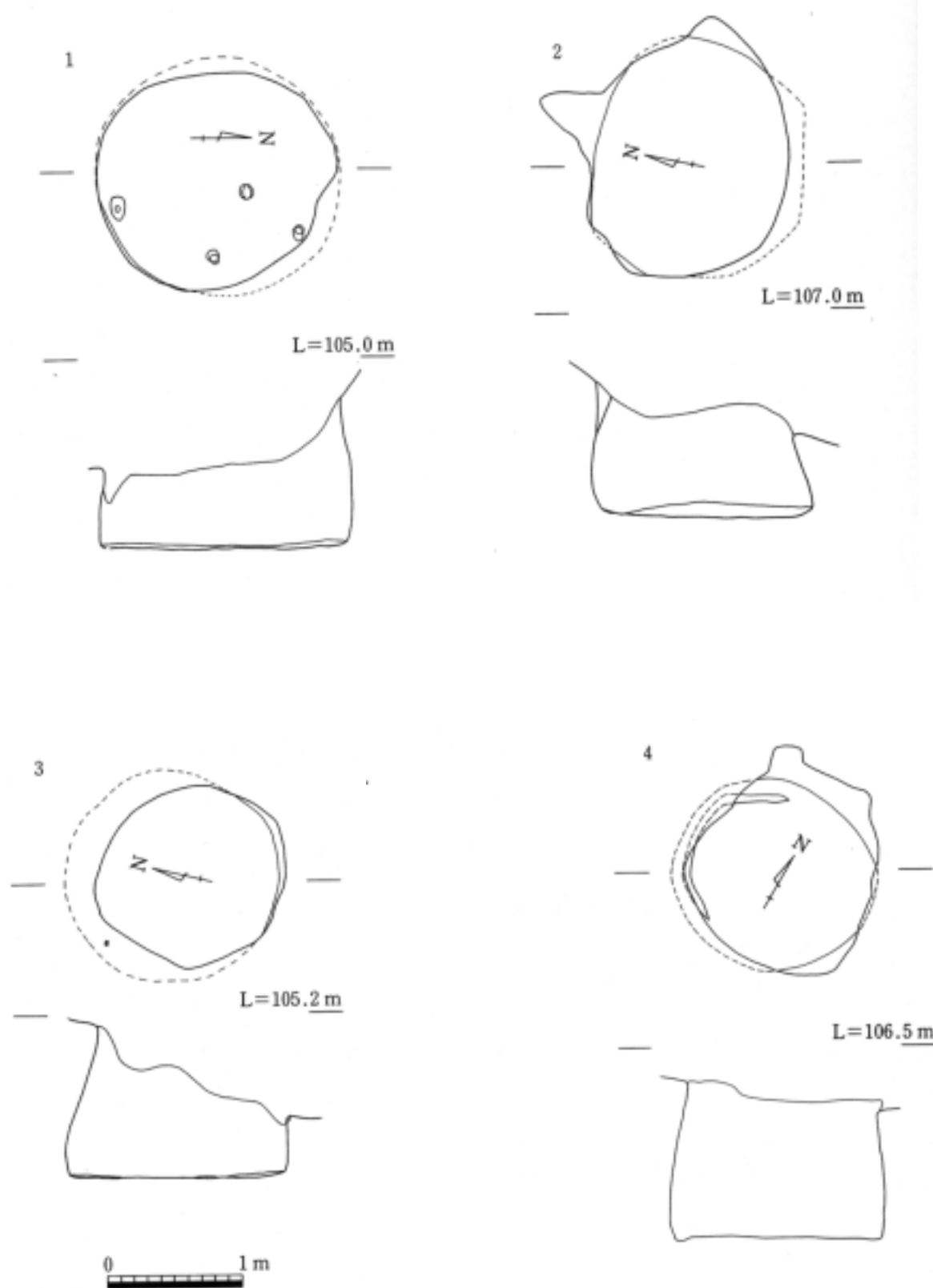
第6図 A地点遺跡第1号テラス状遺構実測図



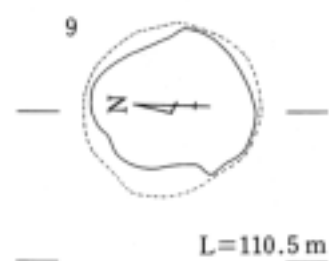
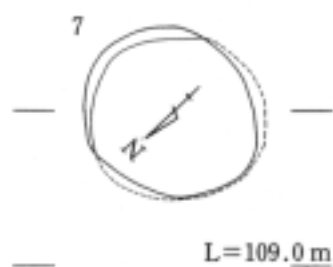
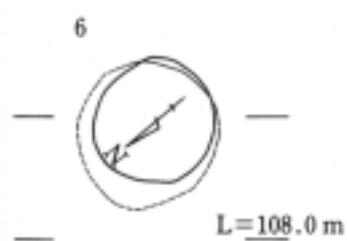
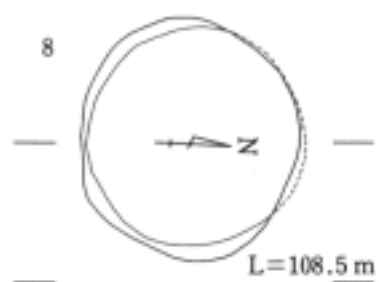
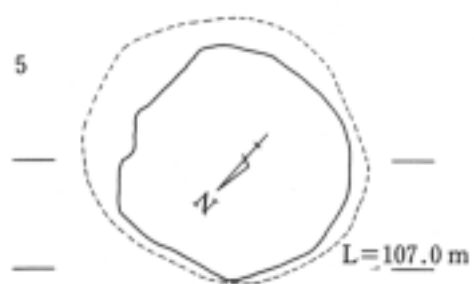
第7図 A地点遺跡第2号・第3号住居跡実測図



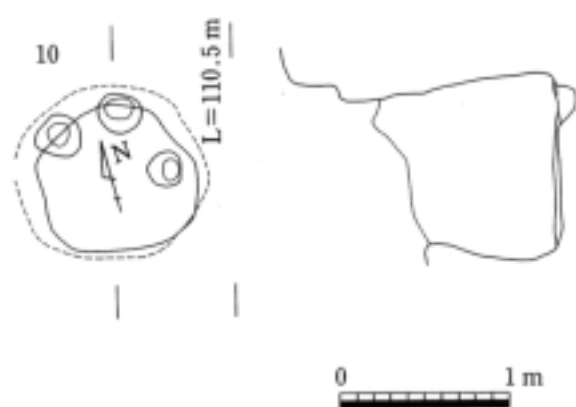
第8図 A地点遺跡第2号テラス状遺構実測図



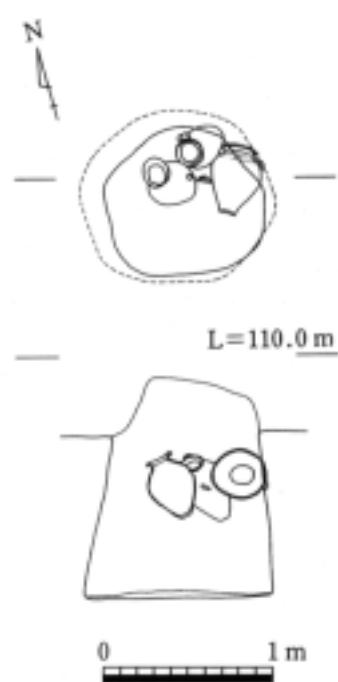
第9圖 A地点遺跡土壤實測圖(1)



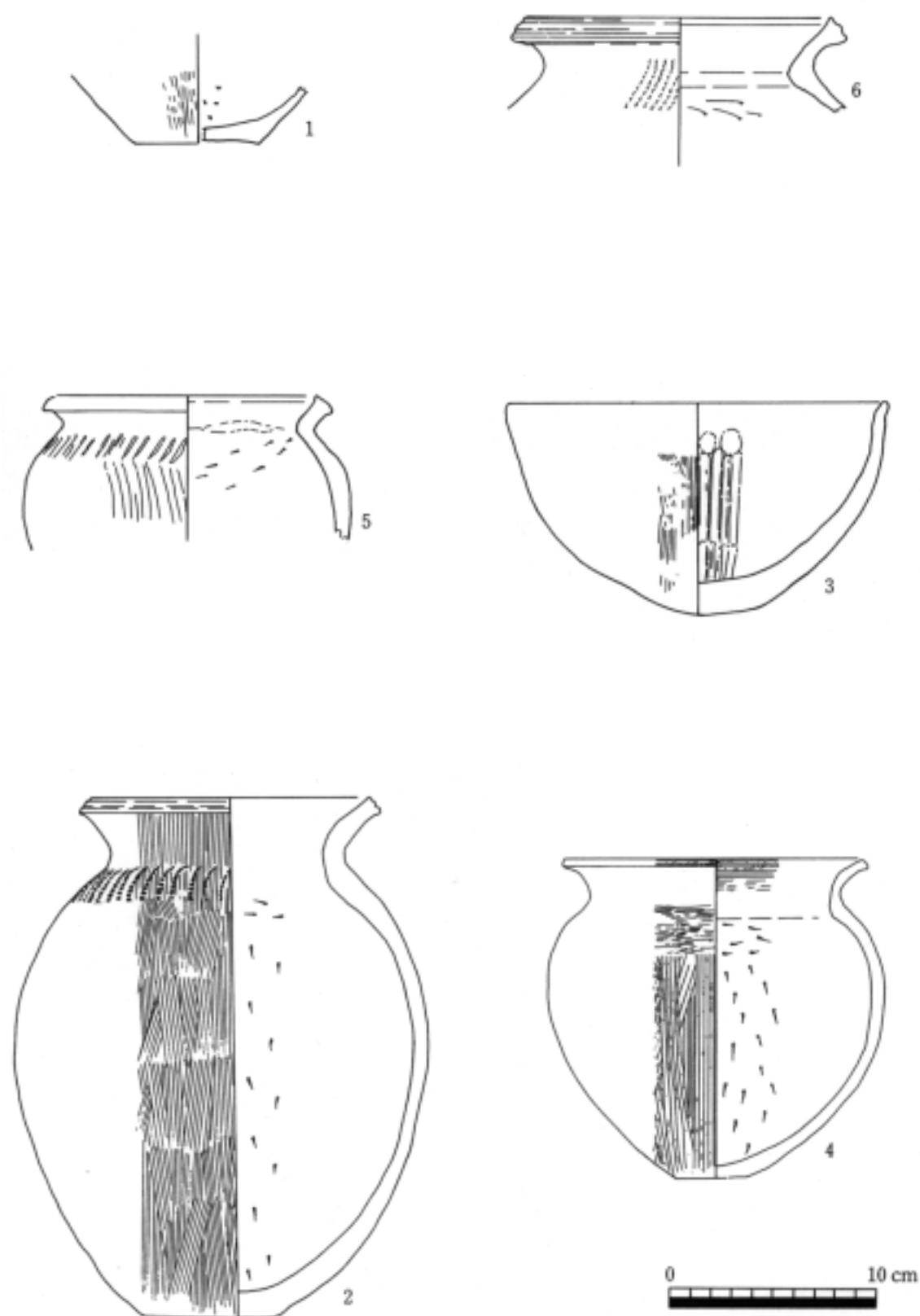
第10图 A地点遗址土壤实测图(2)



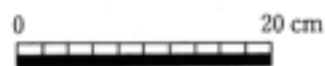
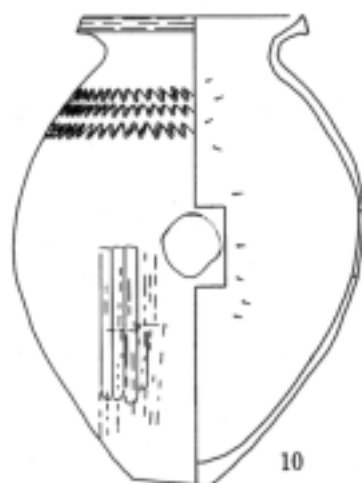
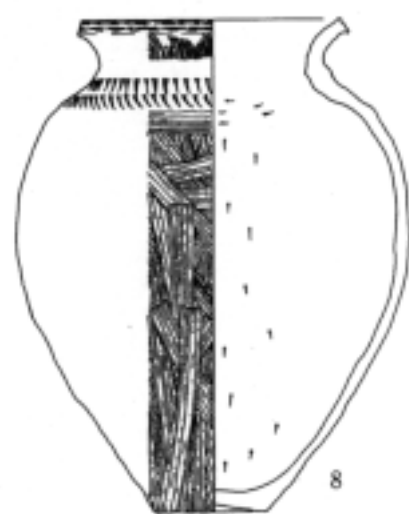
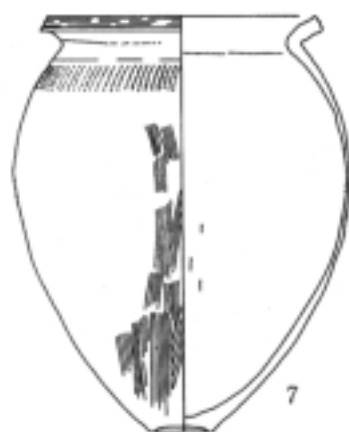
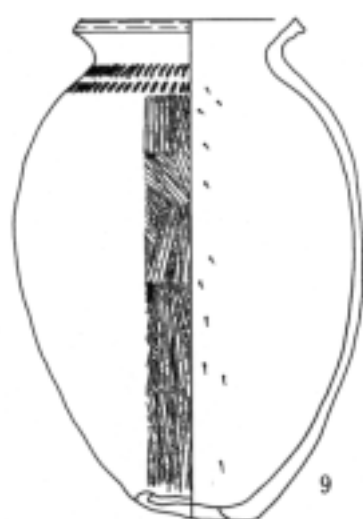
第 11 图 A 地点遺跡土壤実測図 (3)



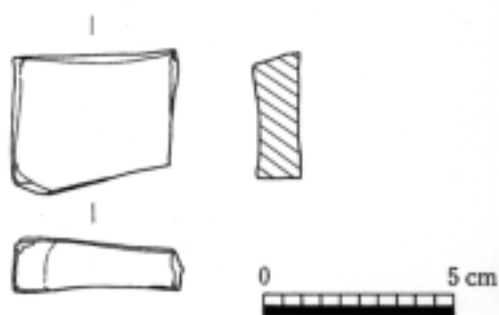
第 12 图 A 地点遺跡第 10 号土壤土器出土状況



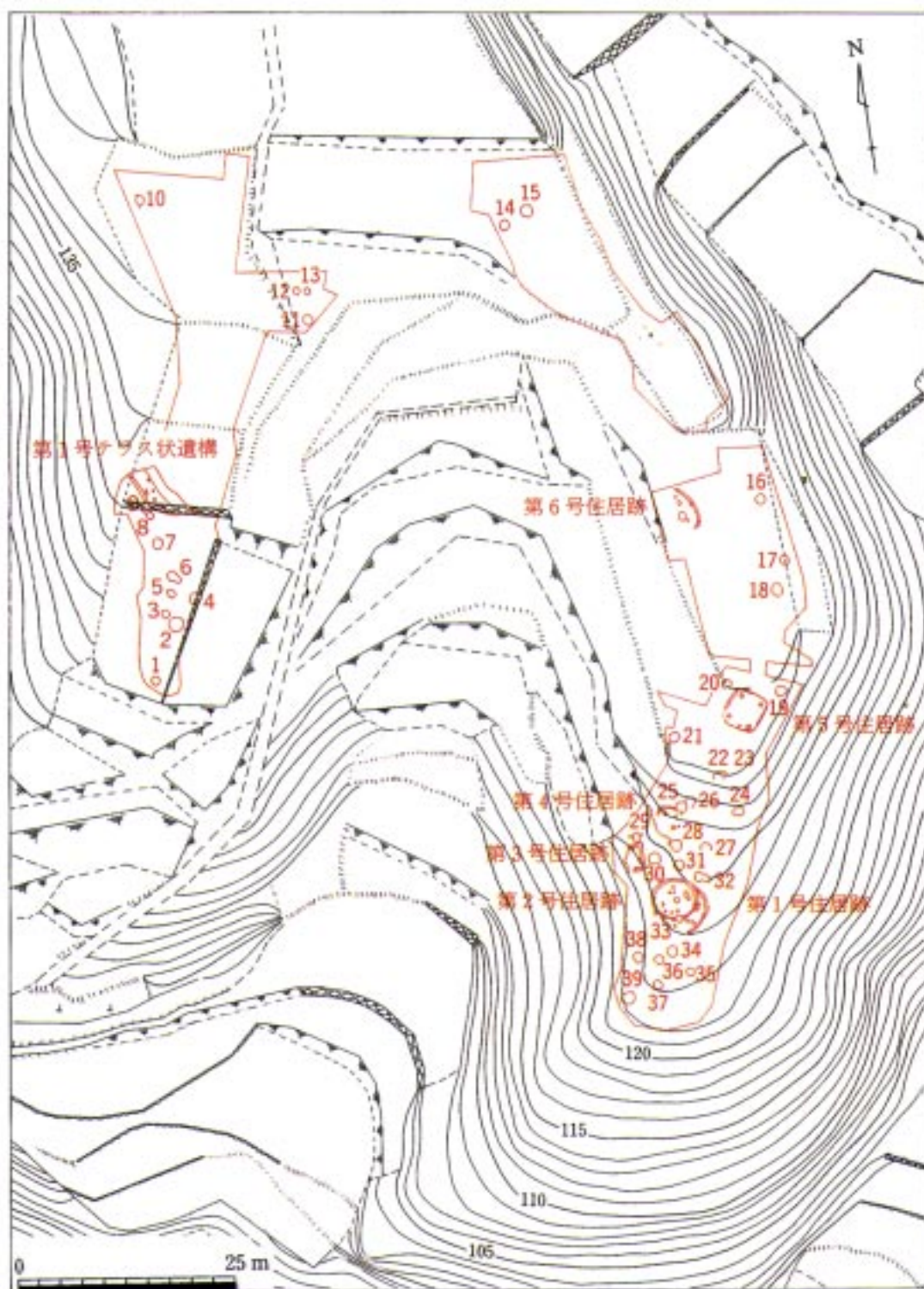
第 13 图 A 地点遗址出土土器实物图 (1)



第 14 图 A 地点遺跡出土土器実測図 (2)



第 15 图 A 地点遺跡出土石器実測図



第16図 B・C地点遺跡遺構配置図(1)

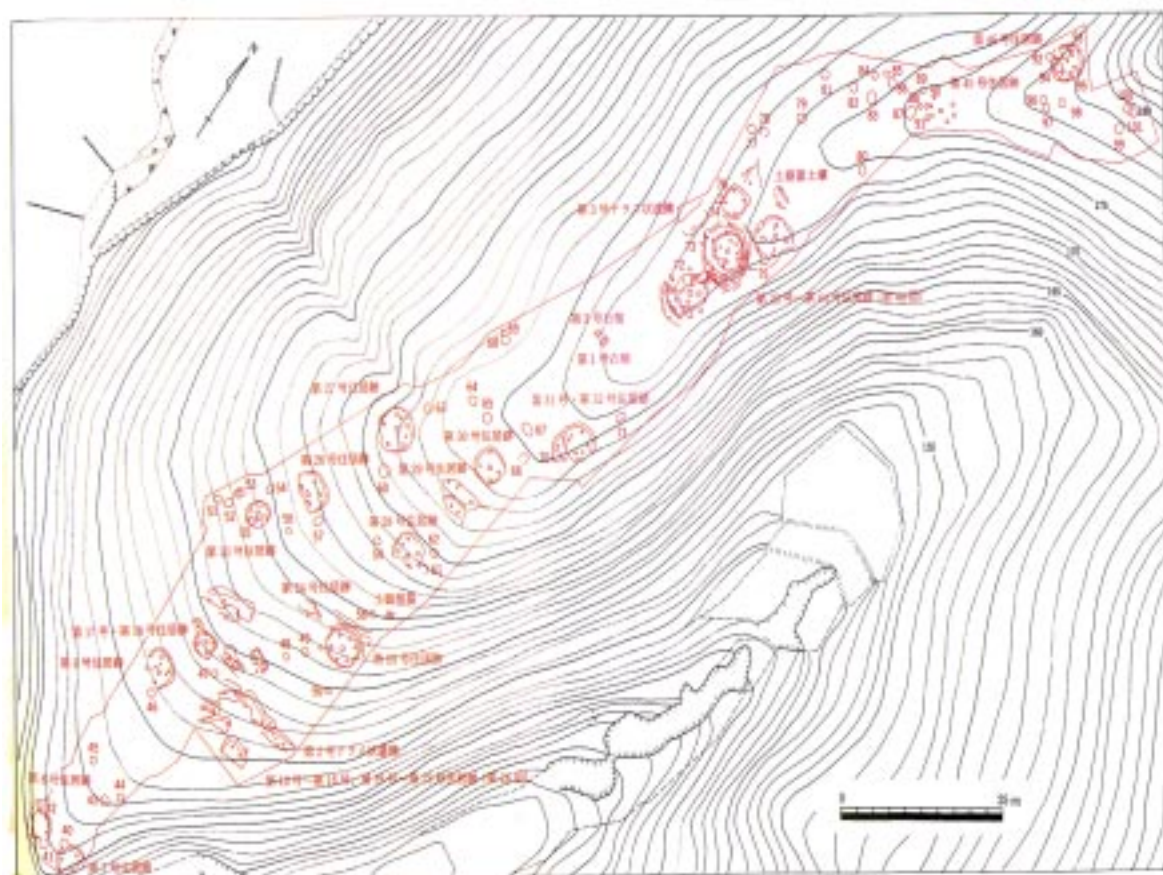


表17 图 3-C 地点遗址分布图 (1)

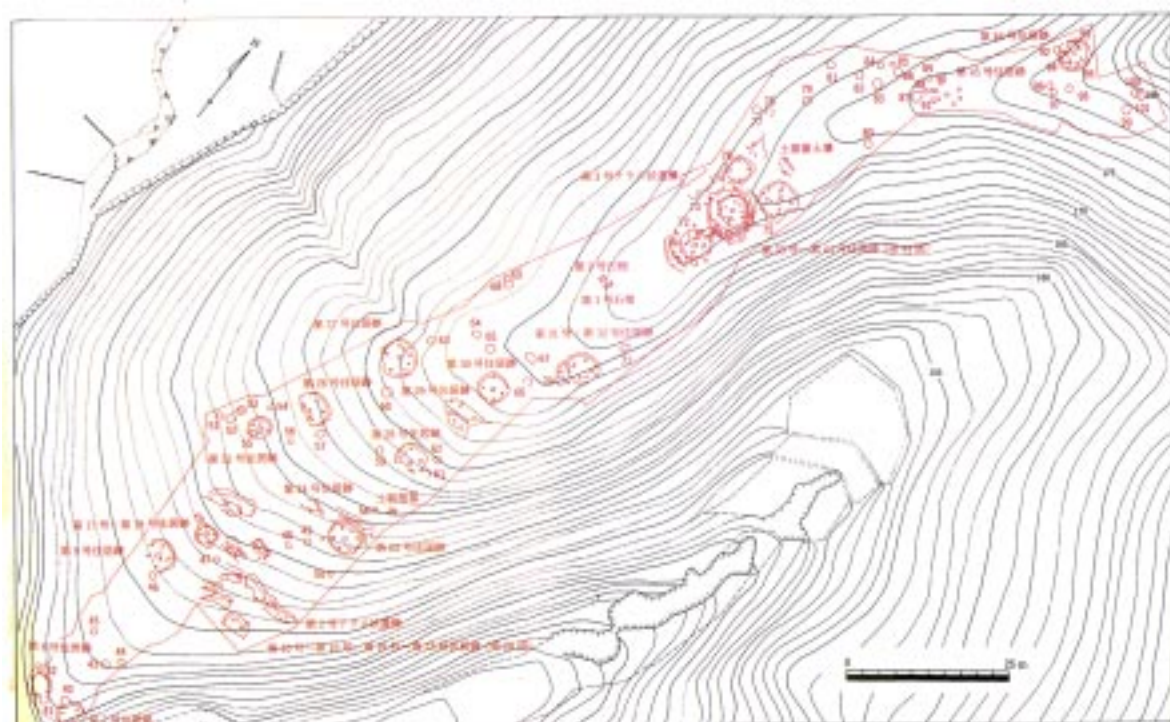
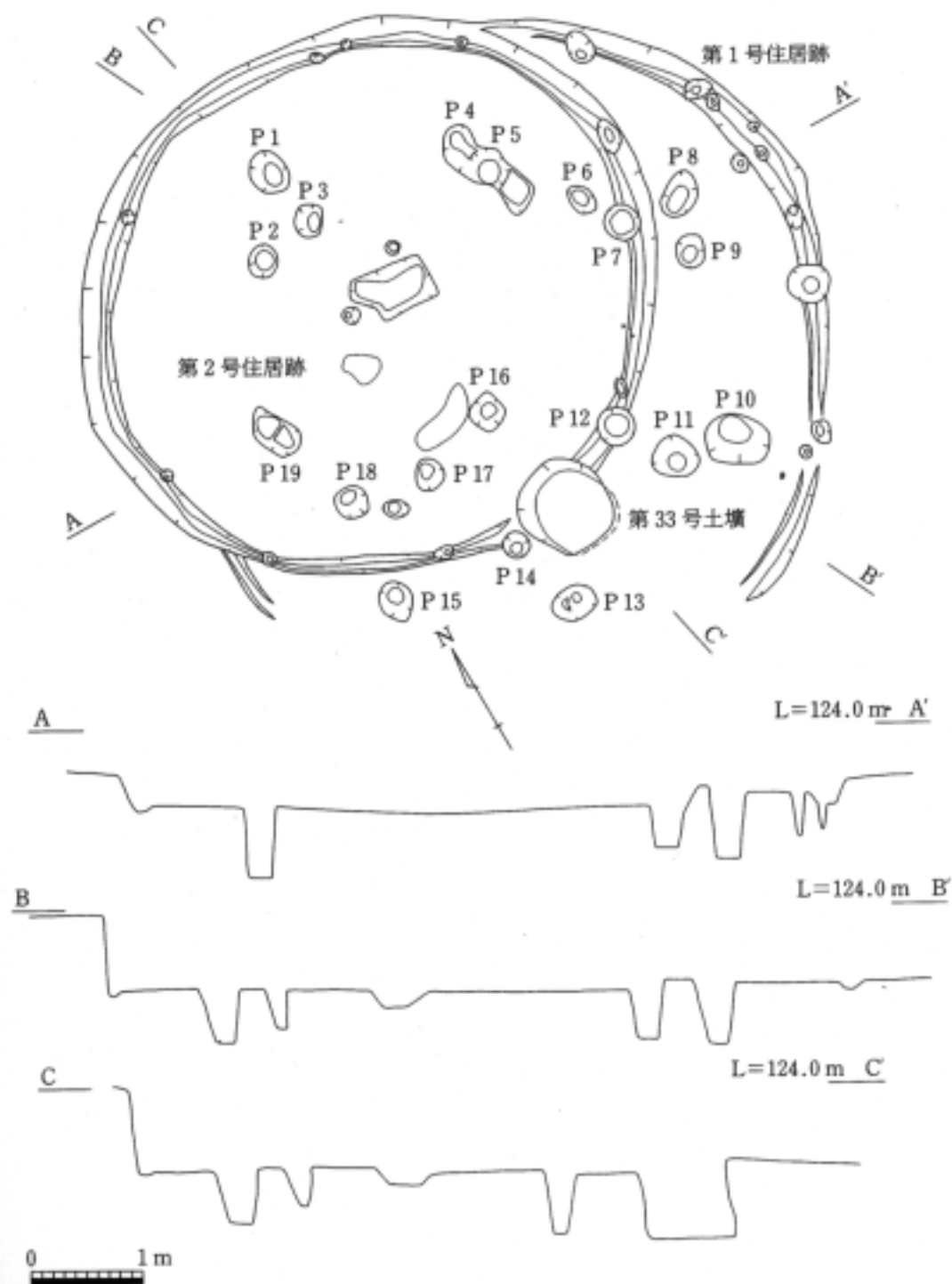


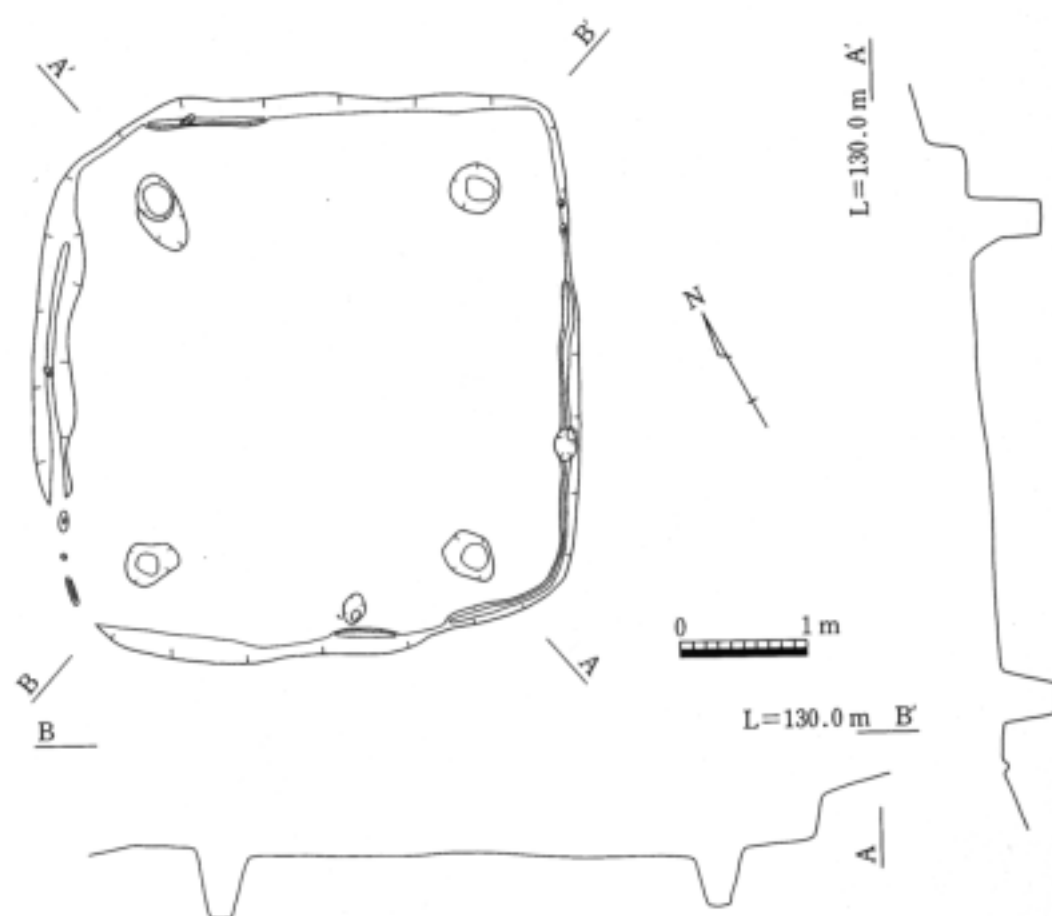
图 27 第 3-10 号遗址分布图 (2)



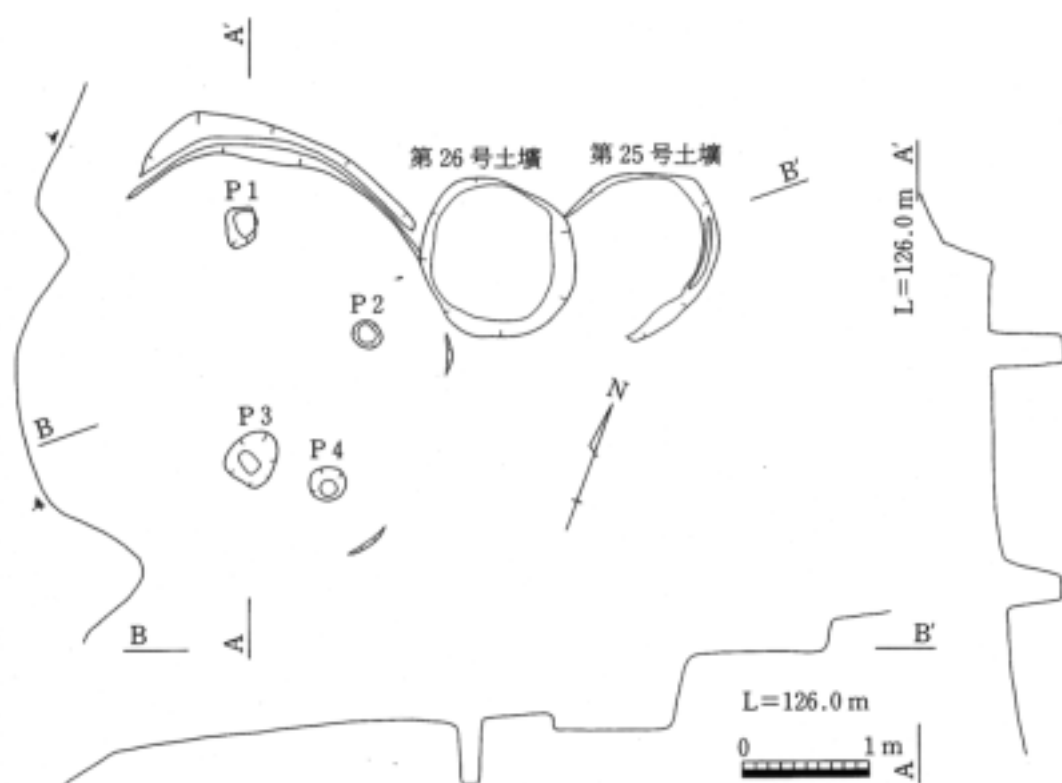
第18图 B·C地点遺跡第1号·第2号住居跡実測図



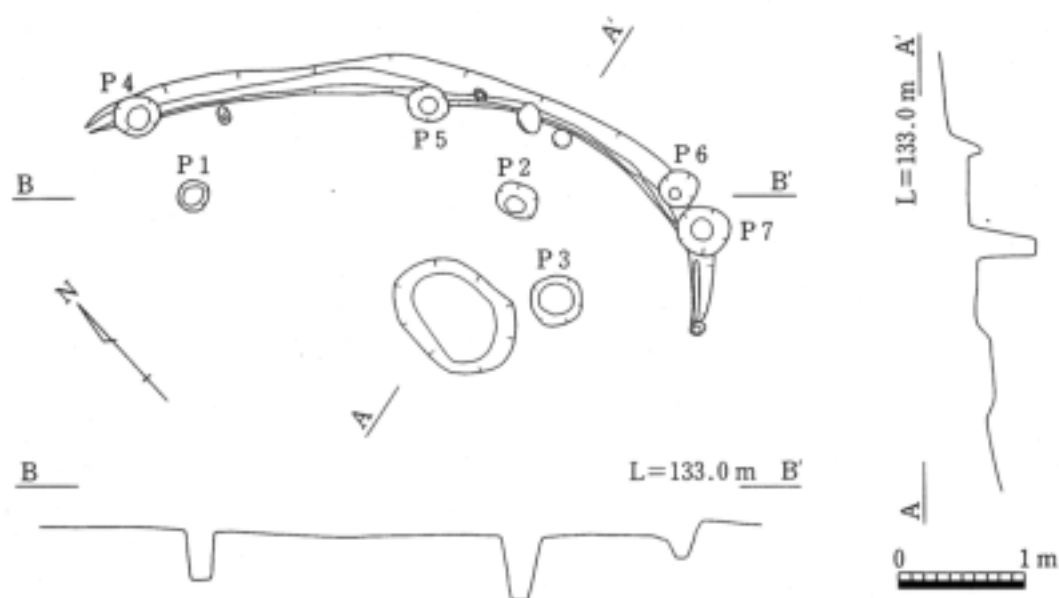
第19图 B·C地点遗址第3号住居跡実測図



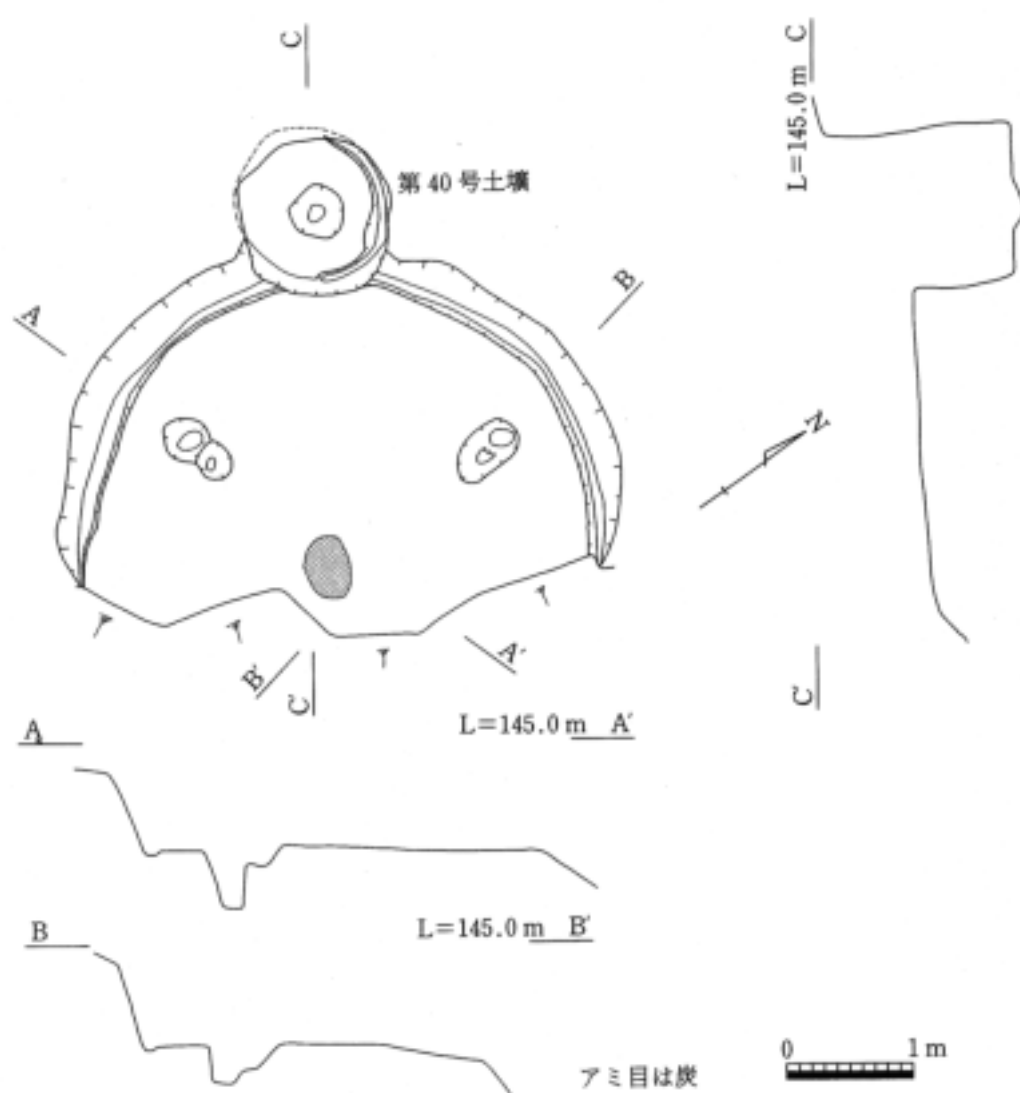
第20图 B·C地点遗址第5号住居跡実測図



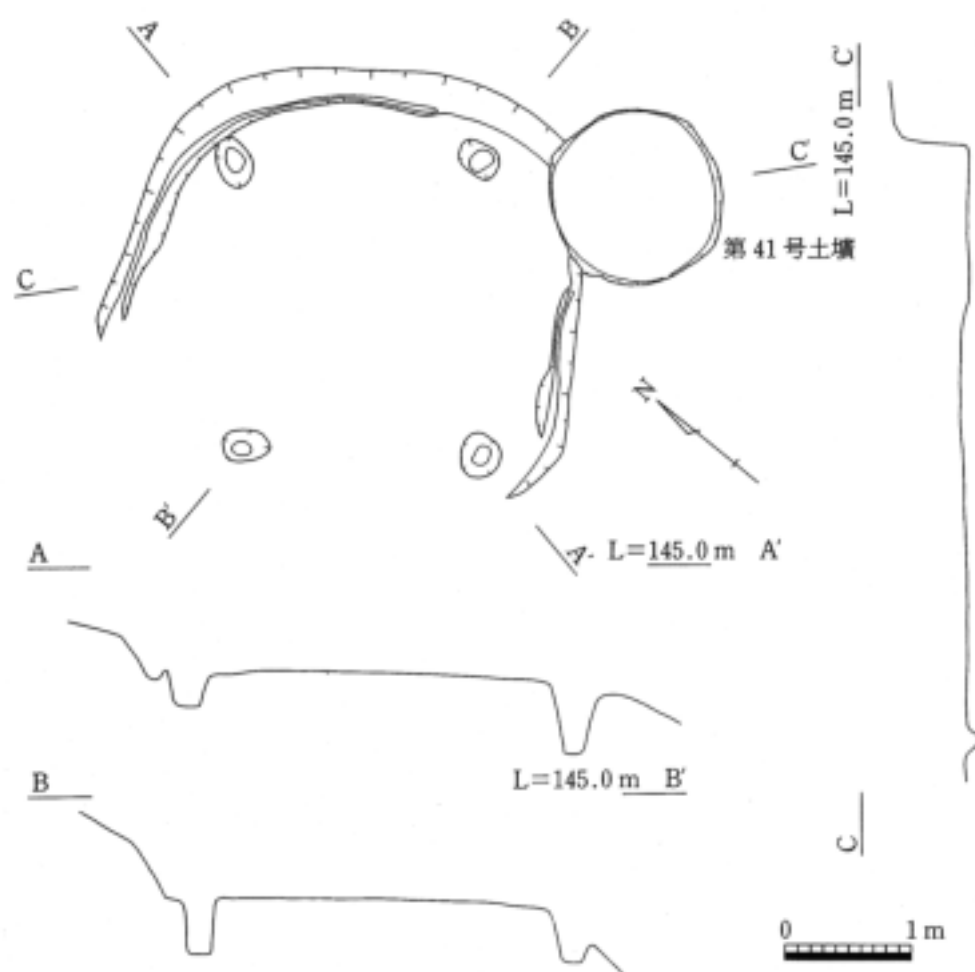
第21图 B·C地点遗址第4号住居跡実測图



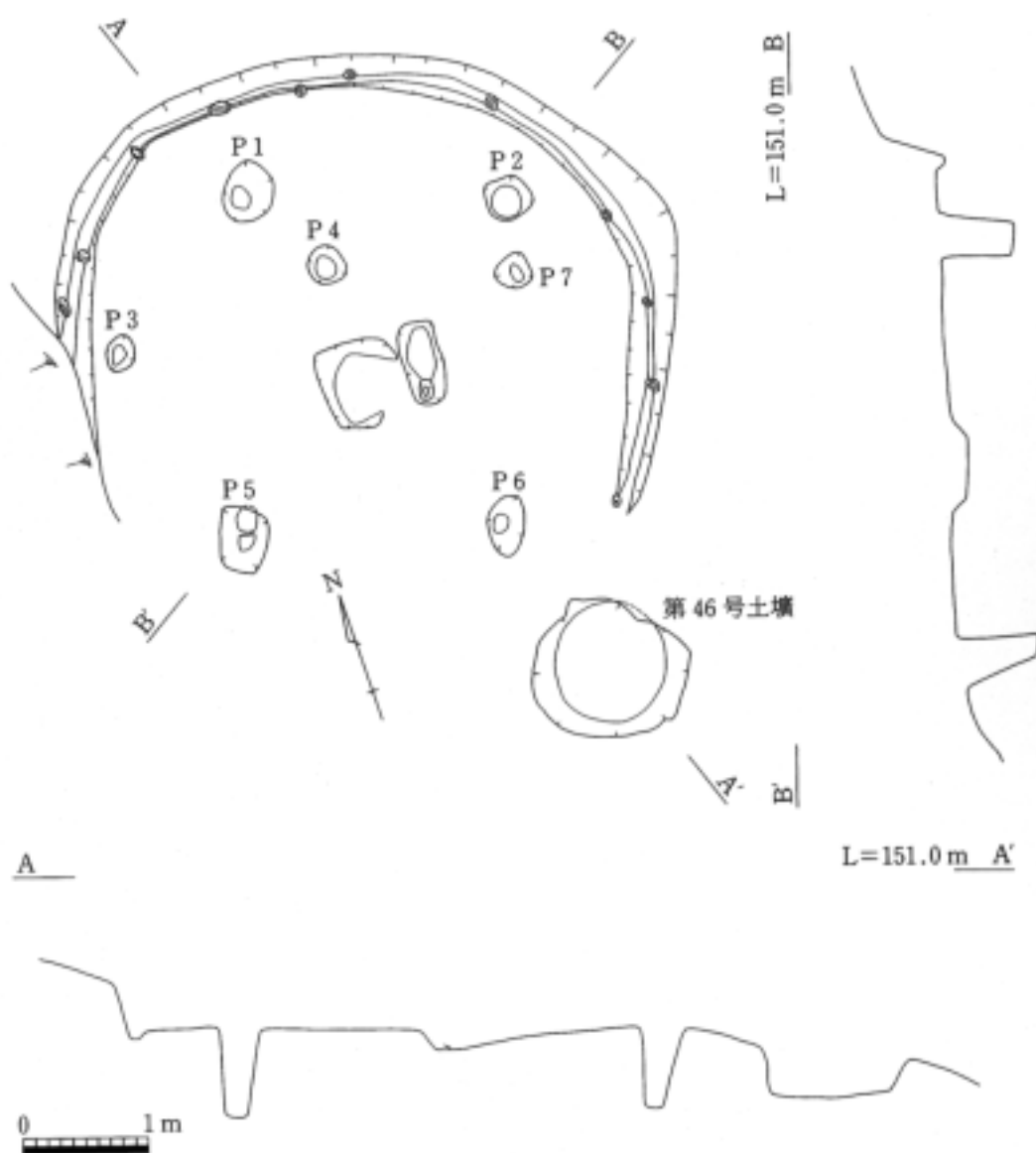
第22图 B·C地点遗址第6号住居跡実測图



第23図 B・C地点遺跡第7号住居跡実測図



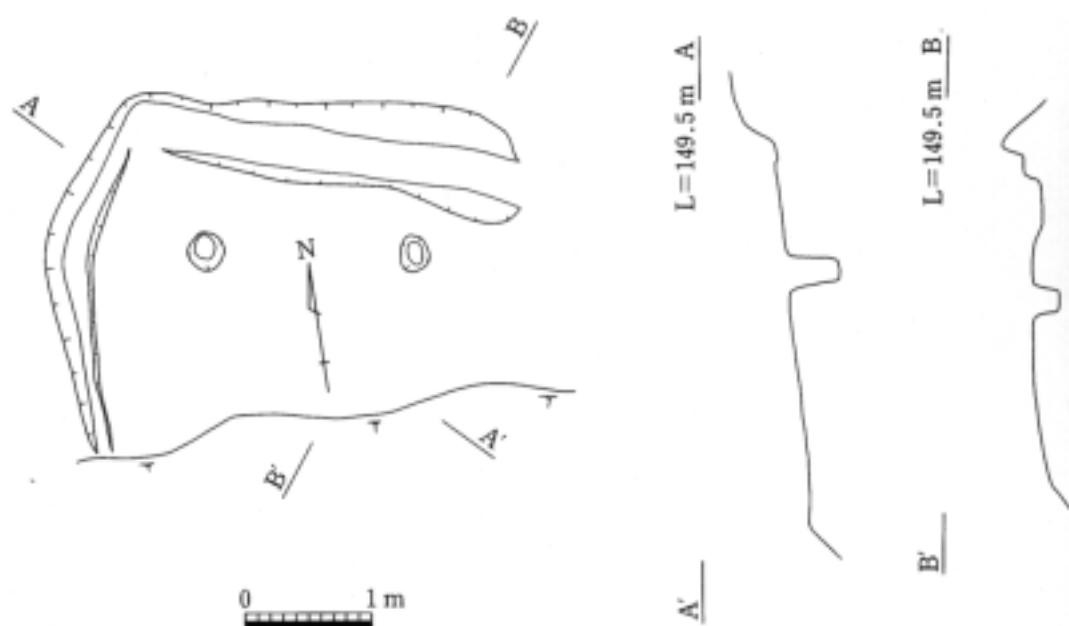
第24图 B·C地点遺跡第8号住居跡実測図



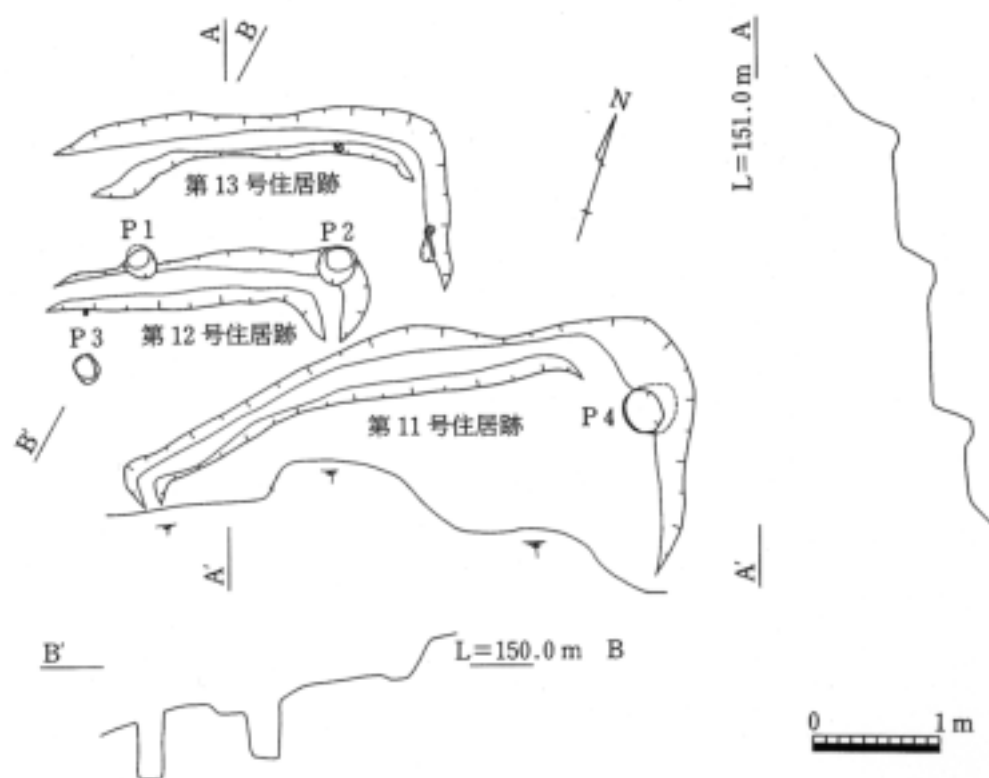
第25图 B·C地点遺跡第9号住居跡実測図



第26図 B・C地点遺跡第10号～第16号住居跡、
第19号～第22号住居跡配置図



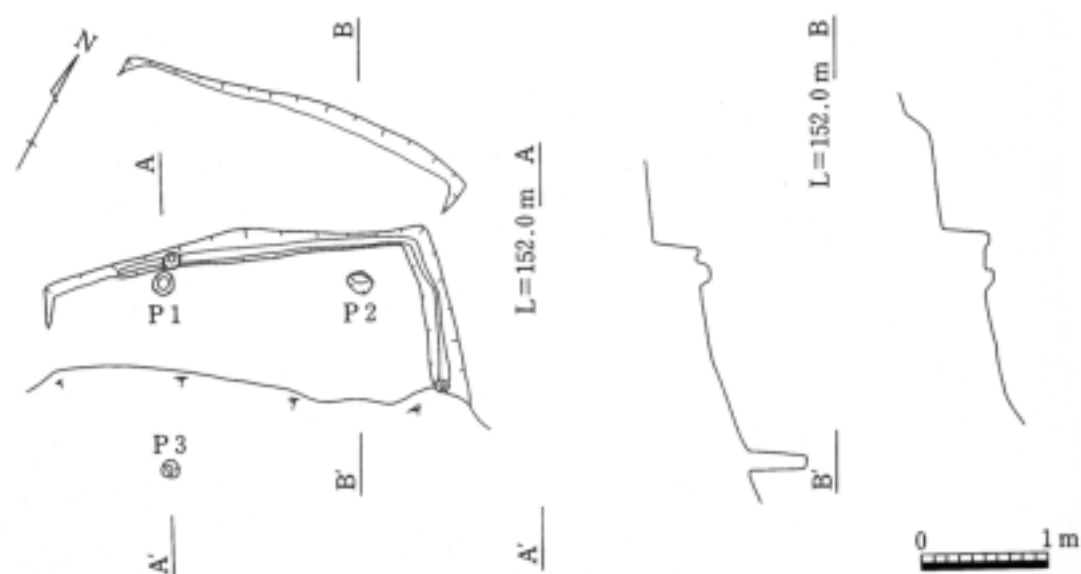
第27图 B·C地点遗址第10号住居跡実測図



第28图 B·C地点遗址第11号·第12号·第13号住居跡実測図



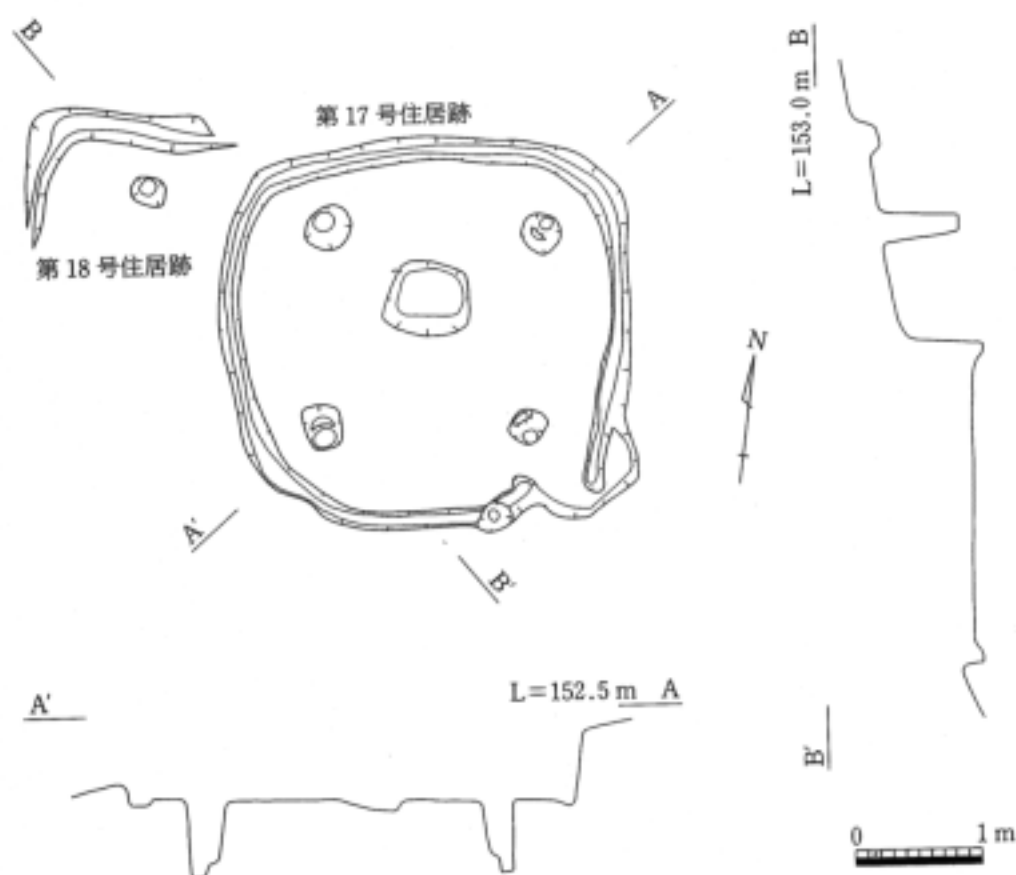
第29図 B・C地点遺跡第14号・第15号住居跡、
第2号テラス状遺構実測図



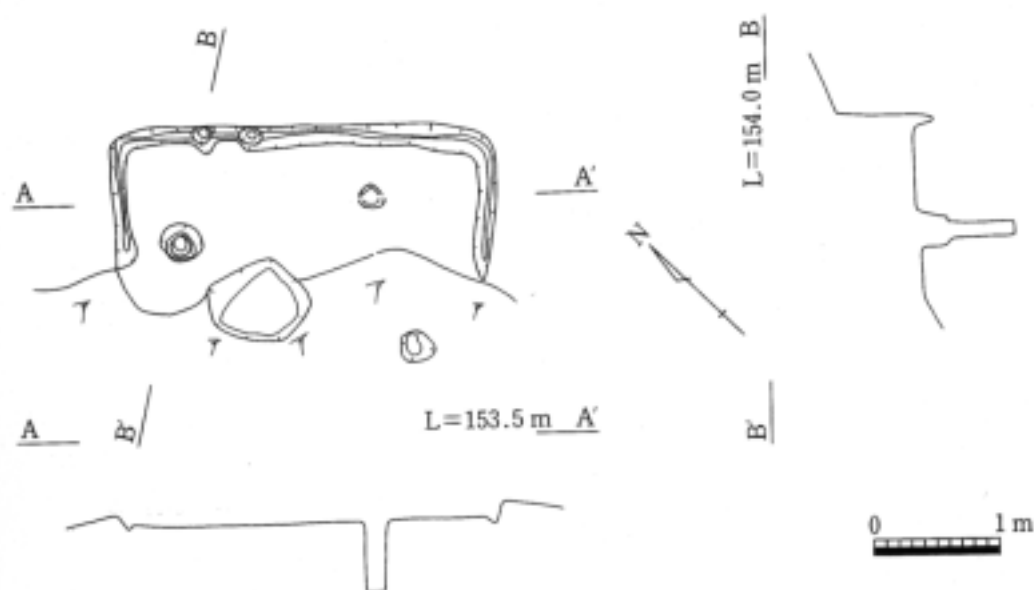
第30図 B・C地点遺跡第16号住居跡実測図



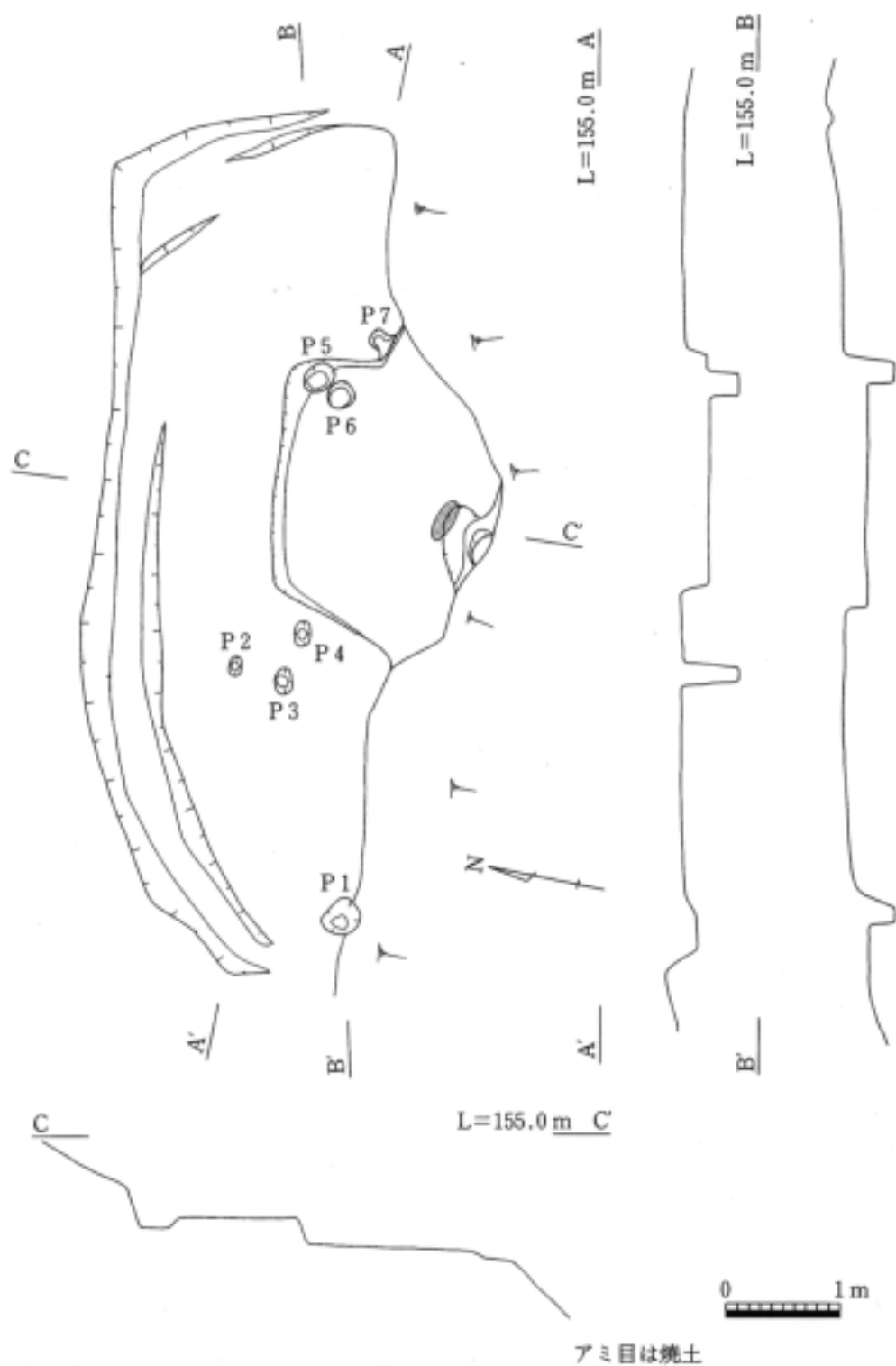
第31図 B・C地点遺跡第19号・第20号住居跡実測図



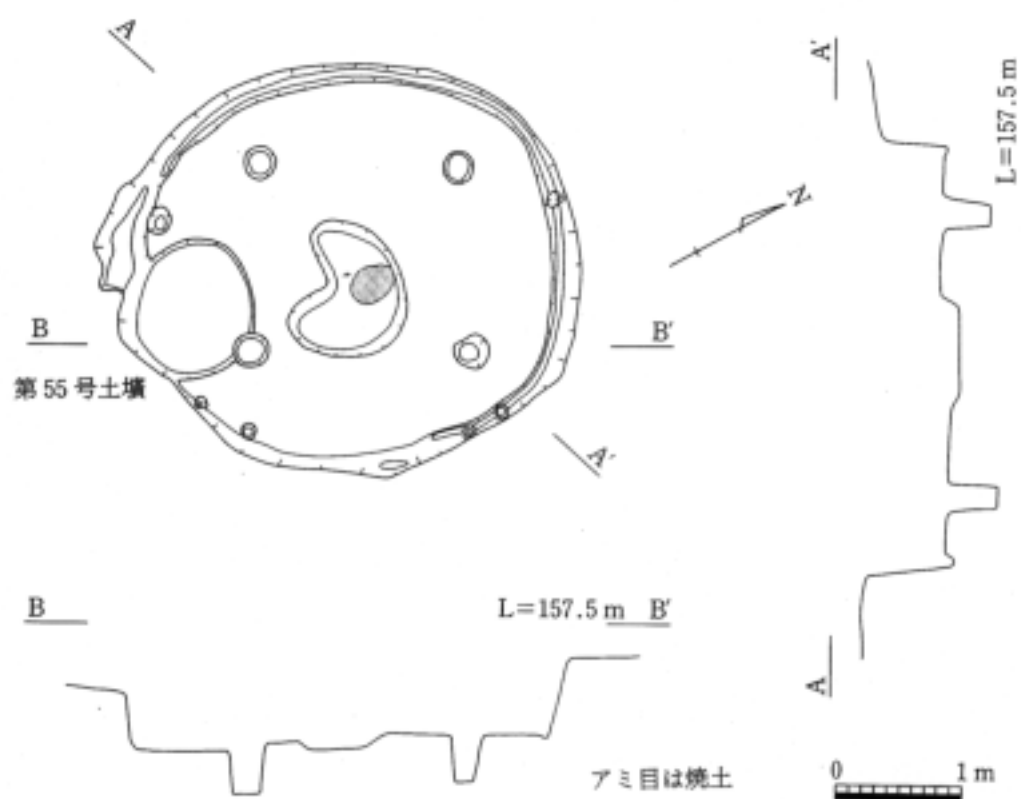
第32图 B·C地点遺跡第17号·第18号住居跡実測図



第33图 B·C地点遺跡第21号住居跡実測図



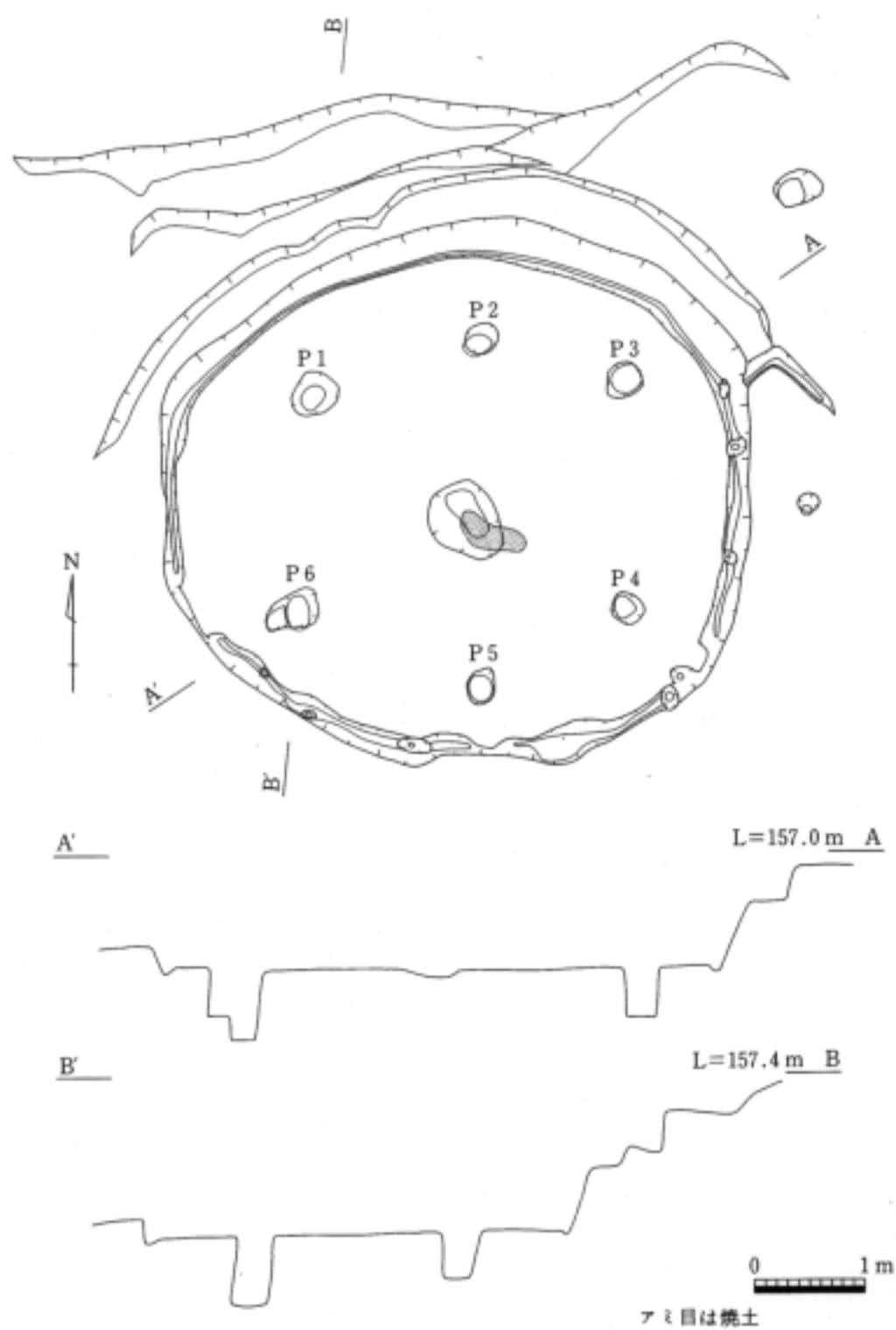
第34図 B・C地点遺跡第22号住居跡実測図



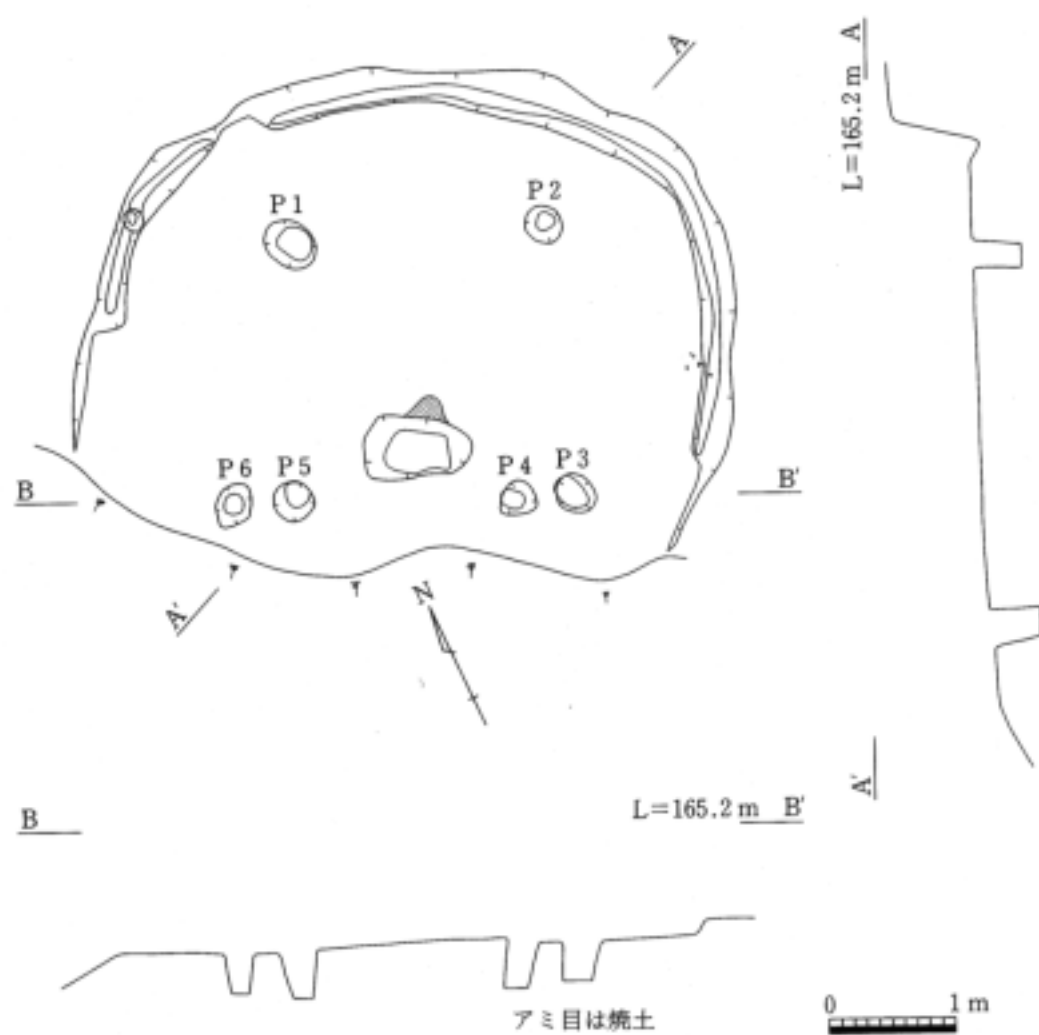
第35図 B・C地点遺跡第23号住居跡実測図



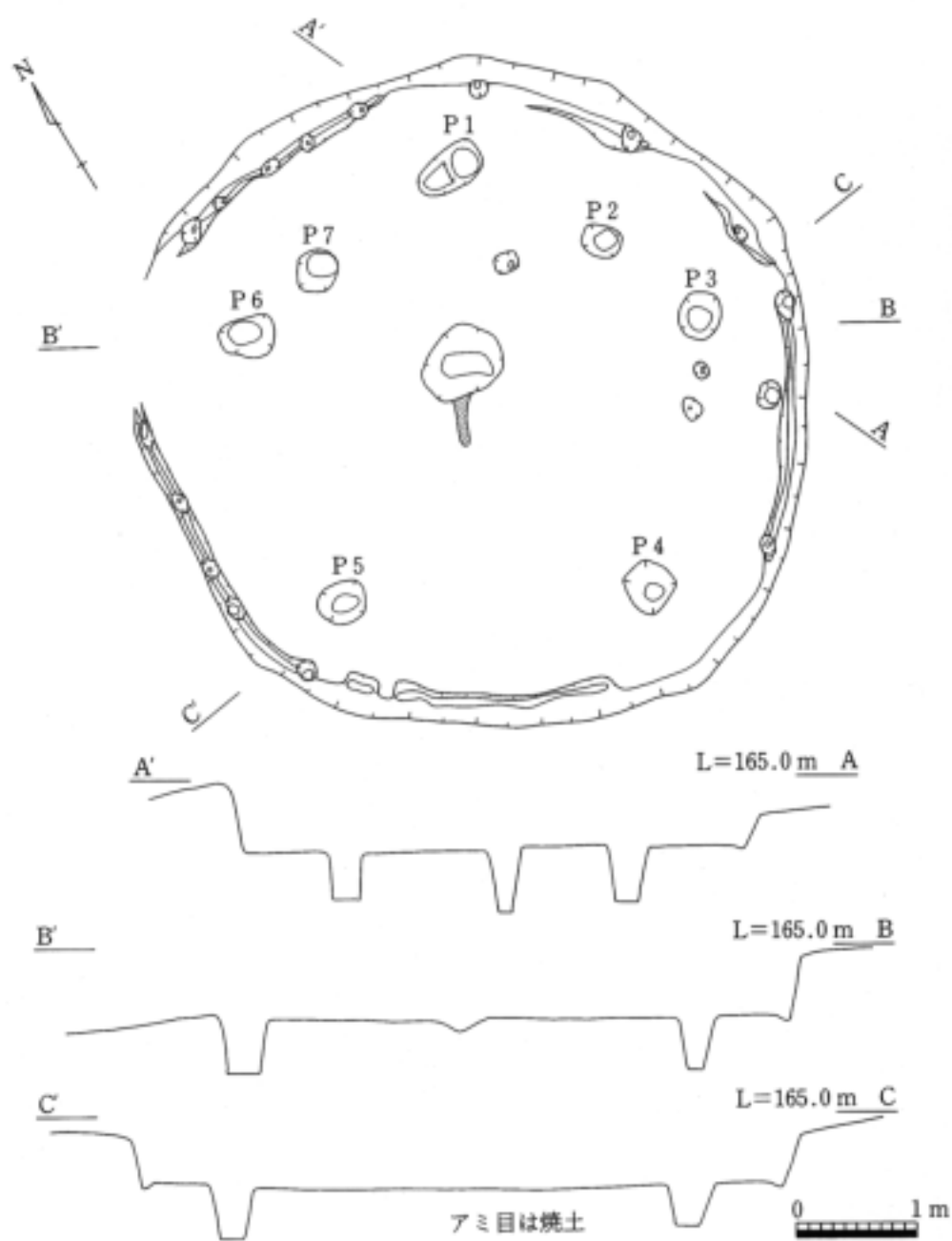
第36図 B・C地点遺跡第24号住居跡実測図



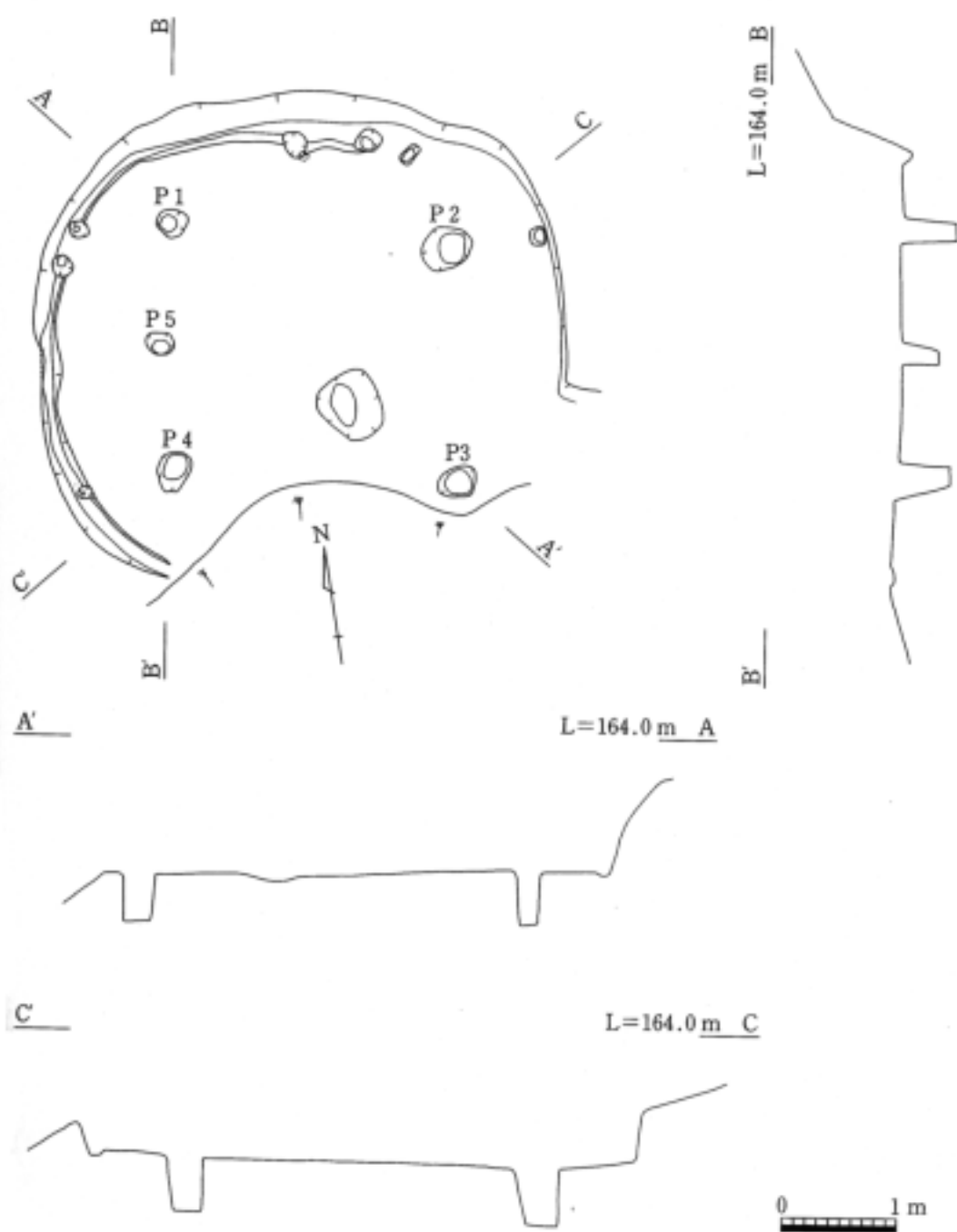
第37図 B・C地点遺跡第25号住居跡実測図



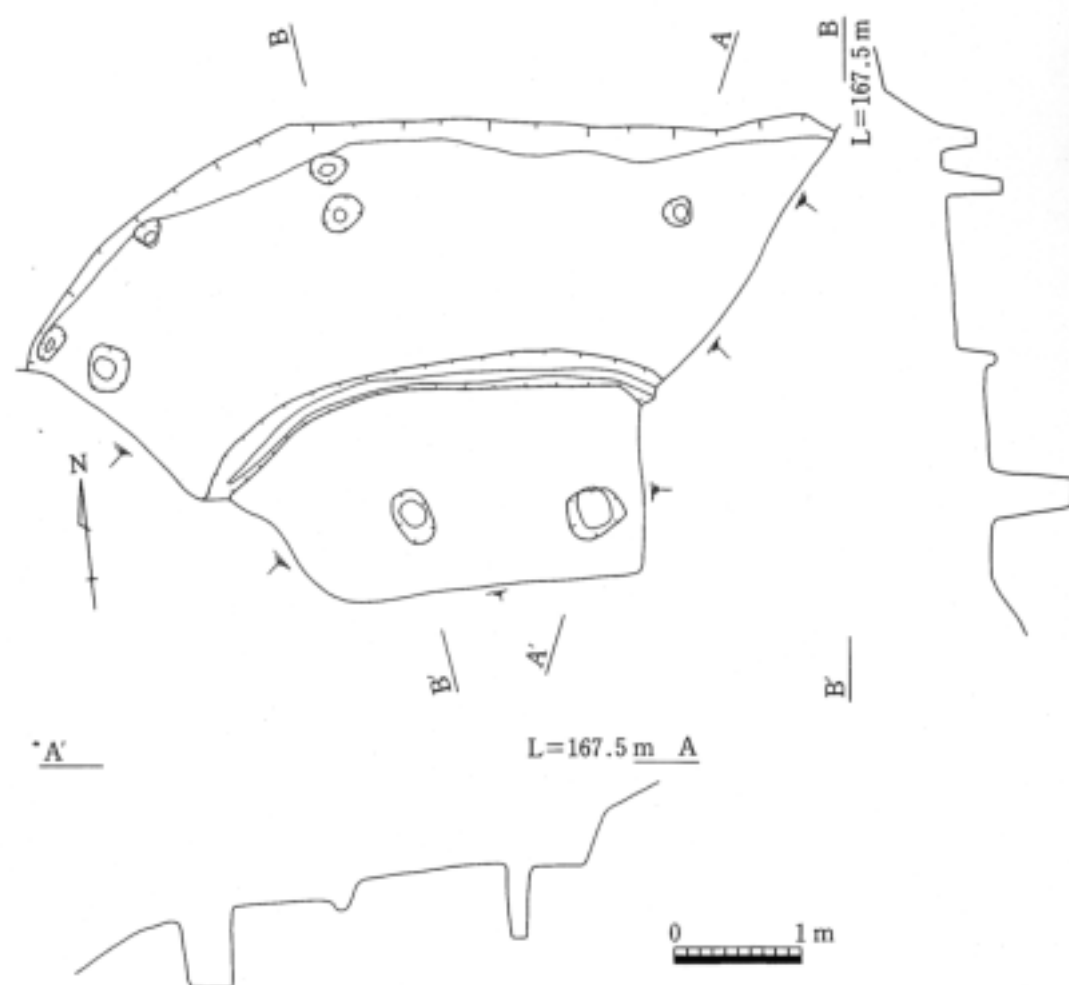
第38図 B・C地点遺跡第26号住居跡実測図



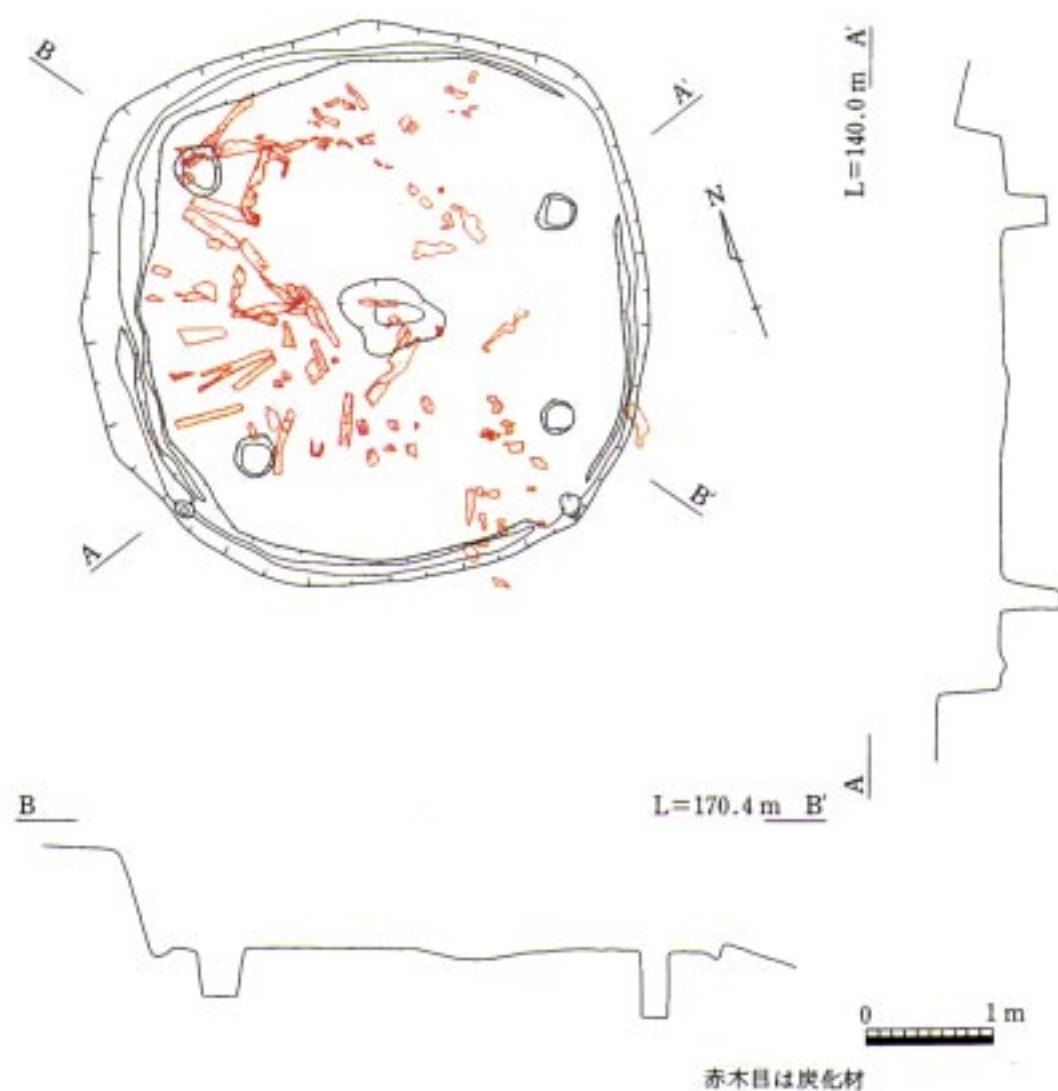
第39図 B・C地点遺跡第27号住居跡実測図



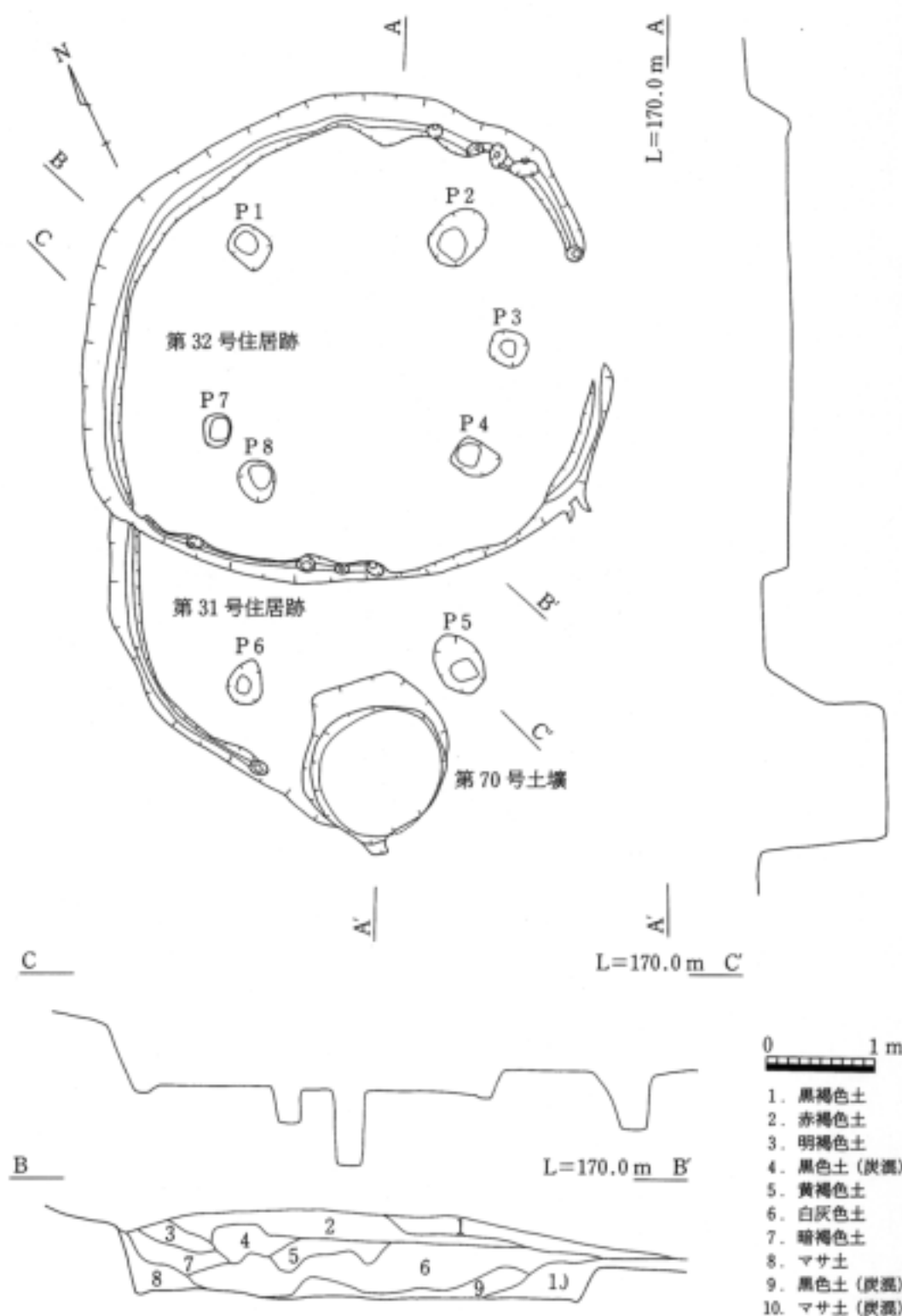
第40图 B·C地点遗址第28号住居跡実測図



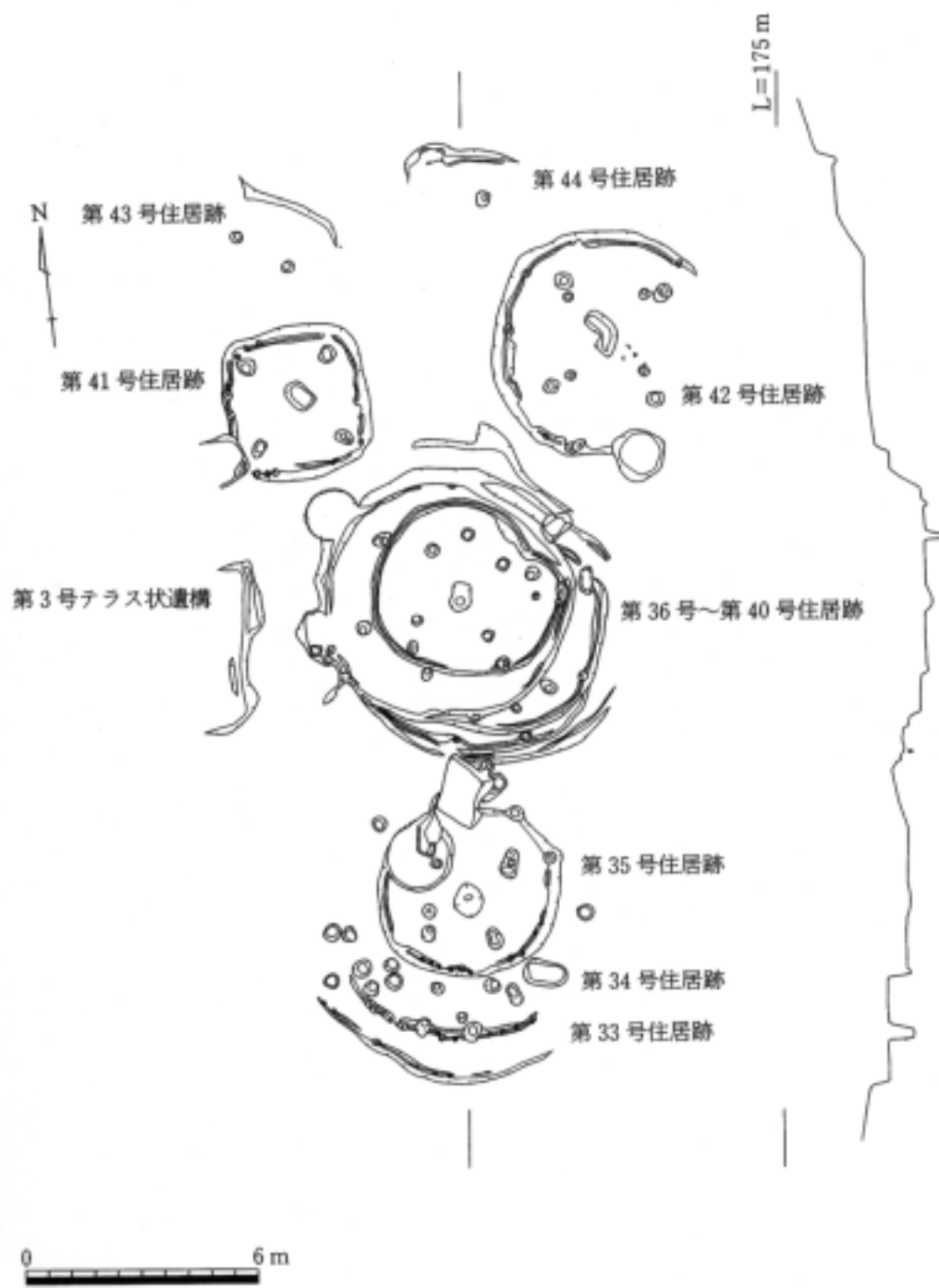
第41图 B·C地点遗址第29号住居跡实测图



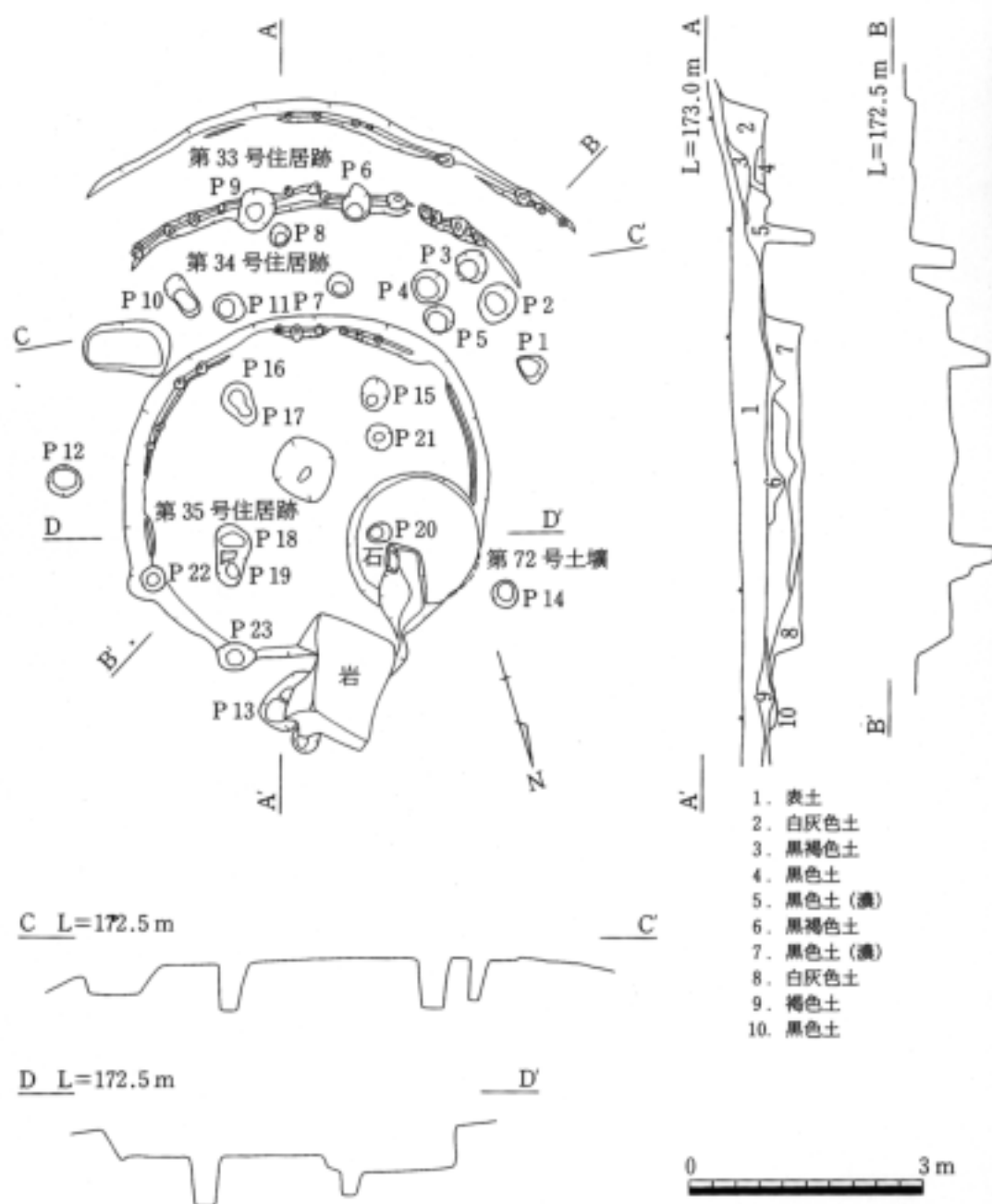
第42図 B・C地点遺跡第30号住居跡実測図



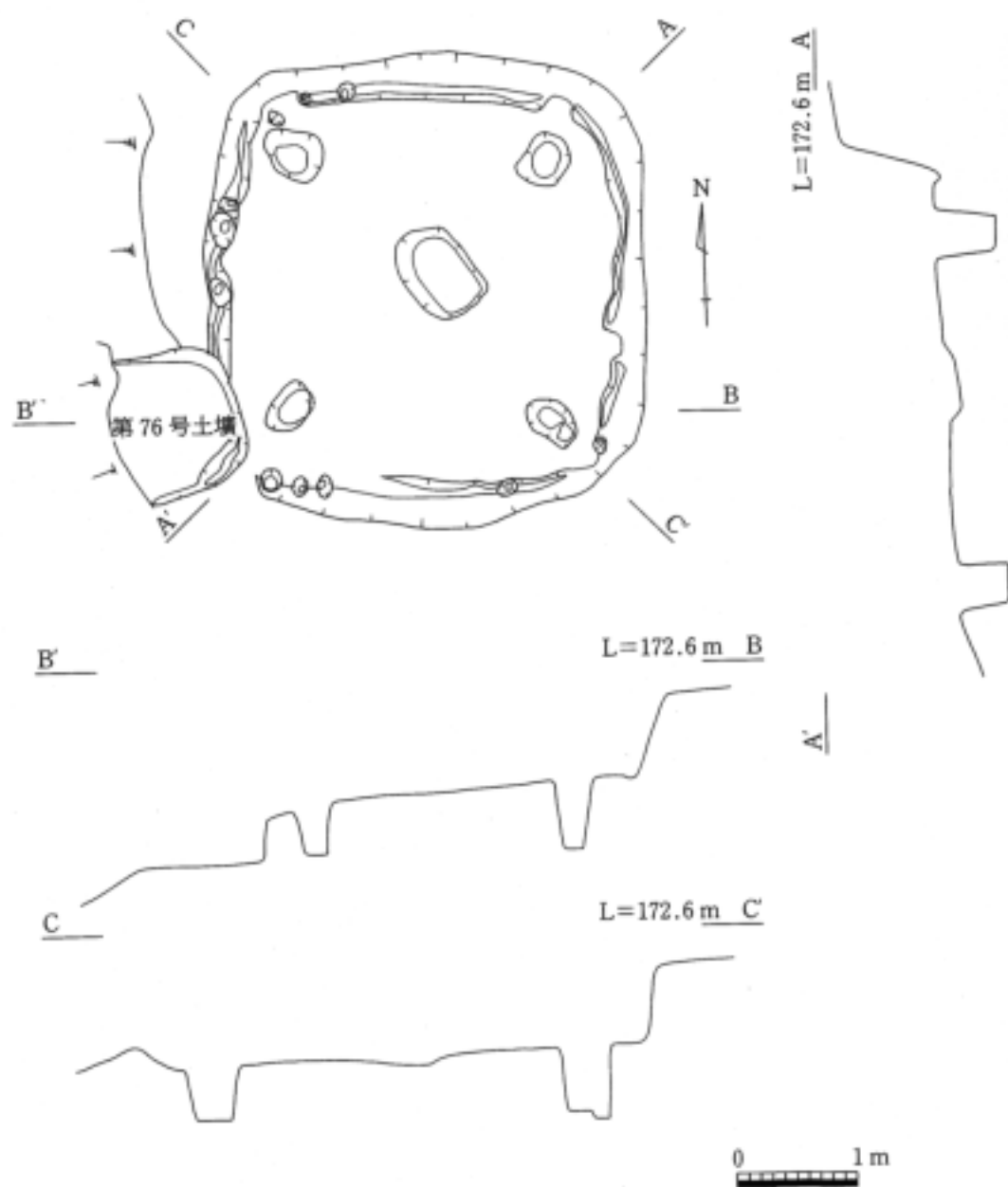
第43図 B・C地点遺跡第31号・第32号住居跡実測図



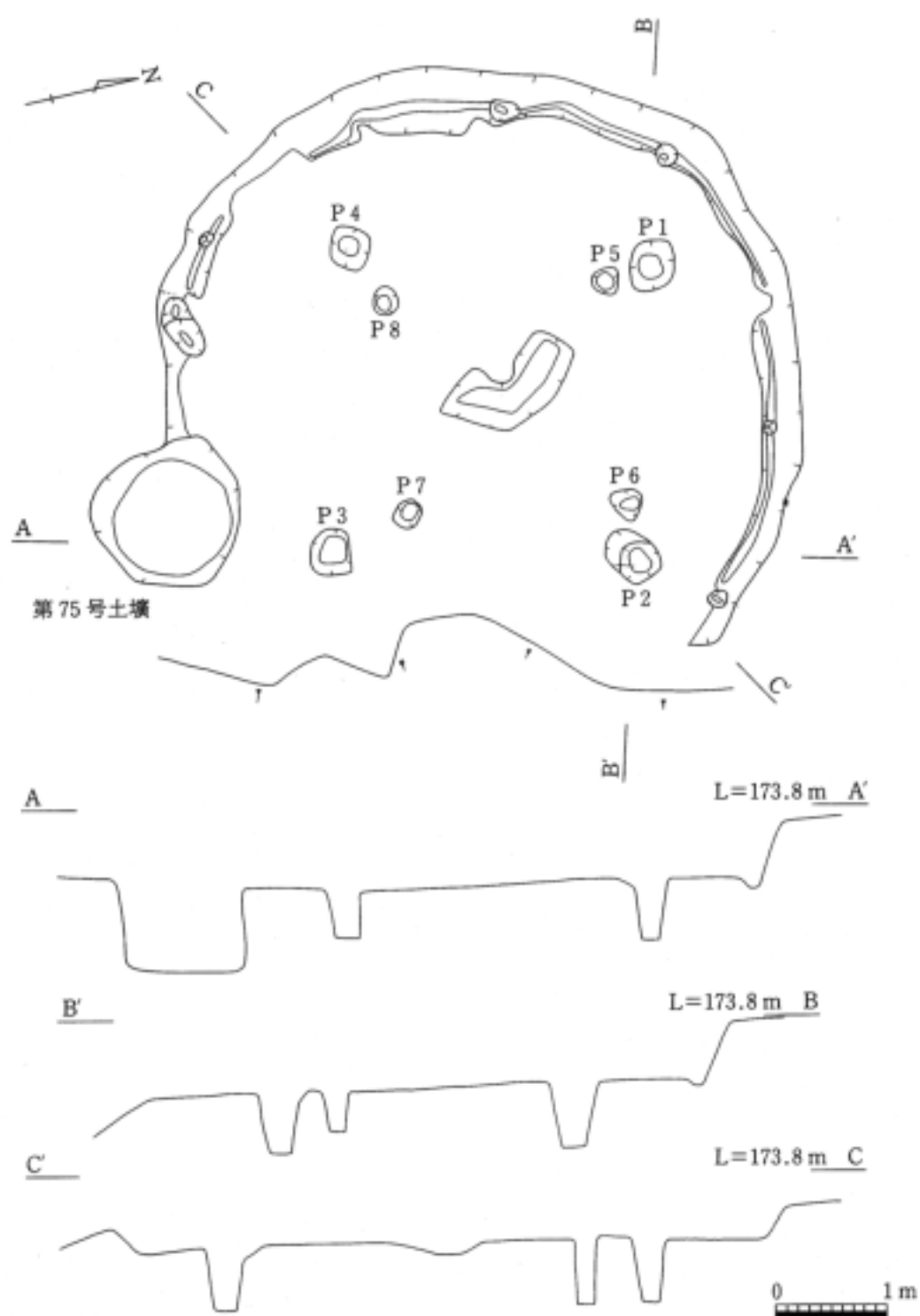
第44図 B・C地点遺跡第33号～第44号住居跡配置図



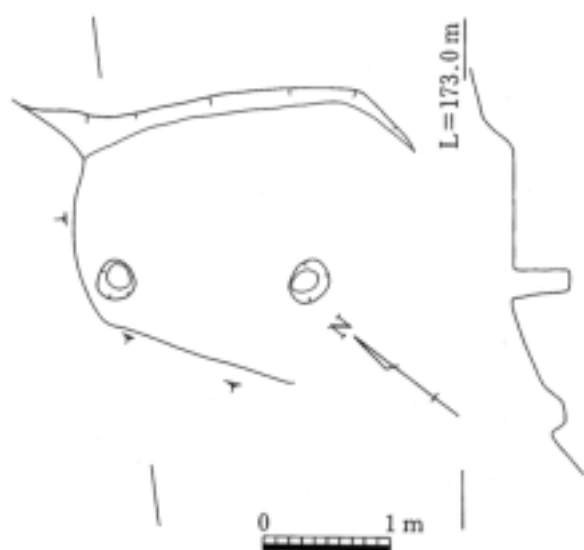
第45图 B·C地点遺跡第33号·第34号·第35号住居跡実測図



第47图 B·C地点遺跡第41号住居跡実測図



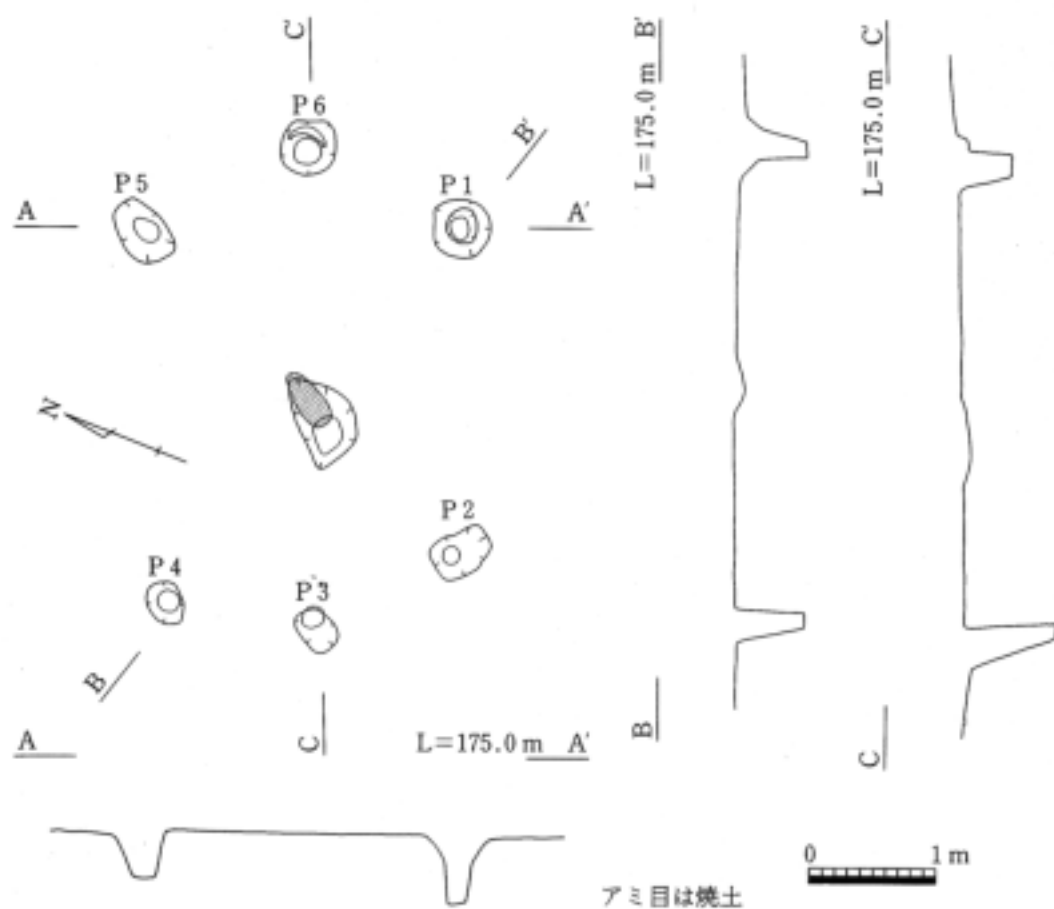
第48图 B·C地点遗址第42号住居跡实测图



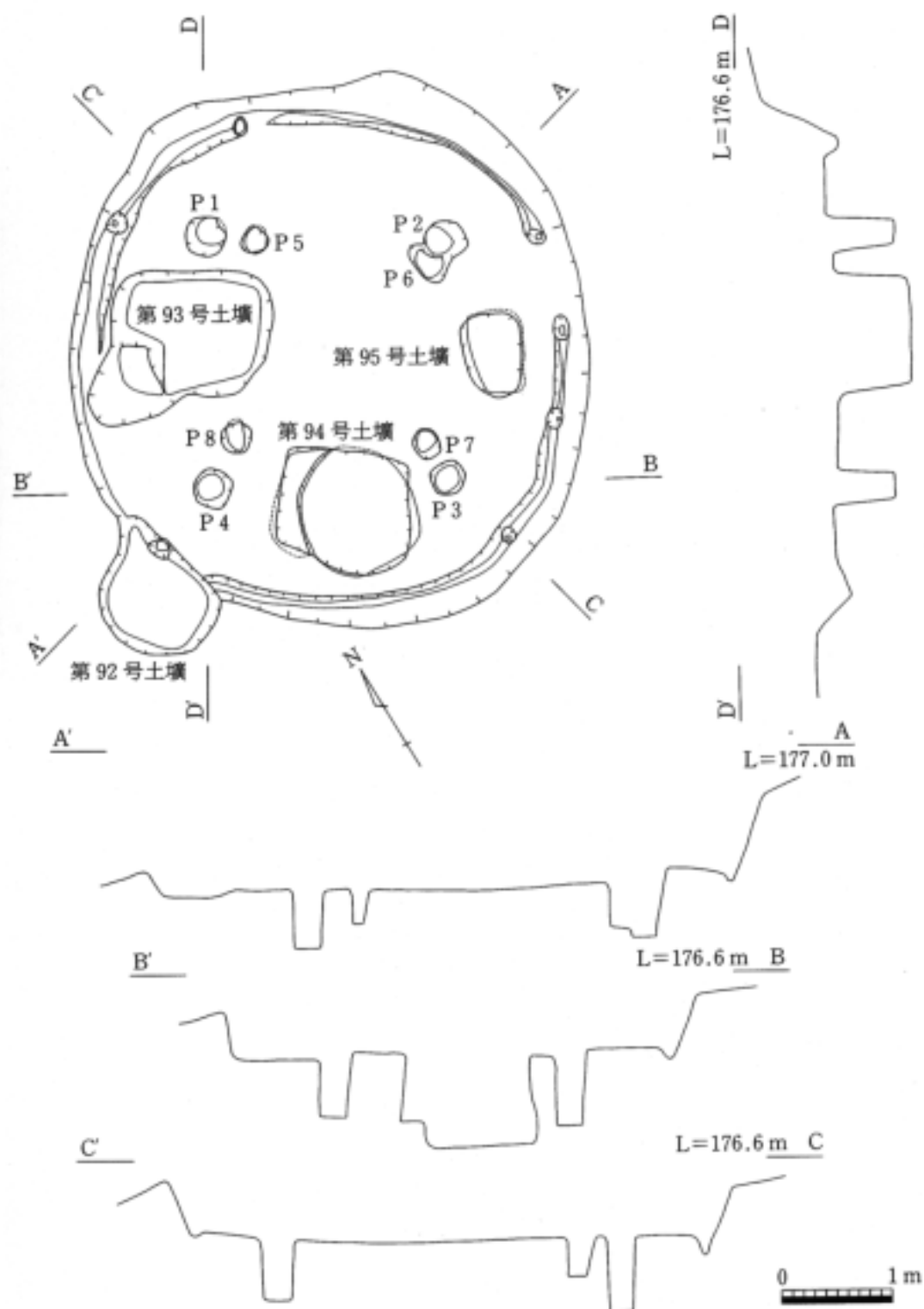
第49図 B・C地点遺跡第43号住居跡実測図



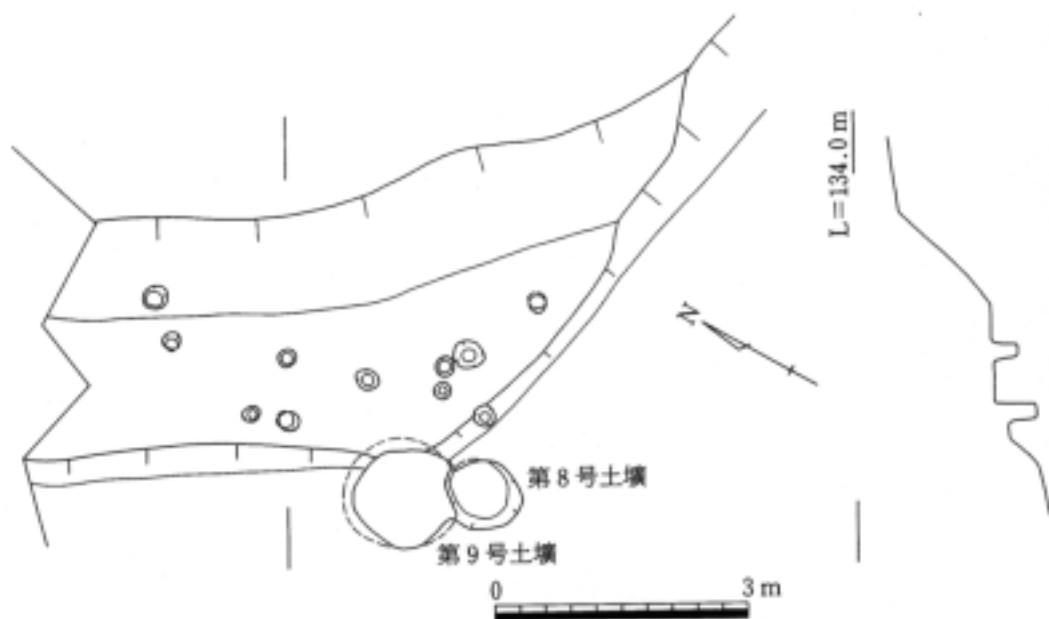
第50図 B・C地点遺跡第44号住居跡実測図



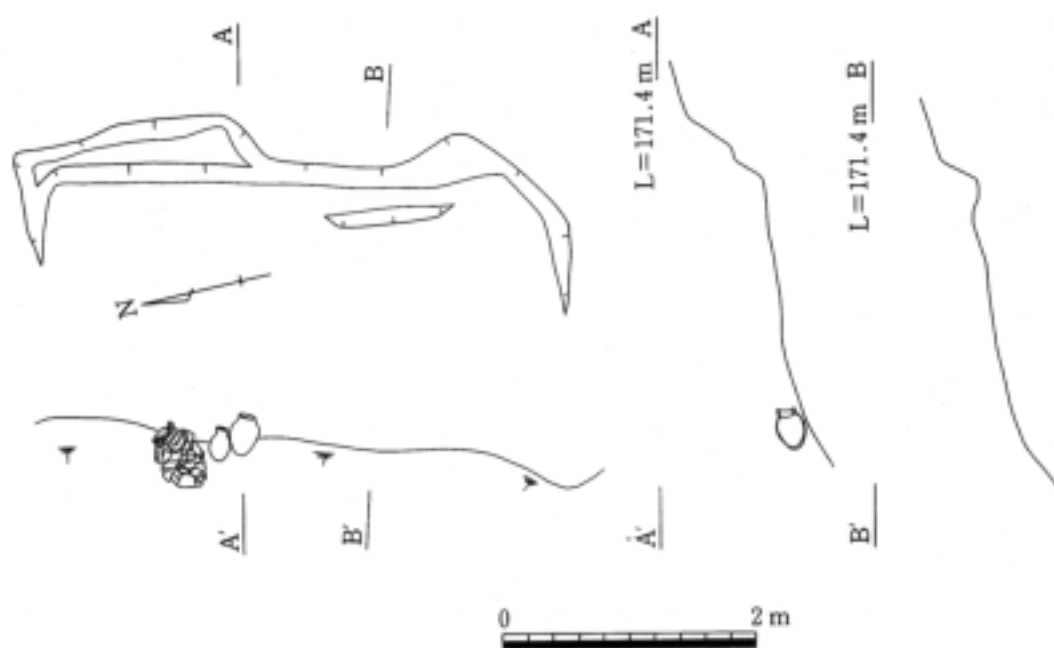
第51図 B・C地点遺跡第45号住居跡実測図



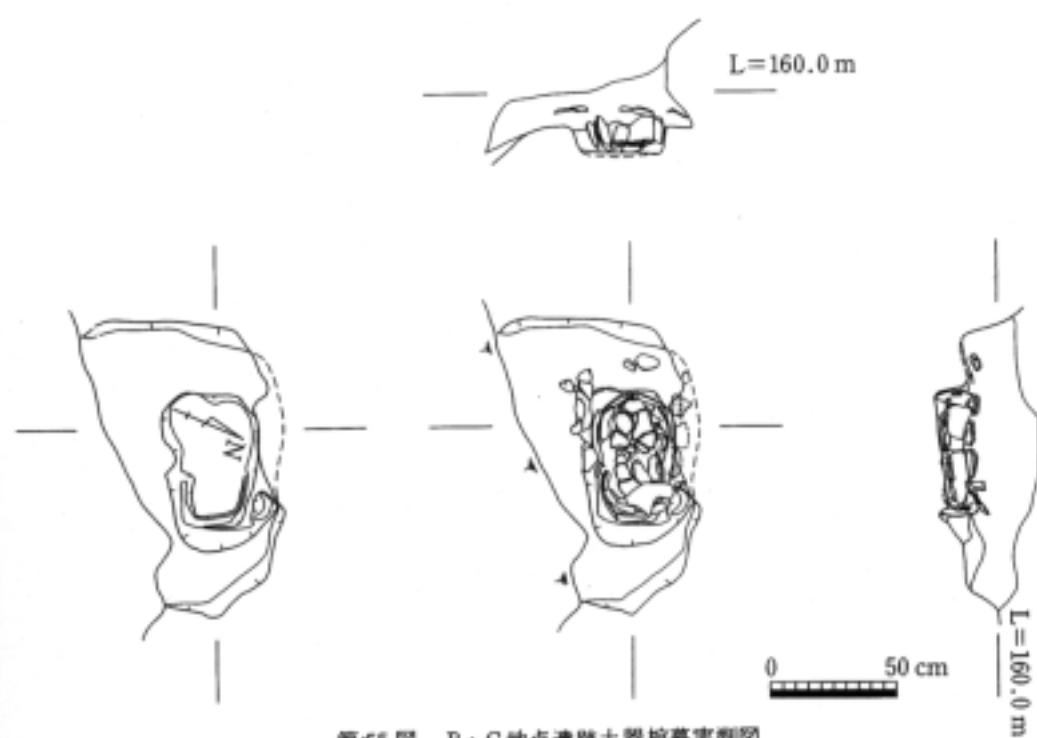
第 52 图 B·C 地点遺跡第 46 号住居跡実測図



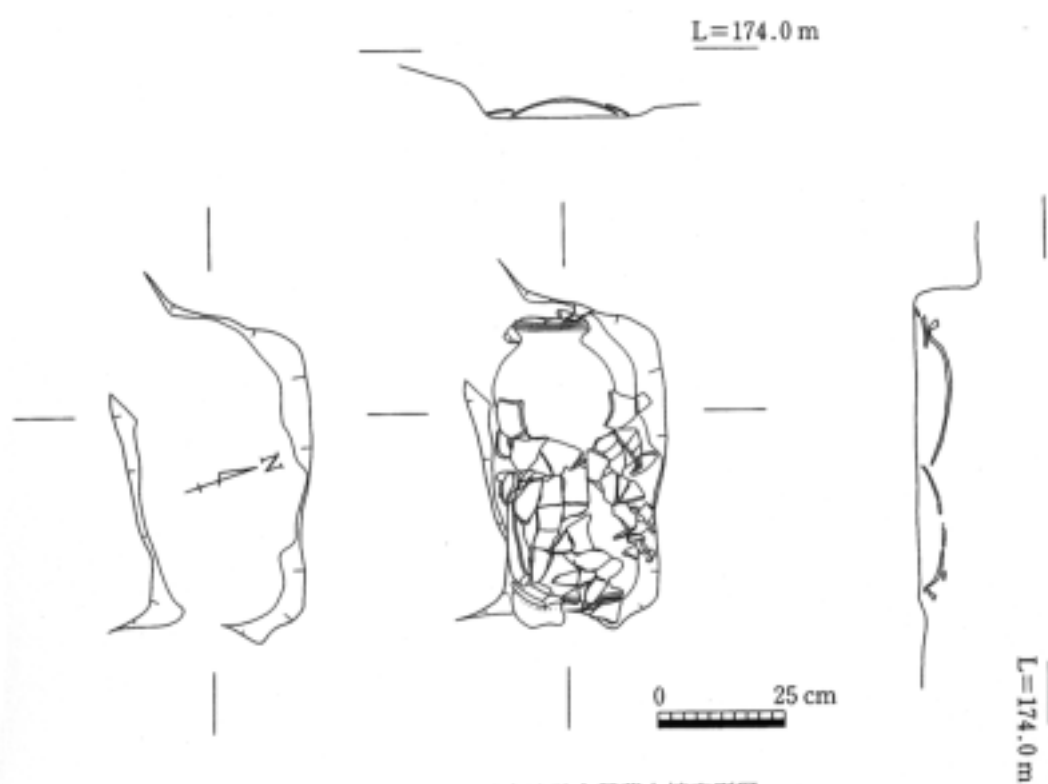
第53図 B・C地点遺跡第1号テラス状遺構実測図



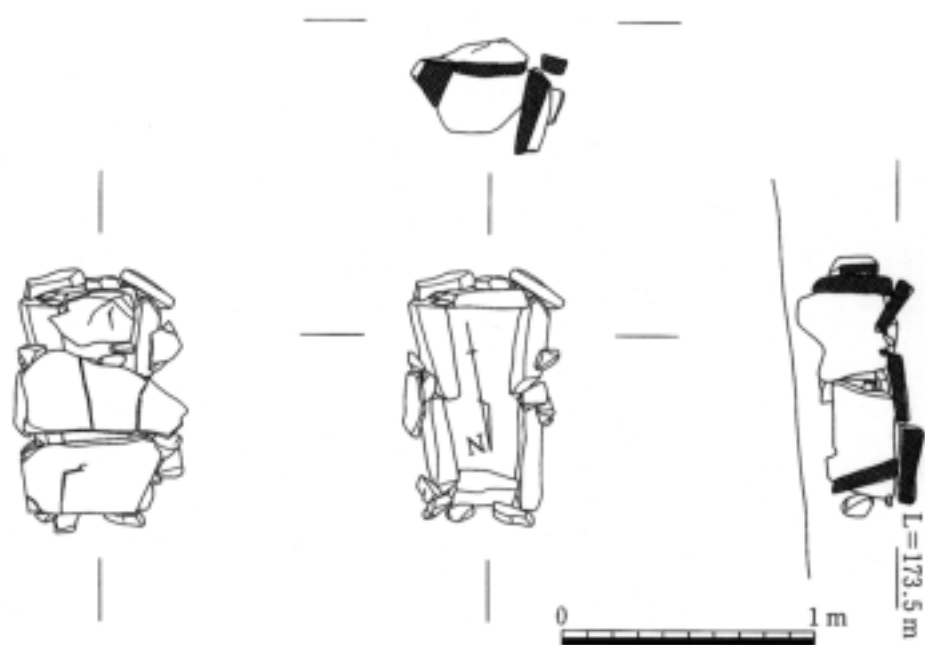
第54図 B・C地点遺跡第3号テラス状遺構実測図



第55图 B·C地点遗址土器棺墓实例图



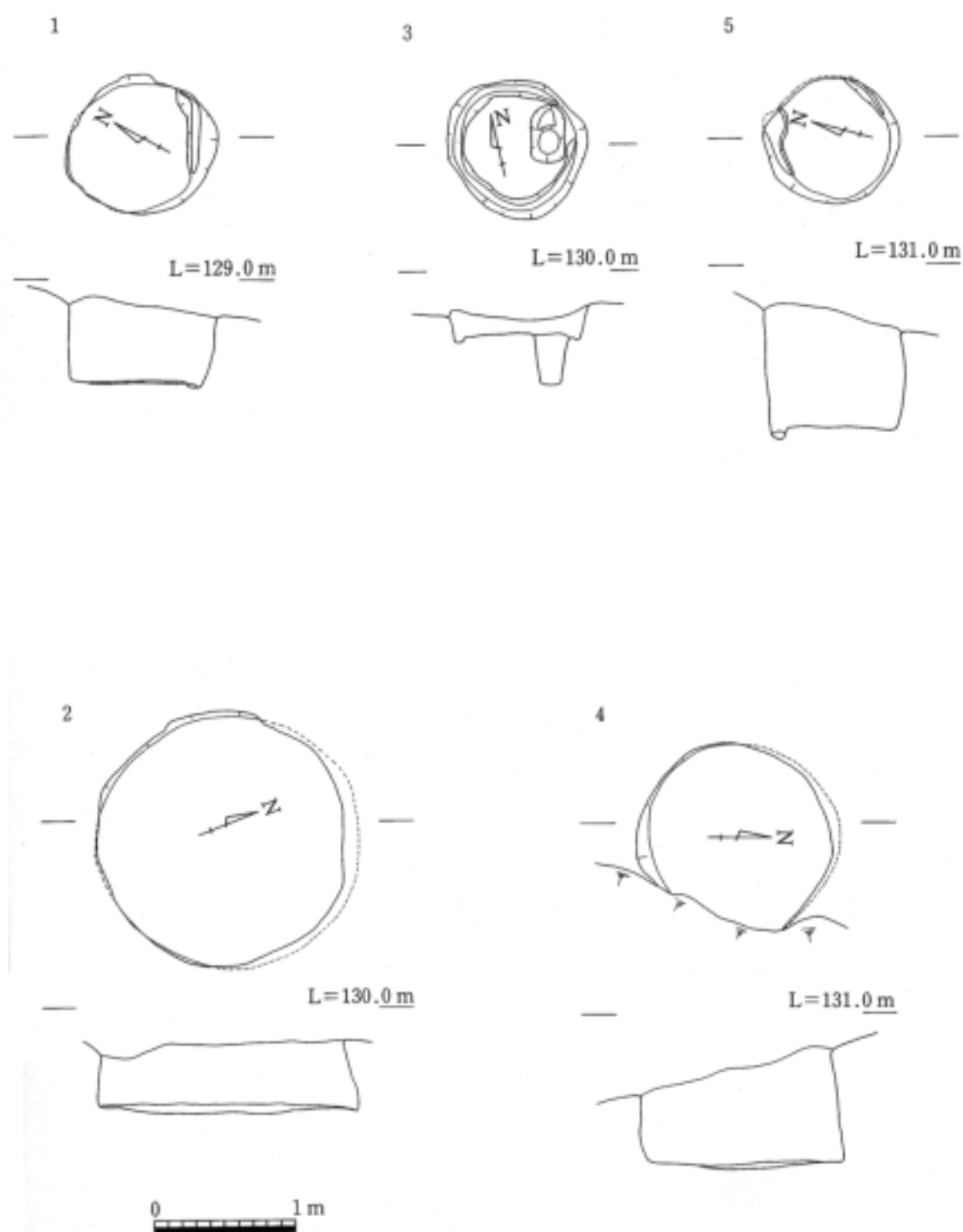
第56图 B·C地点遗址土器墓土坑实例图



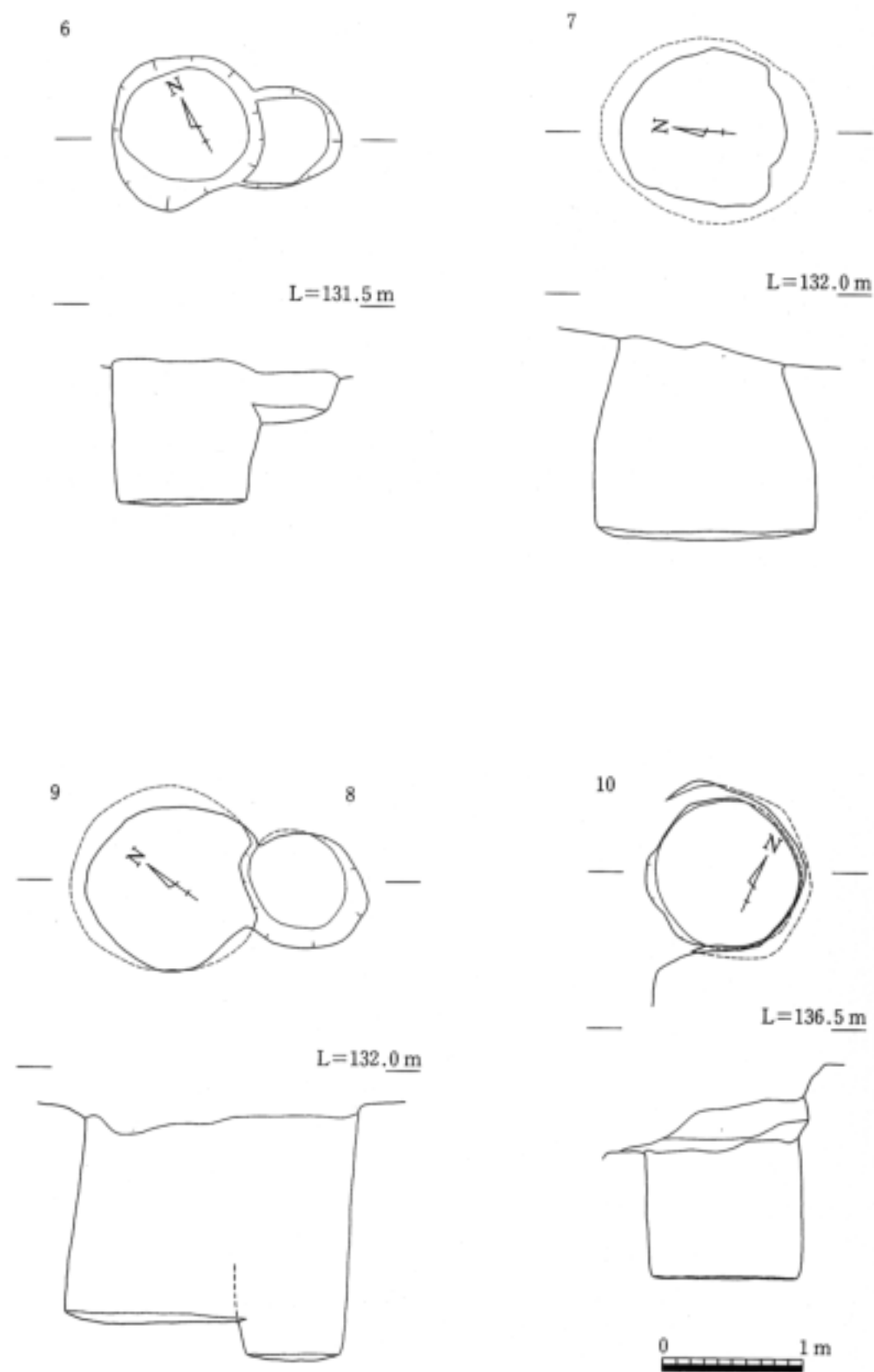
第57图 B·C地点遺跡第1号石棺実測図



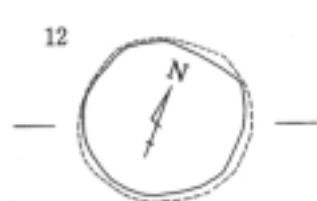
第58图 B·C地点遺跡第2号石棺実測図



第 59 图 B·C 地点遗址土壤实测图 (1)



第 60 图 B·C 地点遗址土壤夹侧图 (2)



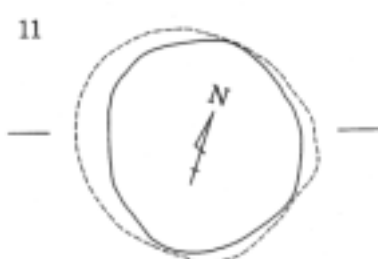
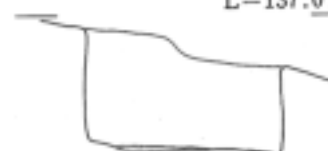
$L=136.0\text{ m}$



$L=136.0\text{ m}$



$L=137.0\text{ m}$



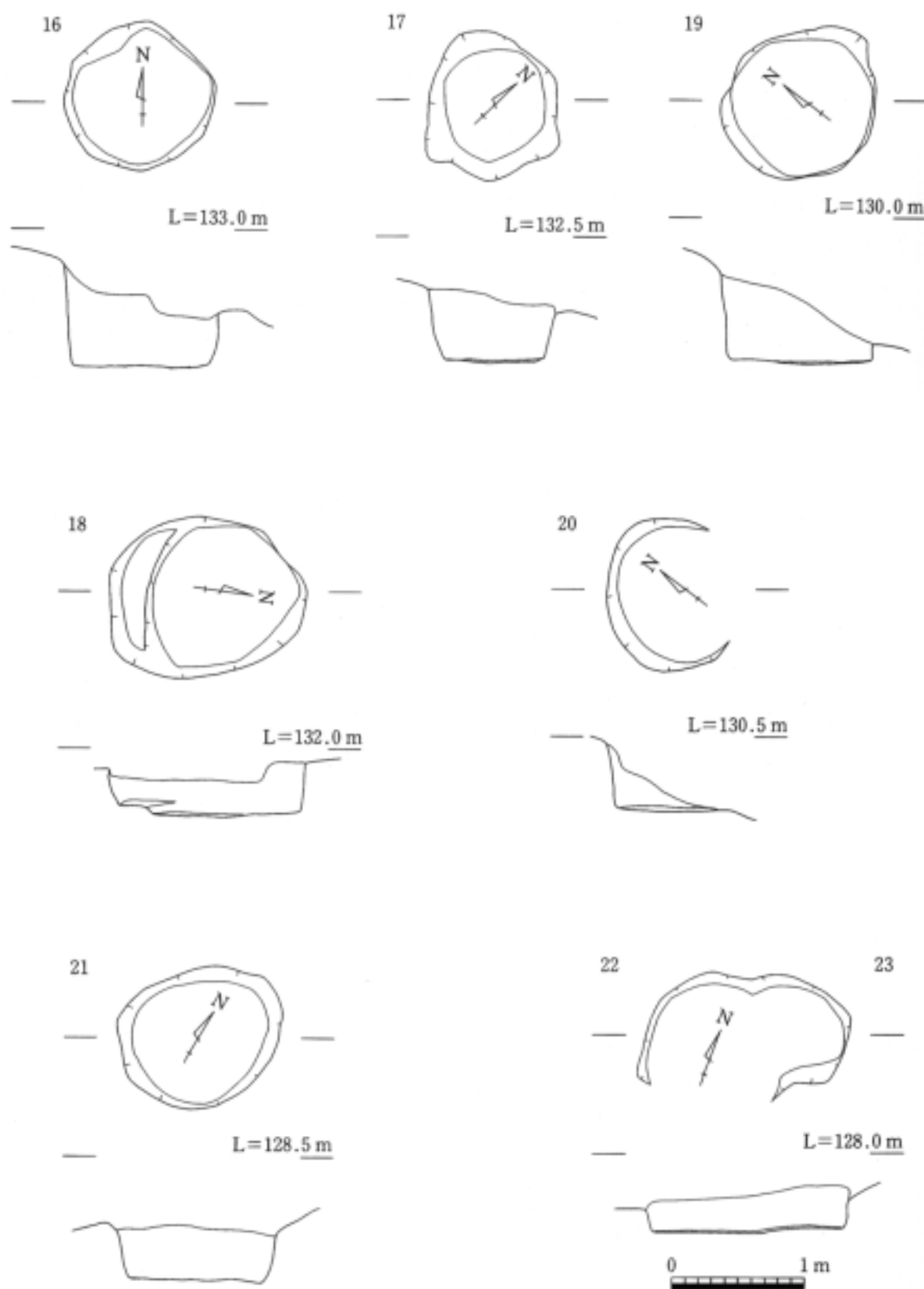
$L=136.0\text{ m}$



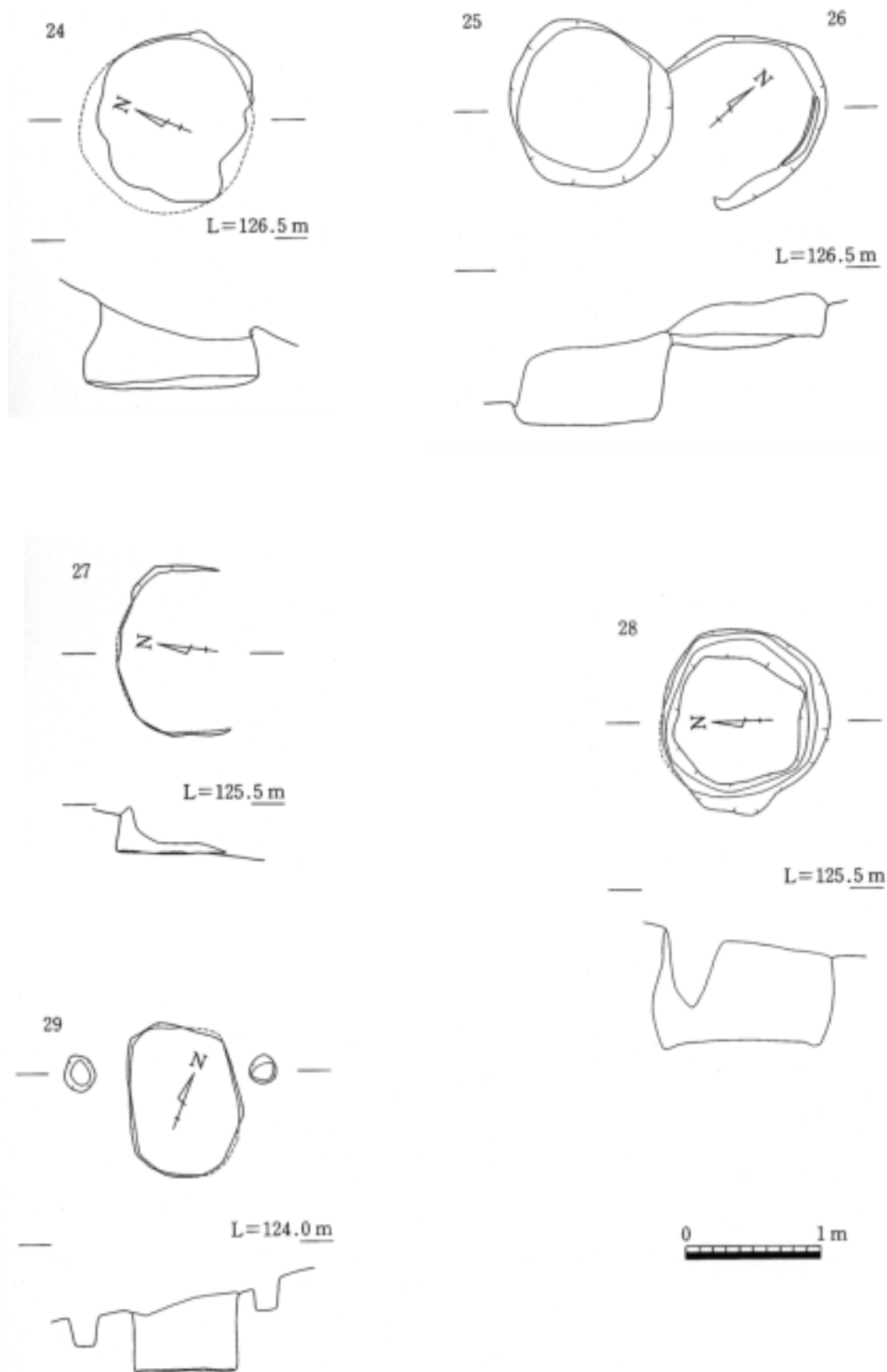
$L=137.5\text{ m}$



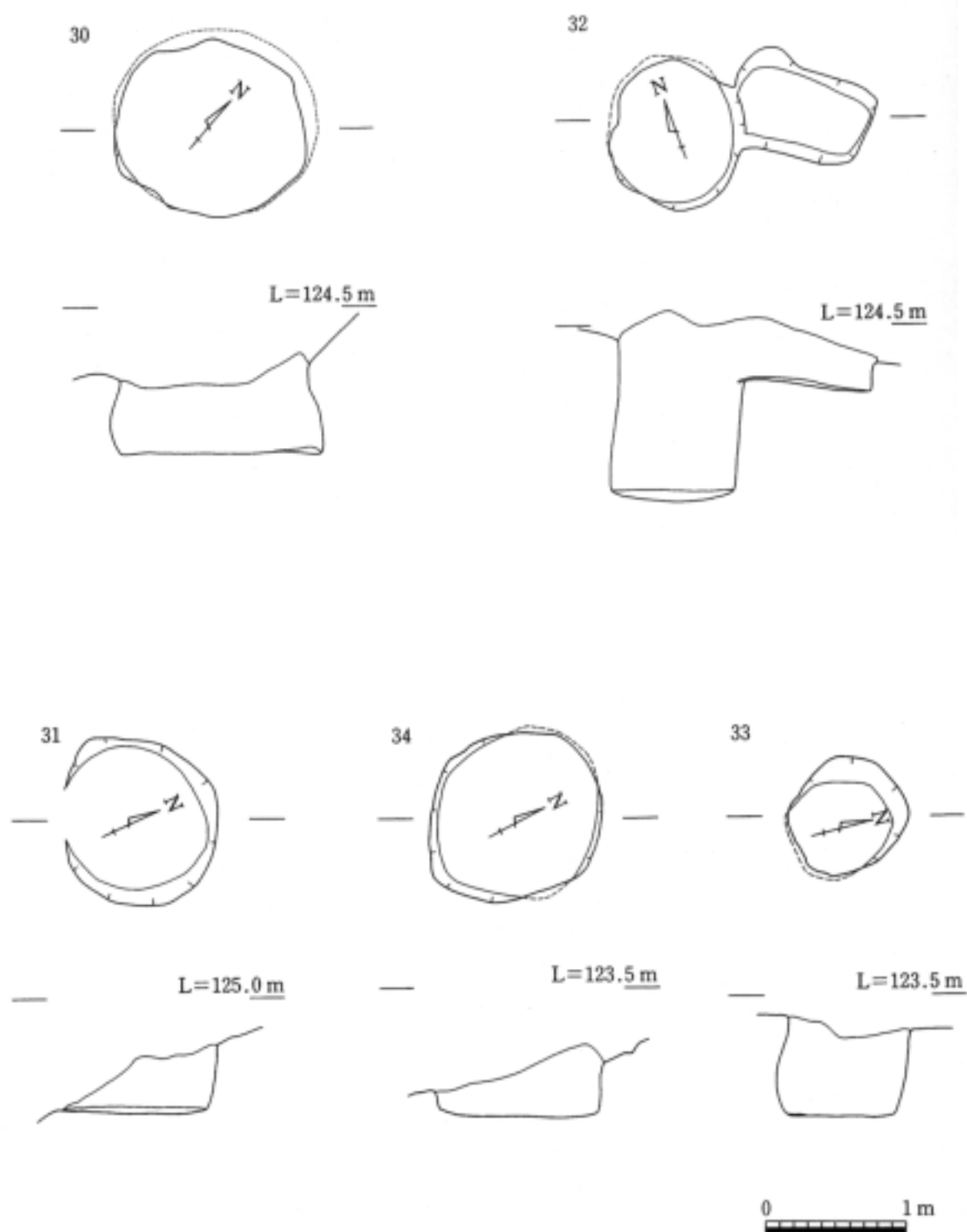
第 61 図 B・C 地点遺跡土坑実測図 (3)



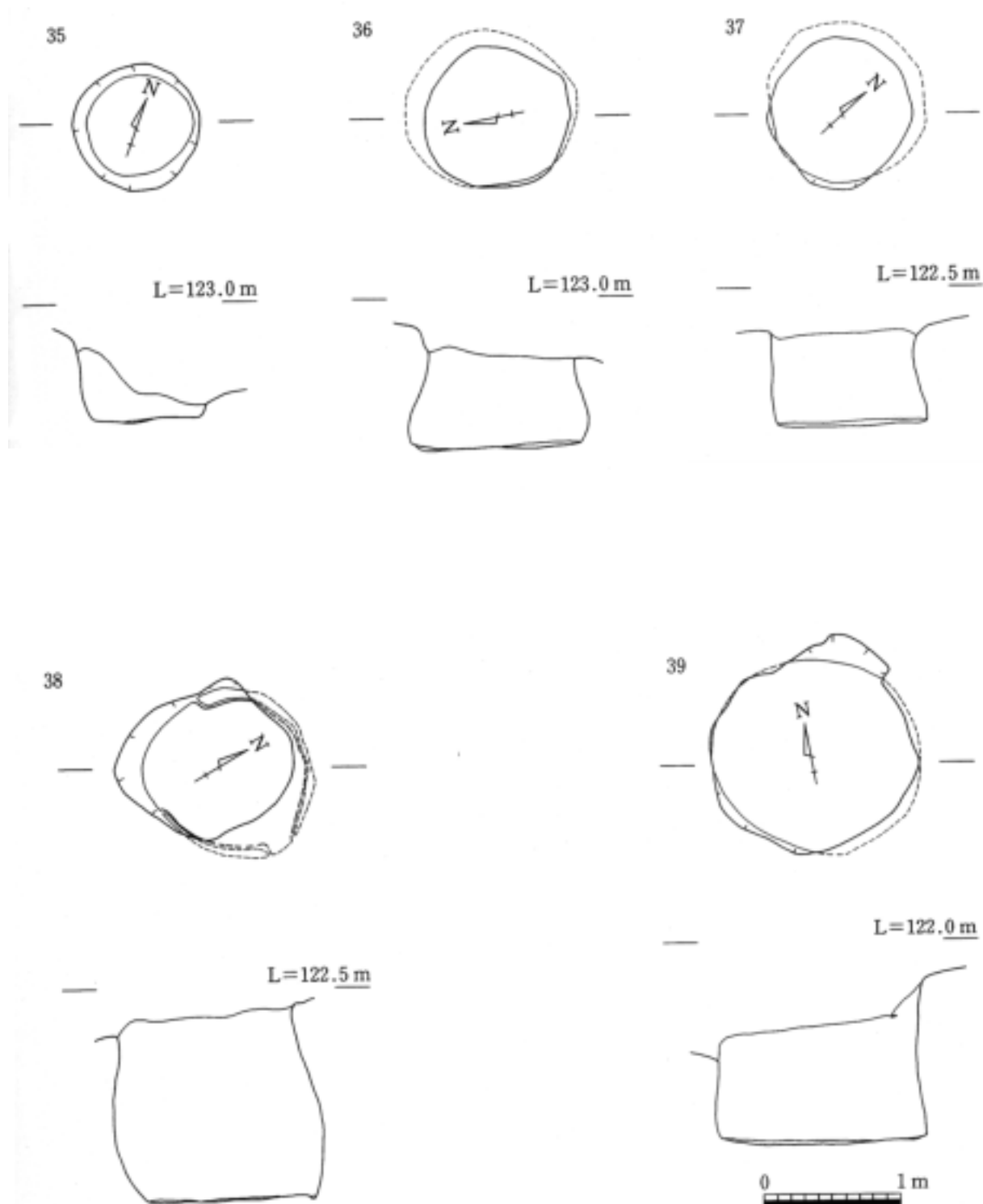
第 62 图 B·C 地点遗址土坑夹测图 (4)



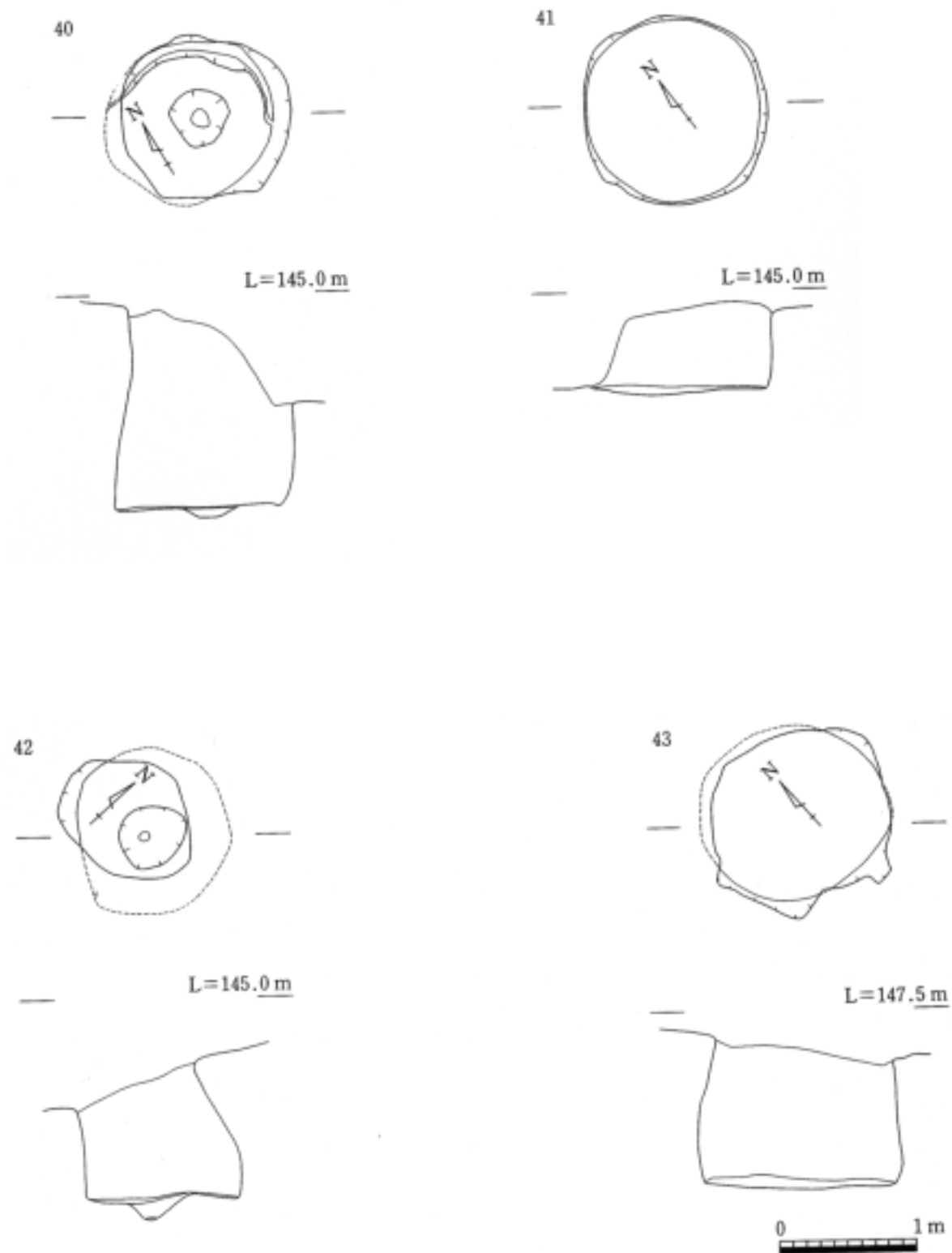
第63图 B·C地点遗址土壤夹制图 (5)



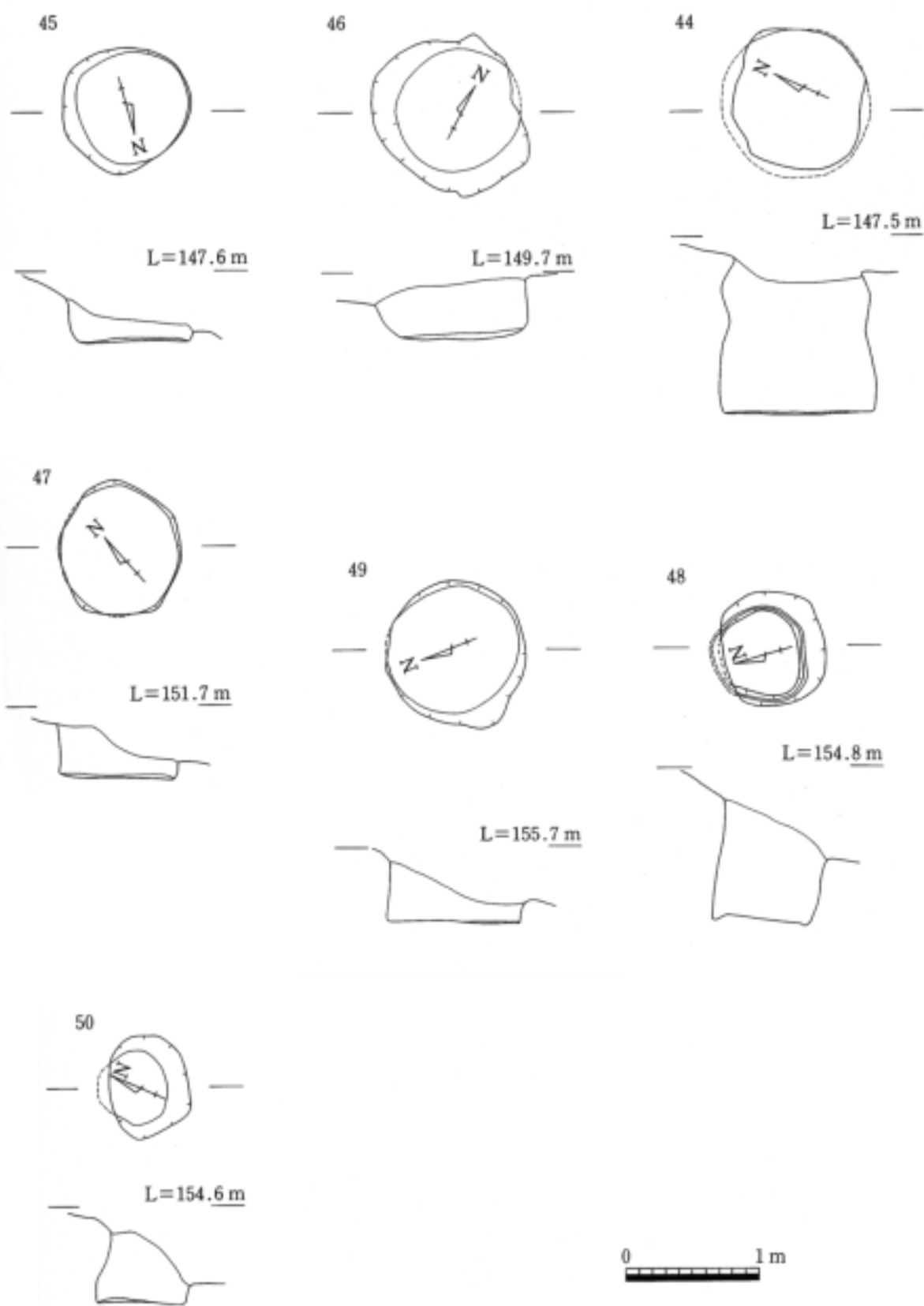
第 64 图 B·C 地点遗址土壤夹测图 (6)



第65图 B·C地点遗址土坑平面图(7)

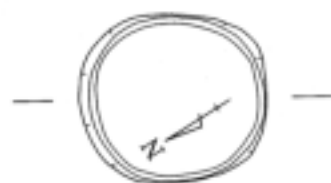


第66图 B·C地点遺跡土坑実測図(8)



第 67 图 B·C 地点遗址土壤夹测图 (9)

51



L=156.7 m



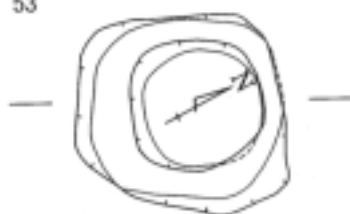
52



L=156.9 m



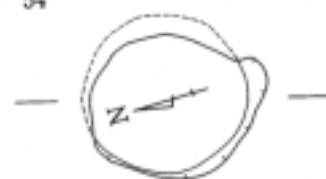
53



L=157.1 m



54



L=158.1 m



56



L=158.0 m



0 1 m

第68图 B·C地点遺跡土壤実測図 00

57



L=161.3 m



60



L=165.0 m



59



L=163.6 m



58



L=159.8 m



62



L=163.5 m



0 1 m

第69图 B·C地点遺跡土坑実測図 00

61



L=163.5 m



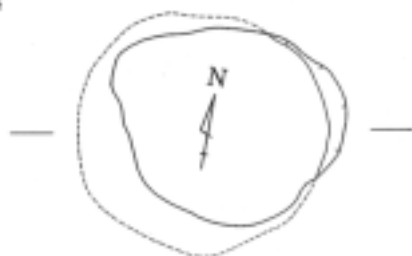
63



L=165.0 m



64



L=169.2 m



65



L=169.5 m



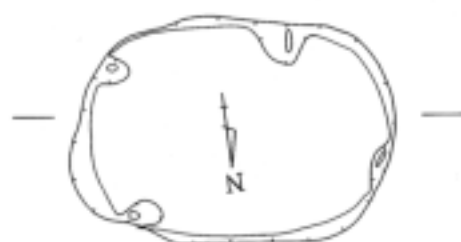
0 1 m

66



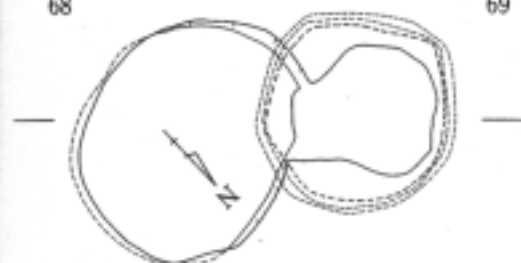
L=169.2 m

67



L=169.5 m

68



L=169.2 m

69



L=169.3 m

0 1 m

第71图 B·C地点遺跡土壤実測図 03

71



75



L=169.5 m



L=172.4 m



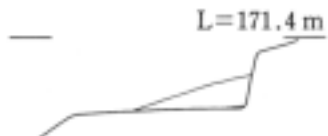
76



77



L=171.4 m



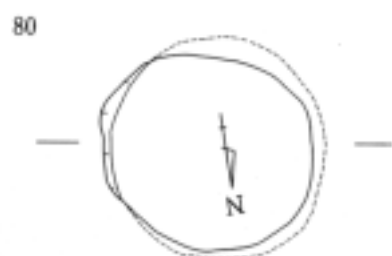
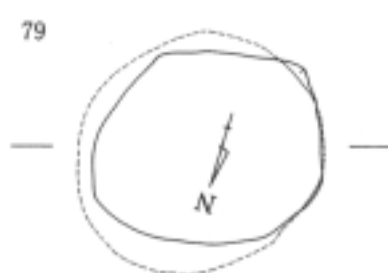
L=172.7 m



0 1 m



第72图 B·C地点遺跡土壤実測図 04



第73图 B·C地点遺跡土壤実測図 049

82



L=175.6 m



83



L=176.5 m



84



L=175.1 m



85

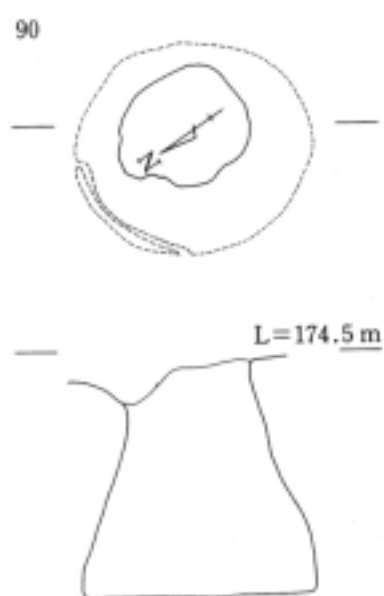
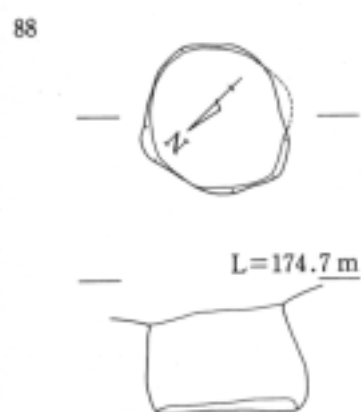
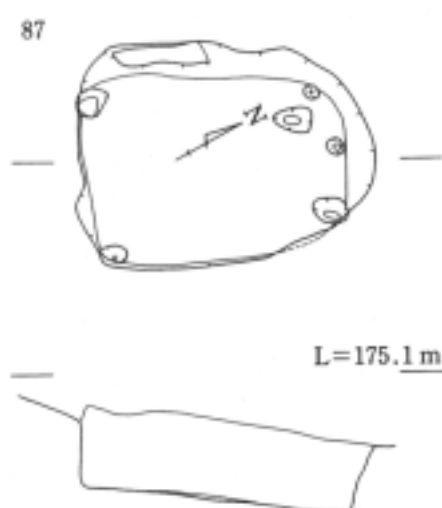


L=174.8 m



0 1 m

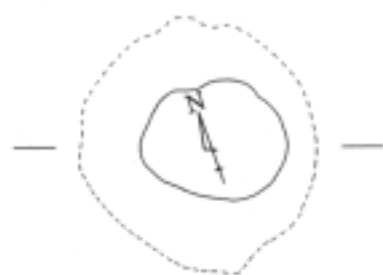
第74图 B·C地点遗址土壤实测图 09



0 1 m

第75图 B·C地点遺跡土坑実測図 07

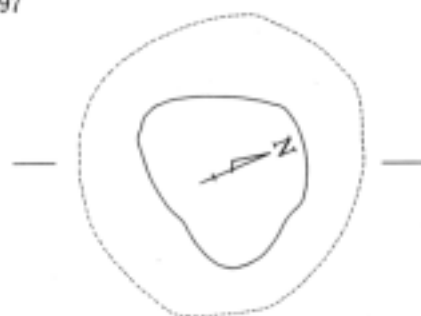
91



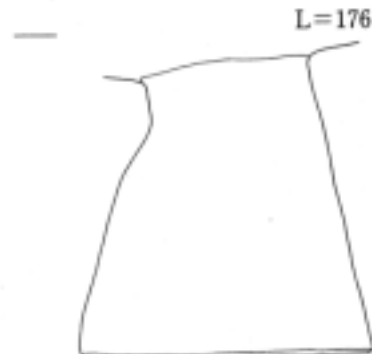
L=174.6 m



97



L=176.7 m



96



L=176.8 m



0 1 m

98

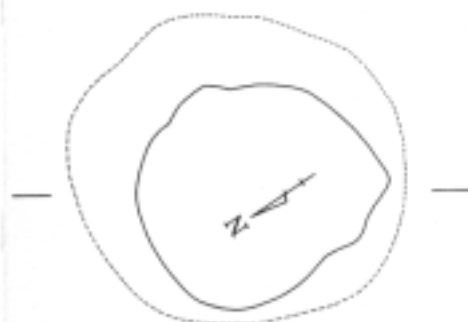


L=176.8 m



第76图 B·C地点遺跡土壤実測図 08

99

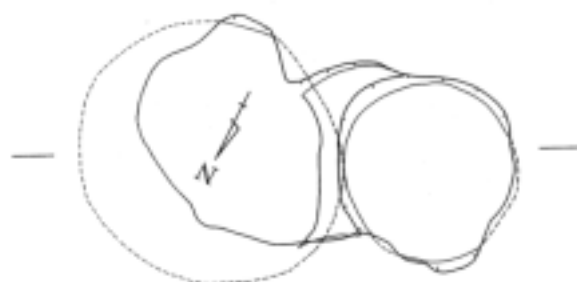


L=179.1 m



100

101

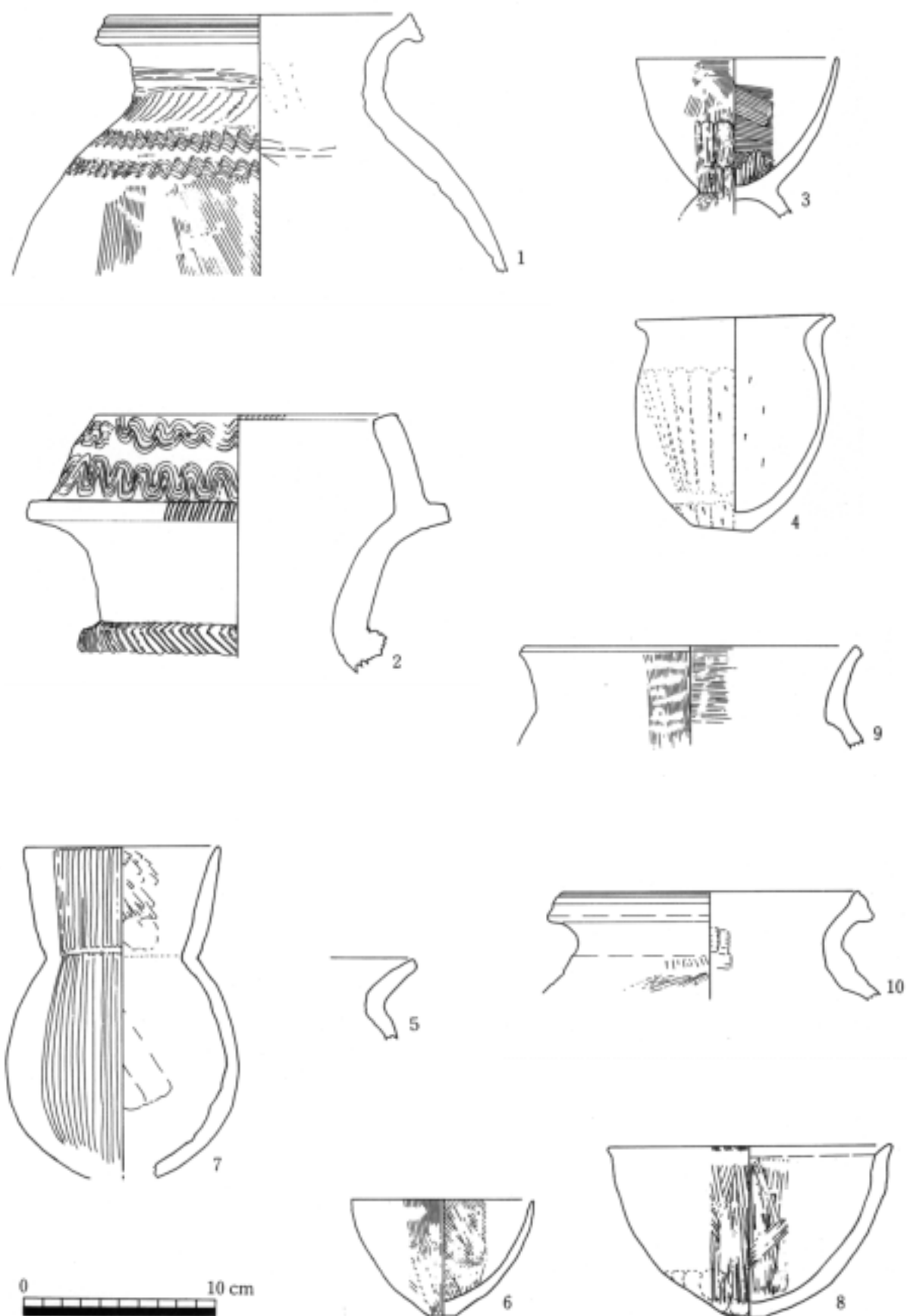


L=179.5 m

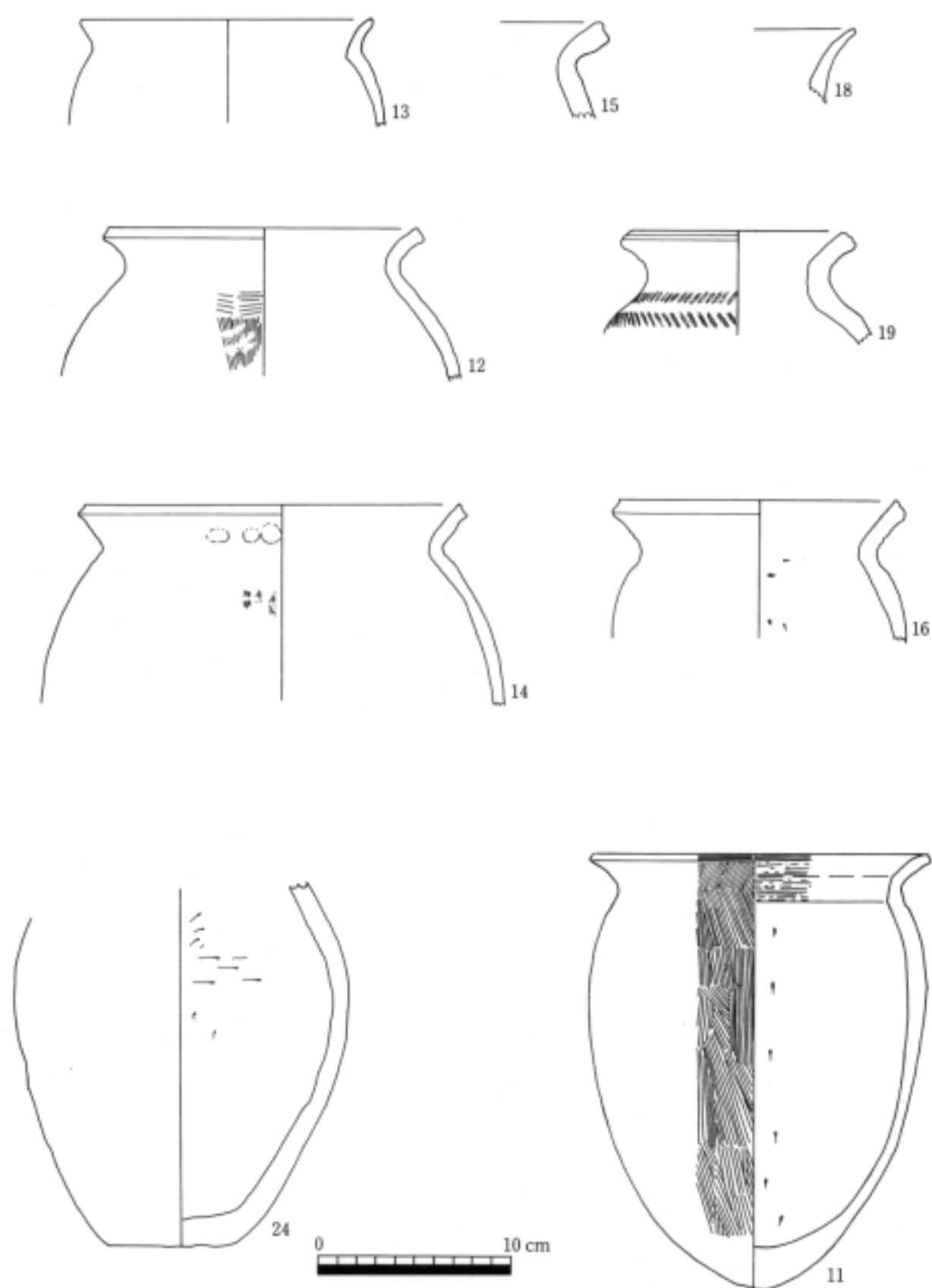


0 1 m

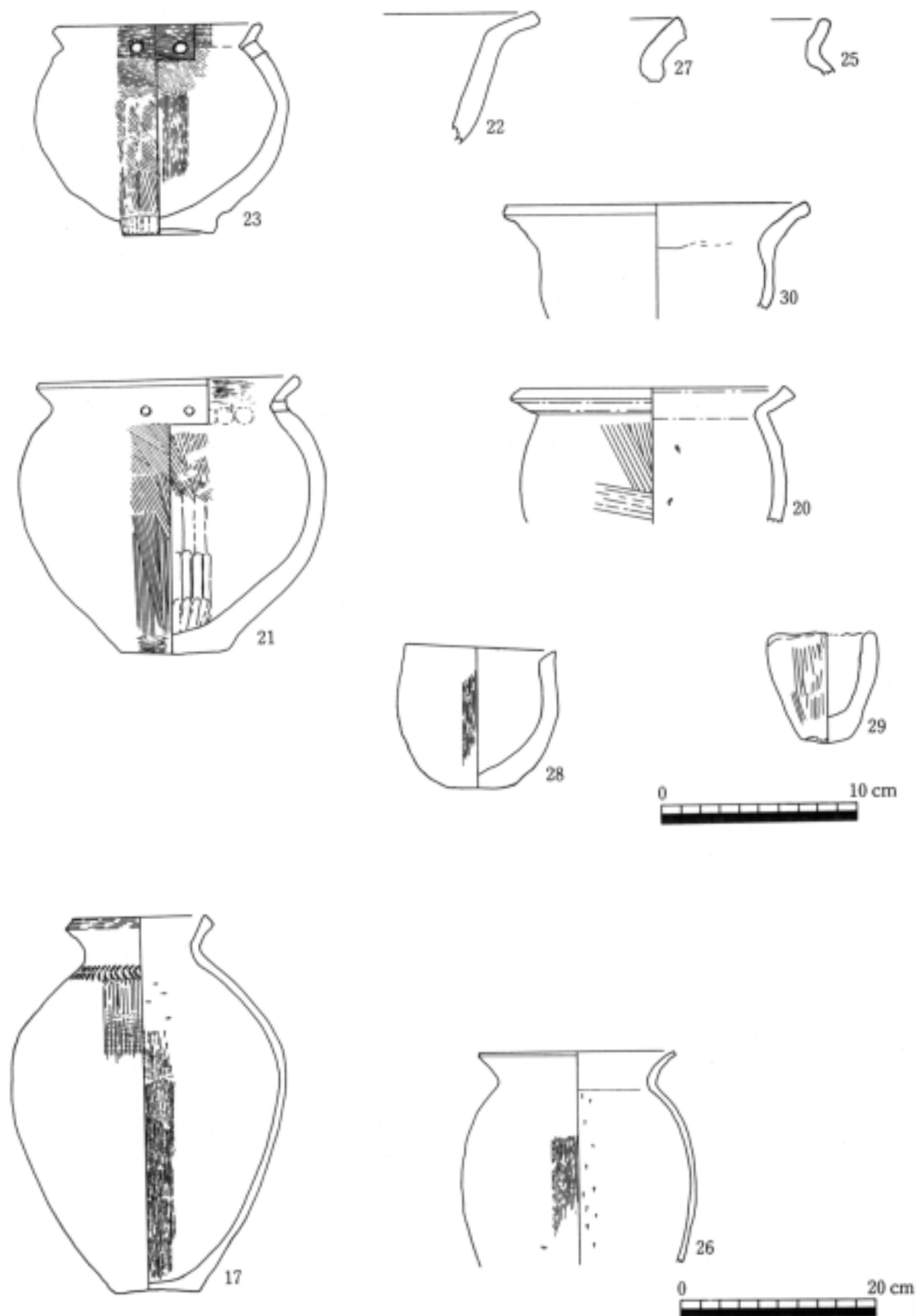
第77图 B·C地点遺跡土坑実測図 09



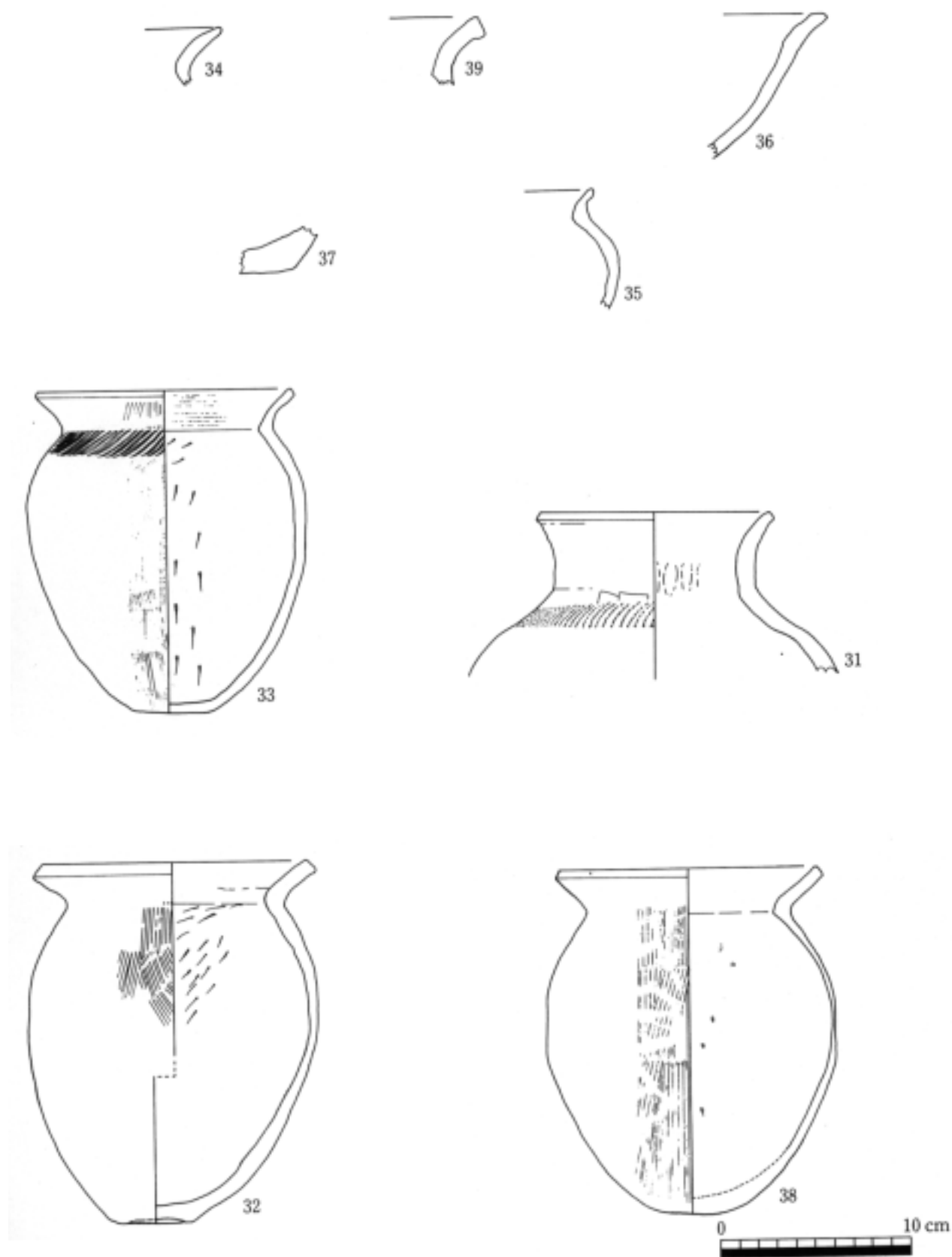
第78図 B・C地点遺跡出土土器実測図(1)



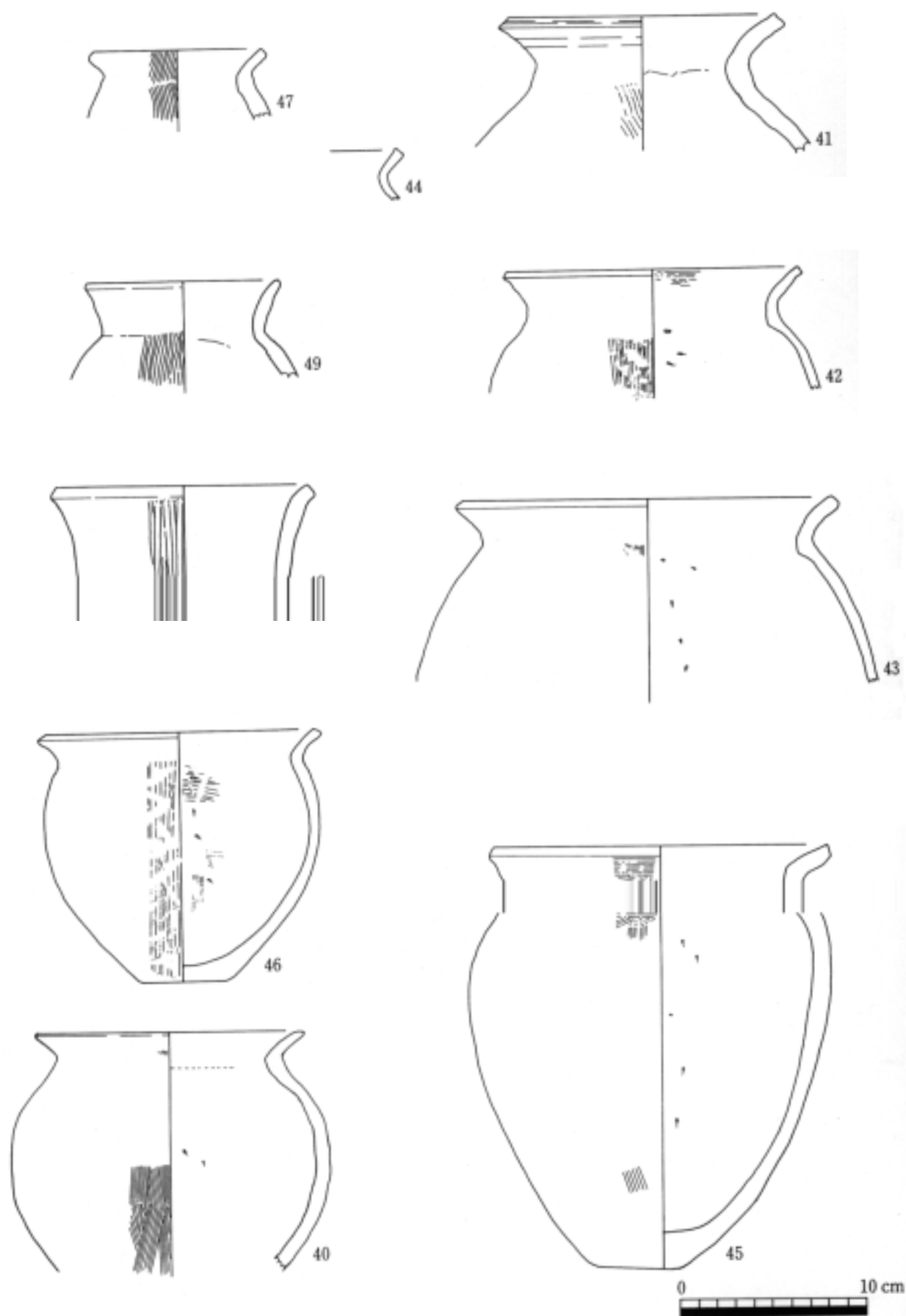
第79图 B·C地点遗址出土土器实物图(2)



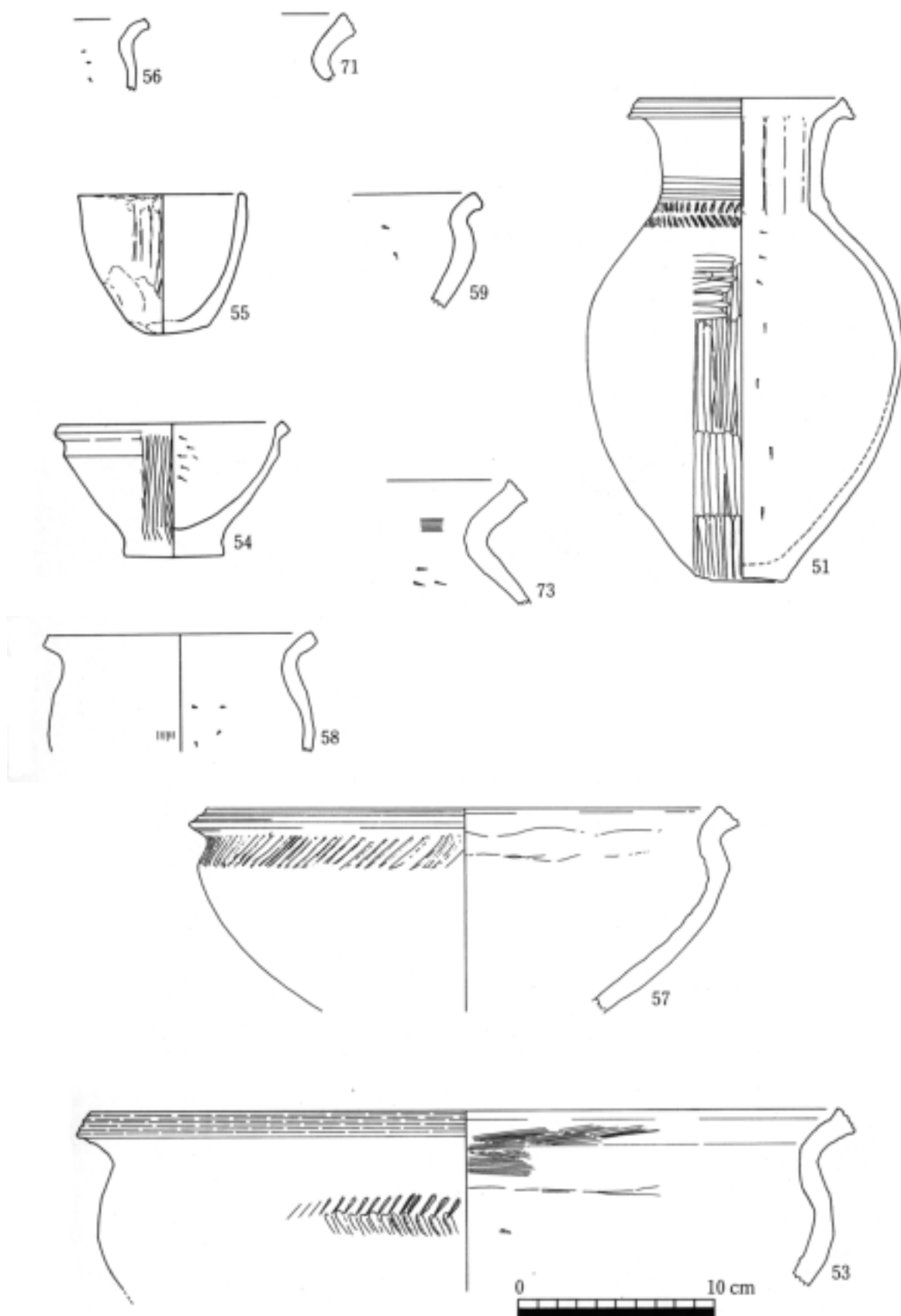
第80图 B·C地点遺跡出土土器実測図(3)



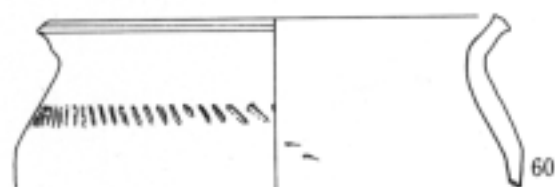
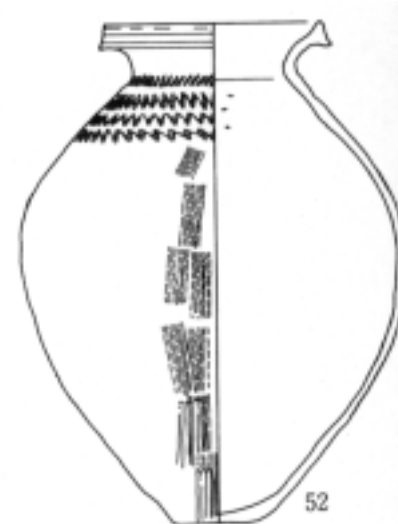
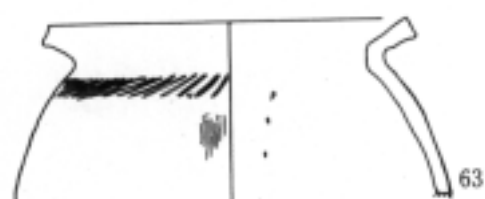
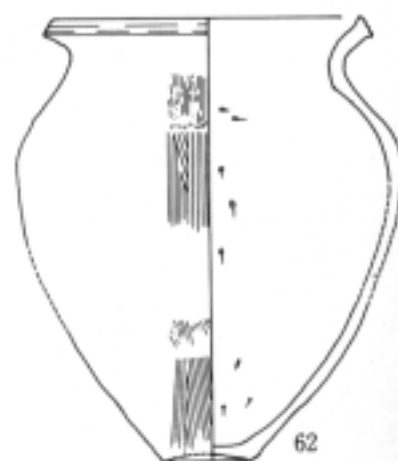
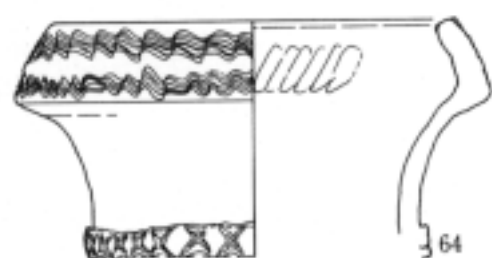
第 81 图 B·C 地点遺跡出土土器実測図 (4)



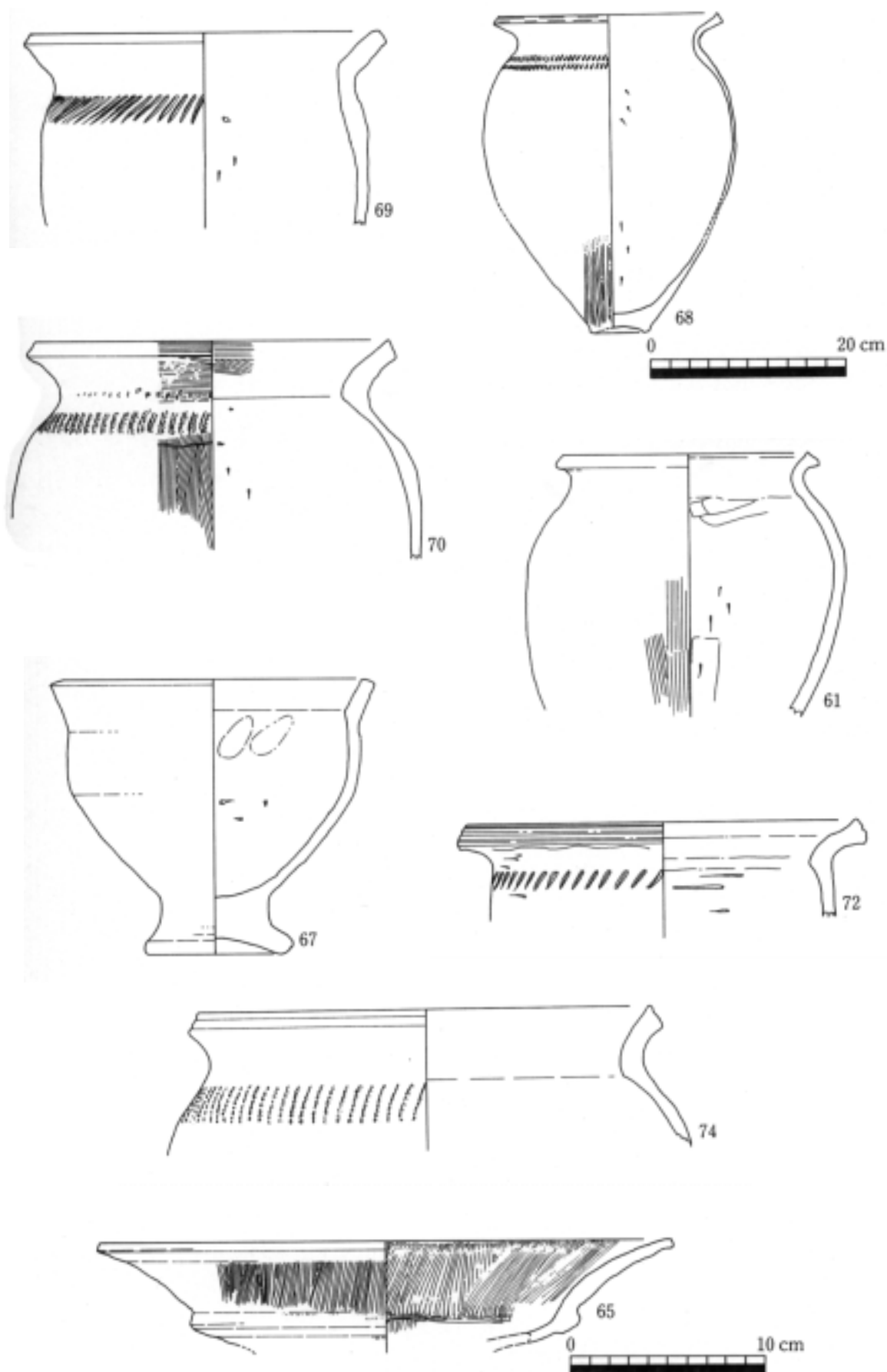
第82図 B・C地点遺跡出土土器実測図(5)



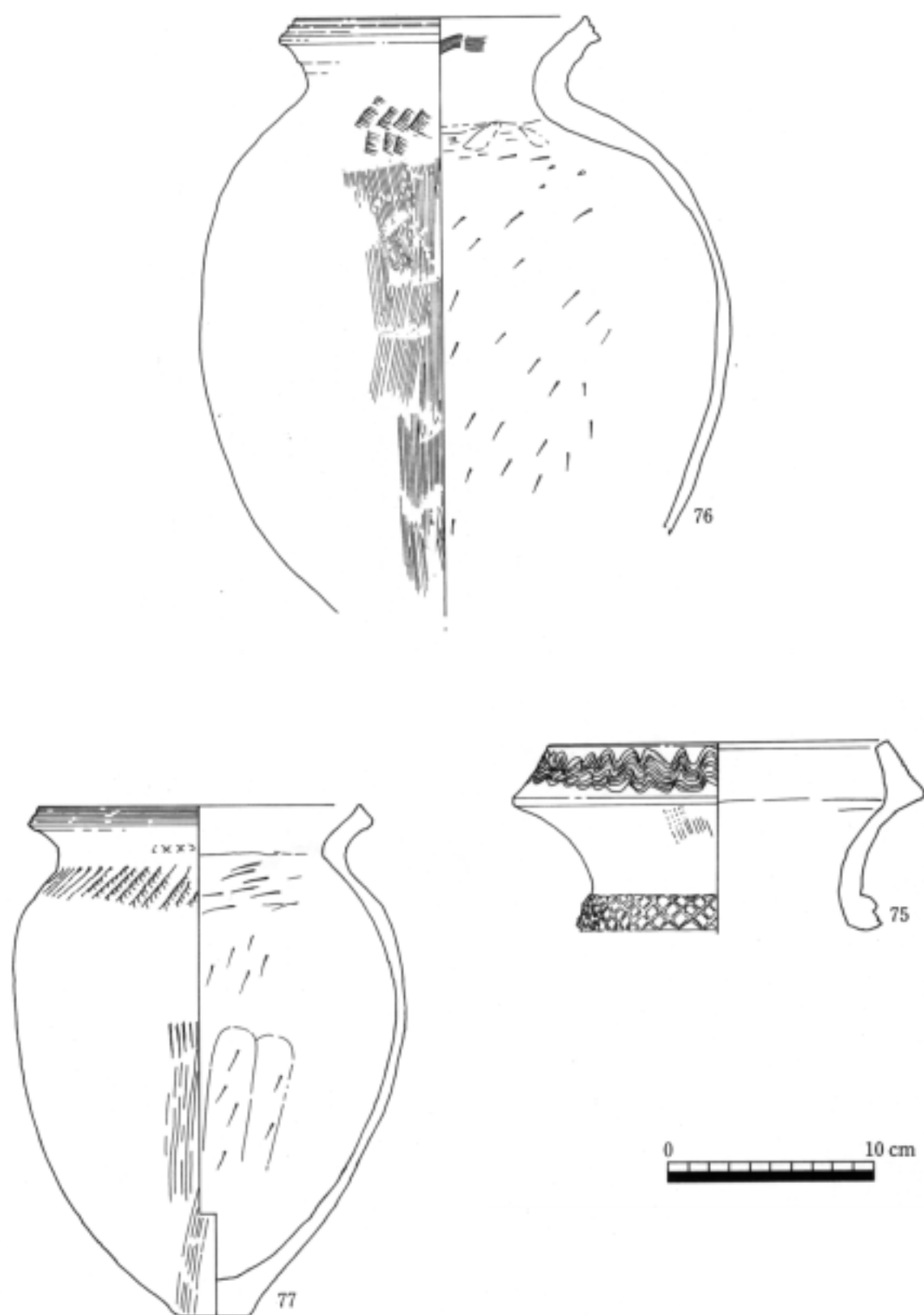
第83圖 B・C地点遺跡出土土器実測圖 (6)



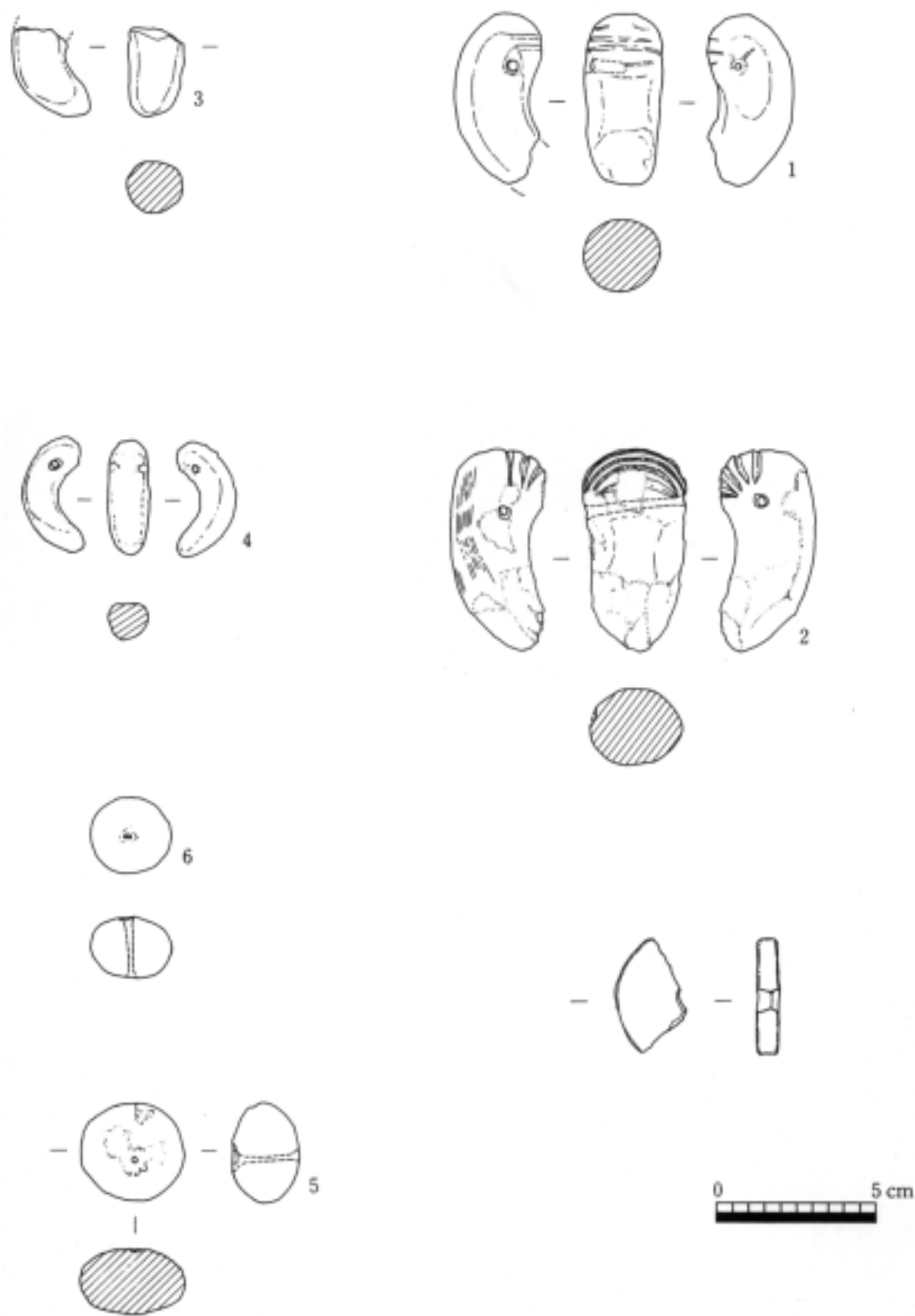
第84图 B·C地点遗址出土土器实图(7)



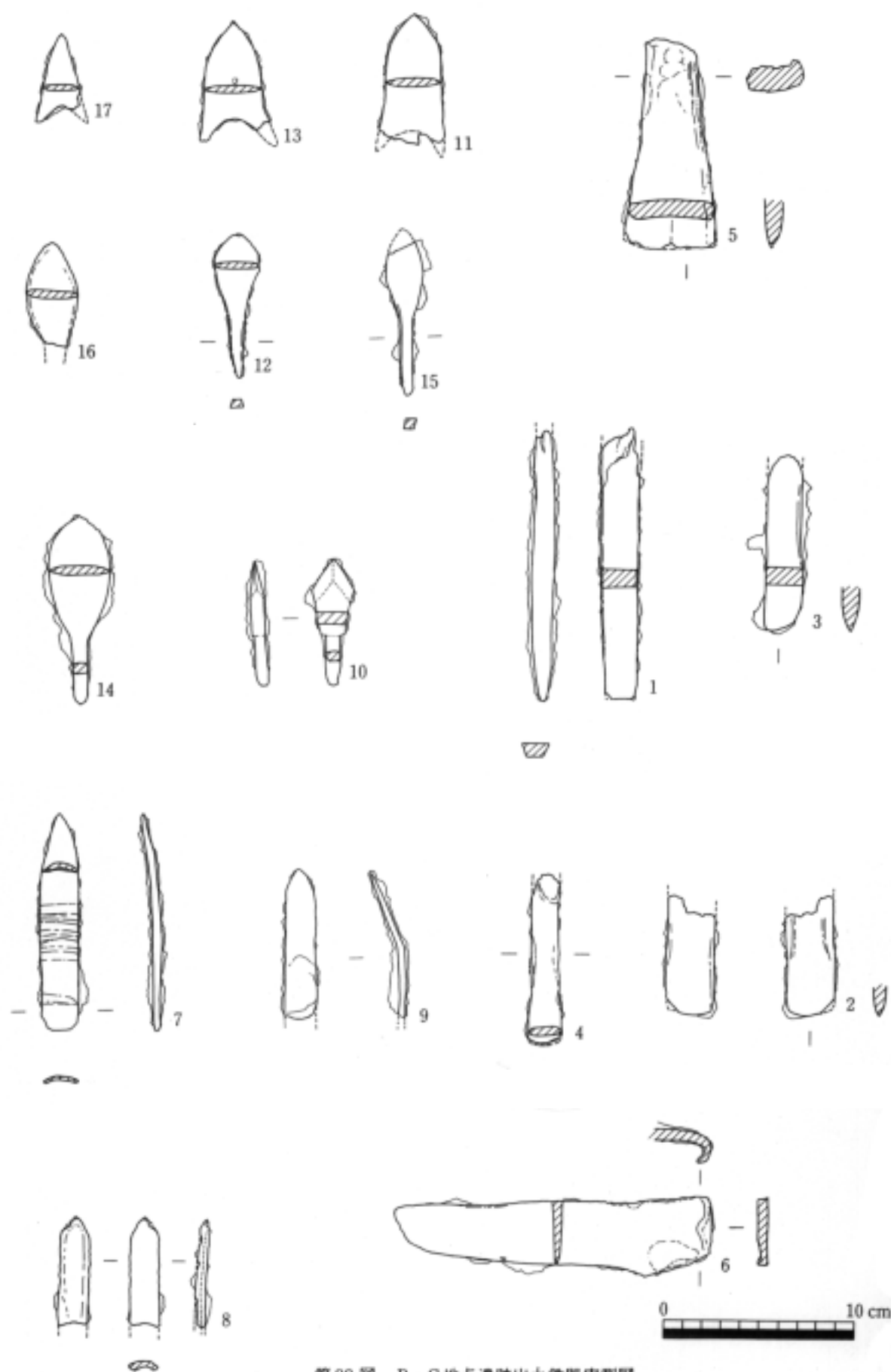
第85图 B·C地点遺跡出土土器実測図(8)



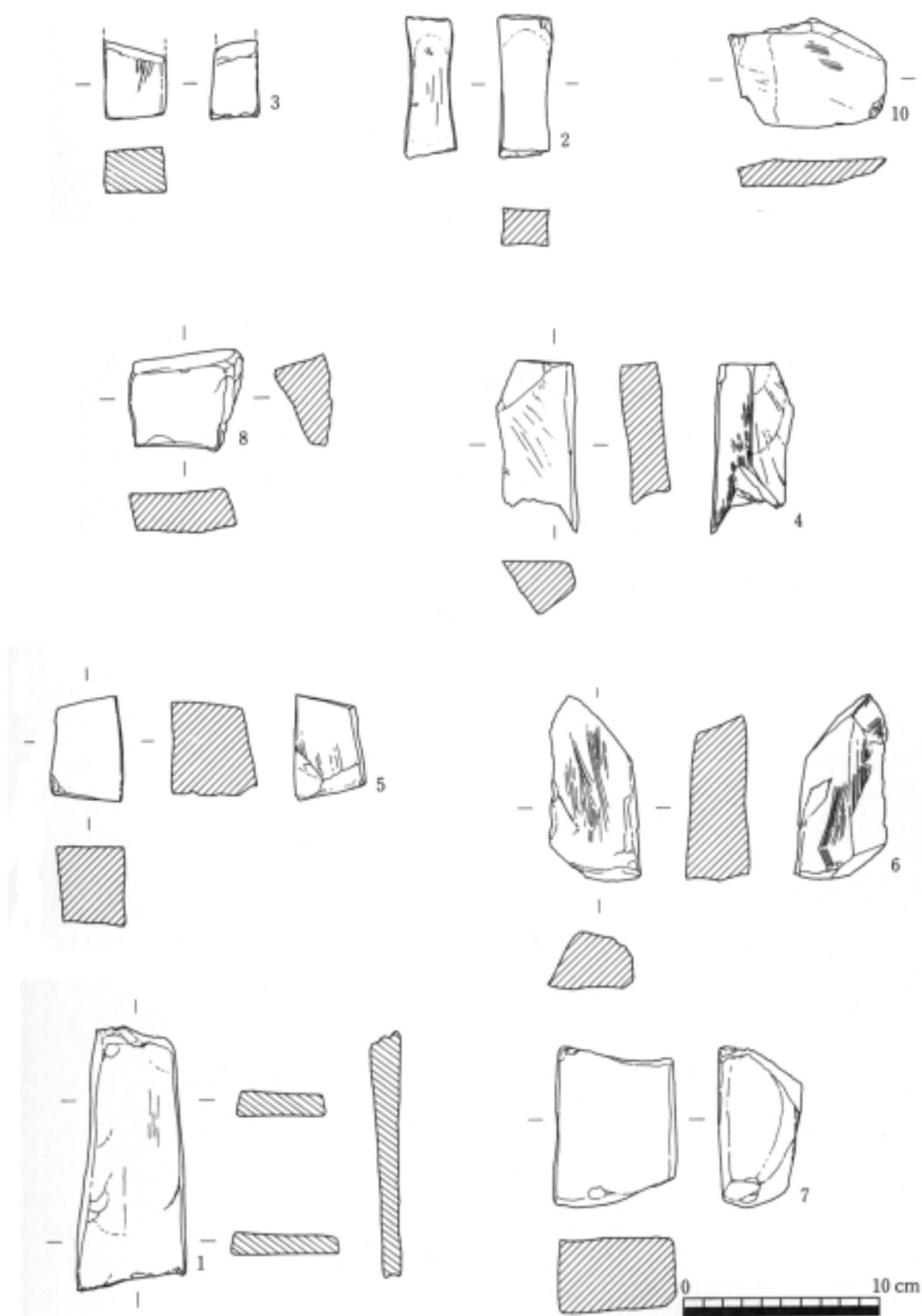
第86图 B·C地点遗址出土土器实测图(9)



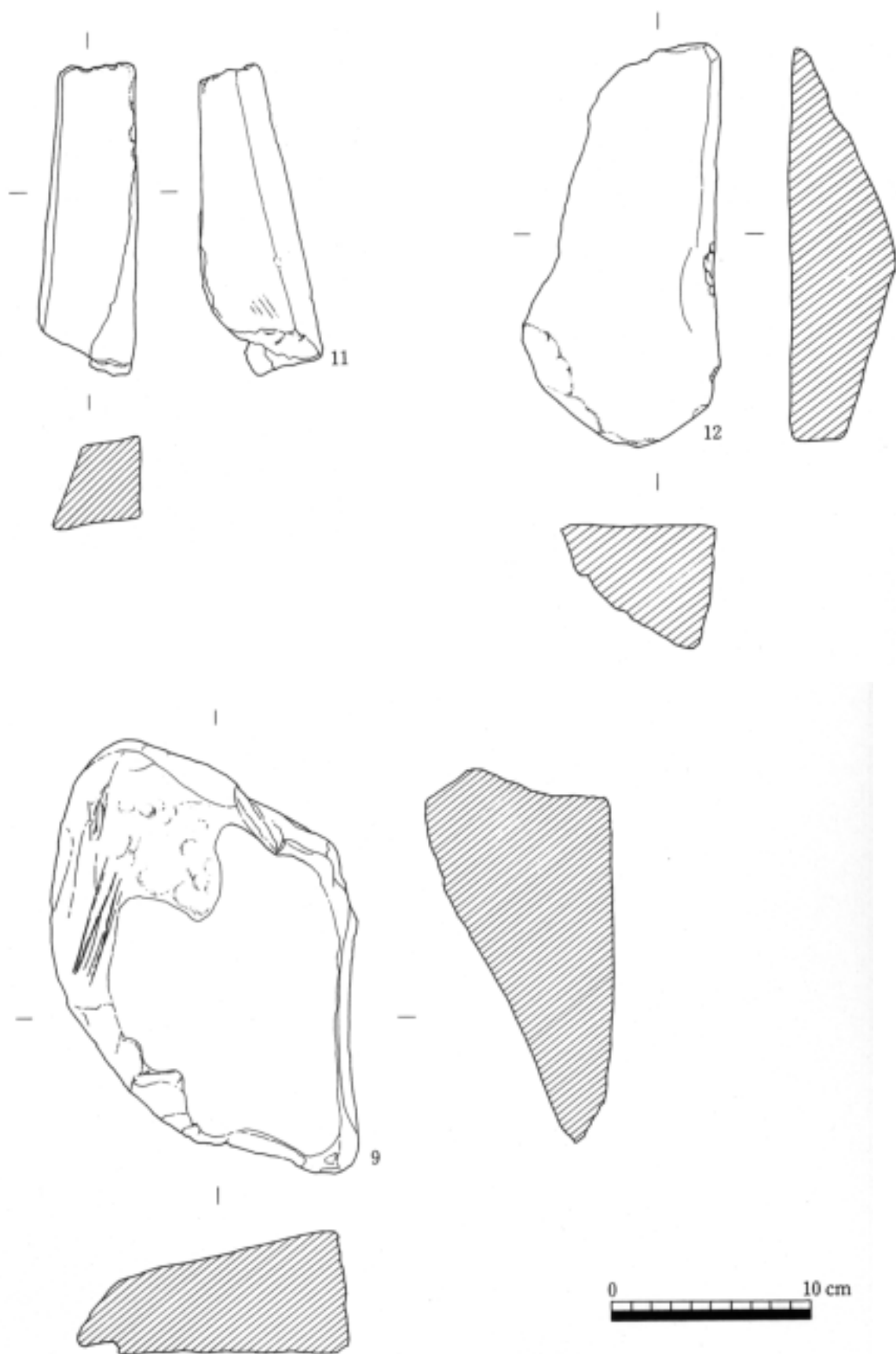
第 87 図 B・C 地点遺跡出土土製品・紡錘車実測図



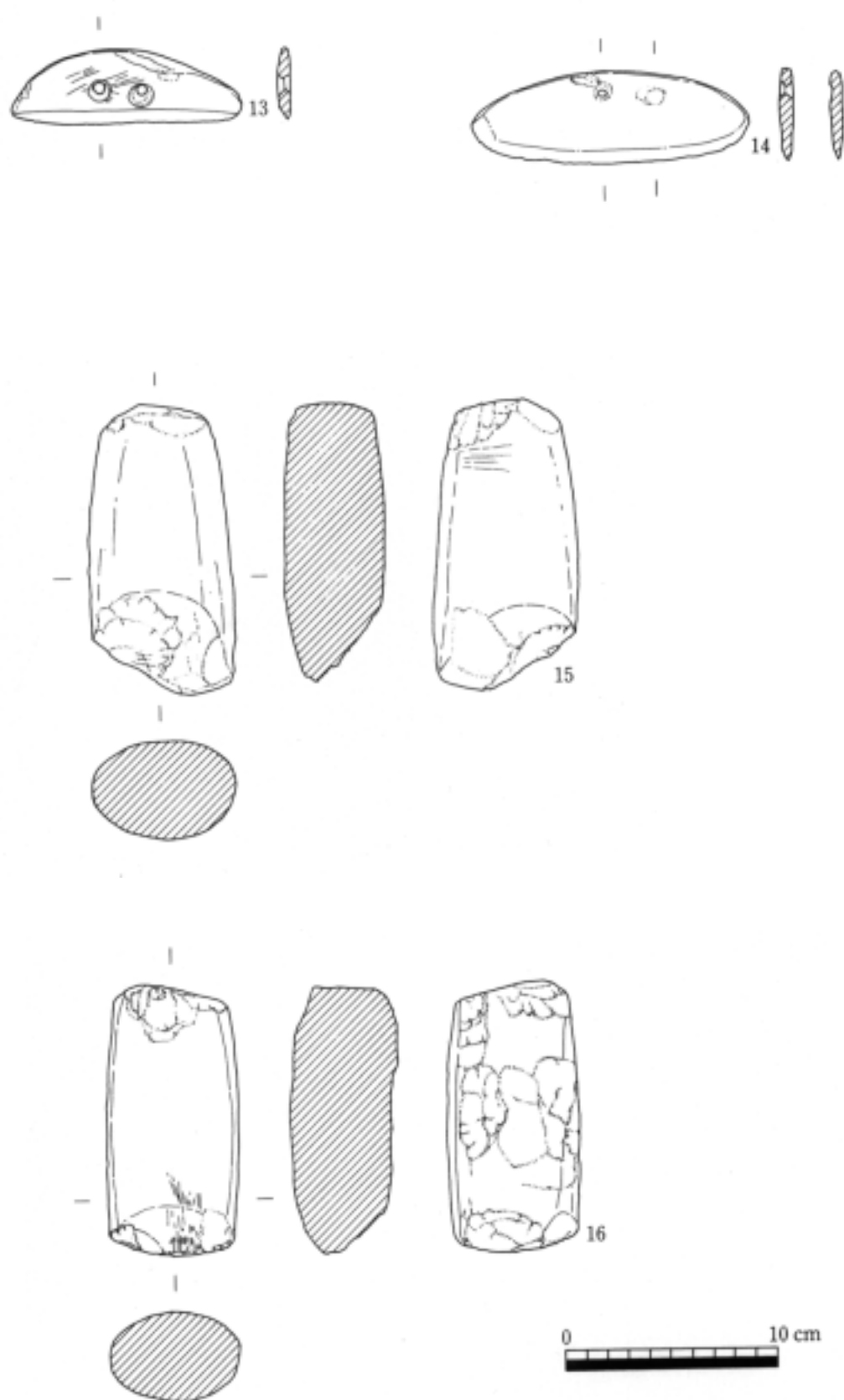
第88图 B·C地点遺跡出土鉄器実測図



第89圖 B・C地点遺跡出土石器実測図 (1)



第90图 B·C地点遗址出土石器实例图(2)



第91图 B·C地点遗址出土石器实图(3)

図

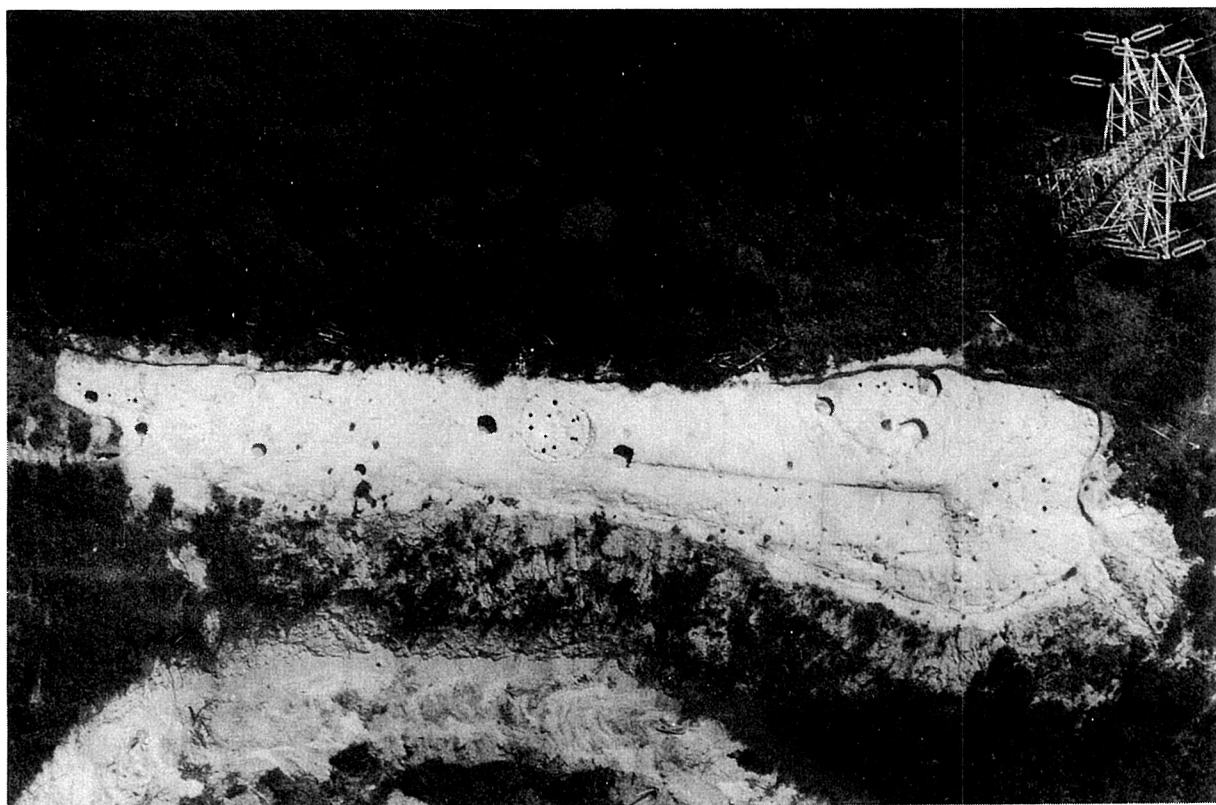
版



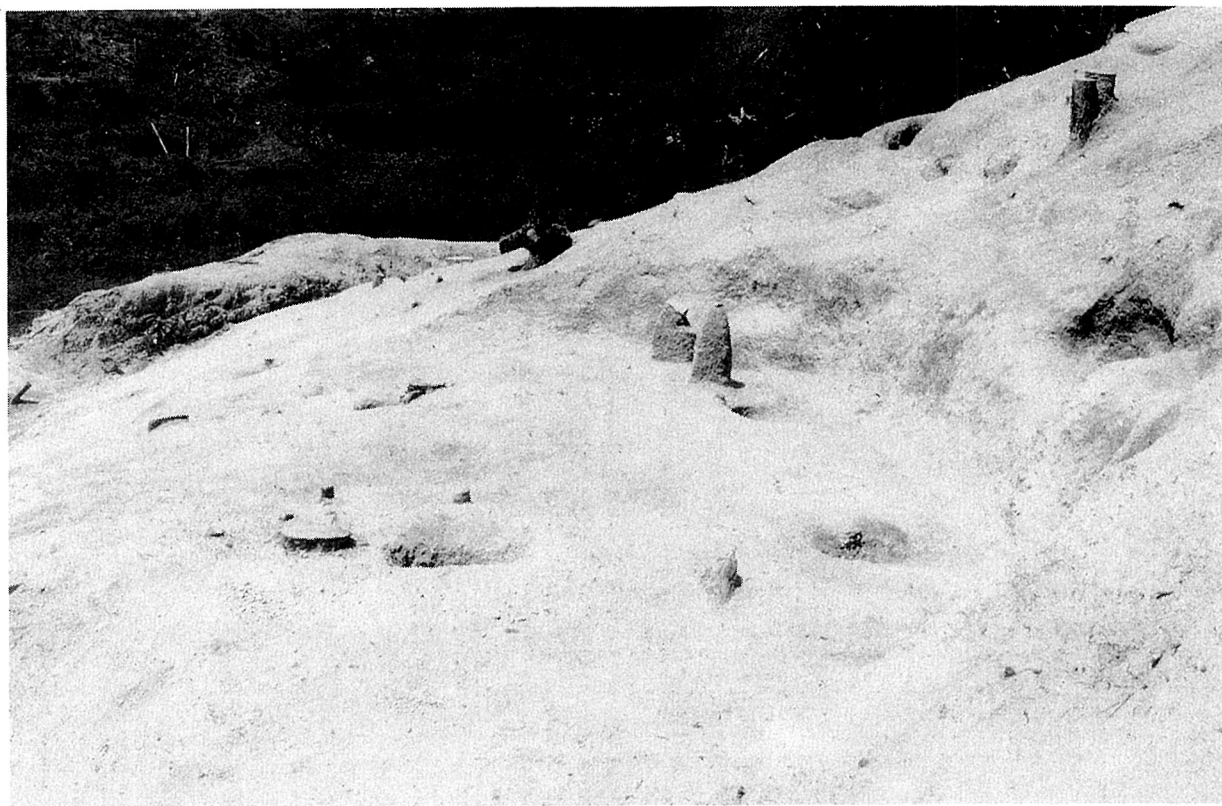
毘沙門台東遺跡全景（調査前，東から）



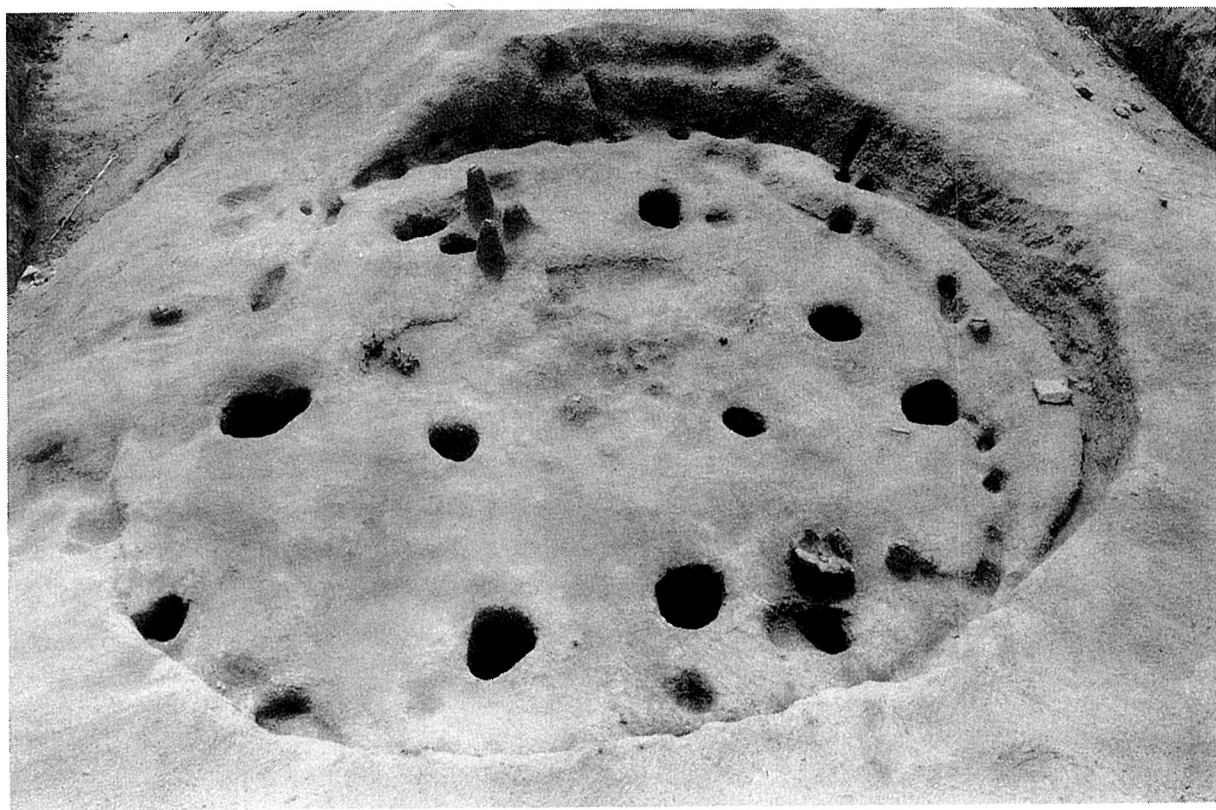
a A地点遺跡中景（調査前，東から）



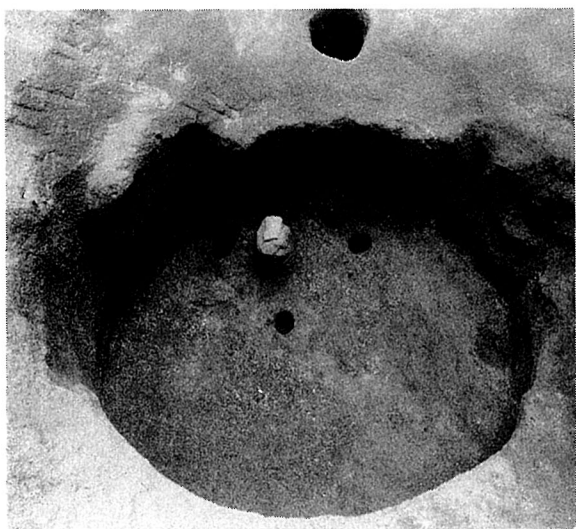
b A地点遺跡全景（調査後，北から）



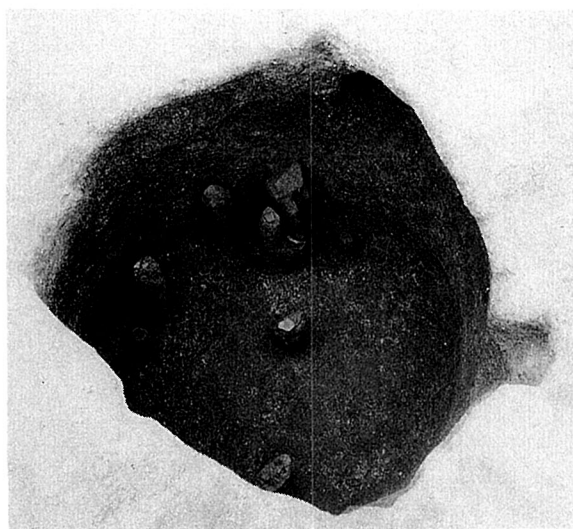
a A地点遺跡第1号住居跡



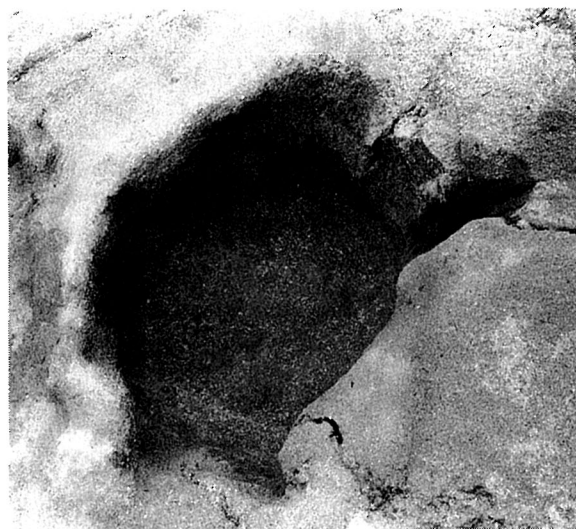
b A地点遺跡第2号・第3号住居跡



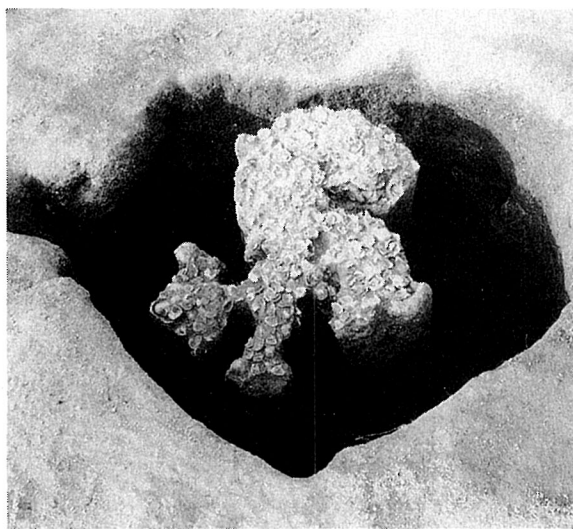
a A地点遺跡第1号土坑



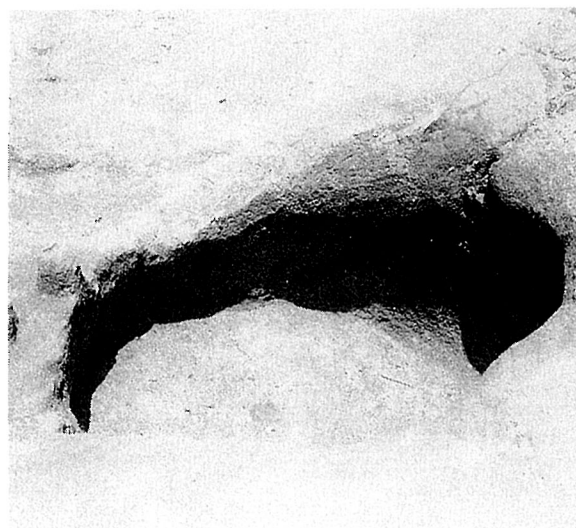
d A地点遺跡第4号土坑



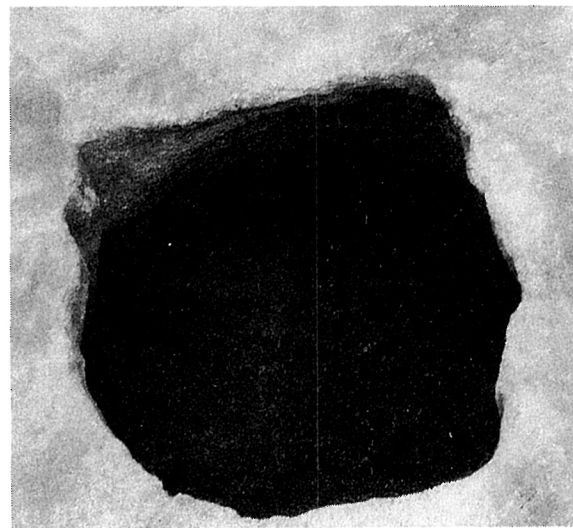
b A地点遺跡第2号土坑



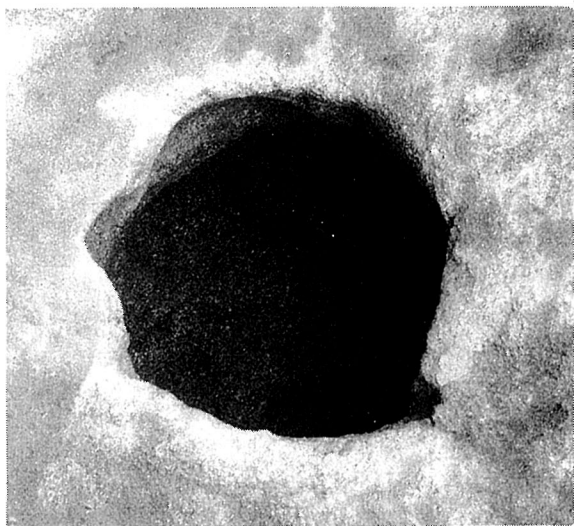
e A地点遺跡第4号土坑貝出土状況



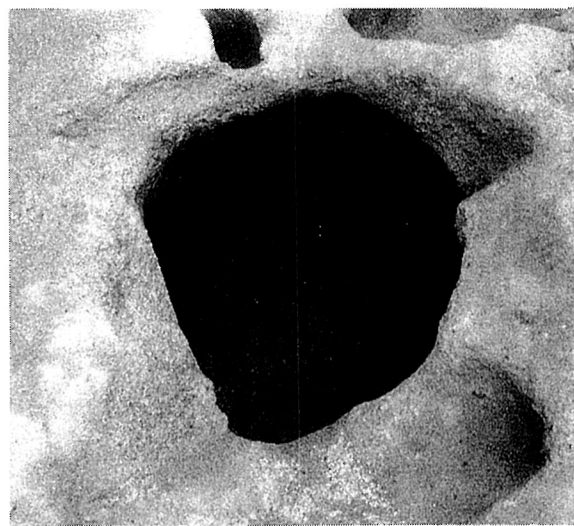
c A地点遺跡第3号土坑



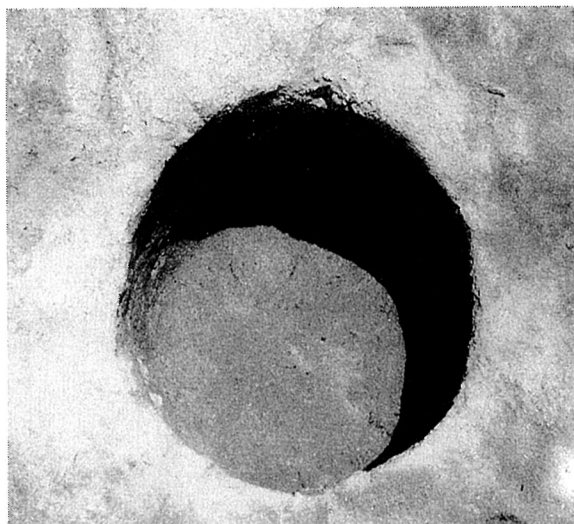
f A地点遺跡第5号土坑



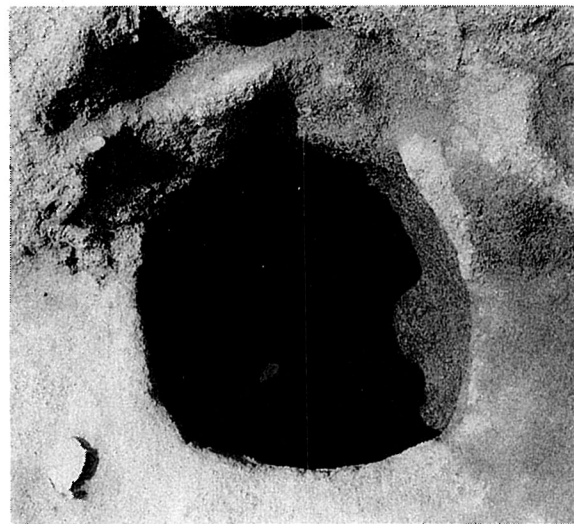
a A地点遺跡第6号土坑



d A地点遺跡第9号土坑



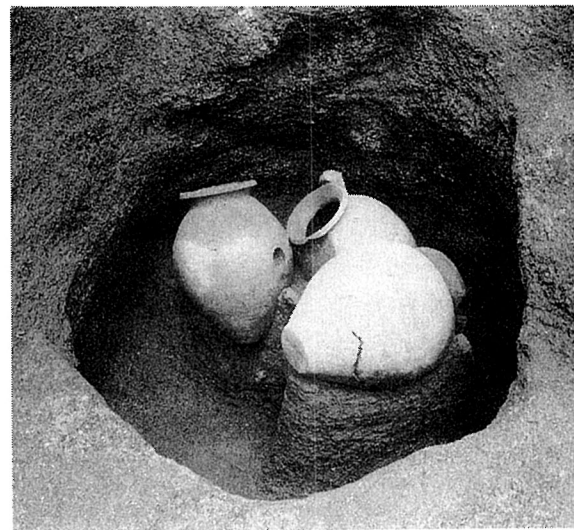
b A地点遺跡第7号土坑



e A地点遺跡第10号土坑



c A地点遺跡第8号土坑



f A地点遺跡第10号土坑土器出土状況



a B地点遺跡中景（調査前，東から）



b B地点遺跡全景（調査後，東から）



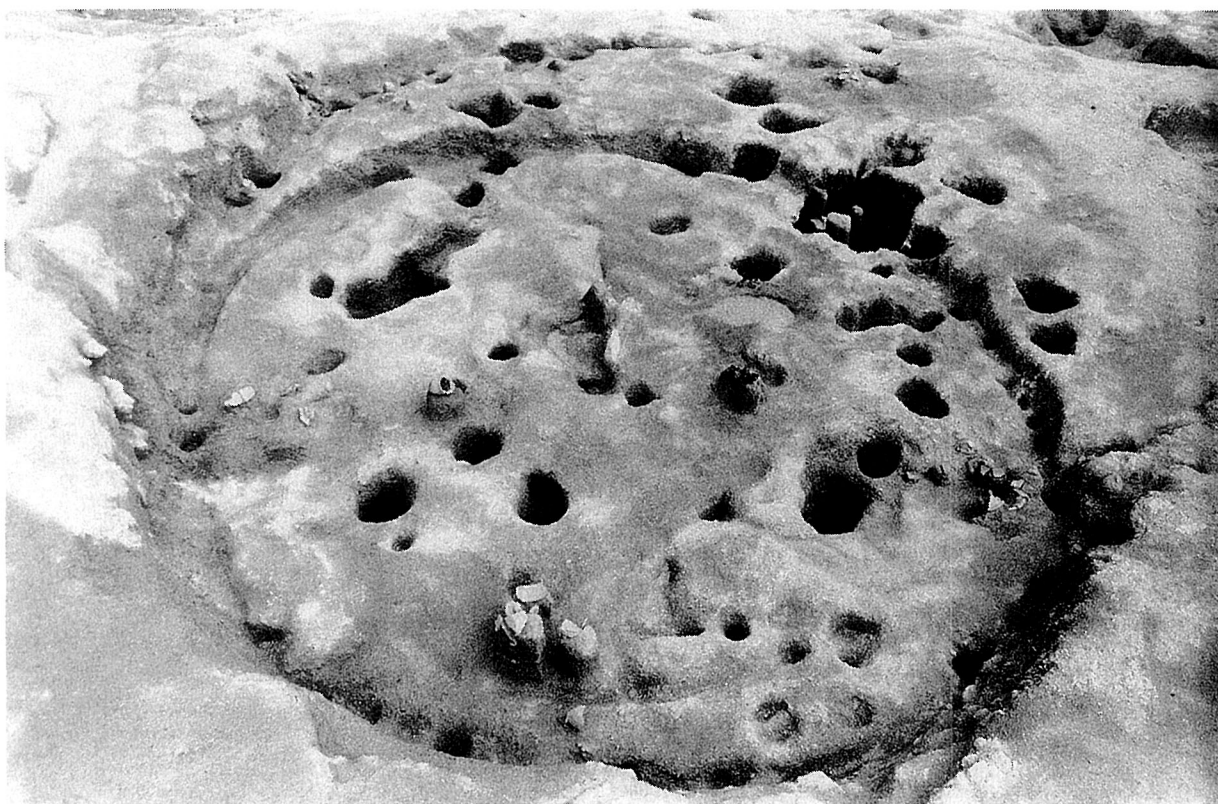
a C地点遺跡遠景（調査後，西から）



b C地点遺跡中景（調査前，東から）



C地点遺跡全景（調査後、北から）



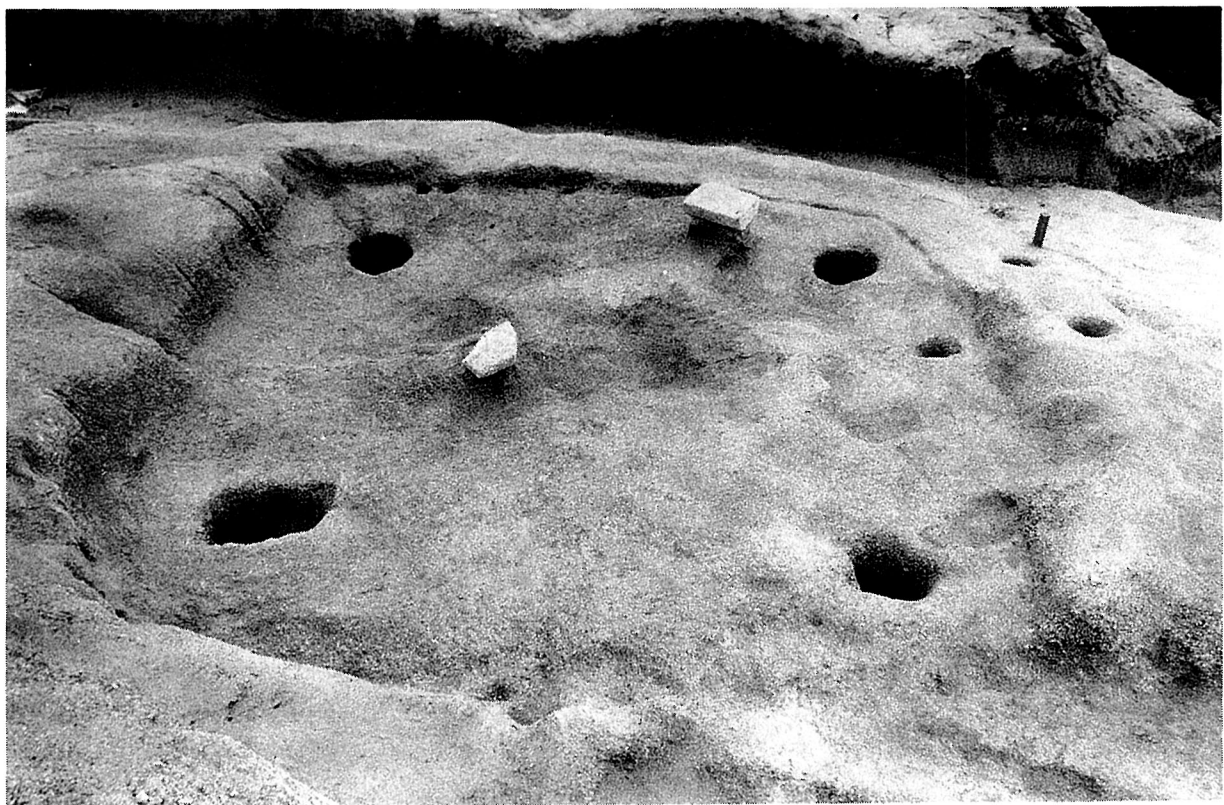
a B·C 地点遺跡第 1 号・第 2 号住居跡



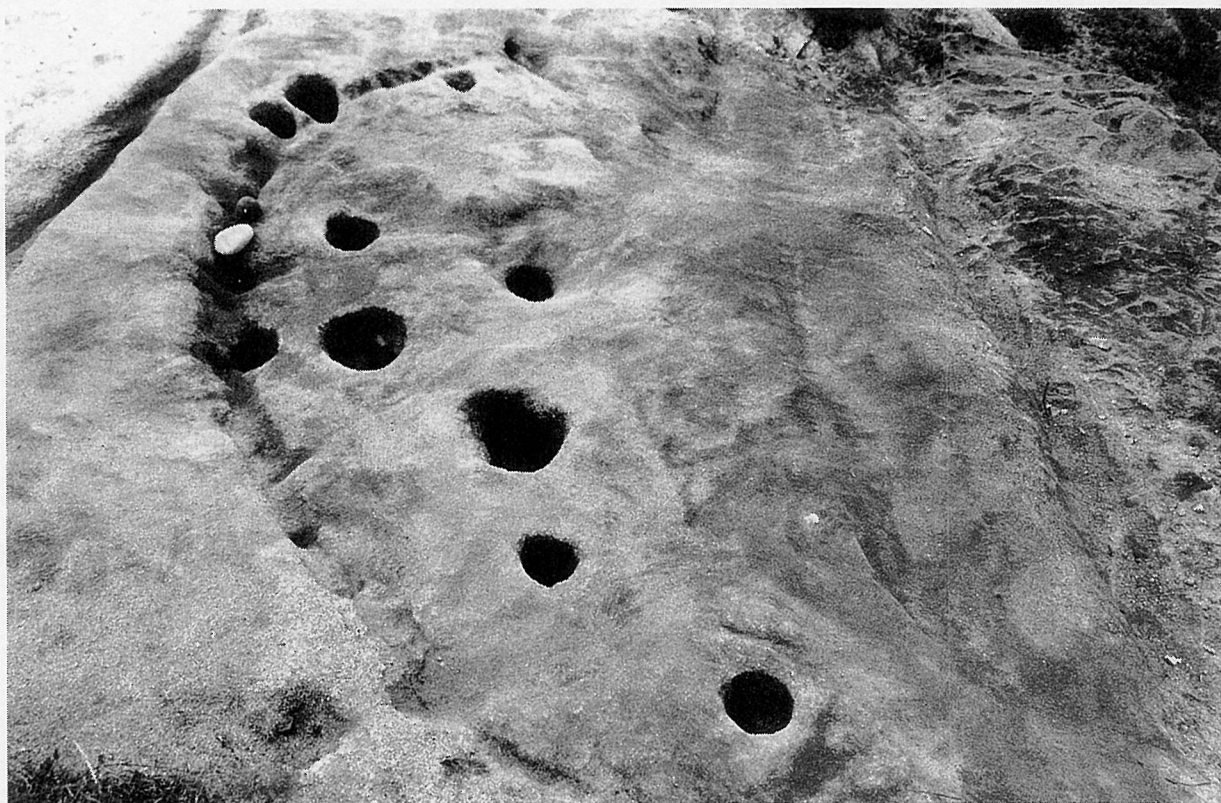
b B·C 地点遺跡第 3 号住居跡



a B·C 地点遺跡第 4 号住居跡



b B·C 地点遺跡第 5 号住居跡



a B·C 地点遺跡第 6 号住居跡



b B·C 地点遺跡第 7 号住居跡



a B·C 地点遺跡第 8 号住居跡



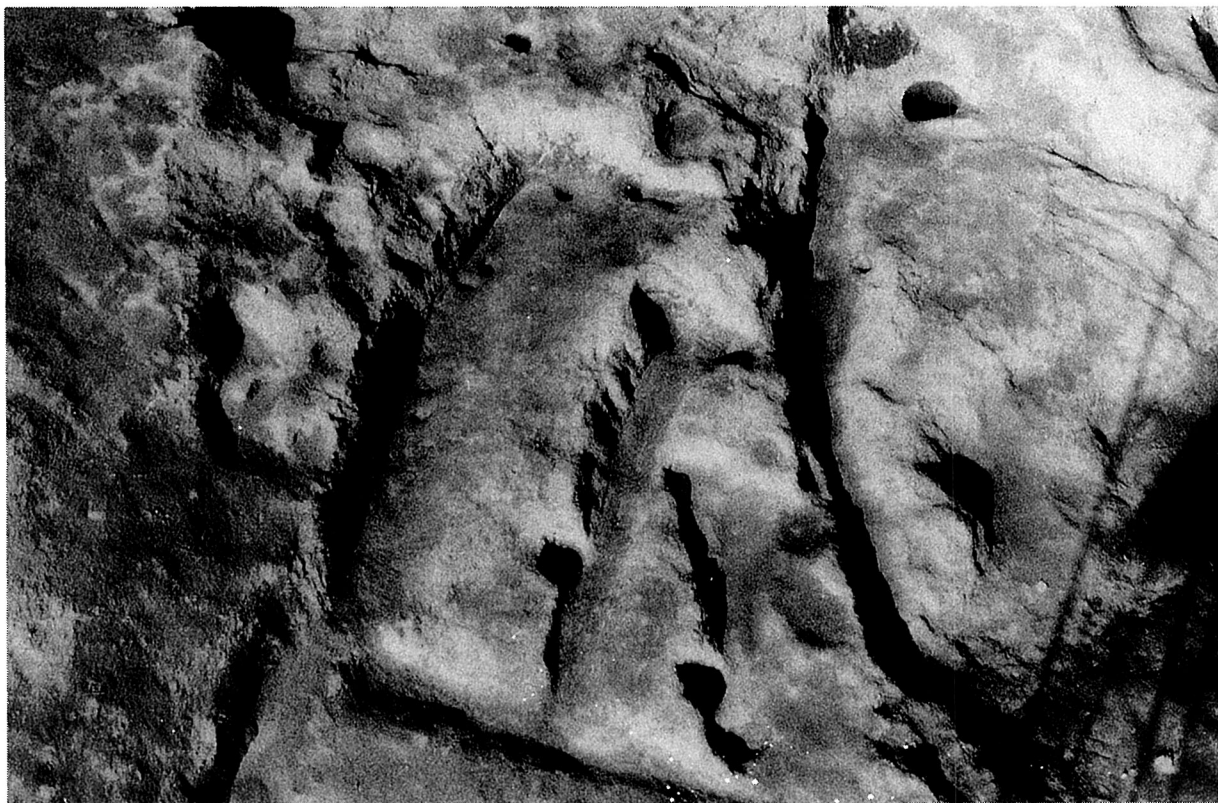
b B·C 地点遺跡第 9 号住居跡



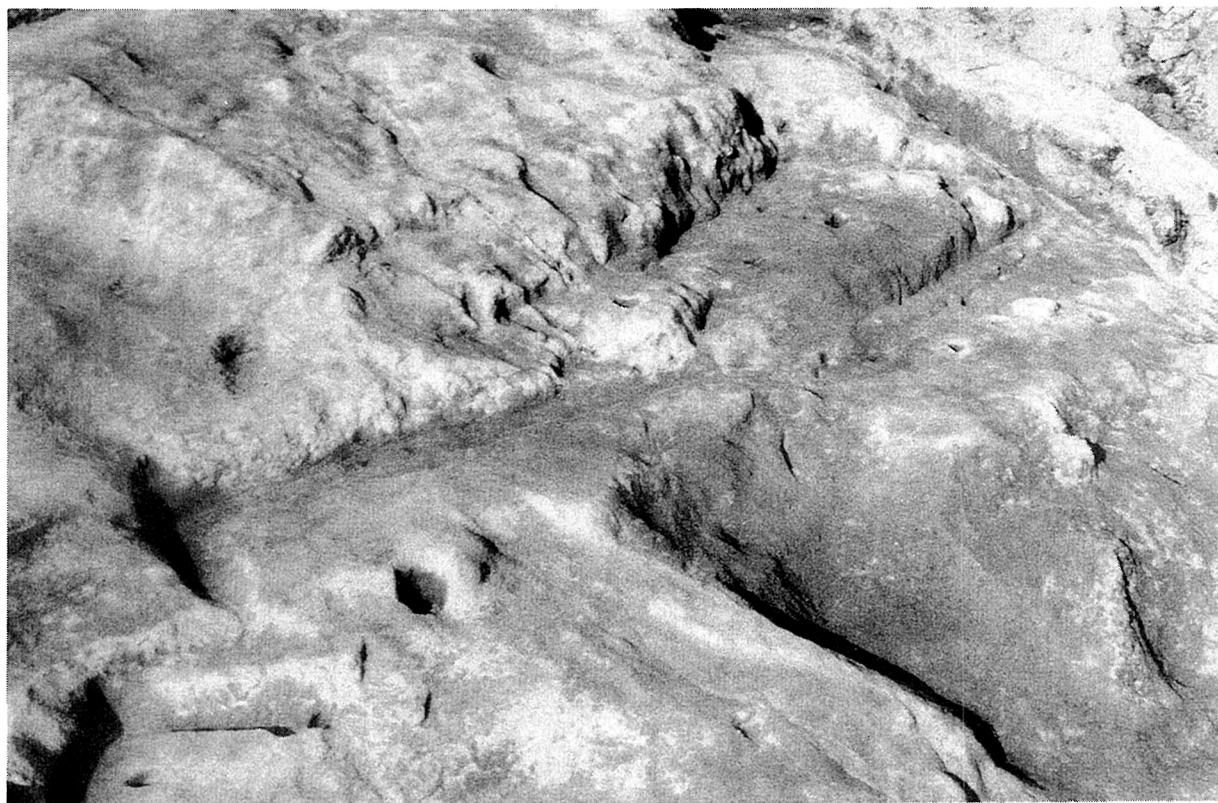
a B・C地点遺跡第10号～第22号住居跡



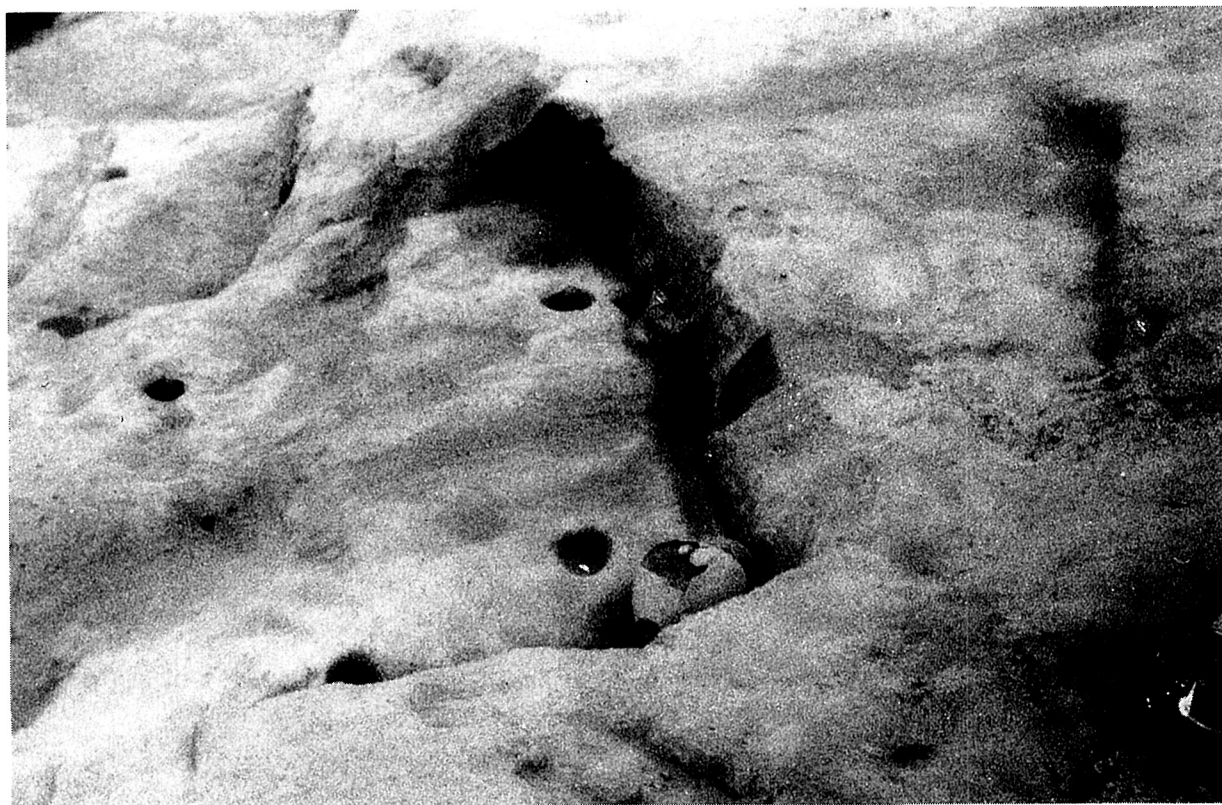
b B・C地点遺跡第10号住居跡



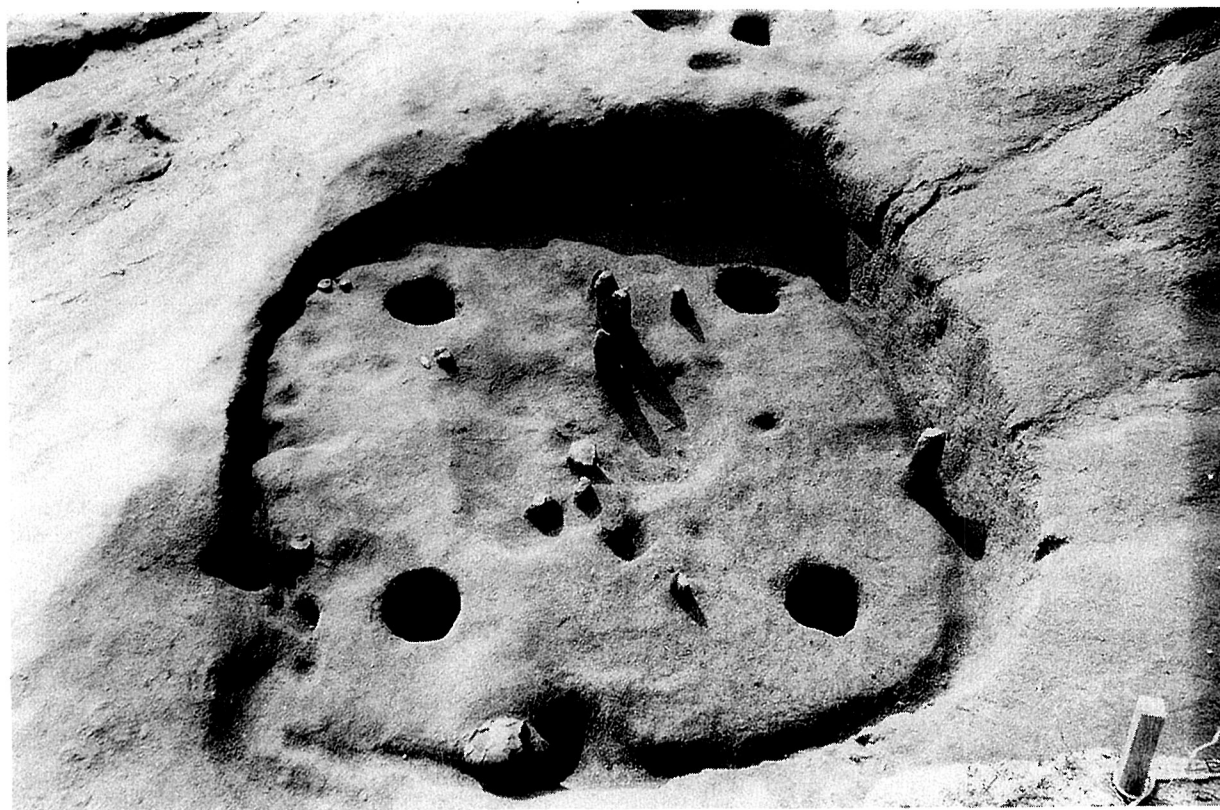
a B・C 地点遺跡第 11 号・第 12 号・第 13 号住居跡



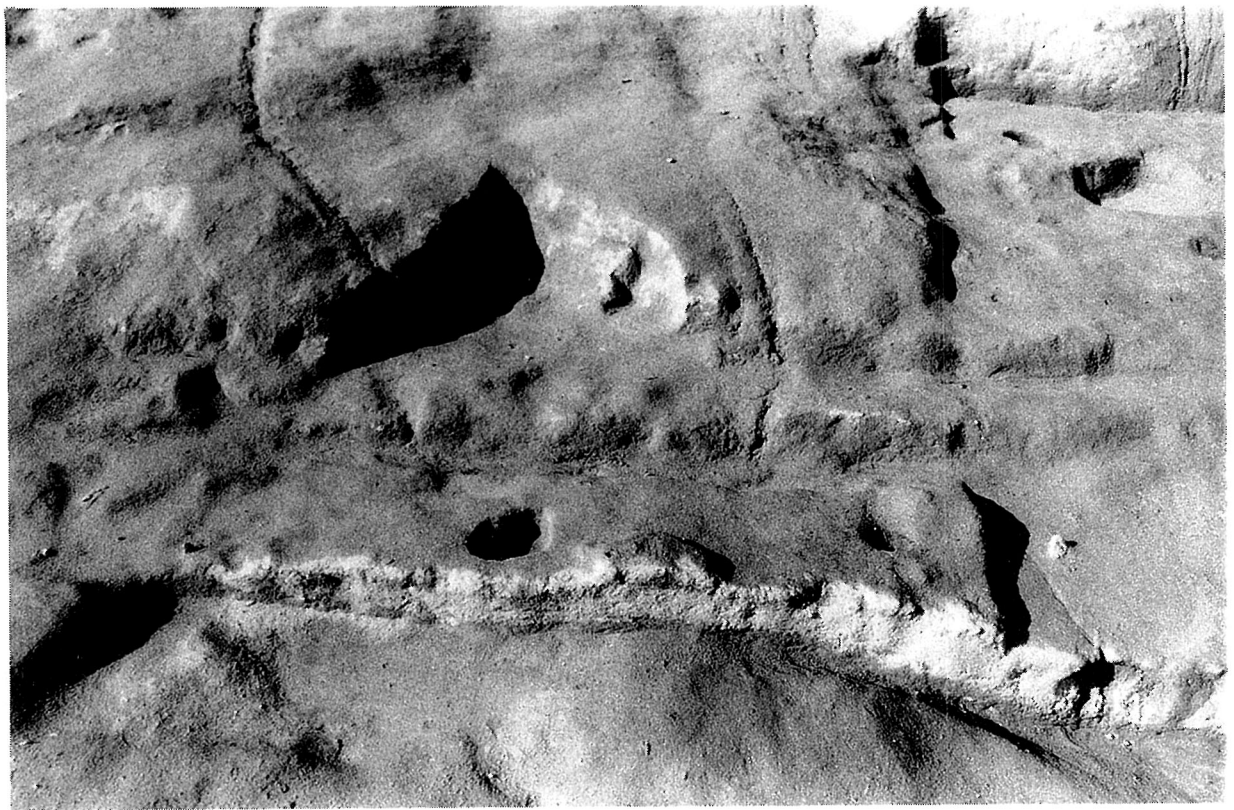
b B・C 地点遺跡第 14 号・第 15 号住居跡, 2 号テラス状遺構



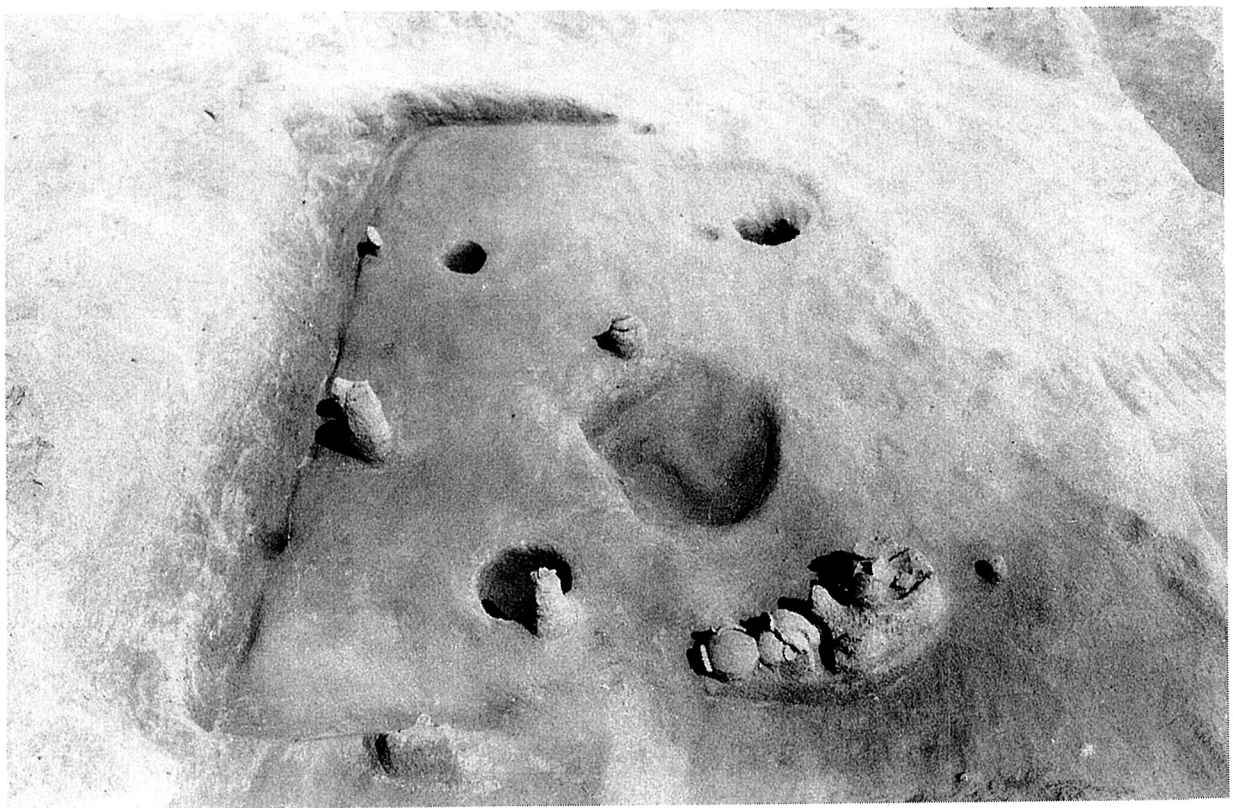
a B·C 地点遺跡第 16 号住居跡



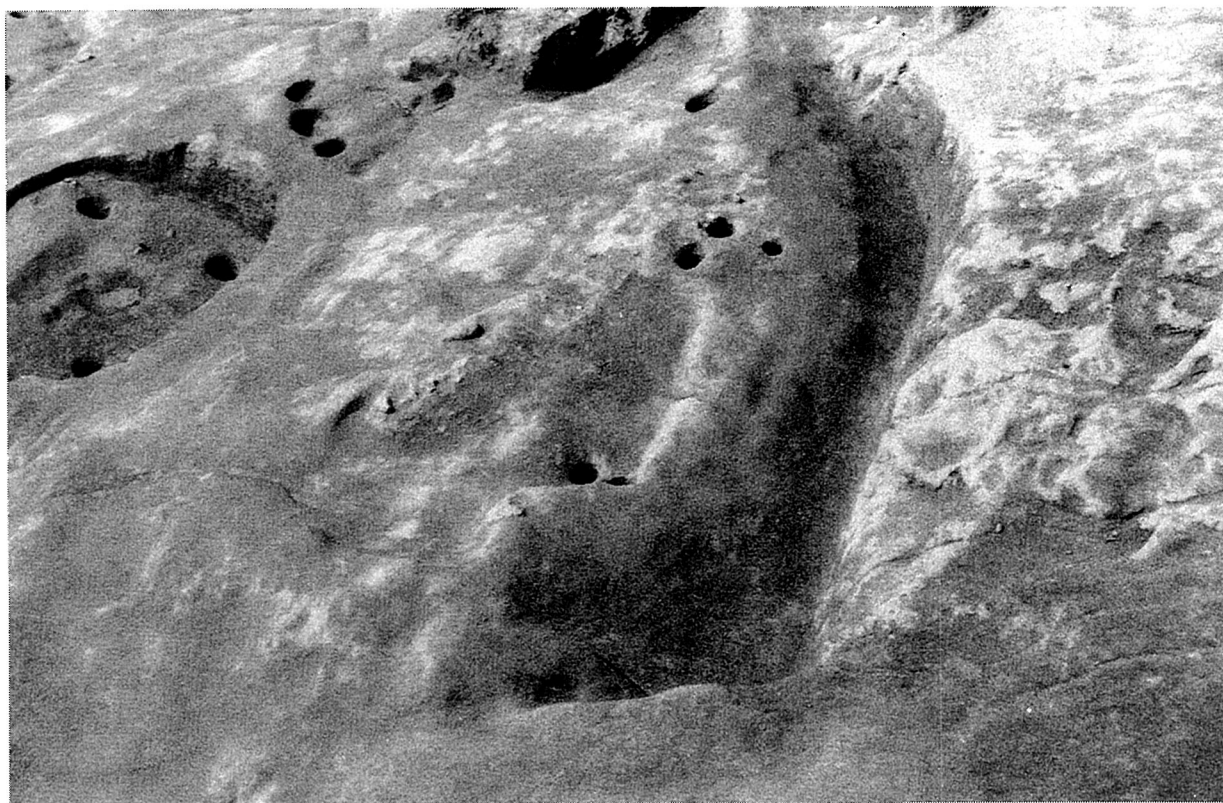
b B·C 地点遺跡第 17 号住居跡



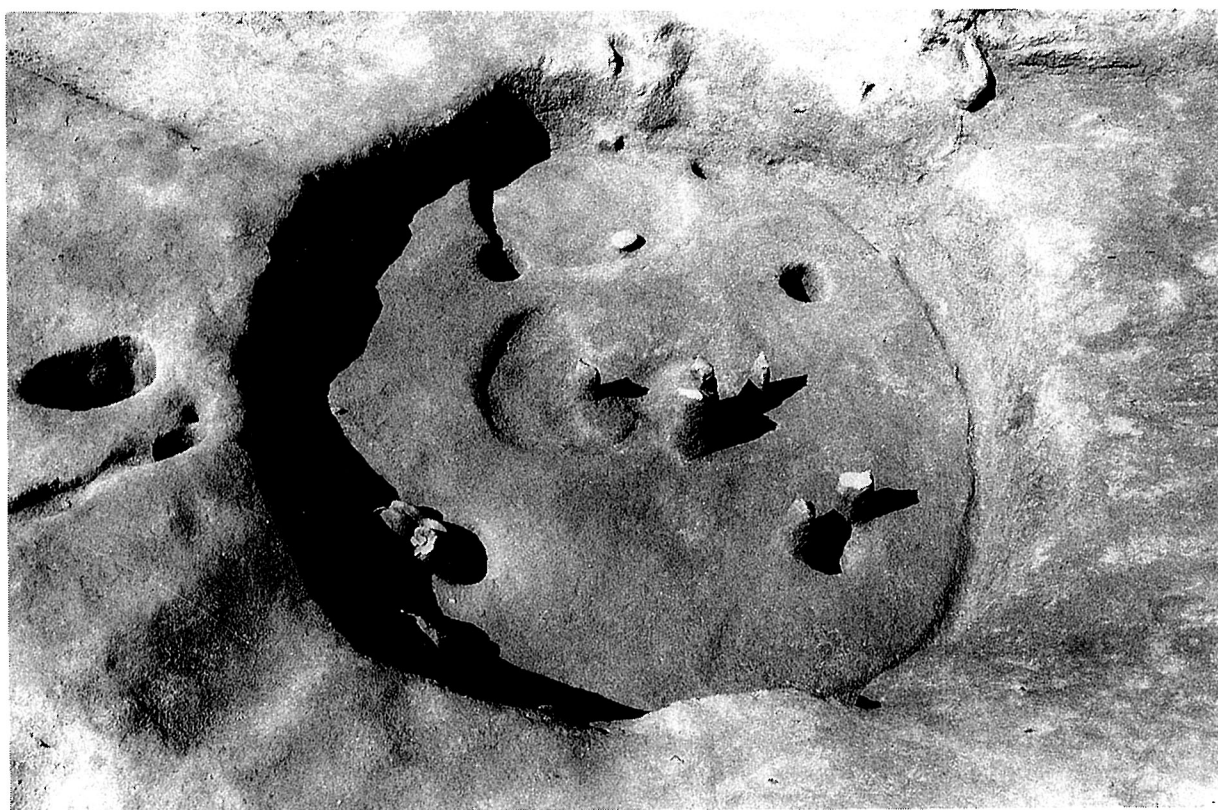
a B·C 地点遺跡第 19 号・第 20 号住居跡



b B·C 地点遺跡第 21 号住居跡



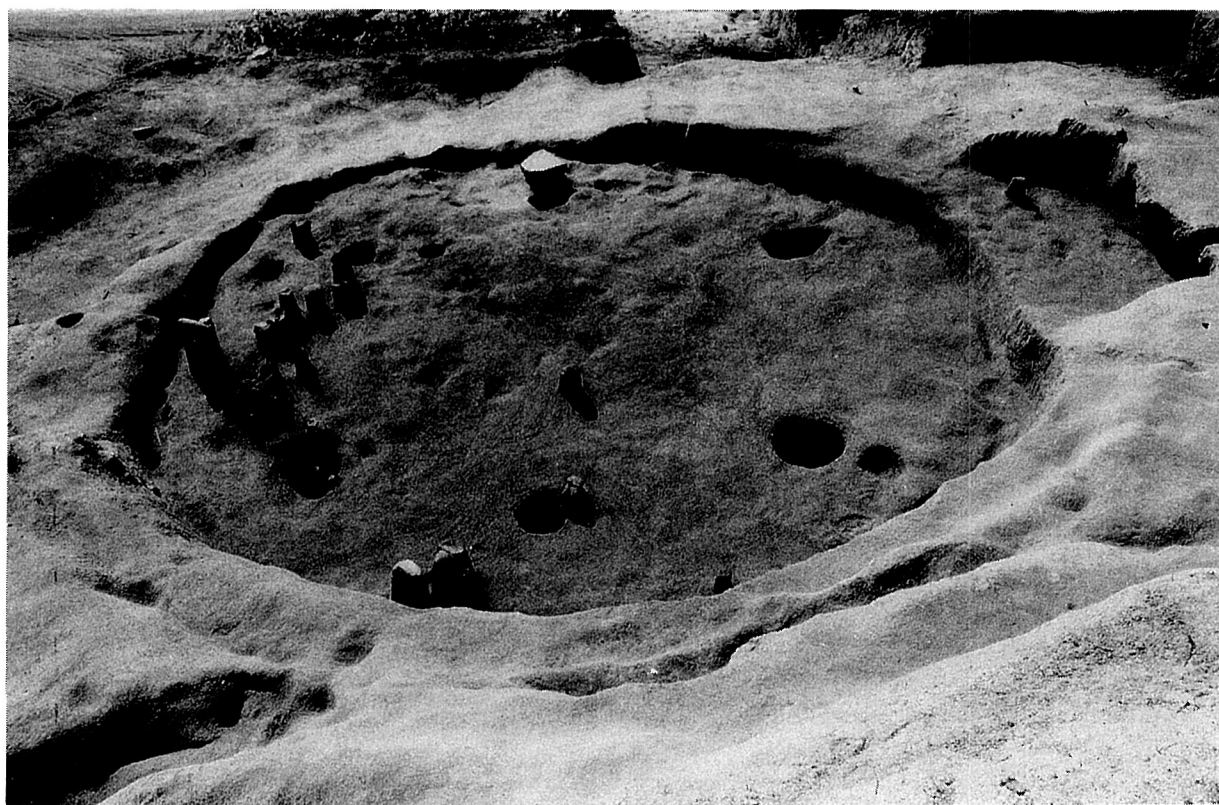
a B·C 地点遺跡第 22 号住居跡



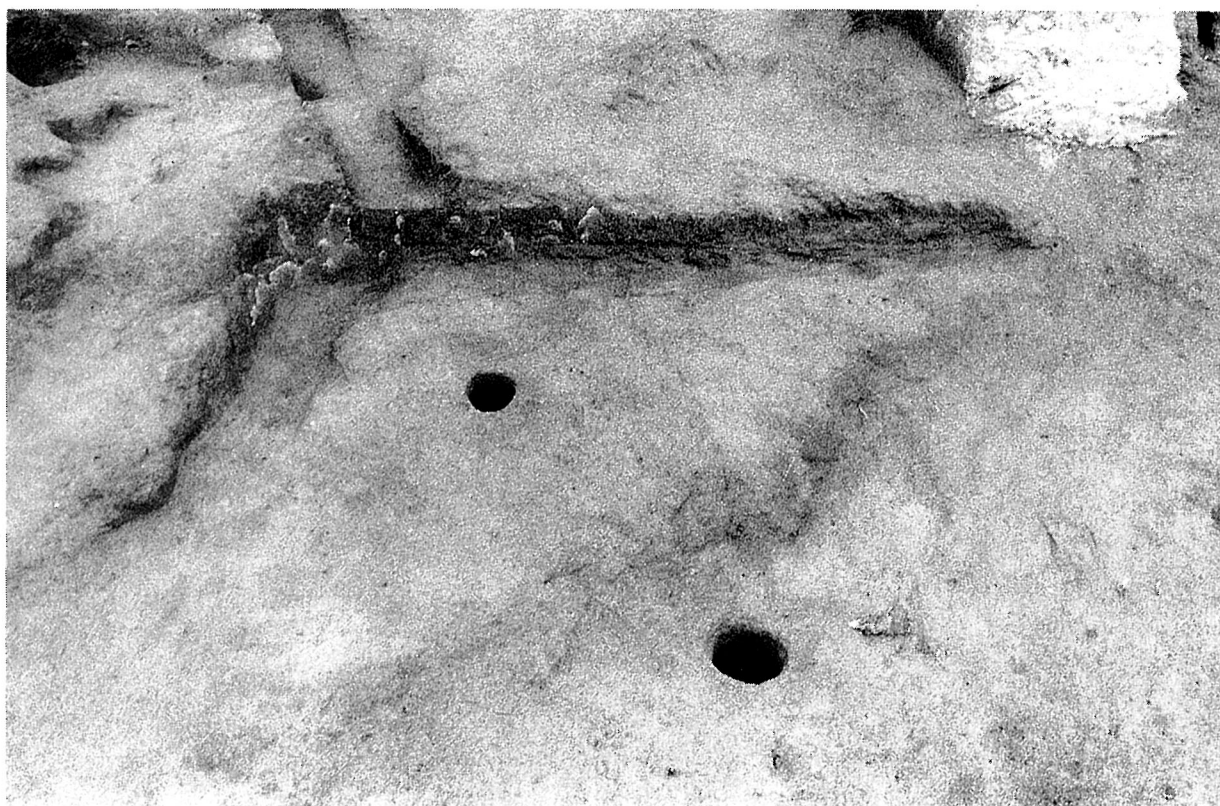
b B·C 地点遺跡第 23 号住居跡



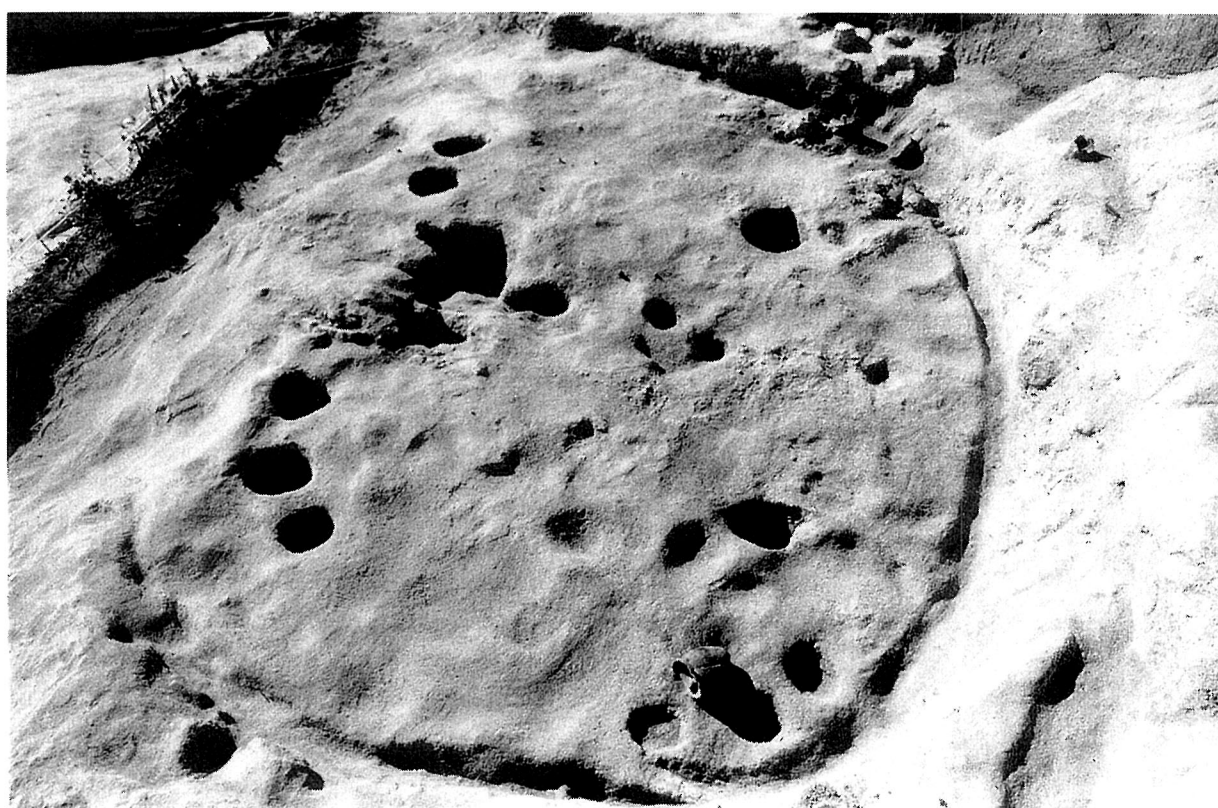
a B·C 地点遺跡第 25 号住居跡遠景



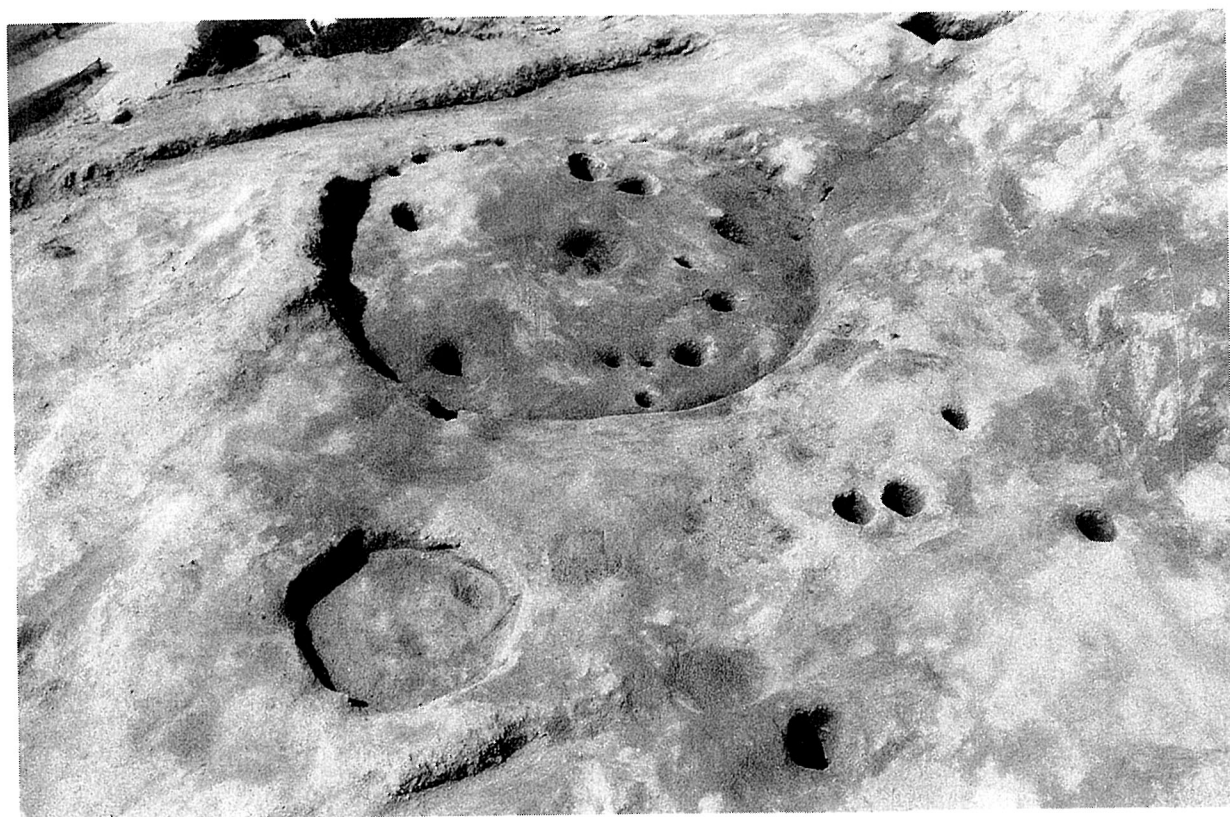
b B·C 地点遺跡第 25 号住居跡



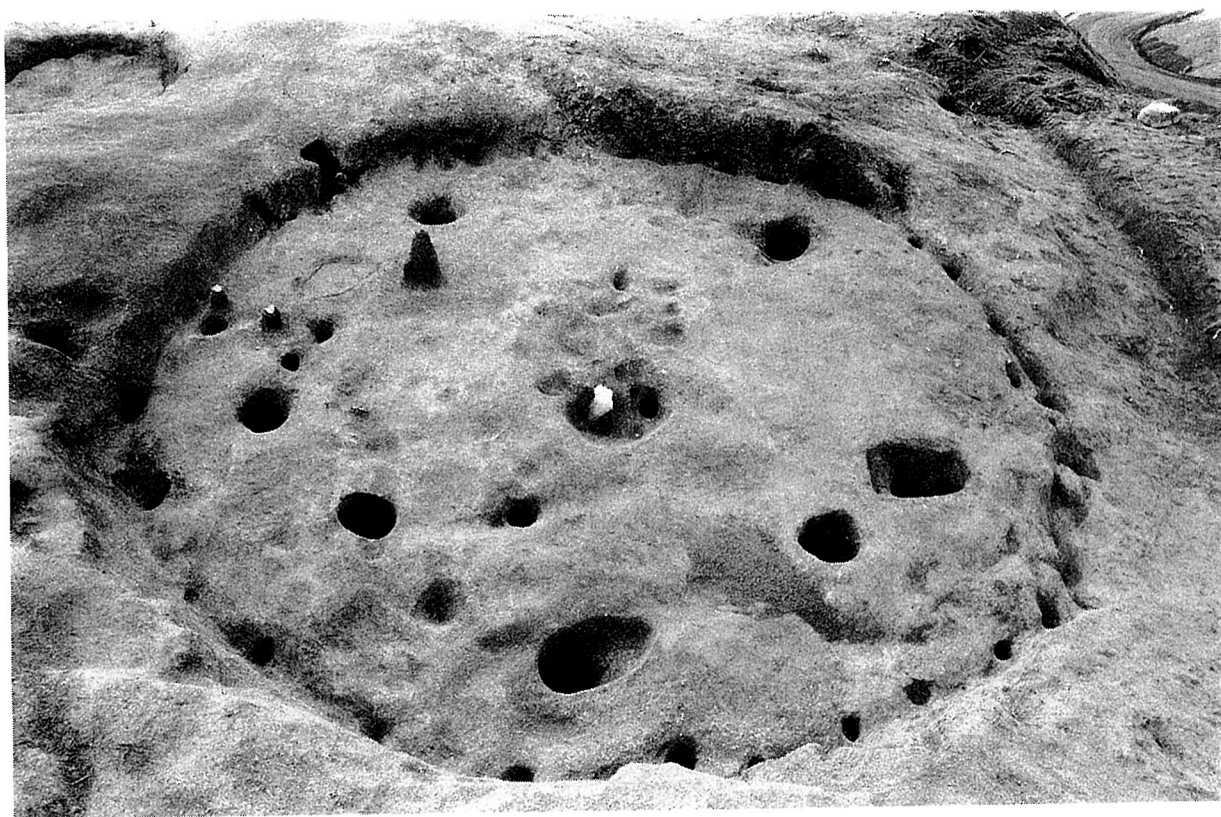
a B·C 地点遺跡第 24 号住居跡



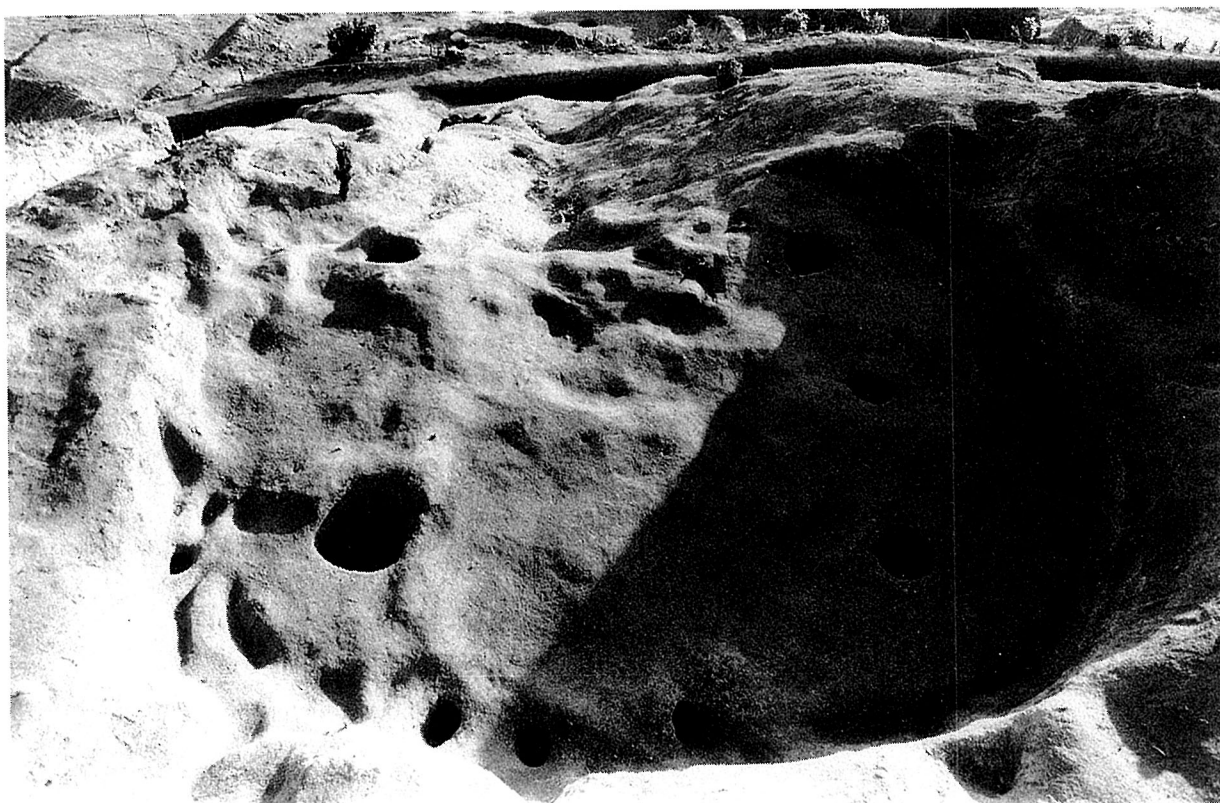
b B·C 地点遺跡第 26 号住居跡



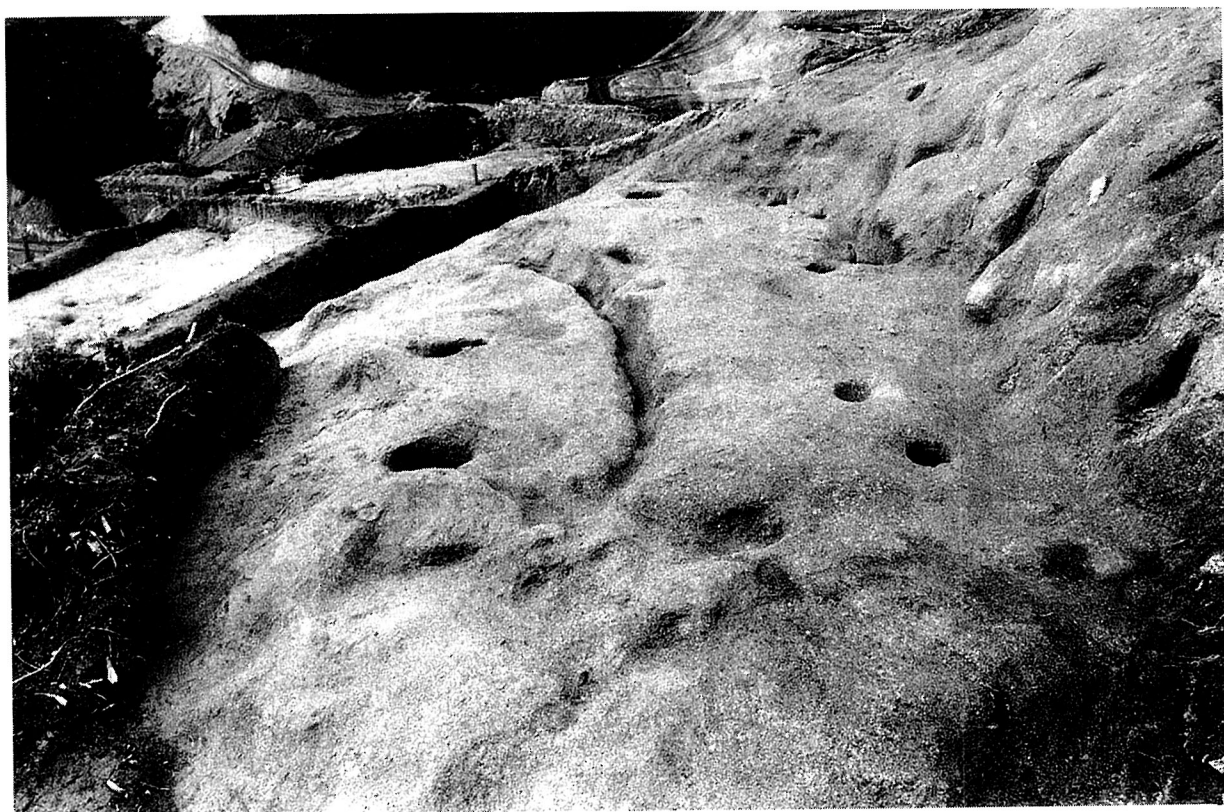
a B·C 地点遺跡第 27 号住居跡, 第 60 号土坑



b B·C 地点遺跡第 27 号住居跡



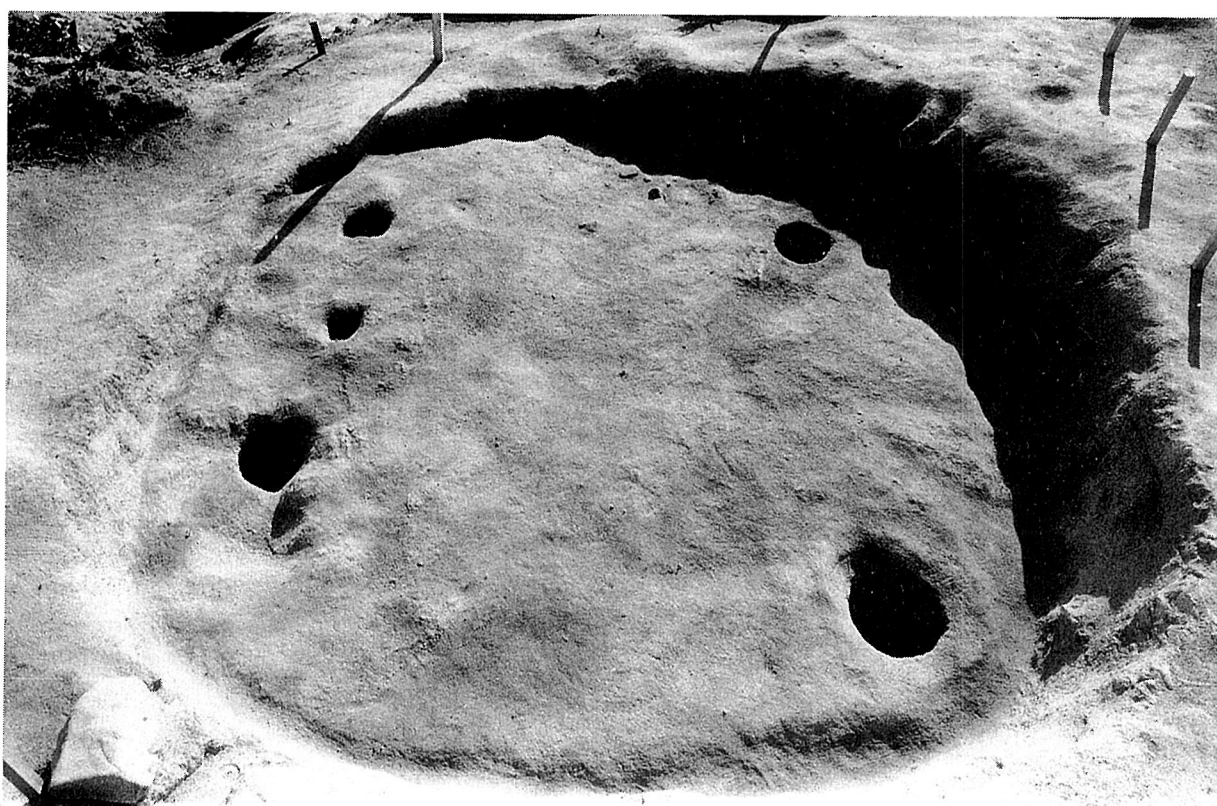
a B·C 地点遺跡第 28 号住居跡



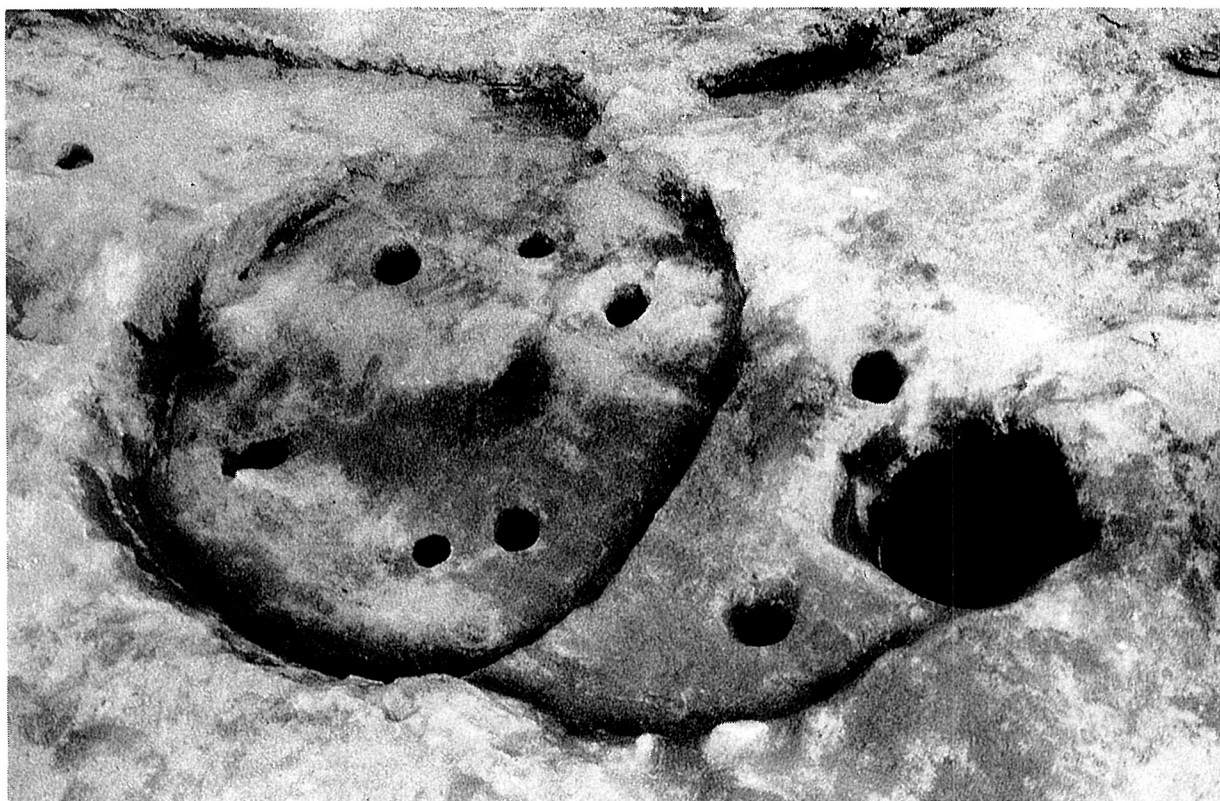
b B·C 地点遺跡第 29 号住居跡



a B・C 地点遺跡第 30 号住居跡炭化材出土状況



b B・C 地点遺跡第 30 号住居跡



a B・C 地点遺跡第 31 号・32 号住居跡



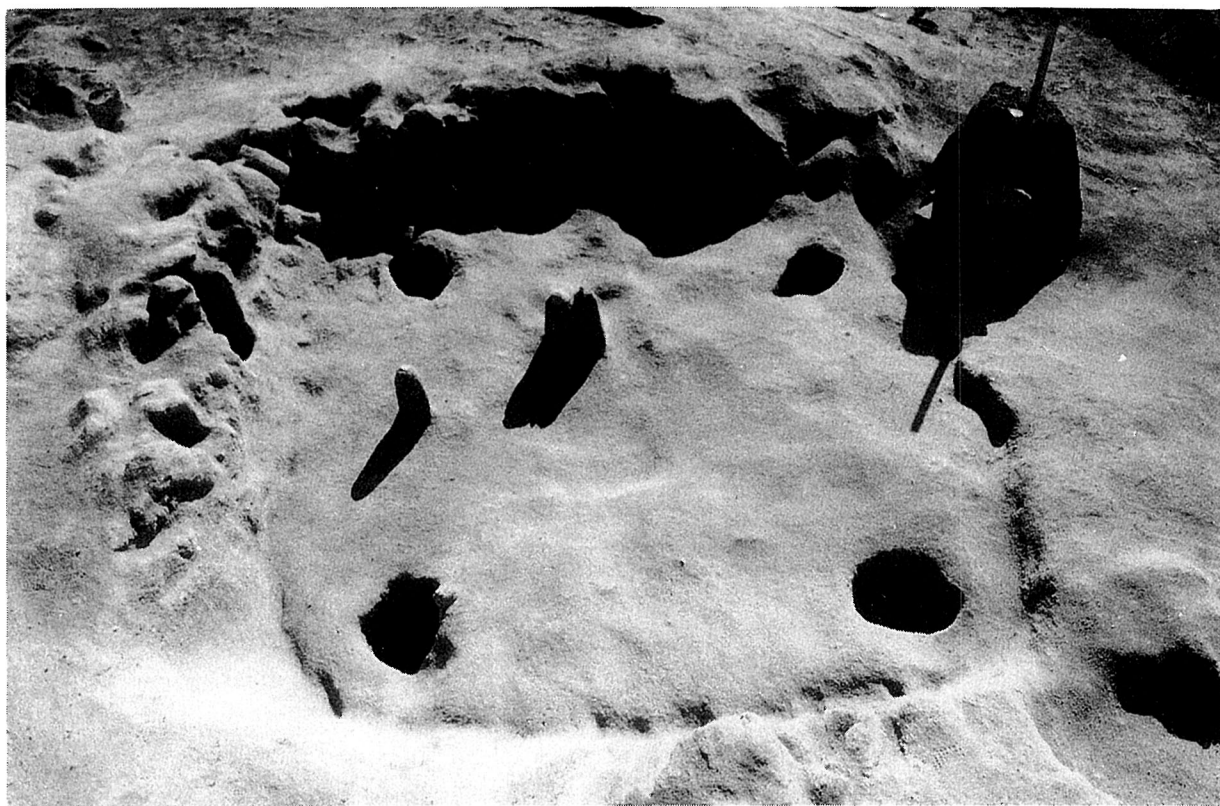
b B・C 地点遺跡第 33 号～第 42 号住居跡



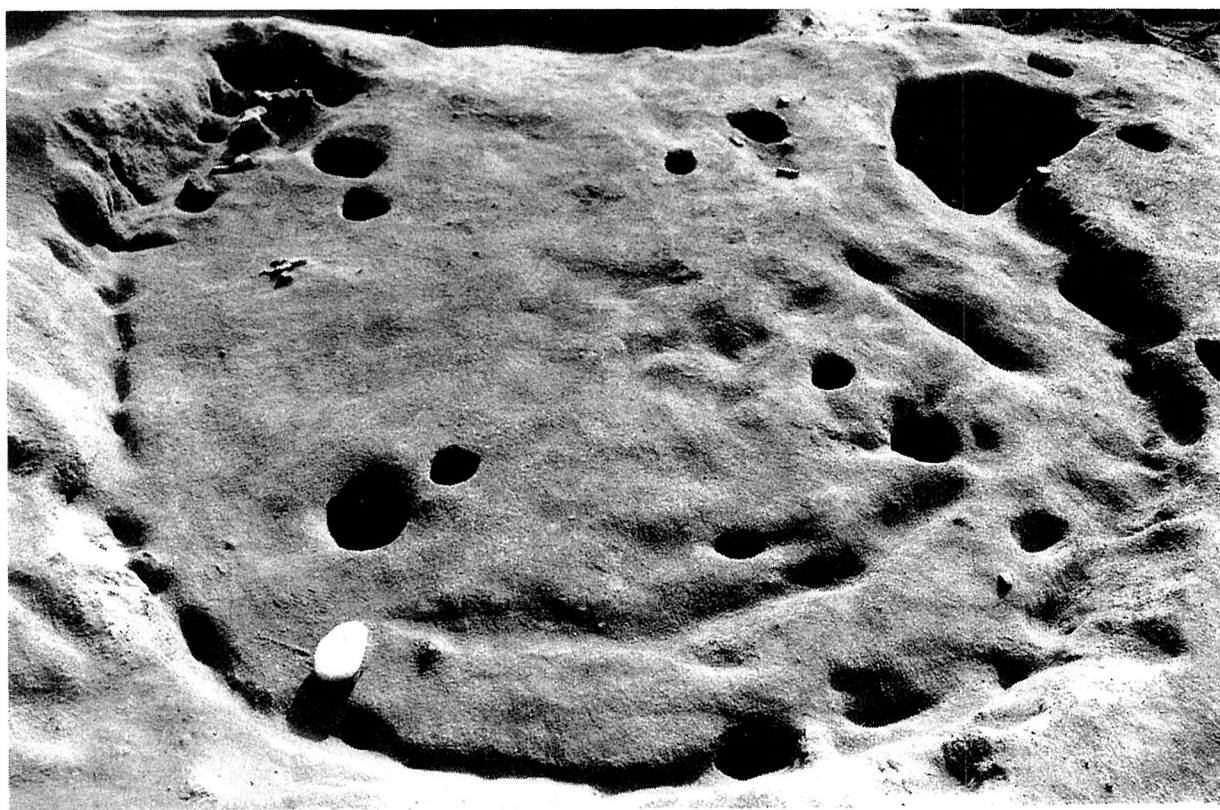
a B・C 地点遺跡第 33 号・第 34 号・第 35 号住居跡



b B・C 地点遺跡第 36 号～第 40 号住居跡



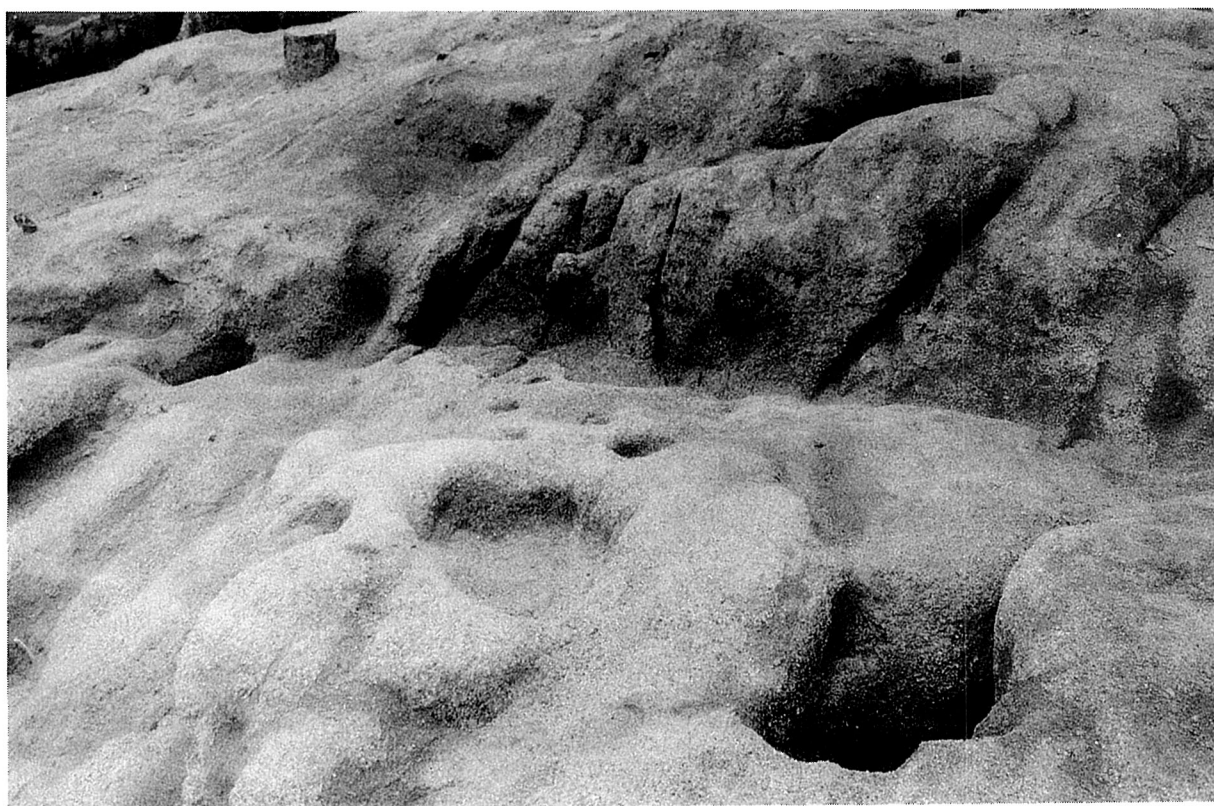
a B·C 地点遺跡第 41 号住居跡



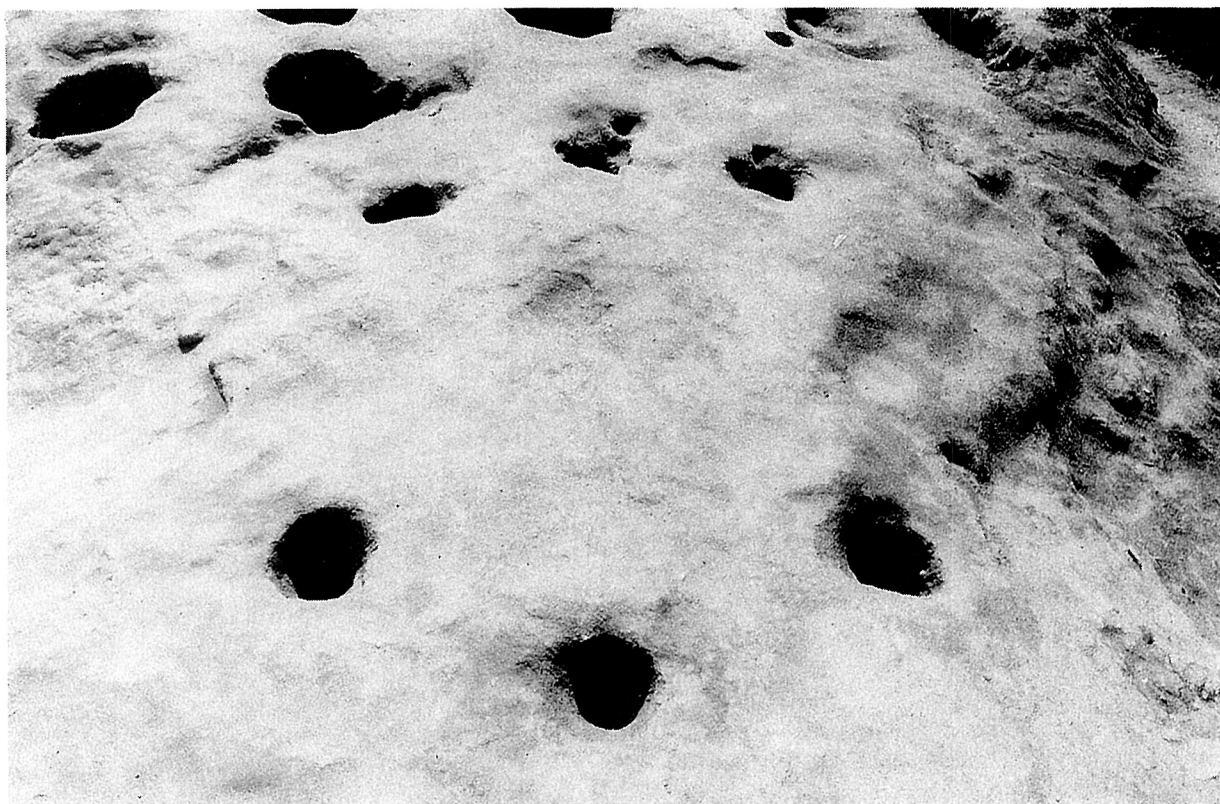
b B·C 地点遺跡第 42 号住居跡



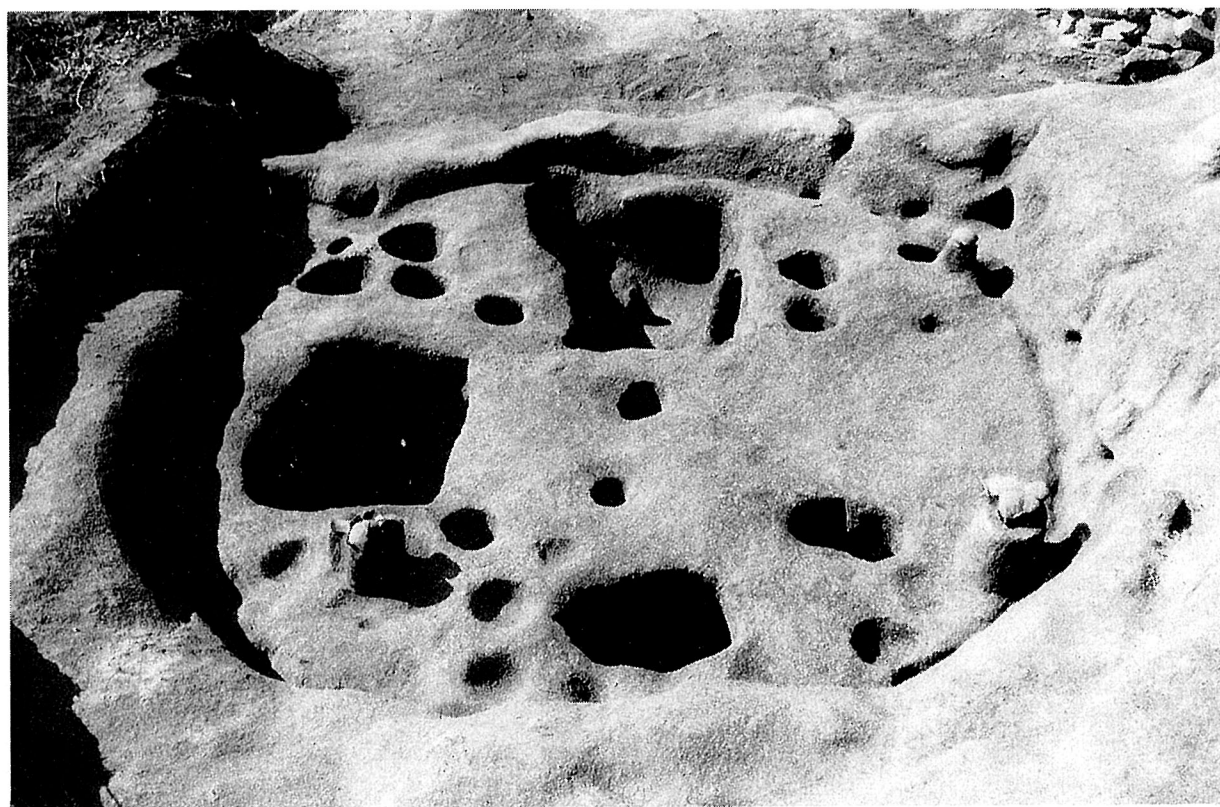
a B·C 地点遺跡第 43 号住居跡



b B·C 地点遺跡第 44 号住居跡



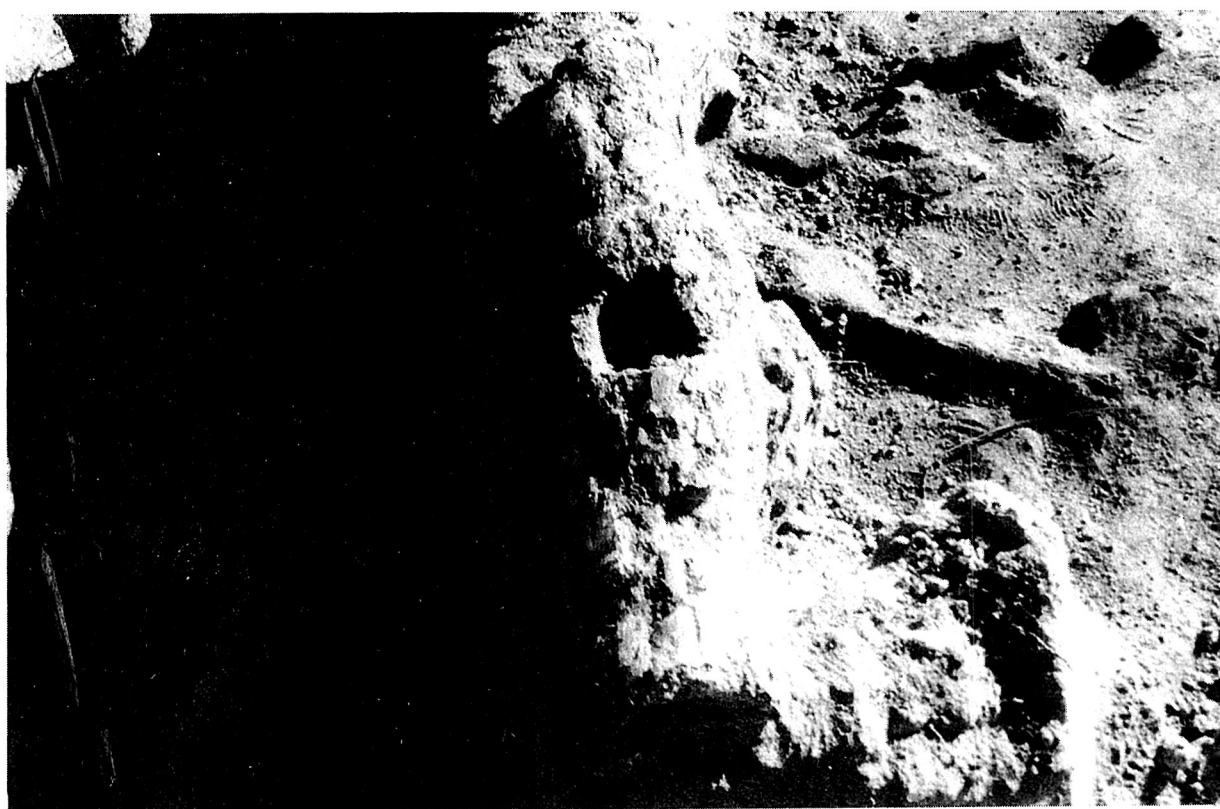
a B·C 地点遺跡第 45 号住居跡



b B·C 地点遺跡第 46 号住居跡



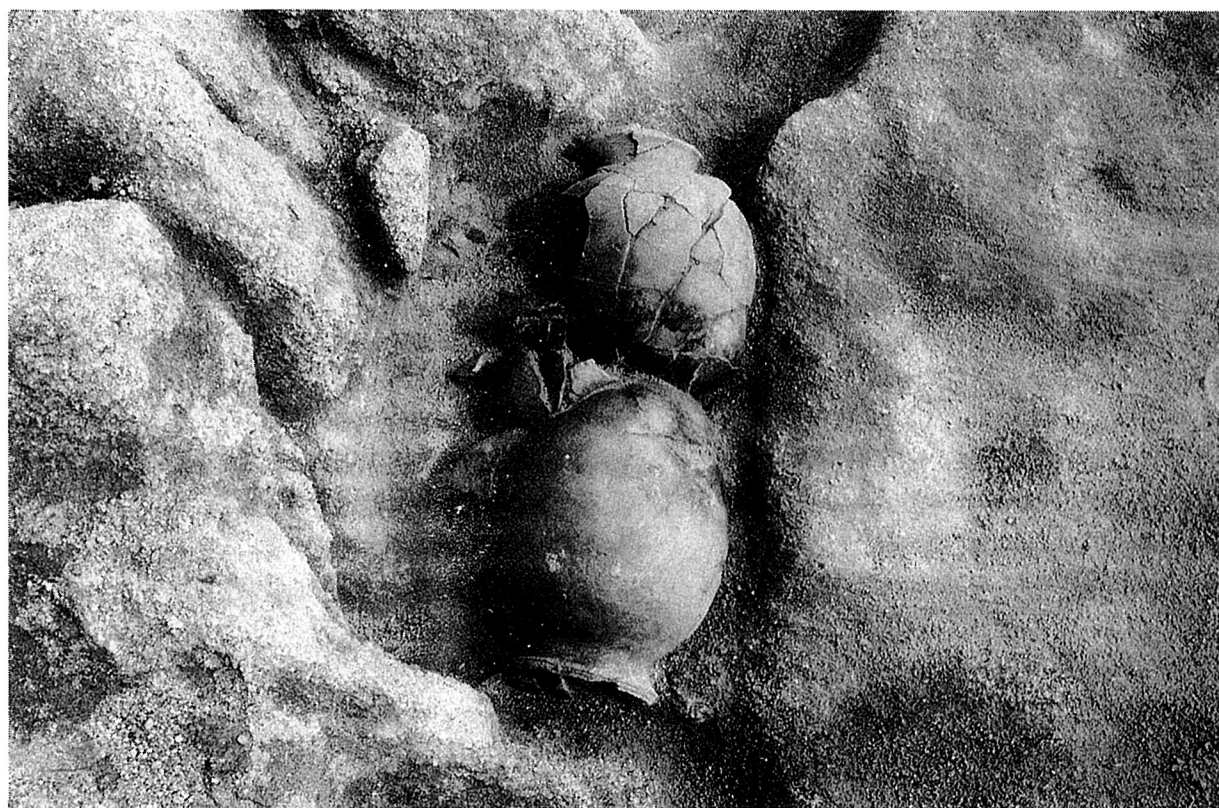
a B・C 地点遺跡第 3 号テラス状遺構土器出土状況



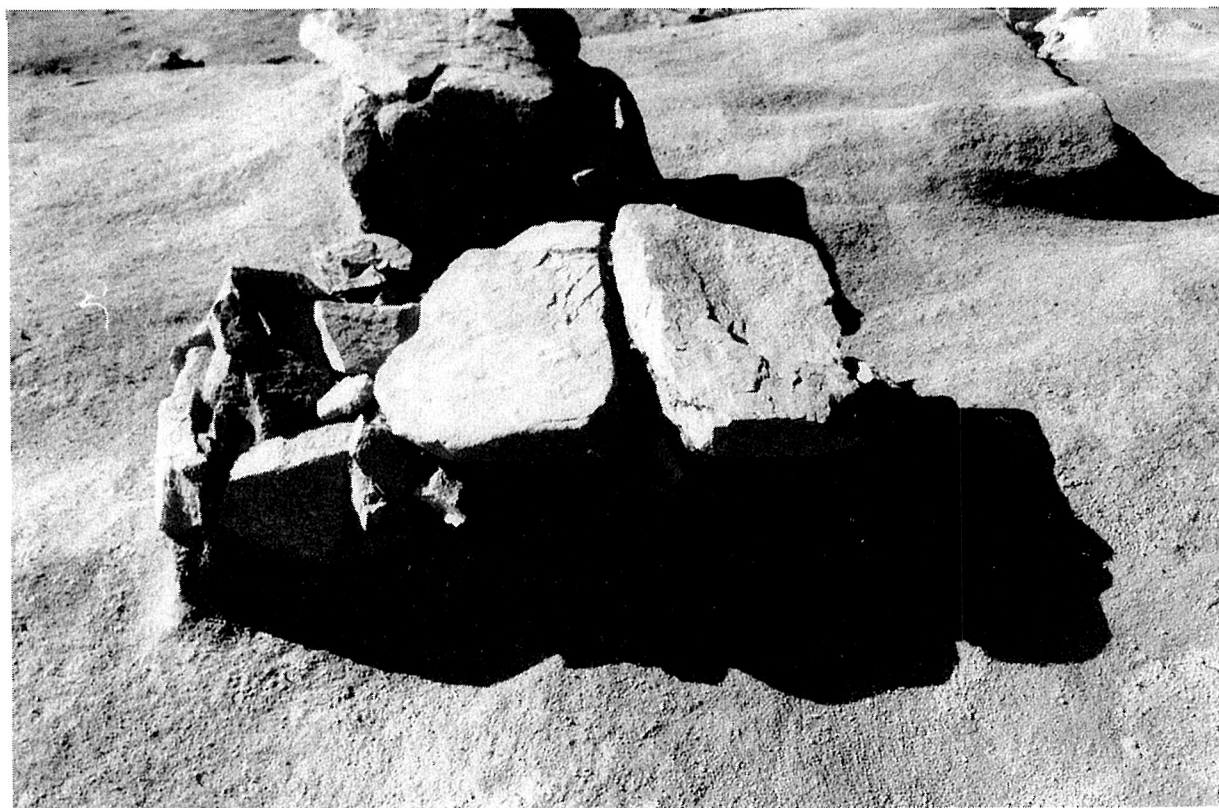
b B・C 地点遺跡第 30 号住居跡炭化材出土状況



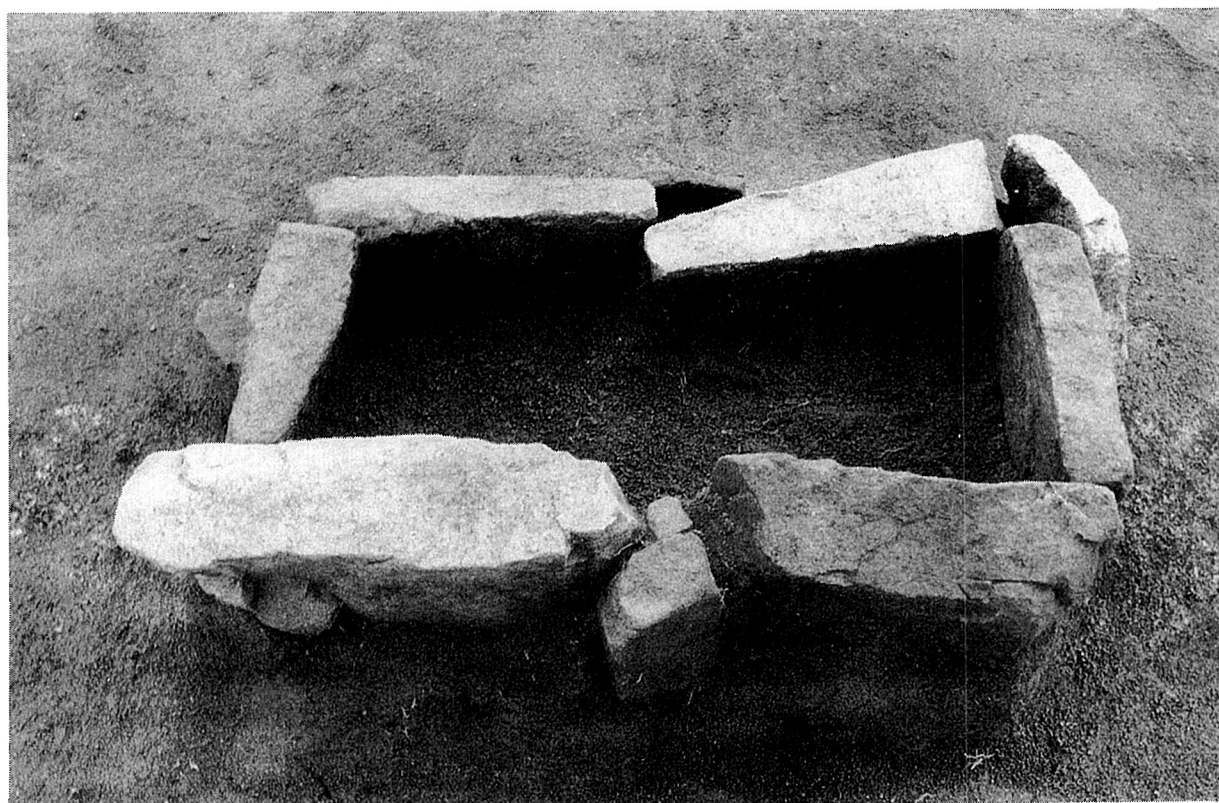
a B·C 地点遗迹土器棺墓



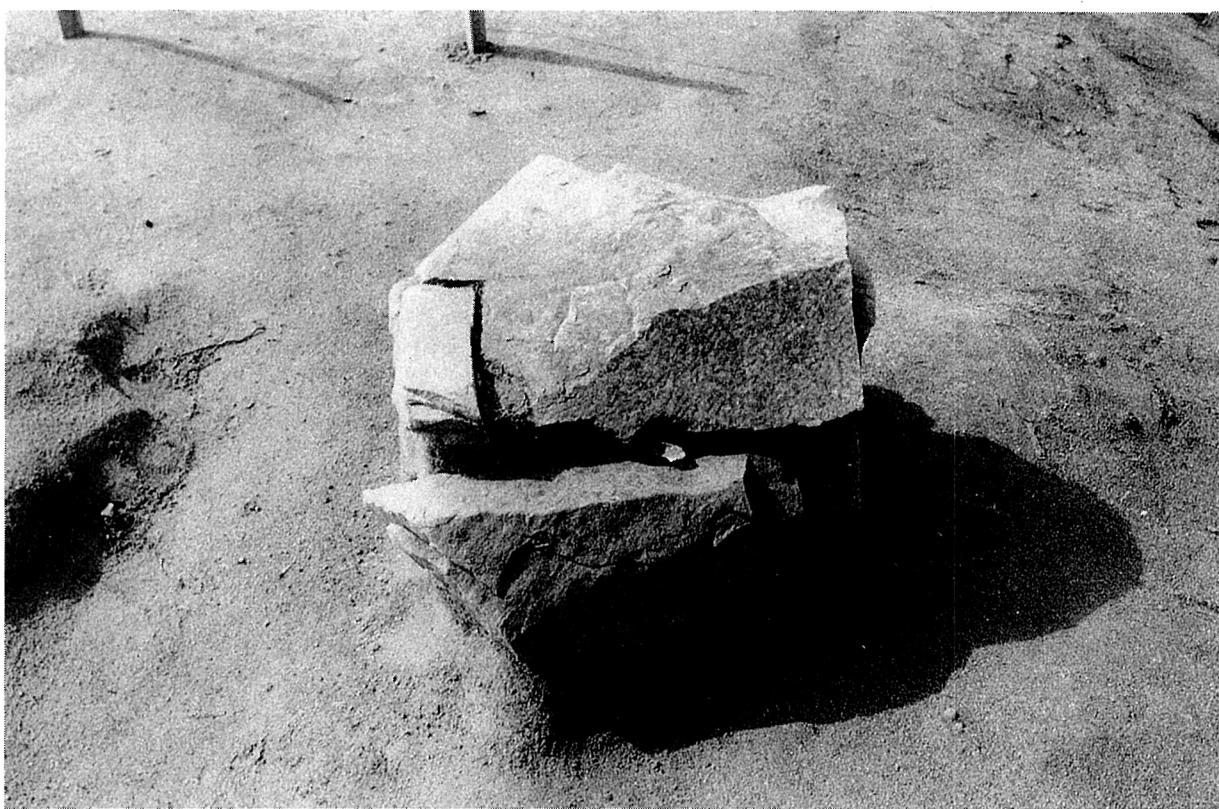
b B·C 地点遗迹土器盖土墳



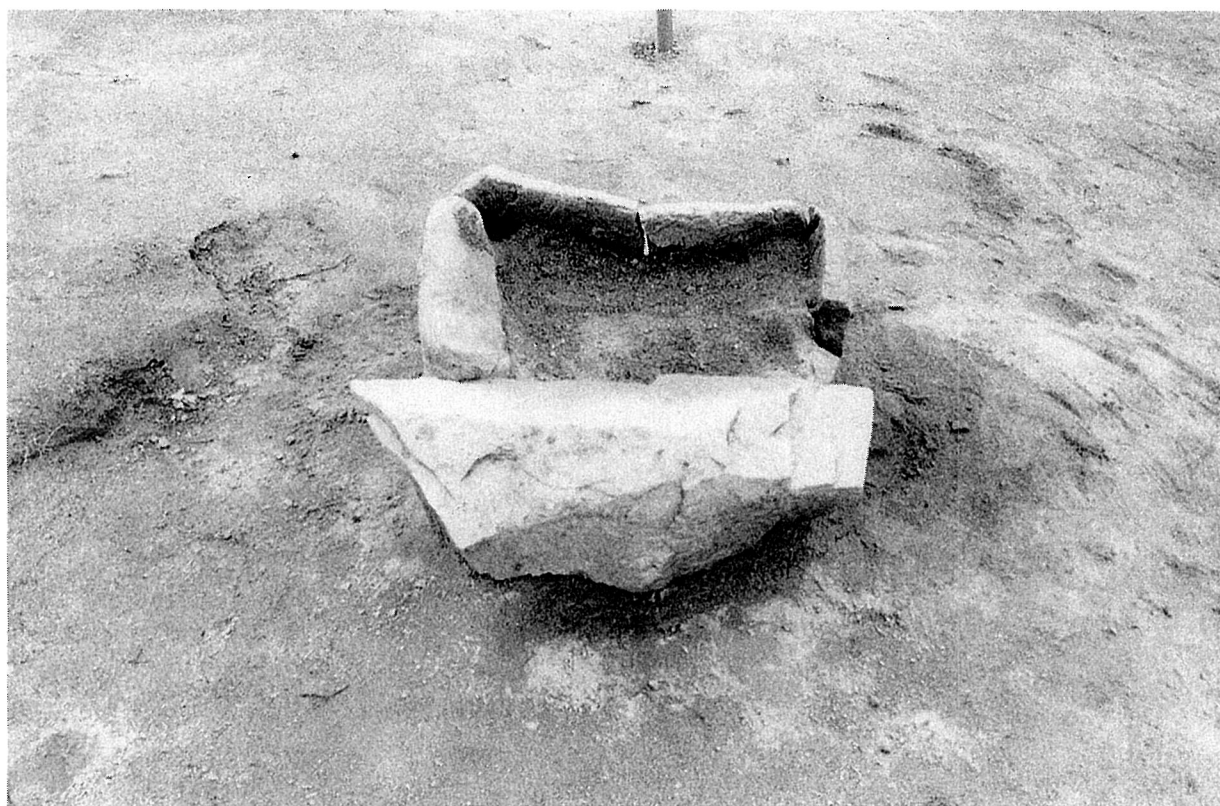
a B・C 地点遺跡第1号石棺（開棺前）



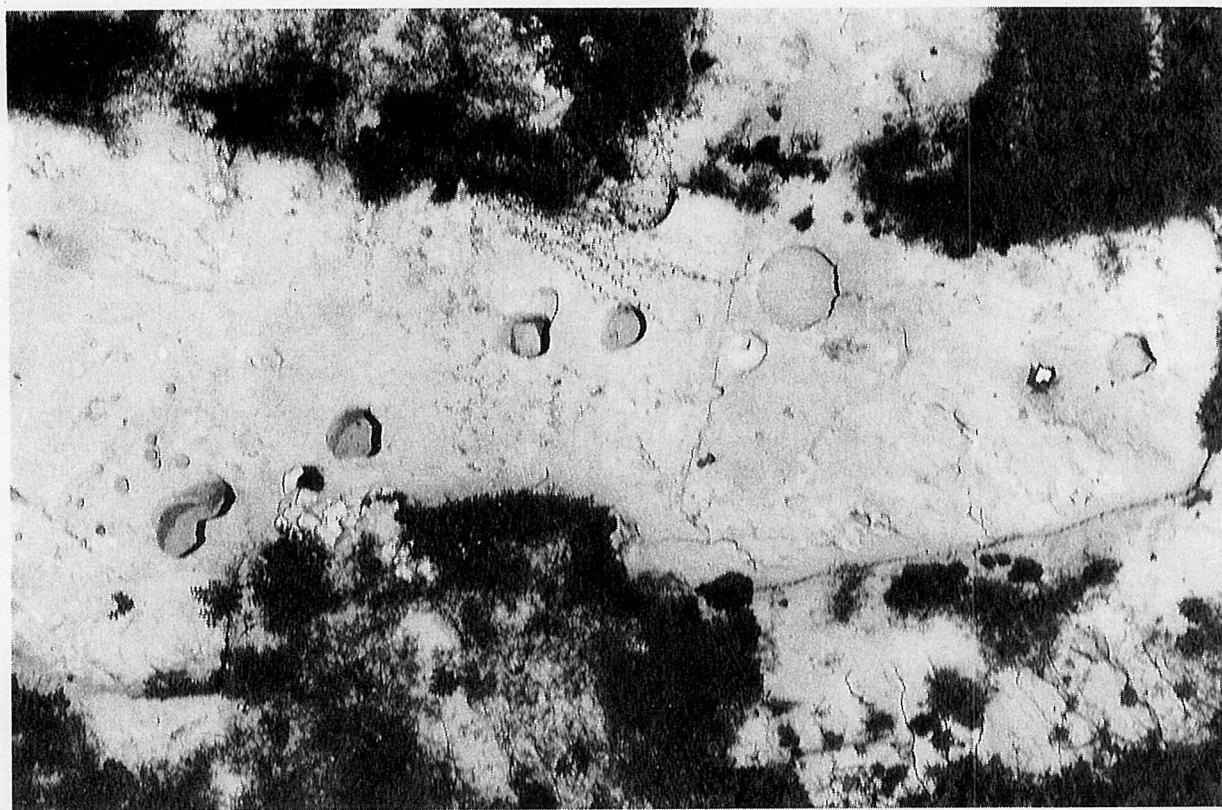
b B・C 地点遺跡第1号石棺（開棺後）



a B・C 地点遺跡第 2 号石棺（開棺前）



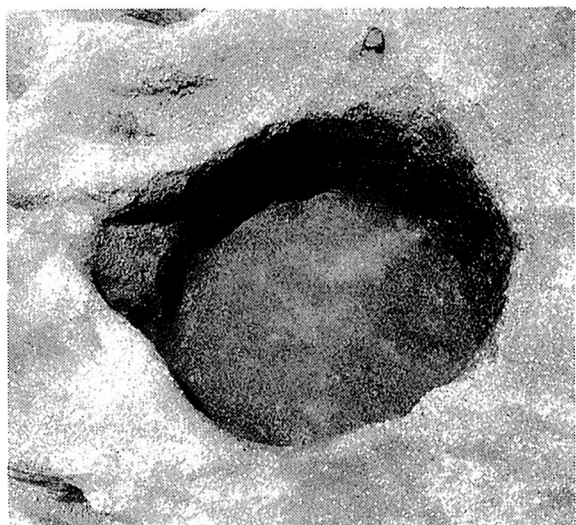
b B・C 地点遺跡第 2 号石棺（開棺後）



a B・C 地点遺跡第 1 号～第 9 号土壌



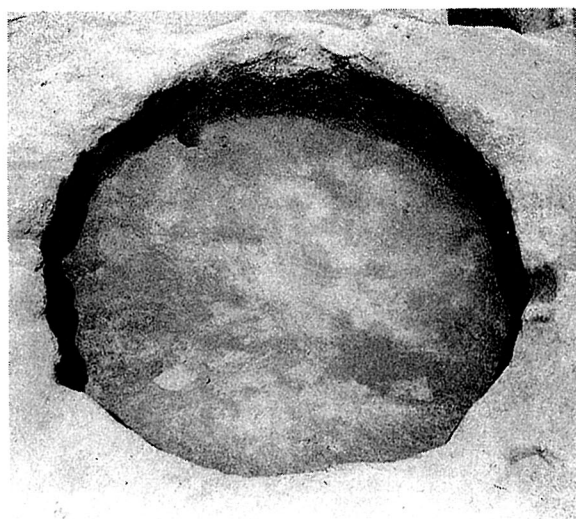
b B・C 地点遺跡第 80 号～第 91 号土壌



a B·C 地点遗迹第 1 号土坑



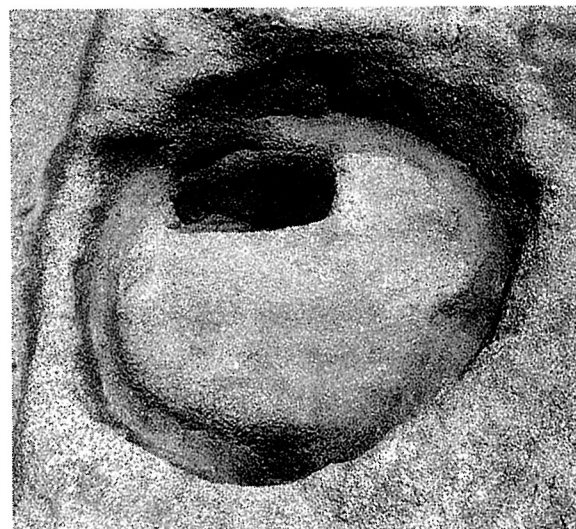
d B·C 地点遗迹第 4 号土坑



b B·C 地点遗迹第 2 号土坑



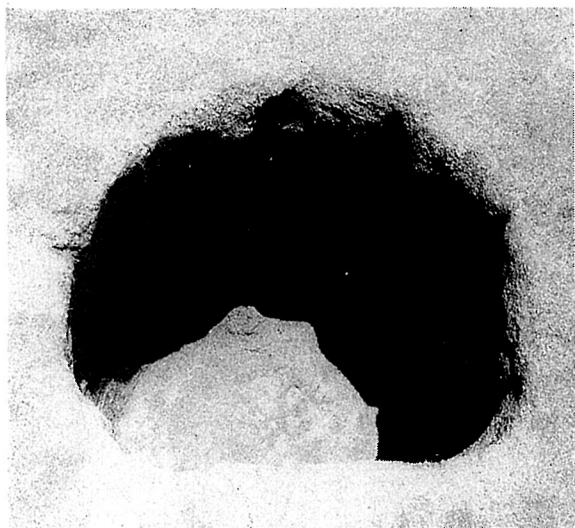
e B·C 地点遗迹第 5 号土坑



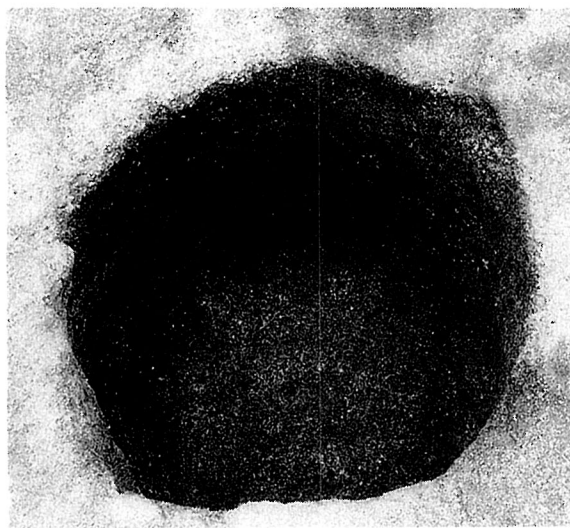
c B·C 地点遗迹第 3 号土坑



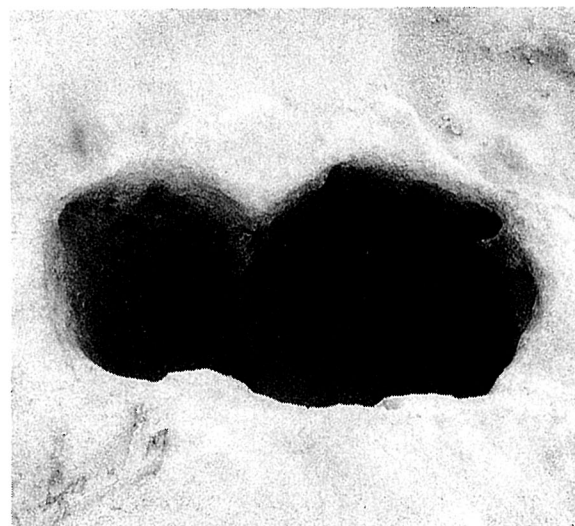
f B·C 地点遗迹第 6 号土坑



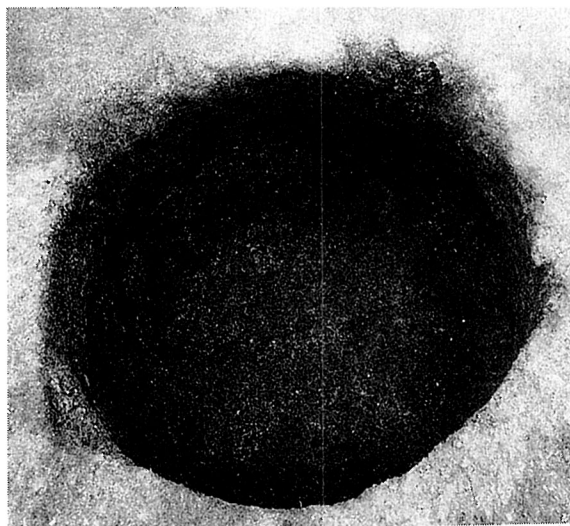
a B·C 地点遺跡第 7 号土壤



d B·C 地点遺跡第 11 号土壤



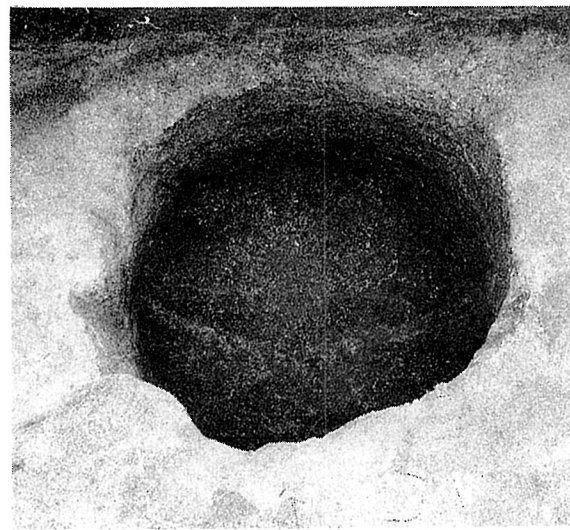
b B·C 地点遺跡第 8 号・第 9 号土壤



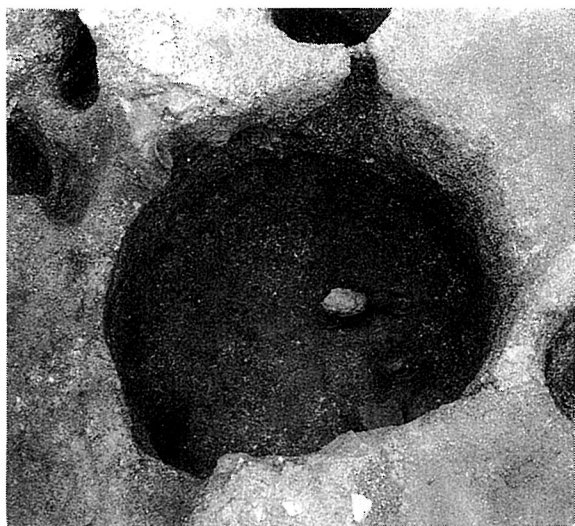
e B·C 地点遺跡第 12 号土壤



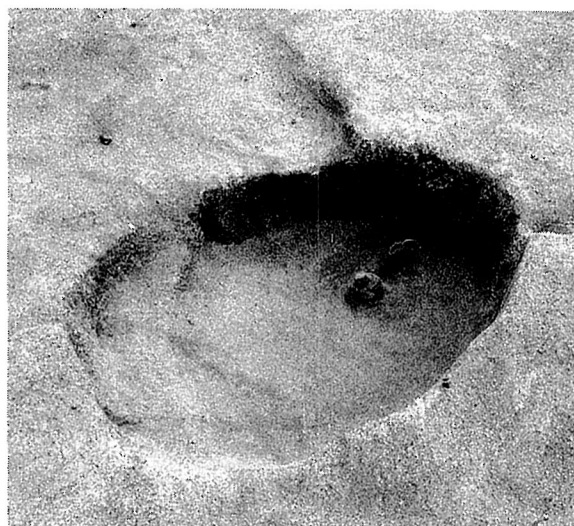
c B·C 地点遺跡第 10 号土壤



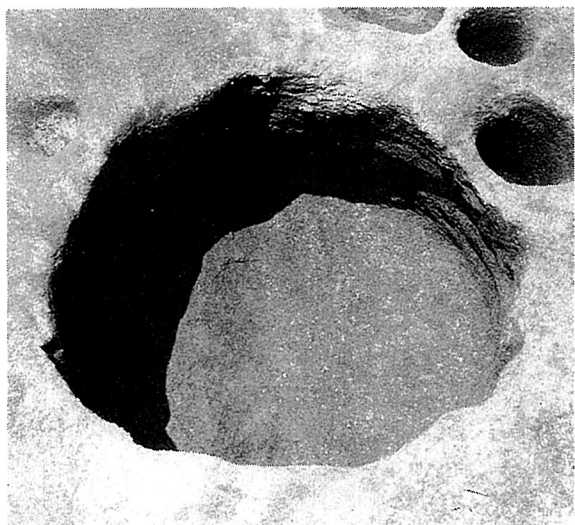
f B·C 地点遺跡第 13 号土壤



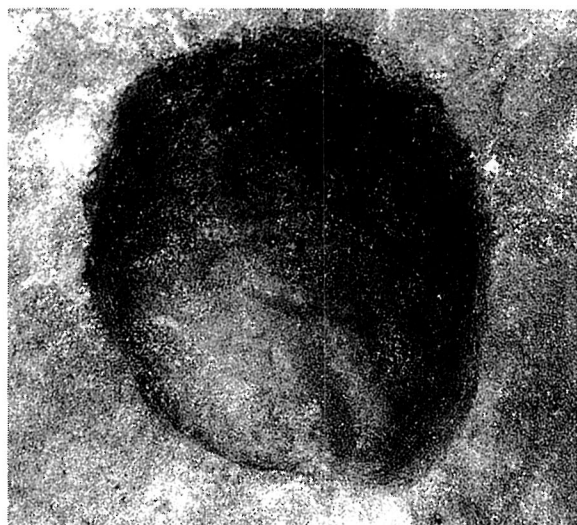
a B·C 地点遺跡第 14 号土坑



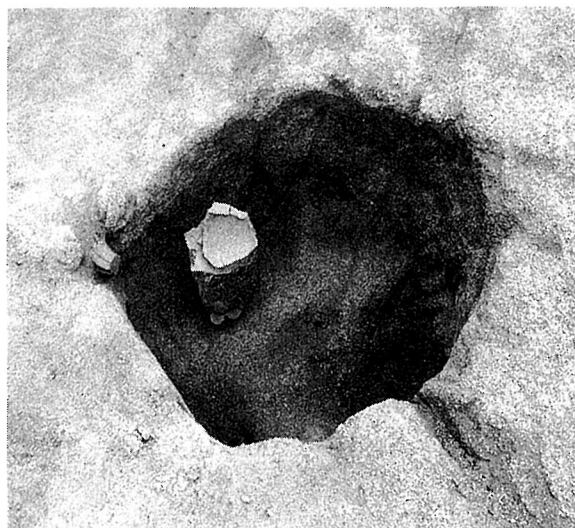
d B·C 地点遺跡第 18 号土坑



b B·C 地点遺跡第 15 号土坑



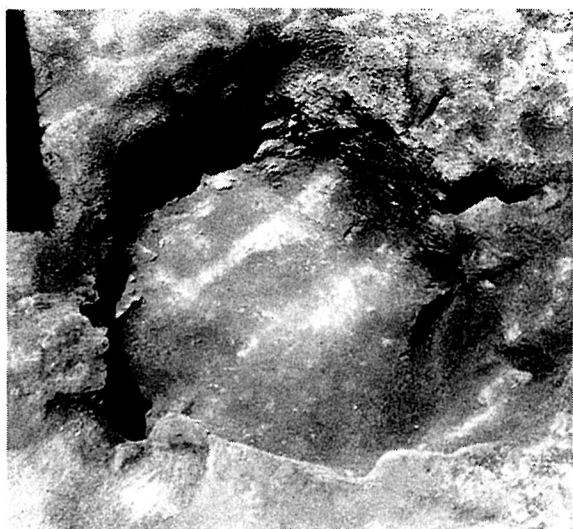
e B·C 地点遺跡第 19 号土坑



c B·C 地点遺跡第 16 号土坑



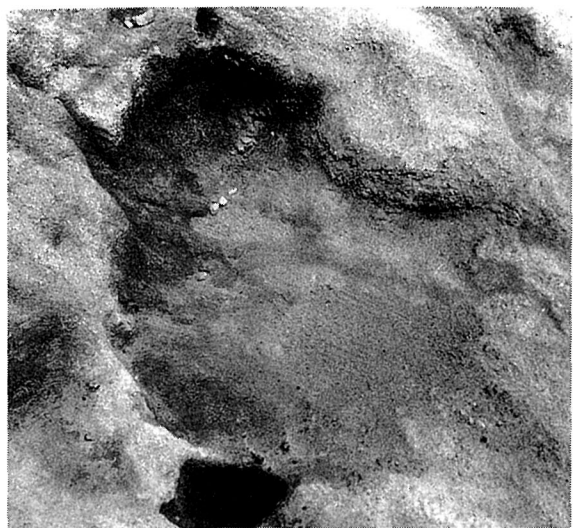
f B·C 地点遺跡第 20 号土坑



a B·C 地点遗迹第 21 号土壤



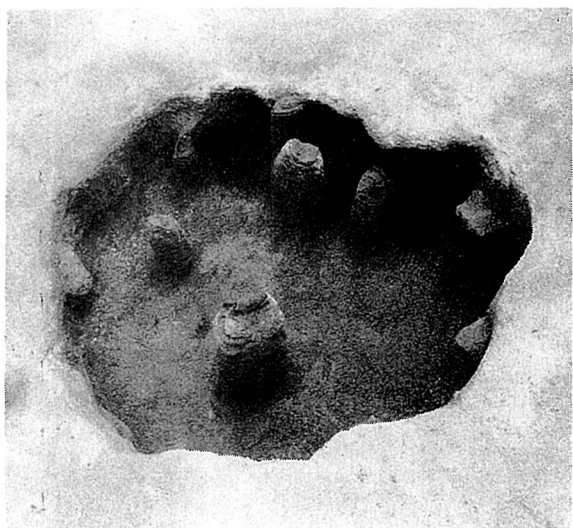
d B·C 地点遗迹第 25 号·第 26 号土壤



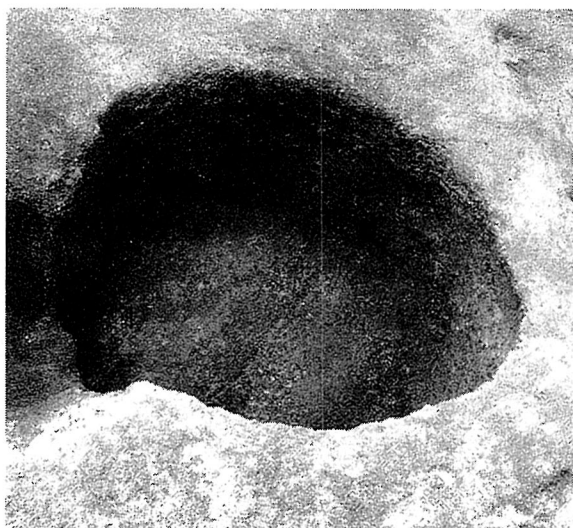
b B·C 地点遗迹第 22 号·第 23 号土壤



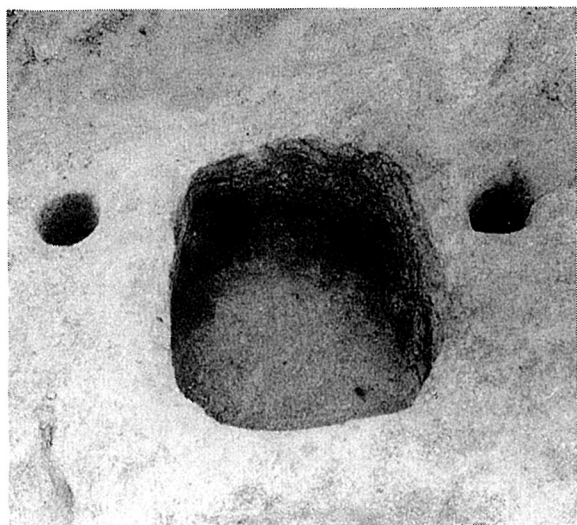
e B·C 地点遗迹第 27 号土壤



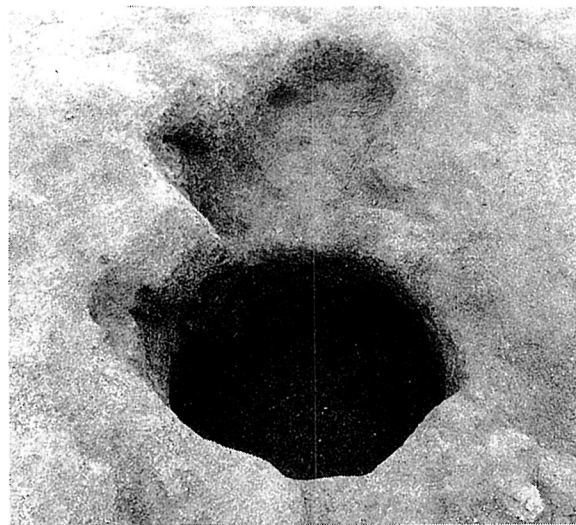
c B·C 地点遗迹第 24 号土壤



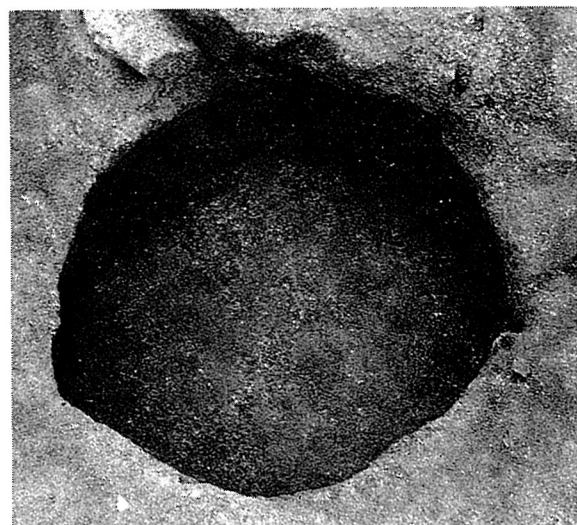
f B·C 地点遗迹第 28 号土壤



a B·C 地点遗迹第 29 号土坑



d B·C 地点遗迹第 32 号土坑



b B·C 地点遗迹第 30 号土坑



e B·C 地点遗迹第 33 号土坑



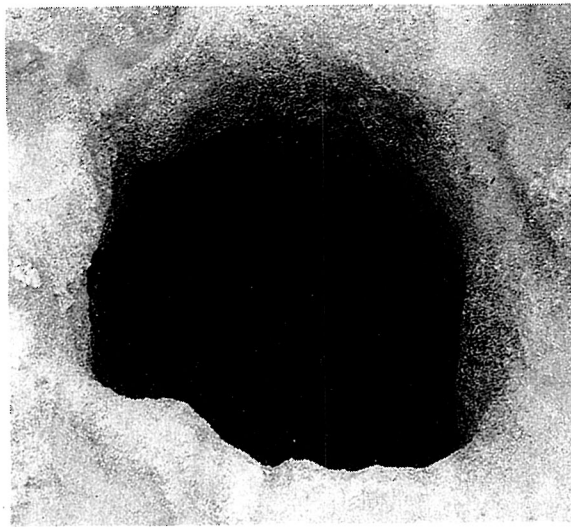
c B·C 地点遗迹第 31 号土坑



f B·C 地点遗迹第 34 号土坑



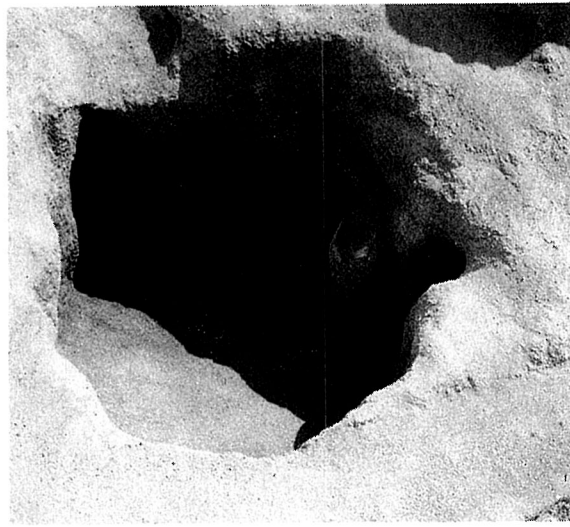
a B·C 地点遗迹第 35 号土坑



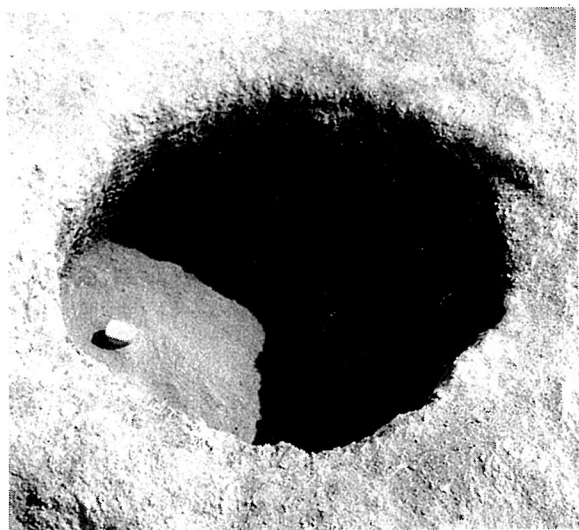
d B·C 地点遗迹第 38 号土坑



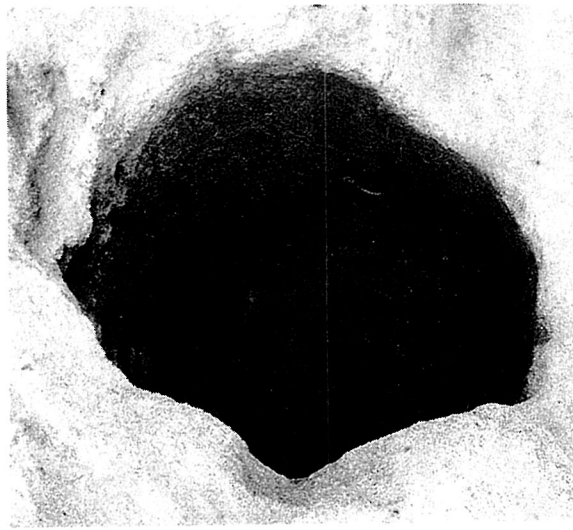
b B·C 地点遗迹第 36 号土坑



e B·C 地点遗迹第 39 号土坑



c B·C 地点遗迹第 37 号土坑



f B·C 地点遗迹第 40 号土坑



a B·C 地点遺跡第 41 号土壙



d B·C 地点遺跡第 44 号土壙



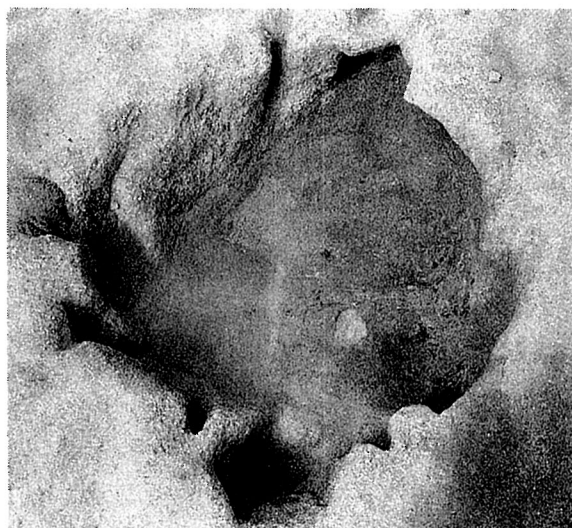
b B·C 地点遺跡第 42 号土壙



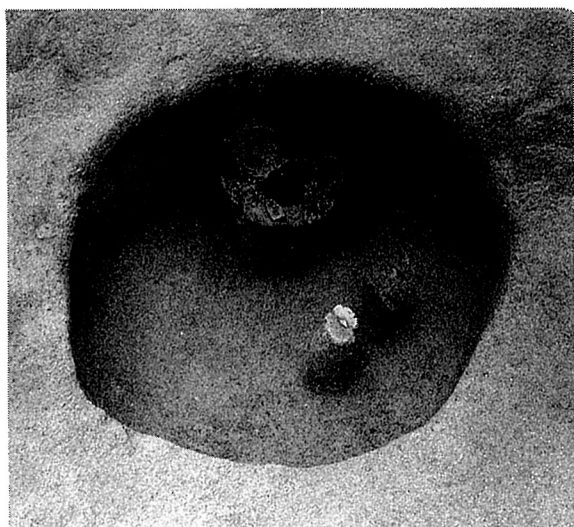
e B·C 地点遺跡第 45 号土壙



c B·C 地点遺跡第 43 号土壙



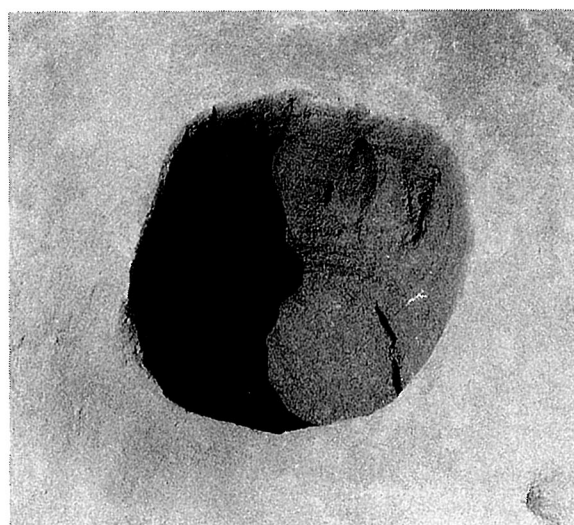
f B·C 地点遺跡第 46 号土壙



a B·C 地点遗迹第 47 号土坑



d B·C 地点遗迹第 50 号土坑



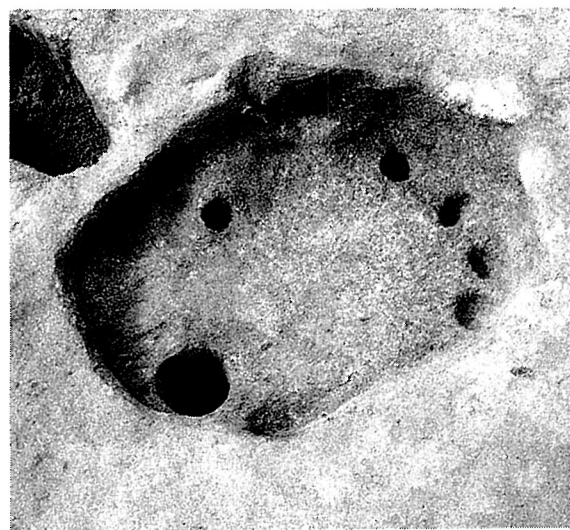
b B·C 地点遗迹第 48 号土坑



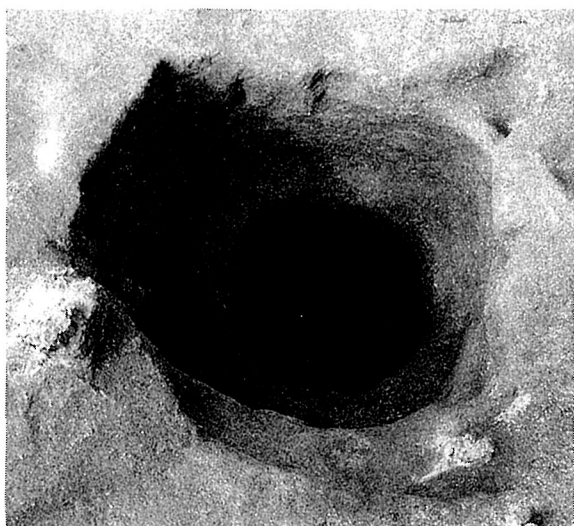
e B·C 地点遗迹第 51 号土坑



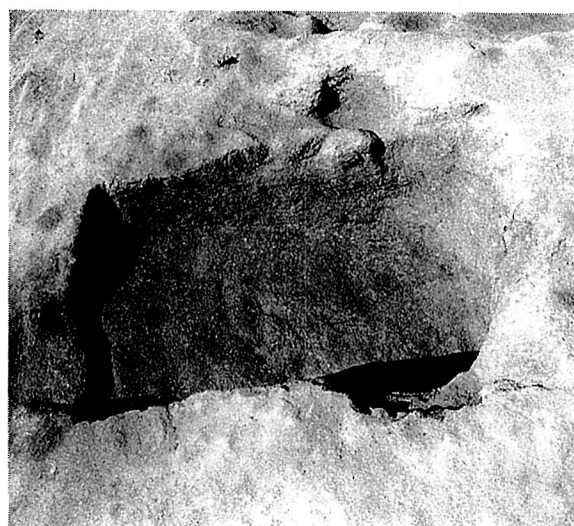
c B·C 地点遗迹第 49 号土坑



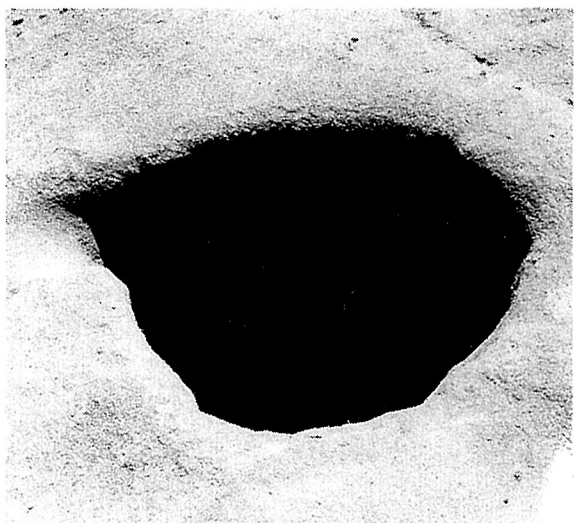
f B·C 地点遗迹第 52 号土坑



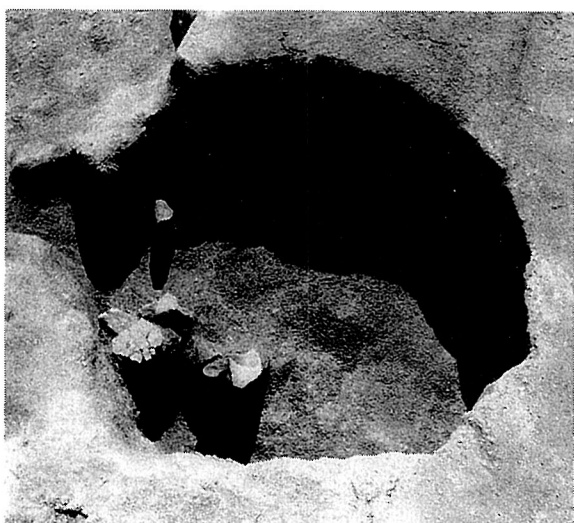
a B·C 地点遗迹第 53 号土坑



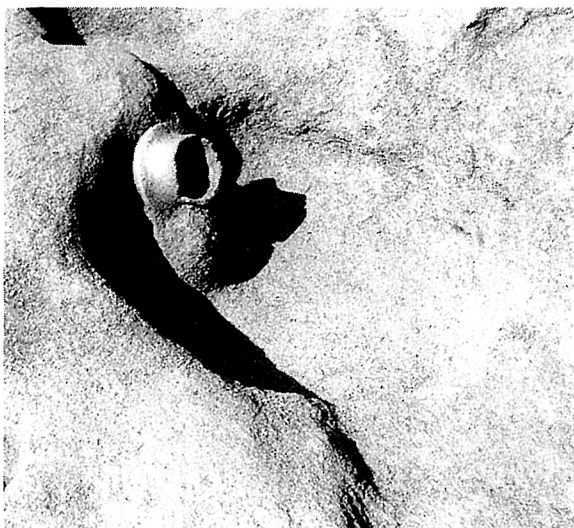
d B·C 地点遗迹第 57 号土坑



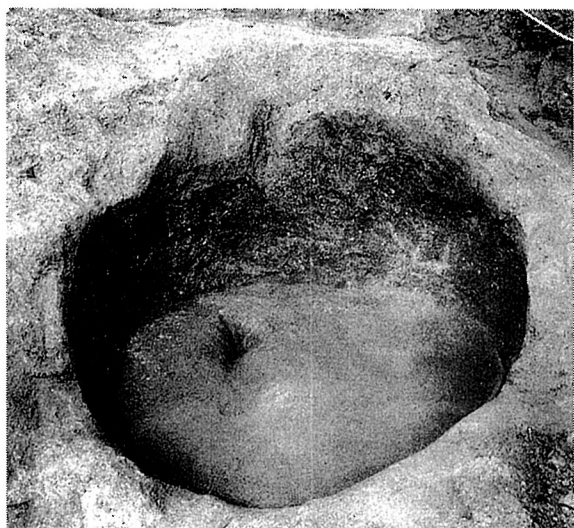
b B·C 地点遗迹第 54 号土坑



e B·C 地点遗迹第 58 号土坑



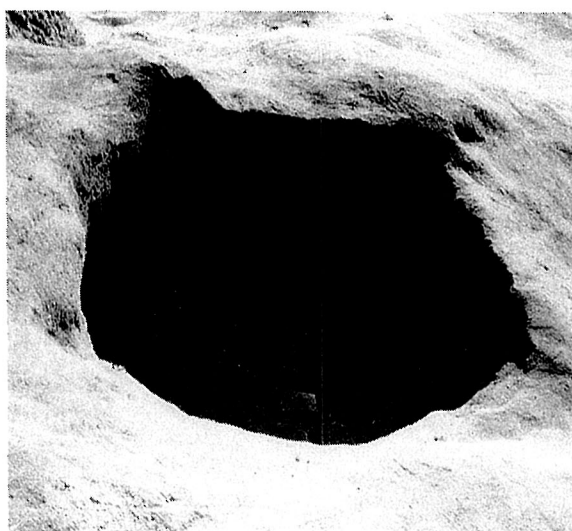
c B·C 地点遗迹第 56 号土坑



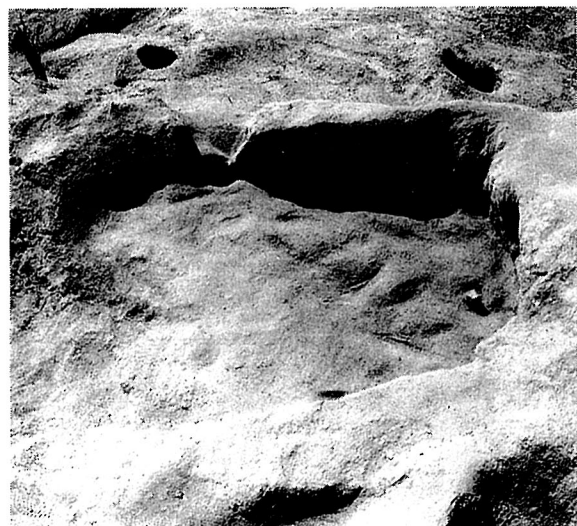
f B·C 地点遗迹第 59 号土坑



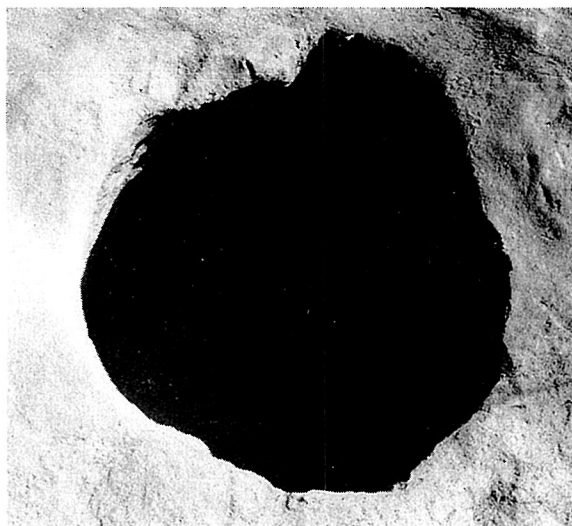
a B・C 地点遺跡第 60 号土壌



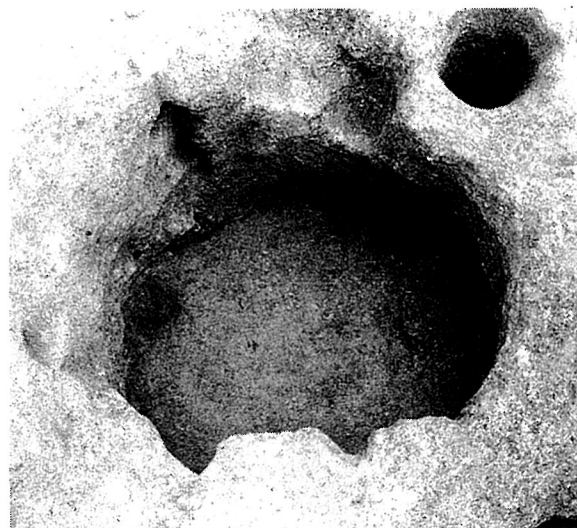
d B・C 地点遺跡第 63 号土壌



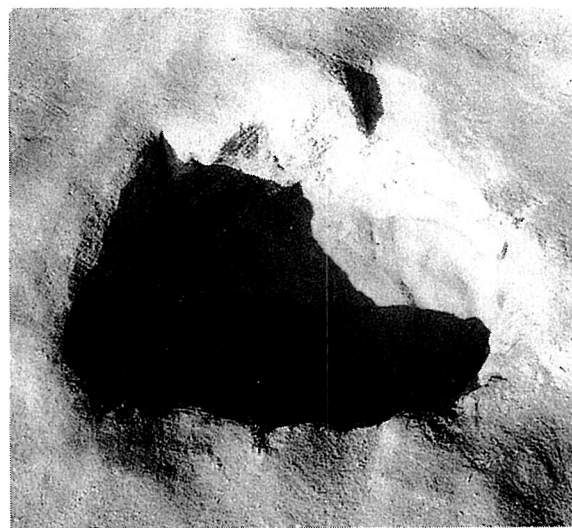
b B・C 地点遺跡第 61 号土壌



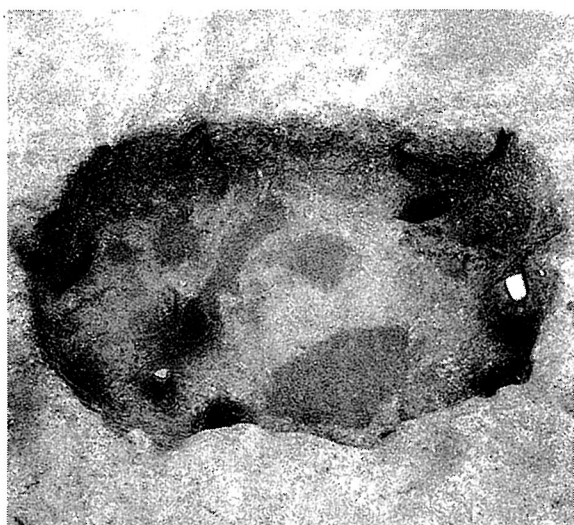
e B・C 地点遺跡第 64 号土壌



c B・C 地点遺跡第 62 号土壌



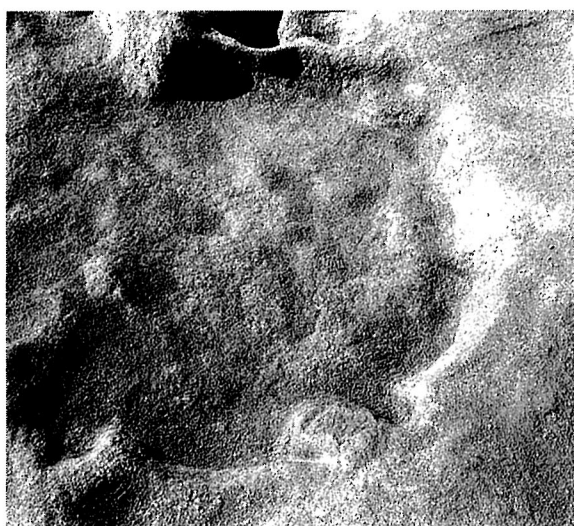
f B・C 地点遺跡第 65 号土壌



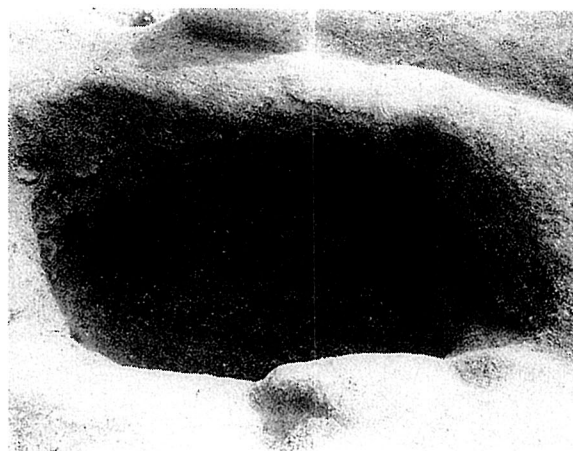
a B·C 地点遗迹第 66 号土坑



d B·C 地点遗迹第 70 号土坑



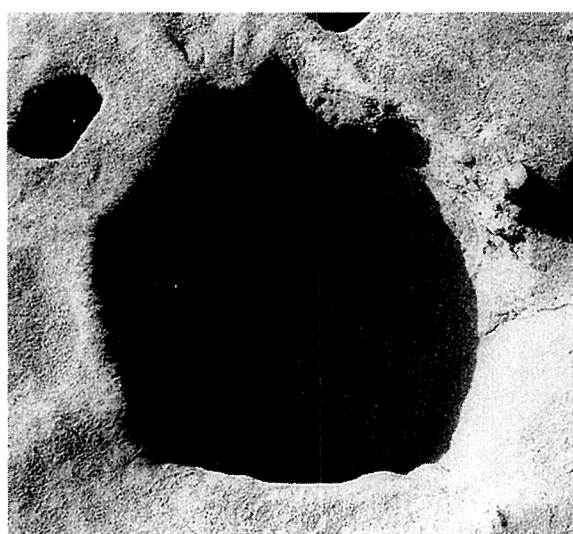
b B·C 地点遗迹第 67 号土坑



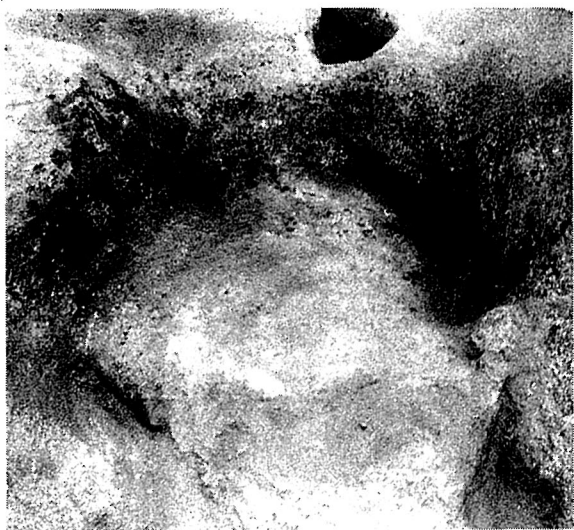
e B·C 地点遗迹第 71 号土坑



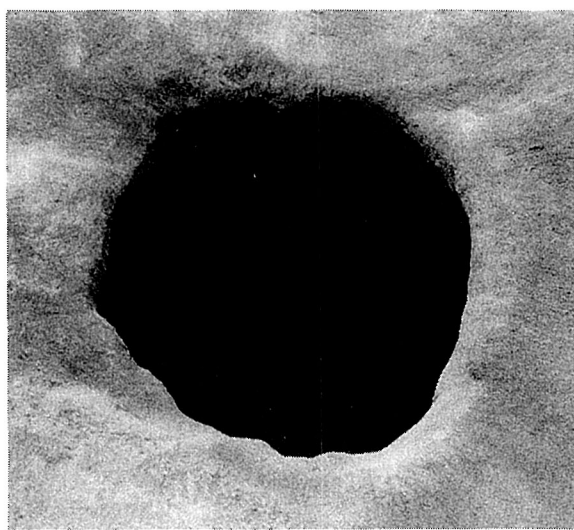
c B·C 地点遗迹第 68 号·第 69 号土坑



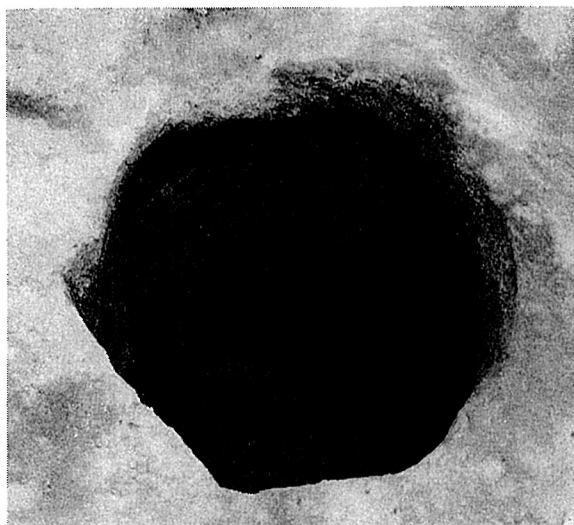
f B·C 地点遗迹第 75 号土坑



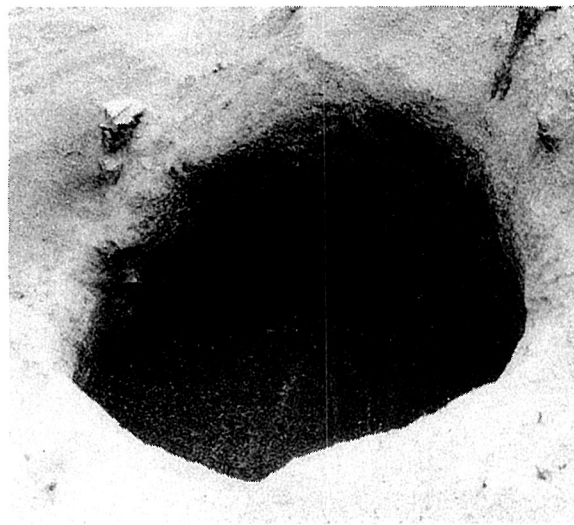
a B·C 地点遺跡第 76 号土坑



d B·C 地点遺跡第 79 号土坑



b B·C 地点遺跡第 77 号土坑



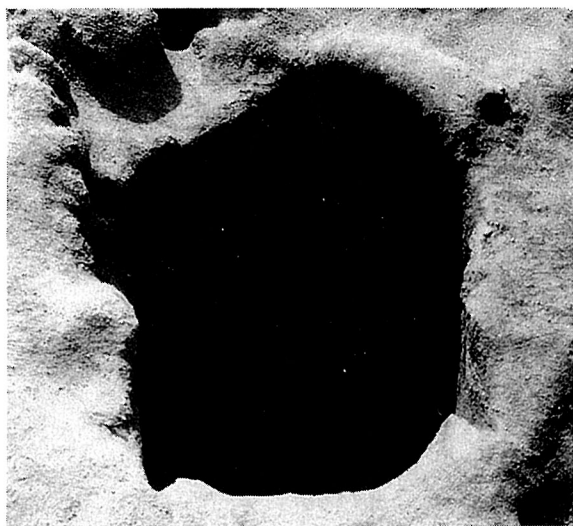
e B·C 地点遺跡第 80 号土坑



c B·C 地点遺跡第 78 号土坑



f B·C 地点遺跡第 81 号土坑



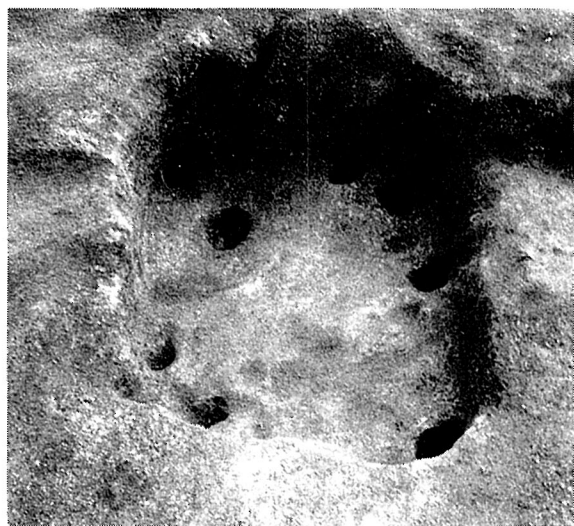
a B·C 地点遺跡第 82 号土壙



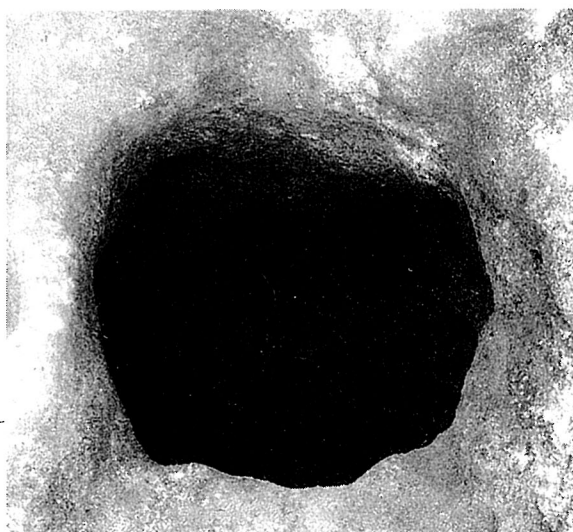
d B·C 地点遺跡第 85 号土壙



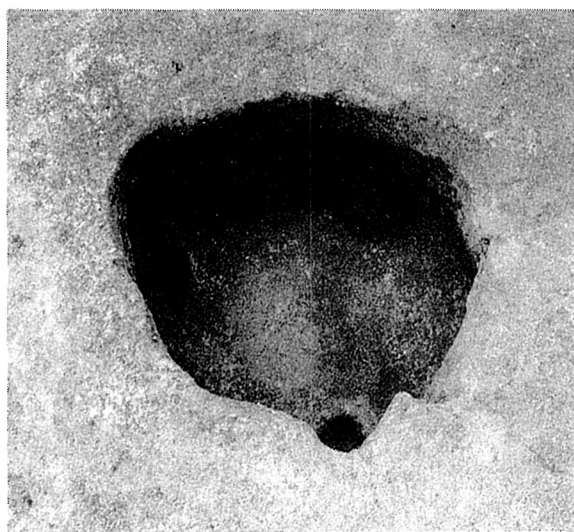
b B·C 地点遺跡第 83 号土壙



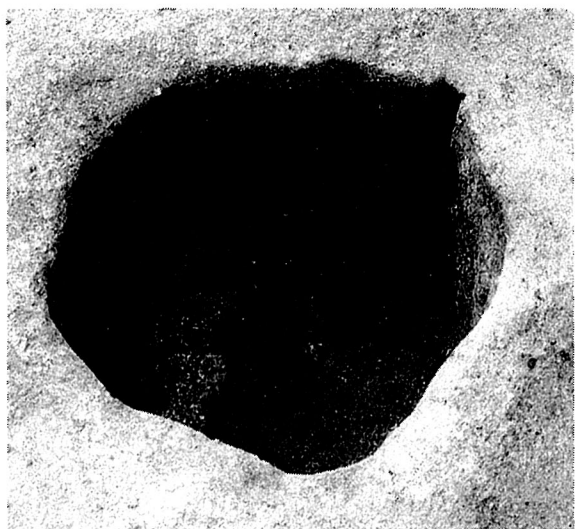
e B·C 地点遺跡第 86 号土壙



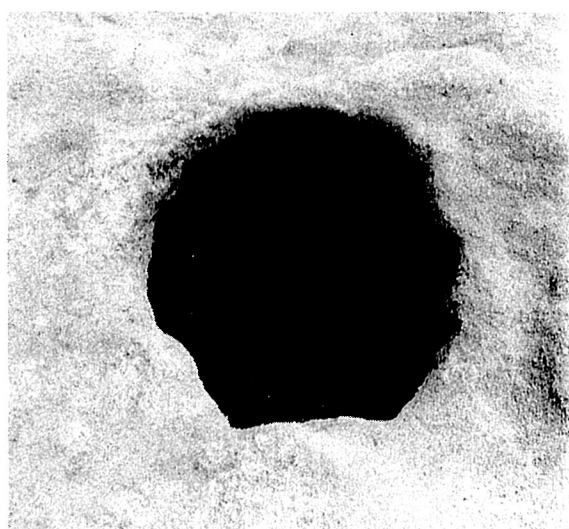
c B·C 地点遺跡第 84 号土壙



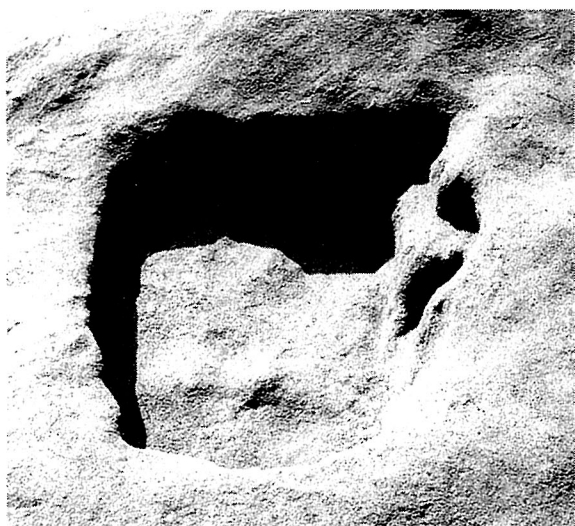
f B·C 地点遺跡第 87 号土壙



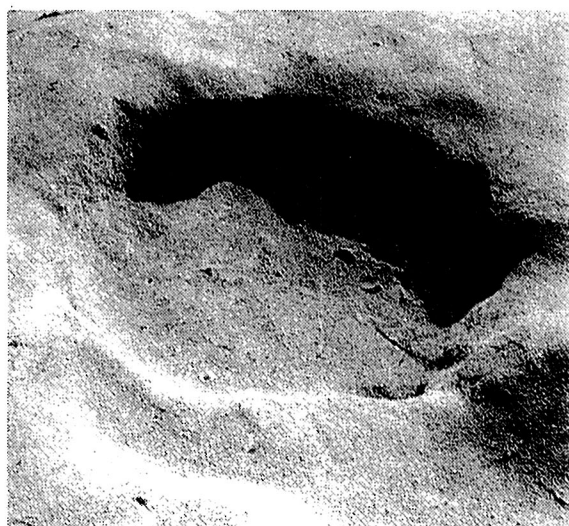
a B·C 地点遺跡第 88 号土壤



d B·C 地点遺跡第 91 号土壤



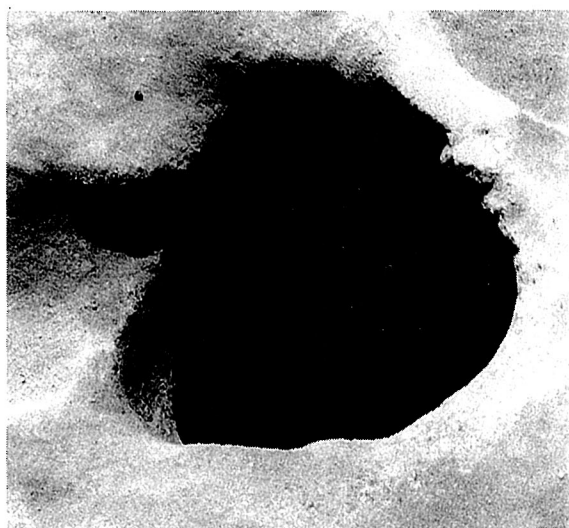
b B·C 地点遺跡第 89 号土壤



e B·C 地点遺跡第 96 号土壤



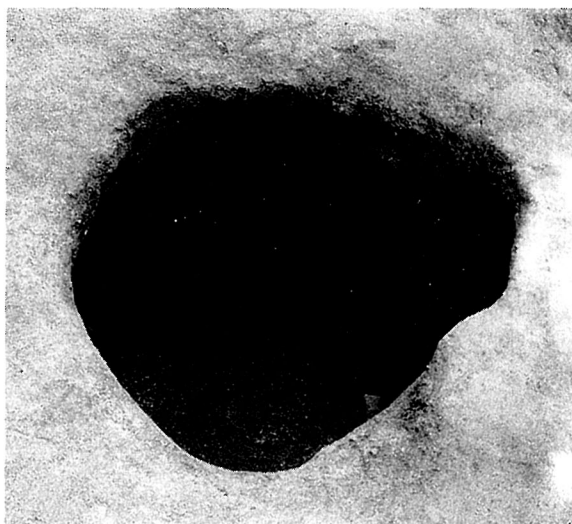
c B·C 地点遺跡第 90 号土壤



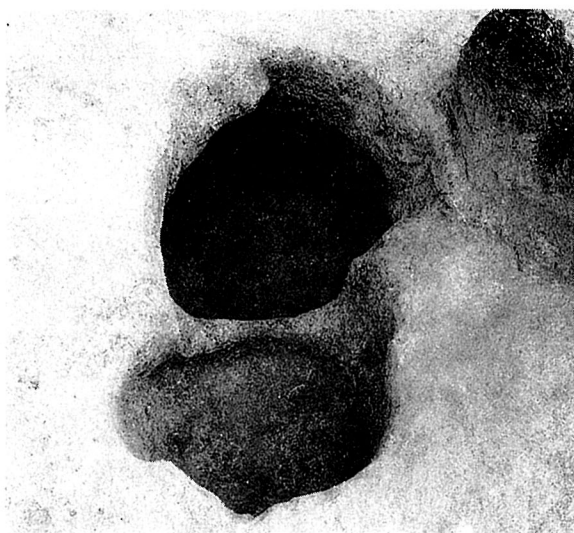
f B·C 地点遺跡第 97 号土壤



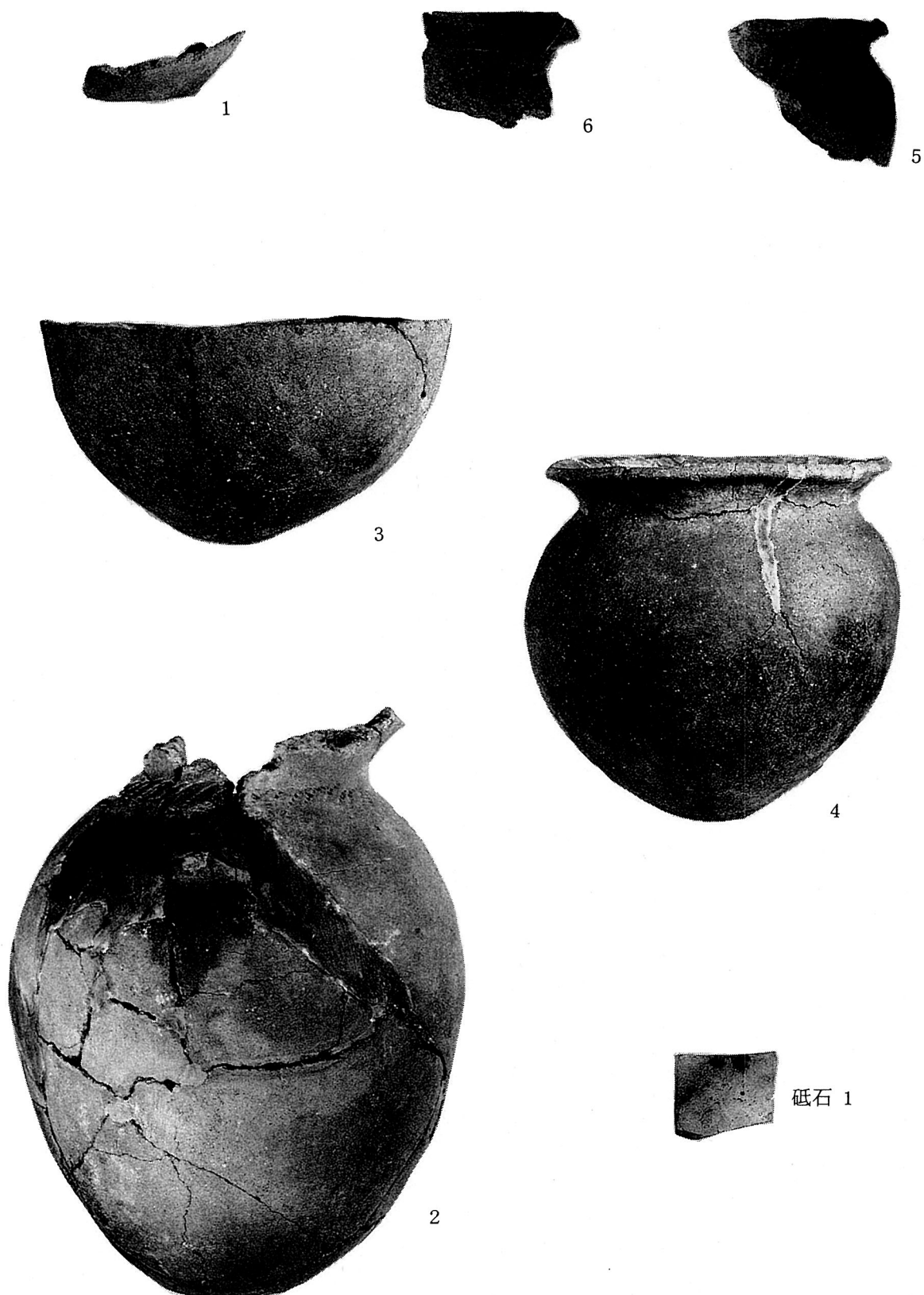
a B·C 地点遗迹第 98 号土壤



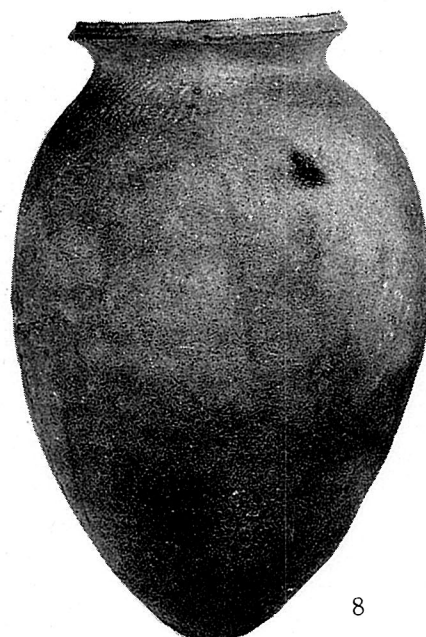
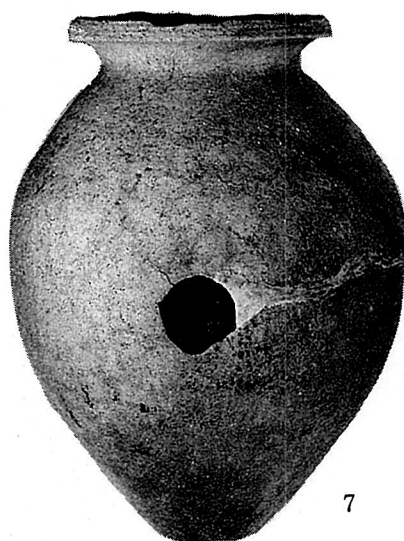
b B·C 地点遗迹第 99 号土壤



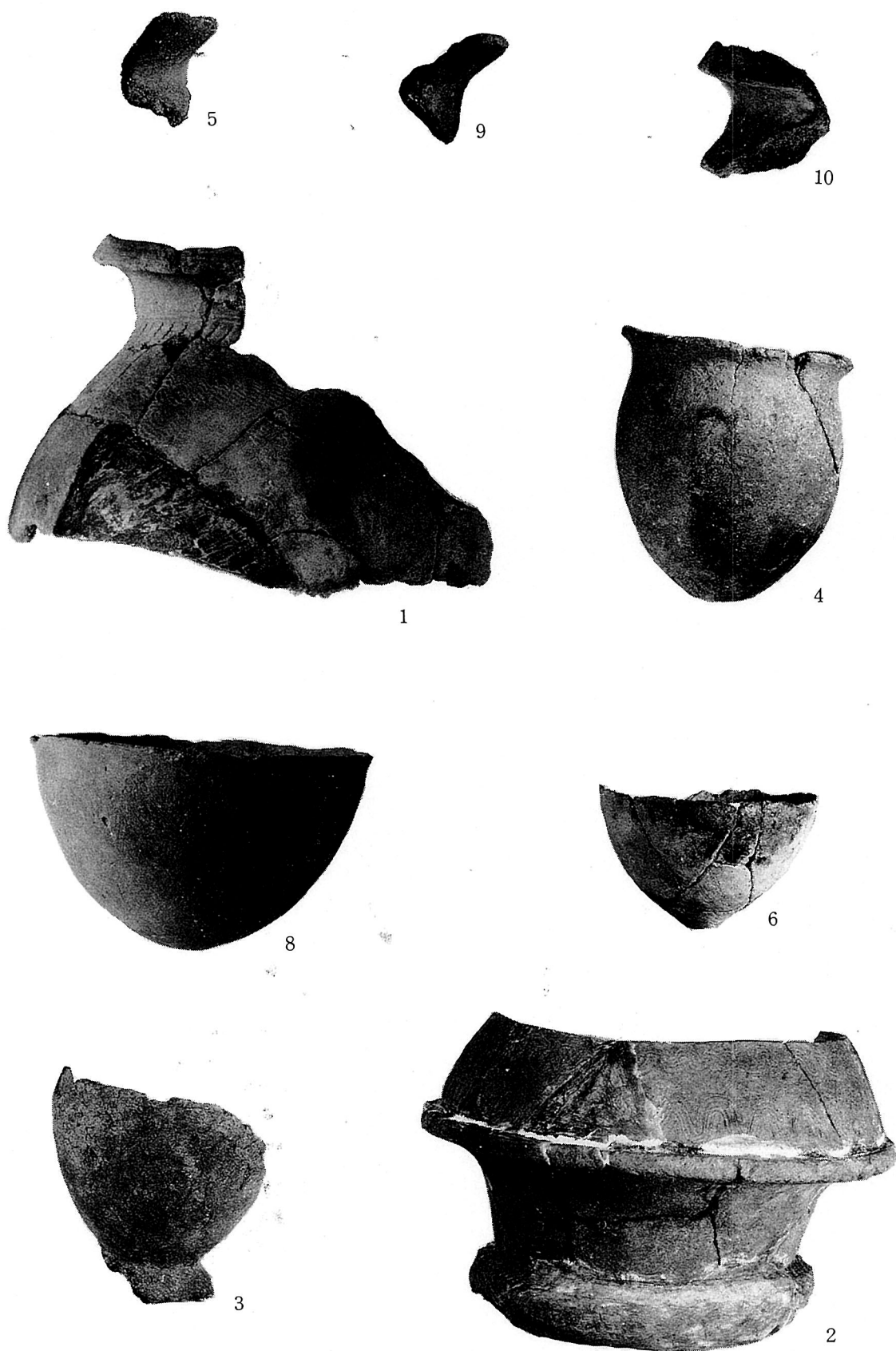
c B·C 地点遗迹第 100 号·第 101 号土壤



A 地点遺跡出土遺物 (1)



A 地点遺跡出土遺物 (2)



B·C 地点遺跡出土遺物 (1)



18



15



13



19



20



12



14



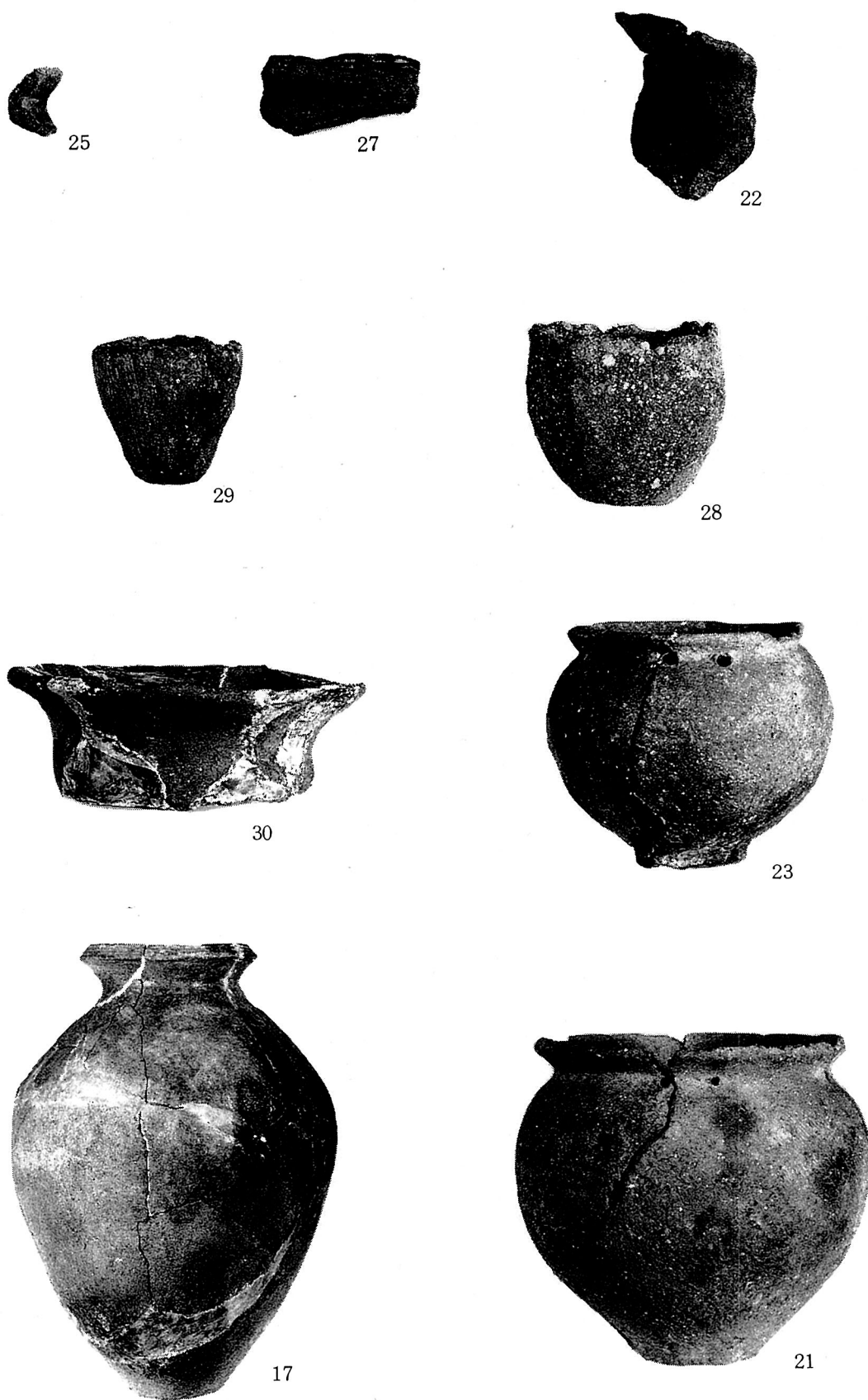
16



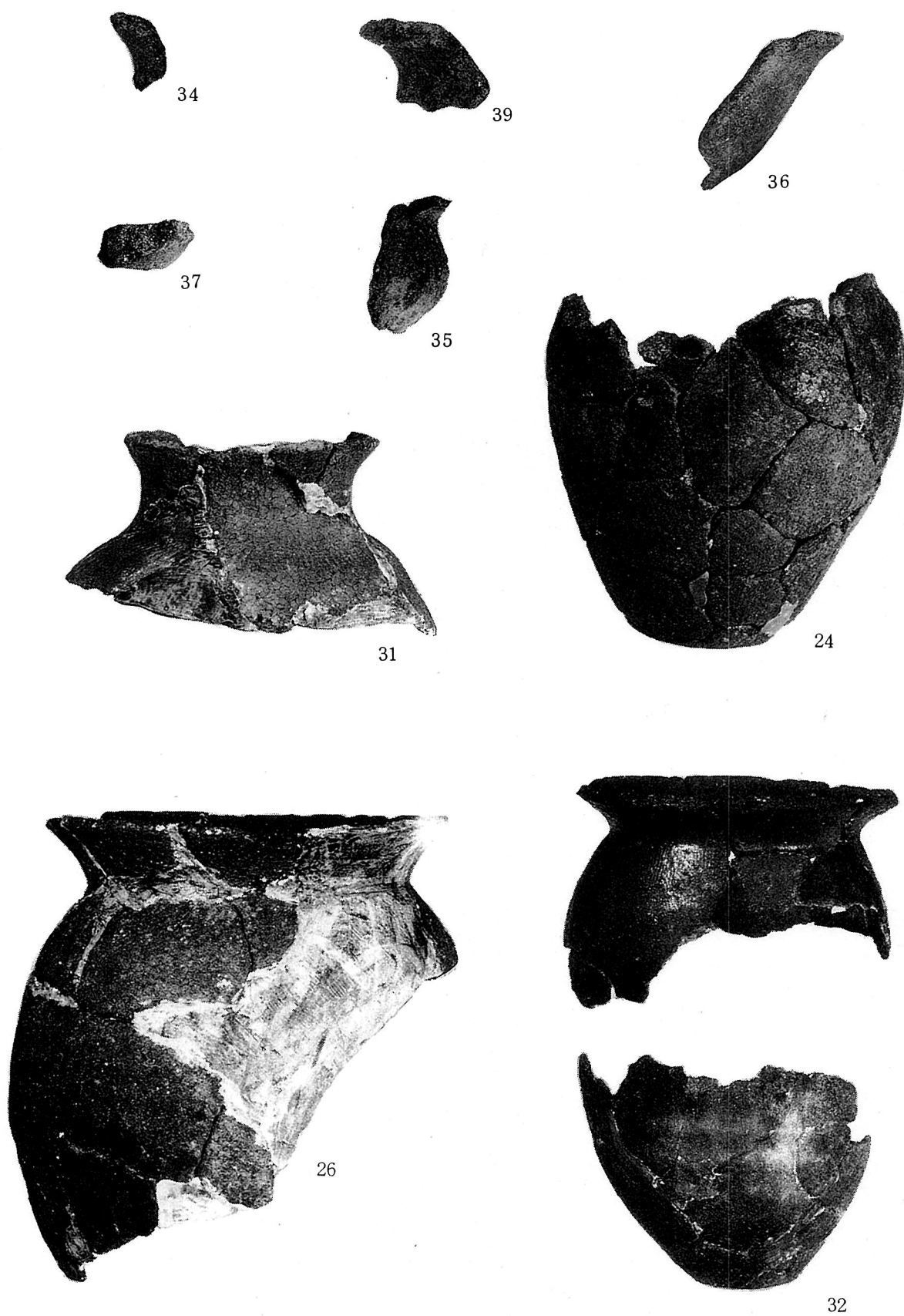
7



11



B・C 地点遺跡出土遺物 (3)



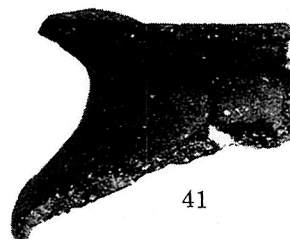
B·C 地点遺跡出土遺物(4)



44



47



41



40



42



43



33



38



48



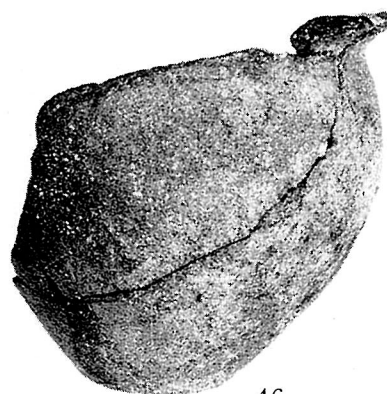
49



55



54



46



45



53



57



56



59



58



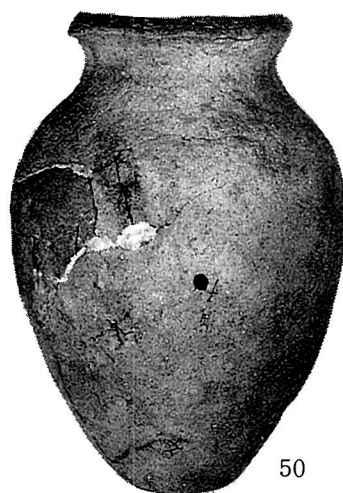
69



66



51



50



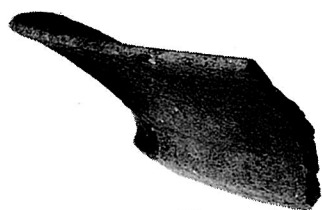
68



52



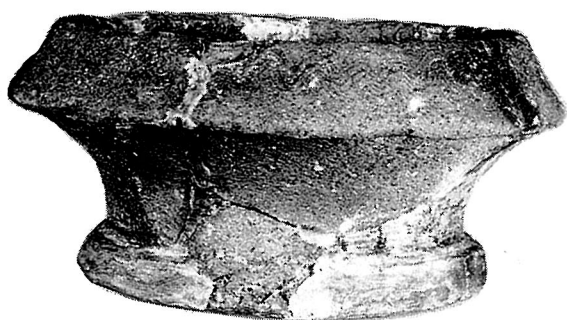
B·C 地点遺跡出土遺物 (8)



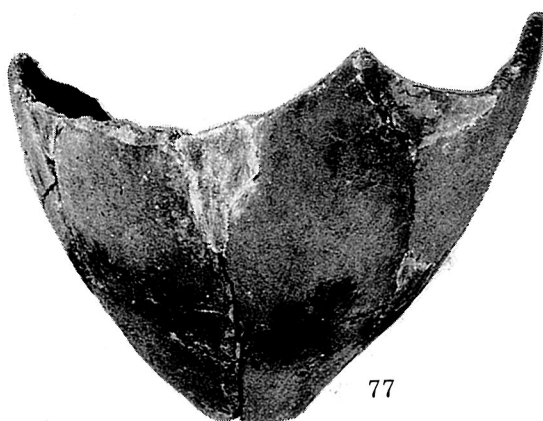
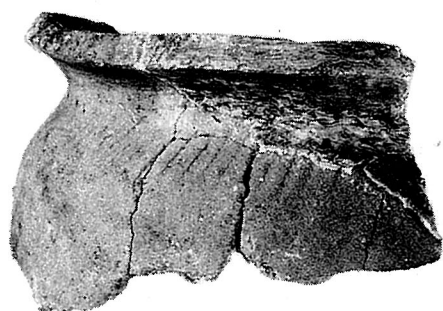
65



64



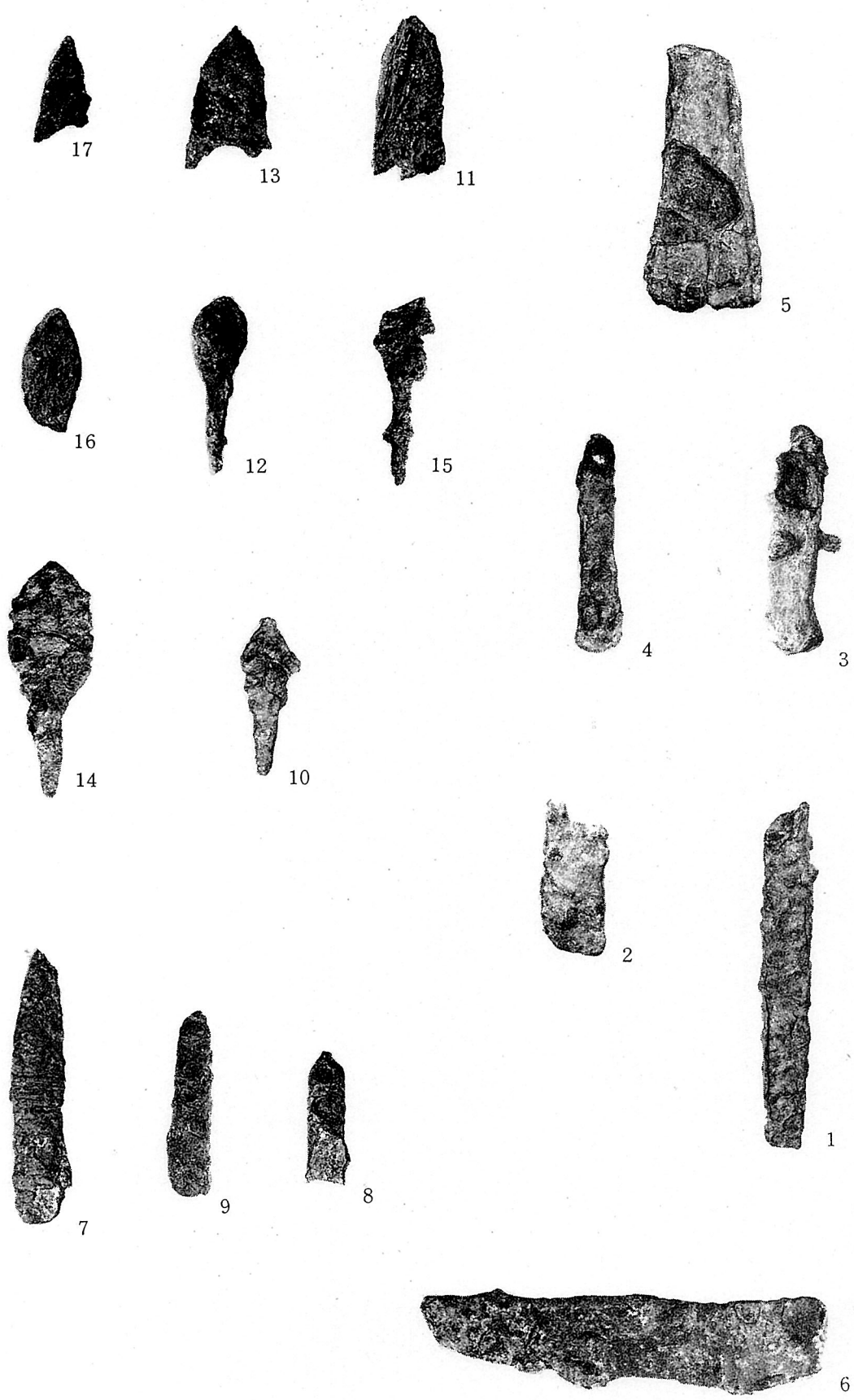
75



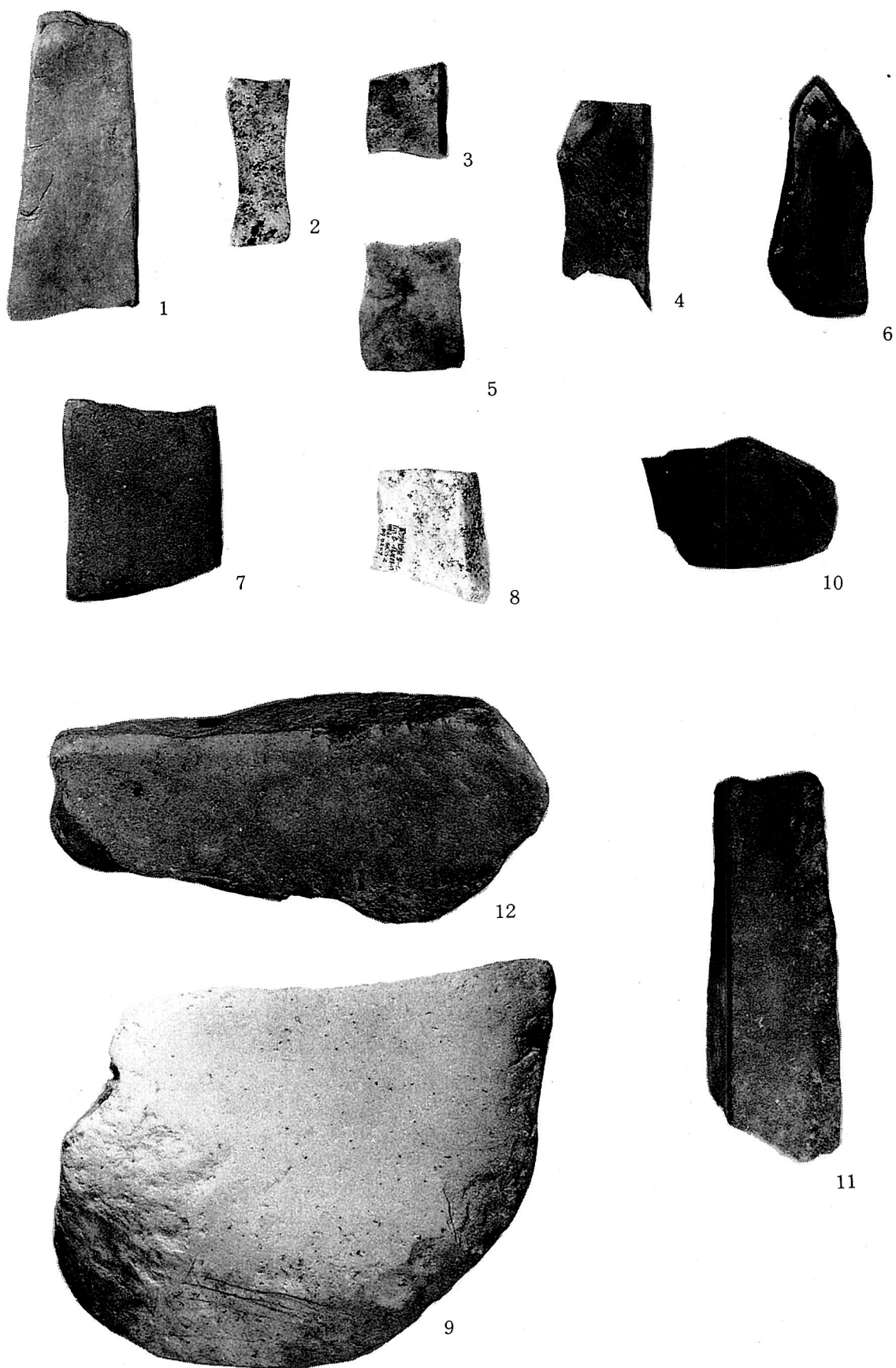
77



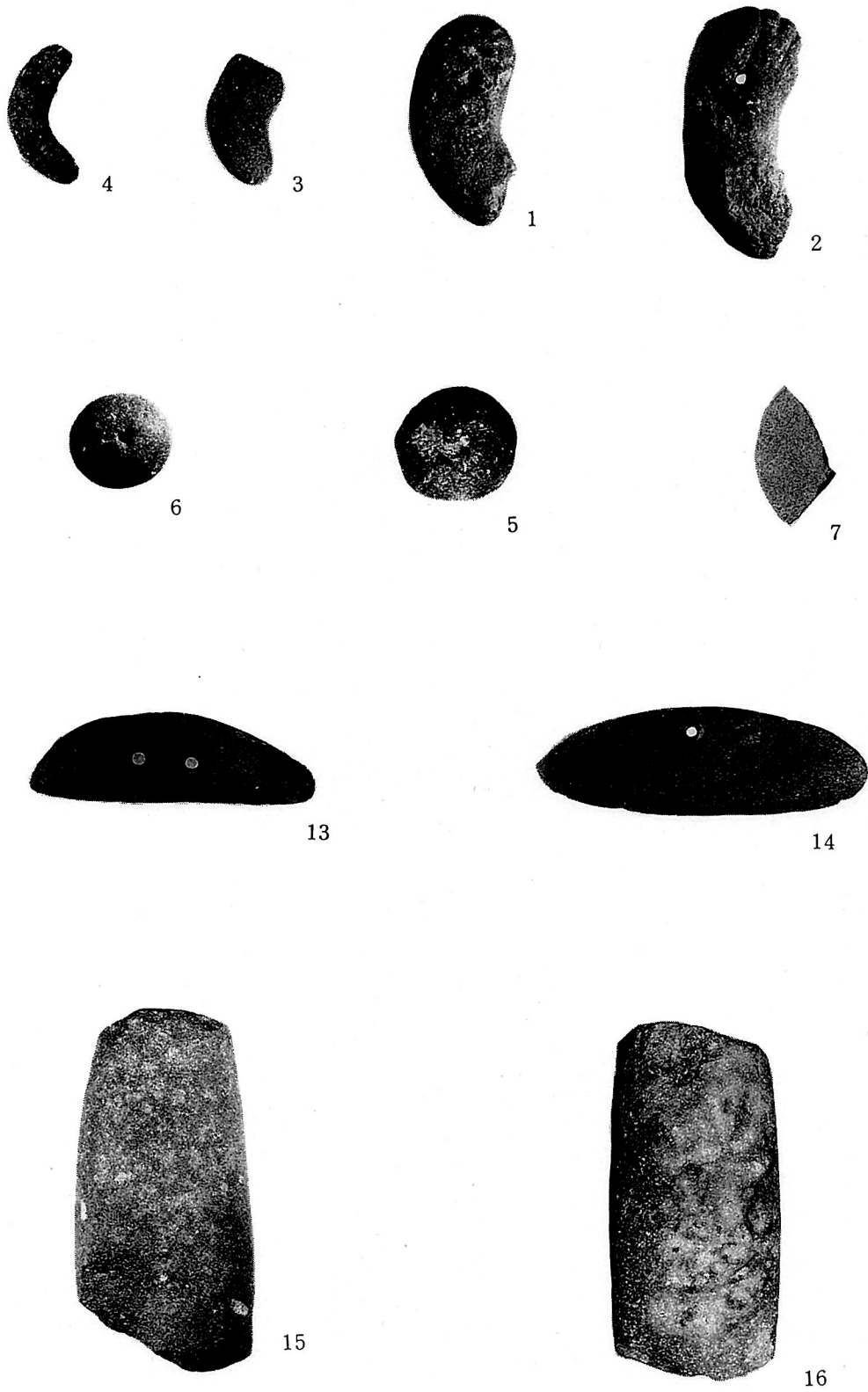
76



B・C 地点遺跡出土遺物 (10)



B・C 地点遺跡出土遺物 (11)



B・C 地点遺跡出土遺物 (12)

広 X4-89-249

広島市の文化財 第 48 集

広島市安佐南区緑井町所在

毘沙門台東遺跡発掘調査報告

1990 年 3 月

編 集 行 広 島 市 教 育 委 員 会
発 行 (社会教育部管理課)
広島市中区国泰寺町一丁目4番21号
TEL (082) 245-2111(代)

印 刷 電 子 印 刷 株 式 会 社
広島市中区堺町一丁目1番5号